

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第156集

須ヶ谷遺跡
西海塚遺跡
山王遺跡

2008

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県稲沢市は、愛知県西部に位置し、平成 17 年 4 月 1 日に 1 市 2 町が合併して新たな出発をしました。稲沢市は、近年は名古屋市のベッドタウンとして宅地化も進んでおりますが、現在でも植木・苗木、野菜の生産が盛んなところです。また、古くは屯倉や国分寺が設定され尾張国の中心地であり、数々の歴史を有する地域でもあります。これまで稲沢市では数多くの遺跡が確認されており、近隣の一色青海遺跡では弥生時代中期の大型掘立柱建物が発見されるなど、数多くの考古学的知見がえられています。

このたび愛知県建設部道路建設課によって県道津島稲沢線の改築工事が実施されることになり、それに伴い財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、愛知県教育委員会を通じて委託をうけ、山王遺跡・西海塚遺跡・須ヶ谷遺跡の事前調査を行いました。その結果、須ヶ谷遺跡では予想外にも弥生時代前期に始まる集落を発見するに至り、地域の歴史に新たな 1 ページを加えることができました。

これらの調査成果を本書に掲載することで、地域史研究に寄与し多くの方々に活用され、ひいては埋蔵文化財保護につながっていくことを願ってやみません。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり、各方面の方々にご配慮を賜り、関係者および関係機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚くお礼申し上げます。

平成 20 年 3 月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 林 良 三

例言

1. 本書は愛知県稲沢市平和町に所在する山王遺跡（さんのういせき：県遺跡番号 270004）、西海塚遺跡（にしかいづかいせき：県遺跡番号 270003）、須ヶ谷遺跡（すかたにいせき：県遺跡番号 270014）の発掘調査報告書である。

2. 調査は県道津島稲沢線道路改築事業に伴う事前調査として、愛知県埋蔵文化財センターが愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査対象面積は 3,550 m² である。

3. 発掘調査は平成 17 年 11 月～平成 18 年 3 月に実施し、支援業務を（株）大成エンジニアリングに発注した。整理および報告書作成作業は平成 18 年 4 月から 10 月にかけて実施した。

4. 現地における発掘調査は、石黒立人（主査）、永井邦仁・加藤博紀（以上調査研究員）が担当した。

5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、稲沢市教育委員会生涯学習課、愛知県建設部道路建設課などの関係諸機関をはじめ、地元区長、隣接地地権者、発掘調査に参加して頂いた方々など、多くのご協力を得た。

6. 本書は、石黒立人、鬼頭 剛、加藤博紀が執筆を分担し、石黒が編集した。分担は以下の通り。自然科学分析については、樹種同定を植田弥生氏、骨貝同定を（株）パリノ・サーヴェイ、AMS 年代測定を（株）パレオ・ラボに委託した。

第 1・2 章（加藤、植田）、第 3 章（石黒）、第 4 章（鬼頭、（株）パリノ・サーヴェイ、（株）パレオ・ラボ）、第 5 章（石黒・加藤）

7. 掲載図の縮尺は個別に表記した。なお、土器は回転図 1/4、破片拓図 1/3、土製品 1/2、石器は 1/1、1/2、1/3 である。

8. 整理作業は加藤・石黒が担当した。作業にあたっては下記の協力を得た。

整理作業員：水野留香、時田典子

石器実測・製図：（株）シン技術コンサル

製図：アイシン文化財プロジェクト

9. 本書に示す座標数値は世界測地系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。

10. 遺構番号は桁数等々が不統一であるが、概ね上層から下層へと桁数が大きくなる。見かけは美しくないが、ある意味で調査の進行をそのまま表していること、そして番号変更による諸記録の混乱を避けるために、敢えて整理は行わなかった。遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理を行った。

11. 写真および図面などの調査に関わる記録類は、愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

（財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802 番 24（0567-67-4161）

12. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802 番 24（0567-67-4164）

目次

本文

第 1 章 遺跡と調査の概要.....	1
1 遺跡の概要.....	1
2 調査の経緯と経過.....	3
第 2 章 山王遺跡・西海塚遺跡.....	6
1 山王遺跡.....	6
(1) 調査の概要.....	6
(2) 調査の成果.....	6
(3) 山王遺跡出土木製品の樹種同定.....	11
2 西海塚遺跡.....	14
(1) 調査の概要.....	14
(2) 調査の成果.....	14
3 中世以降の景観復元.....	15
4 「三宅保」と「須賀垂」.....	15
第 3 章 須ヶ谷遺跡.....	27
1 調査の概要.....	27
2 調査の成果.....	31
(1) 05A 区.....	31
(2) 05B 区.....	35
(3) 05C 区.....	51
3 須ヶ谷遺跡における 遺構の展開.....	106
4 須ヶ谷遺跡の 弥生土器をめぐる予察.....	109
第 4 章 自然科学的分析.....	112
1 須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡 における古環境変遷.....	112
2 須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡 出土の骨貝類.....	119
3 放射性炭素年代測定.....	124
第 5 章 考察.....	126
1 弥生中期・濃尾平野の地域区分.....	126
2 近世の景観復元.....	131

挿図

- 図 1 須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡の位置 /1
- 図 2 周辺の遺跡 /2
- 図 3 調査前の山王遺跡周辺 /4
- 図 4 調査区から西方の三宅川方面を望む風景 /4
- 図 5 調査区配置図 /5
- 図 6 山王遺跡 05B 区 SE01 の調査風景 /6
- 図 7 山王遺跡 05B 区 SE01・SE02 プランとセクション
05D 区 SD01 セクション /7
- 図 8 山王遺跡出土遺物 (1) SE01・02/8
- 図 9 山王遺跡出土遺物 (2) /9
- 図 10 山王遺跡 05B 区 SE01 出土木製品組織の光学顕微鏡写真 /13
- 図 11 西海塚遺跡 05B 区作業風景 /14
- 図 12 西海塚遺跡出土遺物 /14
- 図 13 須ヶ谷・三宅・井堀村の地籍図 /16
- 図 14 須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡の近世後期以降の展開 /16
- 図 15 山王遺跡 05A 区上面プラン・セクション /19
- 図 16 山王遺跡 05A 区下面・05B 区上面プラン /20
- 図 17 山王遺跡 05B 区下面プラン・セクション /21
- 図 18 山王遺跡 05B・C 区プラン・セクション /22
- 図 19 山王遺跡 05D 区プラン・セクション /23
- 図 20 山王遺跡 05E 区プラン・セクション /24
- 図 21 西海塚遺跡 05A 区プラン・セクション /25
- 図 22 西海塚遺跡 05B 区プラン・セクション /26
- 図 23 須ヶ谷遺跡調査区全景 /27
- 図 24 須ヶ谷遺跡調査区配置図 /28
- 図 25 須ヶ谷遺跡セクション合成図 /29
- 図 26 須ヶ谷遺跡 05A 区調査風景 /31
- 図 27 須ヶ谷遺跡 05A 区出土土器 /32
- 図 28 須ヶ谷遺跡 05A 区 1 面・2 面プラン /33
- 図 29 須ヶ谷遺跡 05A 区西壁セクション /34
- 図 30 須ヶ谷遺跡 05B 区作業風景 /35
- 図 31 須ヶ谷遺跡 05B 区 2 面検出状況 /35
- 図 32 須ヶ谷遺跡 05B 区方形周溝墓分布図 /36
- 図 33 須ヶ谷遺跡 05B 区 SD005 出土土器 /37
- 図 34 須ヶ谷遺跡 05B 区方形周溝墓周溝上層掘り下げ /38
- 図 35 須ヶ谷遺跡 05B 区方形周溝墓周溝さらに掘り下げ /38
- 図 36 須ヶ谷遺跡 05B 区方形周溝墓周溝セクション /38
- 図 37 須ヶ谷遺跡 05B 区遺物取り上げ作業 /39
- 図 38 須ヶ谷遺跡 05B 区測量作業 /39
- 図 39 須ヶ谷遺跡 05B 区 1 面・2 面プラン /41
- 図 40 須ヶ谷遺跡 05B 区 3a 面・3b 面プラン /42
- 図 41 須ヶ谷遺跡 05B 区東壁セクション (1) /43
- 図 42 須ヶ谷遺跡 05B 区東壁セクション (2) /44
- 図 43 須ヶ谷遺跡 05B 区各種遺構セクション /45
- 図 44 須ヶ谷遺跡 05B 区出土土器 SB3001・SB005/46
- 図 45 須ヶ谷遺跡 05B 区 SB3003 出土土器 /47
- 図 46 須ヶ谷遺跡 05B 区 SB3004 出土土器 /48
- 図 47 須ヶ谷遺跡 05B 区 SK3015 出土土器 /49
- 図 48 須ヶ谷遺跡 05B 区出土石器 /49
- 図 49 須ヶ谷遺跡 05B 区包含層出土土器 /50
- 図 50 須ヶ谷遺跡 05C 区作業風景 /51
- 図 51 須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面検出状況 /52
- 図 52 須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面全景 /52
- 図 53 雪雲襲来 /54
- 図 54 須ヶ谷 05C 区作業風景 /54
- 図 55 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 /55
- 図 56 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 SD15/56
- 図 57 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD008・SD15 遺物出土状況 /58
- 図 58 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD009 遺物出土状況 /58
- 図 59 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD15 遺物出土状況 /58
- 図 60 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD008 出土土器 /59
- 図 61 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD009 出土土器 /60
- 図 62 須ヶ谷遺跡 05C 区包含層出土土器 /62
- 図 63 須ヶ谷遺跡 05C 区 SK36 出土土器 /64
- 図 64 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3025 出土石器 /65
- 図 65 須ヶ谷遺跡 05C 区各遺構出土土器 SB3003・SB3025
SB3046・SB3049/67
- 図 66 須ヶ谷遺跡 05C 区各遺構出土土器 SB3059・SB3084/68
- 図 67 須ヶ谷遺跡 05C 区各遺構出土土器 SB3019/70
- 図 68 須ヶ谷遺跡 05C 区各遺構出土土器 SK3049・SK3082/71
- 図 69 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3049 出土石器 /72
- 図 70 須ヶ谷遺跡 05C 区 SK3239 出土石器 /72
- 図 71 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (1)/73
- 図 72 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (2)/74
- 図 73 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3053 出土石器 /74
- 図 74 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3080 出土石器 /75
- 図 75 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3055 出土石器 /75
- 図 76 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3059 出土石器 /76
- 図 77 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB 出土石器 /77
- 図 78 須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構出土石器 /78・79
- 図 79 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 SK4001/80
- 図 80 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (3)/81
- 図 81 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (4)/83
- 図 82 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (5)/84
- 図 83 須ヶ谷遺跡 05C 区遺構外出土石器 /85
- 図 84 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (6)/86

図 85	須ヶ谷遺跡 05C 区出土遺物 /87
図 86	須ヶ谷遺跡 05C 区 1 面プラン (1) /89
図 87	須ヶ谷遺跡 05C 区 1 面プラン (2) /90
図 88	須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面プラン /91
図 89	須ヶ谷遺跡 05C 区 3a 面プラン /92
図 90	須ヶ谷遺跡 05C 区 3b 面プラン /93
図 91	須ヶ谷遺跡 05C 区主要竪穴建物跡プラン /94
図 92	須ヶ谷遺跡 05C 区セクション西壁 (1) /95
図 93	須ヶ谷遺跡 05C 区西壁セクション (2) /96
図 94	須ヶ谷遺跡 05C 区セクション東壁 (1) /97
図 95	須ヶ谷遺跡 05C 区東壁セクション (2) /98
図 96	須ヶ谷遺跡 05C 区東壁セクション (3)・北壁セクション /99
図 97	須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (1) /100
図 98	須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (2) /101
図 99	須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (3) /102
図 100	須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (4) /103
図 101	須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (5) /104
図 102	須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (6) /105
図 103	須ヶ谷遺跡の前期から中期前半までの展開 /107
図 104	須ヶ谷遺跡方形周溝墓分布図 /108
図 105	須ヶ谷遺跡における金剛坂形甕の変遷 /109
図 106	須ヶ谷形甕の変遷 /109
図 107	須ヶ谷遺跡出土土器の変遷 /111
図 108	サンプル採取地点 /113
図 109	各地点地層柱状図 /114
図 110	調査地点周辺の等高線図 /116
図 111	ニホンジカの骨格 (八木・大秦司 1994 を改変) /119
図 112	出土骨貝類 /123
図 113	暦年較正結果 /124
図 114	甕の分類と出土傾向 /126
図 115	濃尾平野における弥生中期前葉の甕に見る地域色 /127
図 116	濃尾平野における地域区分 /128
図 117	須ヶ谷川開削関係図 /133

表

表 1	調査工程 /3
表 2	山王遺跡出土木材 (中世) の樹種同定結果一覧 /12
表 3	放射性炭素年代測定値 /113
表 4	検出動物分類群一覧 /119
表 5	骨・貝類同定結果 /120
表 6	SB3046 出土ヤマトシジミ殻長分布 /122
表 7	測定試料及び処理 /124
表 8	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 /124
表 9	甕の分類と諸遺跡の出土数 /126
表 10	関係 8 村の『寛文村々覚書』・大正 5 年の田畑データ /131
表 11	『尾張徇行記』による関係 8 村の記載 /131

写真図版

遺構図版 1	山王遺跡 05A 区
遺構図版 2	山王遺跡 05B 区～05E 区
遺構図版 3	西海塚遺跡
遺構図版 4	須ヶ谷 05A 区
遺構図版 5	須ヶ谷遺跡 05B 区 3 面全景
遺構図版 6	須ヶ谷遺跡 05B 区 2 面全景
遺構図版 7	須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面全景
遺構図版 8	須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SB001・SD001
遺構図版 9	須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SD14・009
遺構図版 10	須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SD004・008
遺構図版 11	須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SD005・SK004
遺構図版 12	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面遺構群
遺構図版 13	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面遺構群
遺構図版 14	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面 SB3049
遺構図版 15	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面遺構群と貝層
遺構図版 16	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部遺構群
遺構図版 17	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3080・3084
遺構図版 18	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3054・3079
遺構図版 19	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3054 炉跡
遺構図版 20	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SK3188・4001
遺物図版 1	須ヶ谷遺跡弥生土器 1・9・27・40・43・90・91・96
遺物図版 2	須ヶ谷遺跡弥生土器 105・119・122・124・128
遺物図版 3	須ヶ谷遺跡弥生土器 189・191・192・193・196・200・201・217
遺物図版 4	須ヶ谷遺跡弥生土器 199・218・222・224・226・228・229
遺物図版 5	須ヶ谷遺跡弥生土器 223・257・264・287・289・295・365

カラー図版

カラー図版 1	山王遺跡全景・西海塚遺跡全景・山王 05B 区 SE01
カラー図版 2	須ヶ谷遺跡 05C 区 1 面全景
カラー図版 3	須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面中景・SB3054・3079 近景
カラー図版 4	須ヶ谷遺跡 05B・C 区細部写真

第1章 遺跡と調査の概要

1. 遺跡の概要

本遺跡周辺に関する歴史地理的知見を見ていくと、『尾張地名考』には、遺跡名ともなっている須ヶ谷の旧名須賀垂のスカは、砂所が転じたもので、砂所は「砂の集ひ寄たる形」をさすとしており、さらに『尾張徇行記』には、三宅川流域の村落には「田ハマツチ畠ハ砂地」という記載が見られる。このことから、三宅川流域は近世にいたるまで三宅川や日光川の活発な活動によって形成された地域であったことがわかる。

さて、三宅川流域は国衙・国分寺などが設置され古くから開発されてきた地域であり、遺跡も数多く確認されている。本遺跡周辺の遺跡を概観すると、弥生時代前期では本遺跡の北方に位置する野口・北出遺跡があげられ、濃尾平野でも初期の農耕集落である。弥生時代中期になると、前述の野口・北出遺跡では円形土坑、方形周溝墓7基などが検出されている。時期的に後続する一色青海遺跡は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・方形周溝墓など多くの遺構が検出され、濃尾平野でも有数の大集落であったことが明らかになった。集落のほぼ中央からは大形掘立柱建物が検出され、その規

模は全国でも最大級のものであり、多くの人々から注目を浴びた。

古墳時代には、三宅川流域にも多くの古墳が分布する。下流域には、三面の三角縁神獣鏡が出土したと云われる奥津社古墳（愛西市）があり、愛知県下でも最古段階の古墳と考えられている。

三宅川流域は古くから開発が進められ、儀長正楽寺遺跡では4世紀と6世紀中頃の竪穴住居跡2棟などが検出されている。続く奈良時代にも三宅川流域は重要視され、国衙や国分寺、国分尼寺が設置された。なお、国分寺は、稲沢市矢合町椎ノ木に所在すると推定され、1961年の発掘調査によって金堂跡と塔跡、金堂に回廊が接続することが確認された。

鎌倉時代以降は、一色青海遺跡で方形土坑群が見つかっている。文献上では、応安3(1370)年8月付の尾張国人荒尾宗天(泰隆)が妙興寺に所領を寄進した寄進状、売券、田地坪付注文に「中嶋郡須賀垂」という地名が見られ、近世初期の『織田信雄分限帳』によると、井堀・儀長・三宅・「このもと」730貫文が「橋本伊賀」の知行地、須ヶ谷・鷺尾・丸淵・法立450貫文が「枚九郎兵衛」の知行地として見る事ができる。



図1 須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡の位置

図2 周辺の遺跡



しかし、こうした開発の一方で、近世の須ヶ谷村が「卑湿ノ地」とされたように、本遺跡周辺は常に水には悩まされてきた地域でもあった。近年においては、昭和34(1959)年の伊勢湾台風、昭和36(1961)年・同51(1976)年の集中豪雨によって、旧平和町のほぼ全地域浸水の被害を受けて

いる。さらに、農作業面でも用排水・農業道路などで支障がきたしていた。そこで、県営土地改良事業が旧平和町全域で昭和40～53(1965～1978)年度にかけて実施され、様相を一変させている。本遺跡周辺では、昭和43～45(1968～1970)年度にかけて実施されている。

遺跡名	時期	遺跡名	時期	遺跡名	時期
1 須ヶ谷遺跡	弥生～近世	26 野口・北出遺跡	弥生～近世	51 堀之内花ノ木遺跡	弥生～近世
2 西海塚遺跡	古墳～近世	27 跡ノ口遺跡	弥生～中世	52 大縄遺跡	古墳～近世
3 山王遺跡	古墳～近世	28 一色天神遺跡	古代～中世	53 井堀・野崎遺跡	古墳～中世
4 一色青海遺跡	弥生～近世	29 一色東川原遺跡	中世	54 建地遺跡	古代～中世
5 長田遺跡	弥生～近世	30 堤附遺跡	古代	55 権介遺跡	古代～中世
6 鷺尾遺跡	古墳～近世	31 一色川俣遺跡	中世	56 野崎北出遺跡	古墳～中世
7 丸洲上八幡社遺跡	近世	32 一色下方遺跡	古代～中世	57 西溝口遺跡	古墳～近世
8 法立廃寺跡	弥生～近世	33 一色森山遺跡	古代～中世	58 大福寺遺跡	弥生、中世
9 大下遺跡	古墳～近世	34 一色三反田遺跡	古代～中世	59 中町屋遺跡	古墳～中世
10 法立六丁遺跡	古代～中世	35 山口外居田遺跡	中世	60 畑西・池ノ頭遺跡	古墳～中世
11 内荒神社周辺遺跡	古墳～近世	36 馬場石塚遺跡	古墳～中世	61 今村西出遺跡	弥生～中世
12 巽屋敷遺跡	古墳～近世	37 儀長・正栄寺遺跡(儀長城)	弥生～近世	62 今村丹波遺跡	弥生～中世
13 西瀬古上遺跡	古墳～中世	38 三島屋敷遺跡	古墳～中世	63 沢西遺跡	古代～中世
14 西瀬古下遺跡	不明	39 秋葉屋敷遺跡	古代～近世	64 五丁遺跡	古代～中世
15 上屋敷遺跡	中世	40 脇ノ田遺跡	古代～中世	65 坂田屋敷遺跡	古代～中世
16 出口遺跡(三宅城)	古代～近世	41 矢合城跡	中世～近世	66 宮郭遺跡	古代～中世
17 折口遺跡	古代～近世	42 矢合城跡下層遺跡	古代～中世	67 蓮原遺跡	古墳～中世
18 三宅廃寺	古代～近世	43 矢合市神前遺跡	古代～近世	68 瀬古遺跡	中世
19 屯倉社遺跡	古代	44 七々代遺跡	古墳～中世	69 古道遺跡	古代～中世
20 横枕遺跡	弥生～近世	45 辻初遺跡	古代～中世	70 船橋市場遺跡	古代～中世
21 観音堂遺跡	古代～近世	46 縄境遺跡	古代～近世	71 馬場法華寺遺跡	弥生～中世
22 犬城遺跡(井堀城)	古代～中世	47 尾張国分寺跡	弥生～近世	72 平・山口遺跡	古代～近世
23 井堀遺跡	古代～中世	48 矢合高畑遺跡	古代～中世	73 一色市場遺跡	弥生～中世
24 蒲六遺跡	古墳～中世	49 鈴置・道相遺跡	古墳～近世	74 布智神社遺跡	古墳～古代
25 北出・高見遺跡	弥生～中世	50 琵琶戸遺跡	弥生～中世	75 布智神社西遺跡	古墳～近世

2. 調査の経緯と経過

今回の発掘調査は、県道津島稲沢線道路改築事業に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行われたものである。

まず、平成 15(2003) 年度に同課から愛知県教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無照会があり、山王遺跡と西海塚遺跡は周知の埋蔵文化財包含地であり、道路にかかることが確認された。そこで、愛知県教育委員会が同年度に現地において遺跡の有無確認および範囲確認調査を行った。さらに、北側にも遺跡があることが確認され、発掘調査の必要があると判断された。これを受けて、愛知県

教育委員会を通じて(財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、平成 17(2005) 年度に調査を実施した。調査面積は、山王遺跡が 738 m²、西海塚遺跡が 461 m²、須ヶ谷遺跡が 1341 m²である。調査担当者は、石黒立人(主査)、加藤博紀、永井邦仁(以上調査研究員)である。また、農業道路などで調査該当区域が分断されるため、図 5 のように山王遺跡 5 調査区、西海塚遺跡 2 調査区、須ヶ谷遺跡 3 調査区に分割して調査を実施した。

そして、報告書作成に関わる整理作業、自然科学分析、編集作業等を平成 18(2006) 年度に実施した。

月	11			12			1			2			3		
山 王 遺 跡															
西 海 塚 遺 跡															
須ヶ谷遺跡 05A 区															
須ヶ谷遺跡 05B・C 区															

表 1 調査工程

【調査日誌抄録】

11/16 西海塚遺跡、発掘作業開始。

11/18 西海塚遺跡、表土除去終了。山王遺跡、表土除去開始。

11/22 西海塚遺跡、05A 区遺構検出。05B 区遺構掘削。

11/30 山王遺跡 05A 区谷地形掘削、全景撮影、測量。サンプリング、深掘。

12/08 山王・西海塚遺跡全景撮影。須ヶ谷遺跡 05A 区表土除去開始。

12/09 須ヶ谷遺跡 A 区第 1 面検出。堆積環境分析用の試料採取（山王 05A 区、須ヶ谷 05A 区）。

12/14 須ヶ谷遺跡 05A 区第 2 面遺構検出。

12/26 須ヶ谷遺跡 05B 区表土除去開始。

12/28 山王遺跡、西海塚遺跡埋め戻し。

1/05 須ヶ谷遺跡 05B 区南部東壁トレンチ掘削。

1/10 須ヶ谷遺跡 05B・C 区遺構検出。

1/19 須ヶ谷遺跡 05B・C 区第 1 面全景撮影。

1/23 須ヶ谷遺跡 05C 区第 1 面下部遺構検出および遺構掘削。

1/25 須ヶ谷遺跡 05C 区第 2 面遺構検出。

1/27 須ヶ谷遺跡 05C 区第 2 面遺構掘削。

2/02 須ヶ谷遺跡 05B 区第 2 面遺構検出。

2/06 須ヶ谷遺跡 05B 区第 2 面遺構掘削。

2/08 須ヶ谷遺跡 05B 区第 2 面、周溝墓群撮影。

2/09 須ヶ谷遺跡 05B・C 区全景撮影。

2/10 須ヶ谷遺跡 05C 区第 3 面遺構検出。

2/14 須ヶ谷遺跡 05C 区第 3 面遺構掘削。

2/21 須ヶ谷遺跡 05B 区第 3 面遺構検出、遺構掘削。

2/28 須ヶ谷遺跡 05C 区南半部全景撮影。

3/04 須ヶ谷遺跡 05C 区ラジコンヘリ・高所作業車による全景撮影。

3/07 須ヶ谷遺跡 05B 区補足調査。

3/11 05B 区全景、05C 区は円形竪穴建物を中心に第 3 面下部撮影。

3/14 須ヶ谷遺跡 05C 区補足調査。

3/17 写真・実測図完了。調査区埋め戻し進行。現場調査終了。

3/22 調査区埋め戻し状況確認。



図 3 調査前の山王遺跡周辺 北から



図 4 調査区から西方の三宅川方面を望む



図5 調査区配置図 1/7500

第2章 山王遺跡・西海塚遺跡

1. 山王遺跡

(1) 調査の概要

旧畑地では現表面から約30cmほど掘削した明灰色砂層が遺構確認面となる。しかし、05B区北側では大幅な攪乱を受けており、また05A区と05D区北側から西海塚遺跡05A区南側にかけて土地区画整理事業以前の水田と思われる落込みがあるため、遺構は上記以外のところを中心に井戸(SE)2基、溝(SD)19条、土坑(SK)47基、自然流路(NR)1条などが確認できた。

05A・B区で検出された溝群は、自然流路の方向軸N-45°-Eに平行しており、自然流路を利用してつくられた近世の水田に影響されたものと考えられ、土地改良事業以前の遺構と推測される。

遺物は二次堆積と考えられるものが多く、遺構の性格を決定できるものはほとんどない。

(2) 調査の成果

i 井戸

05B区 SE01 05B区南端近くで検出された。西端が一部調査区外となり、掘形は径約3mの円形で深さは約1.4mである。掘形の中央に曲物を2段（上段の径45cm高さ32cm、下段の径43cm高さ19cm）積み上げ、その上に井戸枠が残る。井戸枠は縦板を立て並べて方形に組んだ横板で支えており、方形縦板組横棧式に近似する。また隅柱は1本確認できたので、支柱はあったものと考えられる。所属年代は13世紀前半である。利用木材は、曲物がヒノキ、井戸枠の縦板はスギとネズコ、支柱などに利用されたと考えられる杭状または棒状の材はクリであった。

井戸枠以外の遺物は、二次堆積と思

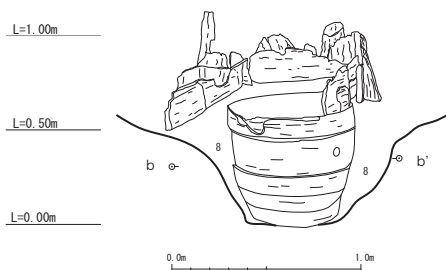
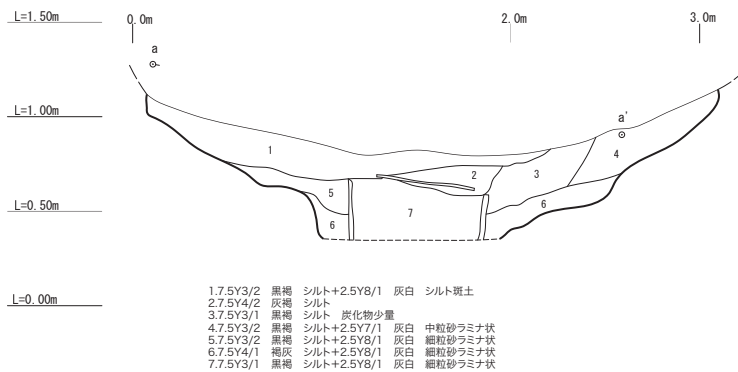
われる遺物が中心である。須恵器・土師器・灰釉陶器などが確認できた。1は須恵器の坏身。8世紀代の美濃須恵産である。2は、須恵器の甕。3・4は、須恵器の坏蓋。なお、4の内側にはスズが確認される。5は須恵器の坏身。高台はつかないと思われる。6は須恵器の盤。なお、やや小型の同窯式の盤(7)が同じ調査区から出土している。8は須恵器の碗。高台がつくと思われる。2～8の須恵器はO-10号窯式に属する。9・10は土師器の甕。9世紀代。11～14は灰釉陶器の碗。15は灰釉陶器の皿。16は灰釉陶器の段皿。17～19は灰釉陶器の長頸瓶である。11～19は、すべて釉はハケ塗りであり、K-90号窯式に属すると思われる。20の灰釉陶器の碗は、釉は漬かけであり、O-53号窯式に属する。また、その他に古代の平瓦(22)が出土している。さらに同じ地点から同様な平瓦(23)が確認されている。ともに7世紀末～8世紀前半のものと思われ、凹面に布目が確認できる。なお、23は凸面に斜格子目の圧痕がみられる。

05B区 SE02 SE01の北東で検出された。調査

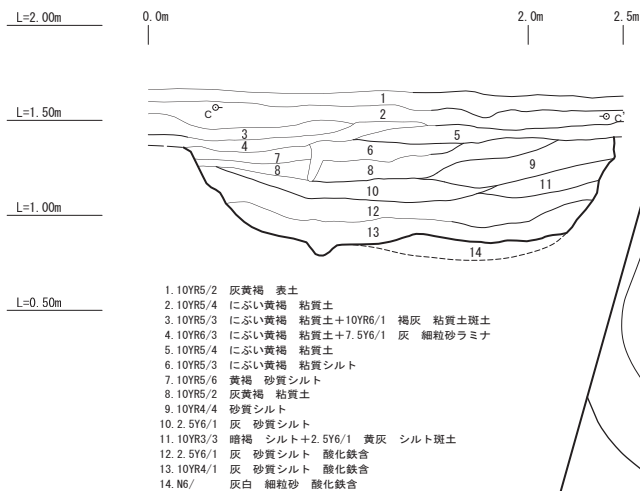


図6 山王遺跡05B区SE01の調査風景

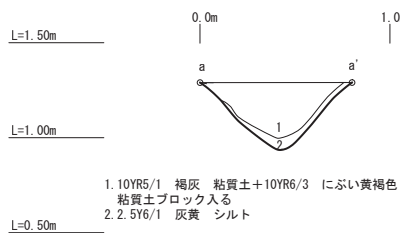
05B 区 SE01 断面図（西および北から）



05B 区 SE02 断面図（西から）



05D 区 SD01 断面図（西から）



SE01

SE02

05B 区 SE01・SE02 平面図

0 0.5 1 2m

図 7 山王遺跡 05B 区 SE01・SE02 プラン・セクション 05D 区 SD01 セクション 1/40

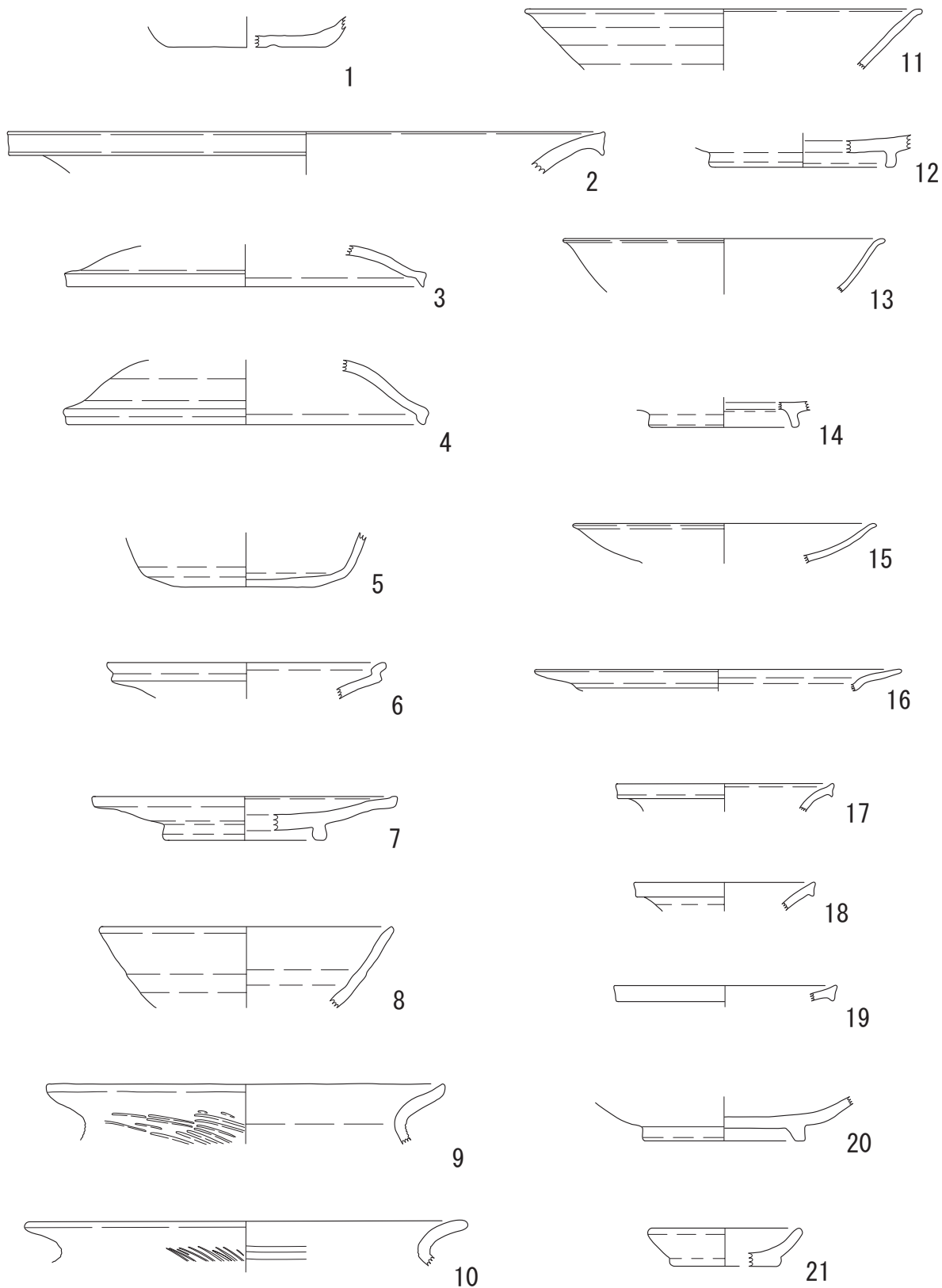


図8 山王遺跡出土遺物 (1) SE01・02 1/3

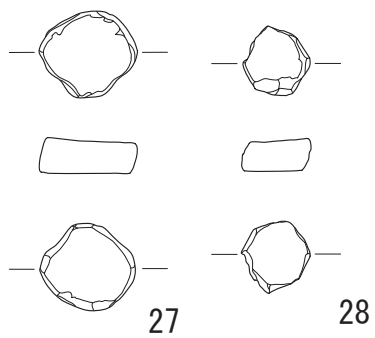
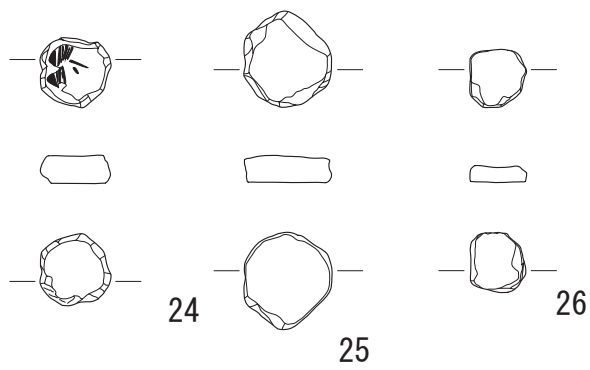
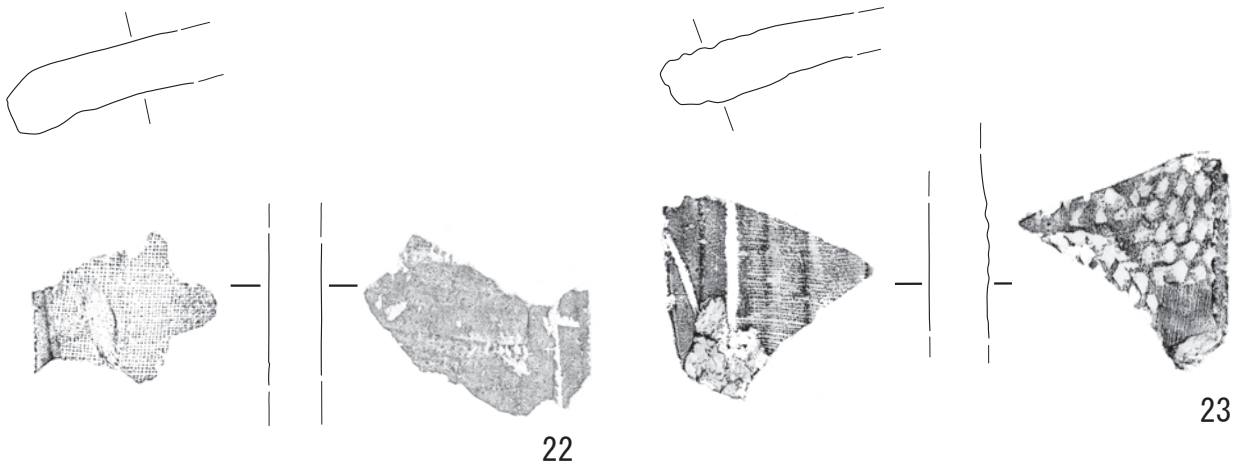


图9 山王遺跡出土遺物 (2) 1/3

区内では遺構の西端しか検出できず、構造物も確認できなかった。ただし、埋土の状況がSE01に似ているため、井戸と思われる。

遺物は、13世紀代の灰釉系陶器の小皿(21)などが確認できた。

ii 溝・土坑

05B区 SD04・05・09 NR01と方向軸を一にする調査区南側で検出された溝群。SD04と05の先後関係は、SD05が一度埋まった後にSD04が掘削されたものである。

05D区 SD01・SK02 SD01は、調査区北よりで検出された溝。05A区NR01や05B区南の溝群とはやや方向軸を違にする。この溝を切るかたちでSK02が掘削されている。

iii 自然流路

05A区 NR01 調査区内ではNR01の右岸しか確認できなかったため、調査区北よりから調査区南外へ広がる自然流路である。遺物は確認できなかった。しかし土層観察から、河川流路の変化によって河水が供給されず湿地化し、近世から水田として利用されたと思われる。また、土層観察から水田と思われる北側に土塁状の高まりが確認できた。地籍図の分析から水田の北側に設けられた村道と思われる。

その他に特徴的な遺物として、近世陶器の体部を転用した加工円盤(24～28)や幕末～明治初期の灰釉の通い徳利(29)がある。29には「屋」「五」が墨書されており、屋号と徳利の番号の一部と思われる。

(3) 山王遺跡出土木製品の樹種同定*

i はじめに

ここでは、B-2 区の井戸 SE01 から出土した木製品 16 点の樹種同定結果を報告する。この井戸から出土した遺物は奈良時代から平安時代の須恵器や灰釉陶器が多いが、13 世紀の遺物を少し伴うことから中世に掘削された井戸とされている。樹種調査が実施された木製品は、井戸構造物の曲物や杭・加工痕のある木材などである。

ii 試料と方法

木製品から材の 3 方向 (横断面・接線断面・放射断面) を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート (材組織標本) を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で 40～400 倍に拡大し観察した。

材組織標本は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

iii 結果

16 点から検出された樹種は、針葉樹のヒノキ (6 点)・スギ (6 点)・ネズコ (1 点)、落葉広葉樹のクリ (3 点) であった (表 1)。

ヒノキ 6 点は、井戸底に設置された大型の曲物の側板と板材または板状の材であった。板材または板状の材は、木取りが板目で切削痕のあるものが多い。薄い板の破片 (No. 24) は、曲物や折敷の底板に似ていた。

スギ 6 点は、板材または板状で、木取りはすべて板目であった。No. 16・23・26・39 は、縦長の幅の狭い板材・板状であった。

ネズコ 1 点は、ヒノキやスギの試料に比べ薄い板材であった。

クリ 3 点の形状は、直径 10cm 前後の芯持ち丸木の杭状と棒状であった。No. 34 には樹皮が残存し、樹皮が接する最終年輪は晩材部が十分に形成されていたことから、晩秋から翌年の早春の間に

伐採された材であることが判った。

樹種記載

(1) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科
図版 1 1-3 (No. 23)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は多く、晩材の仮道管壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。仮道管の径は大きく、分野も広い。分野壁孔は大きなスギ型、1 分野に 2～3 個が水平に配列している。

(2) ネズコ *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科
図版 1 4-6 (No. 19)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。スギに比べ、仮道管の径は小さく、晩材部の量は少なく、晩材部の仮道管壁の肥厚は少ない。分野壁孔は孔口がやや広いヒノキ型や小型のスギ型、1 分野に 2～5 個ある。

ネズコは本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木であり、特に中部地方以北に多く分布する。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科
図版 1 7-8 (曲物)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。スギに比べ、仮道管の径は小さく、晩材部の量は少なく、晩材部の仮道管壁の肥厚は少ない。分野壁孔はヒノキ型、1 分野に 2～4 個でおもに 2 個が水平に配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれ、建築材・曲物などによく使われる。

(4) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科
図版 1 9-12 (No. 34)

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性、

道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は粘りがあり腐朽性にすぐれている。

iv まとめ

中世に掘削された井戸から出土した木製品 16 点は、ヒノキ (6 点)・スギ (6 点)・ネズコ (1 点)・クリ (3 点) の 4 分類群であった。針葉樹のヒノキとスギが多く、いずれも木取りは板目の板材や板状が多かった。一方、落葉広葉樹のクリは、杭状や棒状の芯持ち丸木の形状であった。井戸底に設置されていた曲物は、ヒノキであり典型的な樹種利用であった。また、ヒノキの板材には荒削りの切削痕が見られたが、このような切削痕があるスギ材はなかった。スギ材は丁寧に加工された破片が多い。このような違いから、スギ材は製品として搬入されていたものが多く、ヒノキは原材が搬入され遺跡で加工されていたのかも知れない。クリは杭状・棒状であった。クリは耐久性・耐水性に優れている材質から杭や棒にも適材であり、直径 10cm 前後であることから、遺跡周辺で入手が容易であったと思われる。樹皮が残存していた Na. 34 の杭状のクリ材は、その最終年輪部位から晩材から早春に伐採された事が判った。

周辺遺跡の一色青海遺跡や下津北山遺跡から出土した、板・下駄・火きり臼・木簡・箸状木製品・曲物底 (蓋) 板・柄勺など、中世の木製品樹種はヒノキがほとんどである (松葉、1998、2000)。当遺跡からはヒノキと共にスギも多く検出された点は、一色青海遺跡や下津北山遺跡とやや異なる。しかしこの偏りは、樹種同定試料として選択された木製品器種による偏りを反映している可能性もある。下津北山遺跡に近い中之郷北遺跡 (植田、2006) の古代の河道から出土した加工材は、ヒノキが最も多く、ヒノキ属のサワラも多いがスギは報告されていない。従って本地区一帯では、古代～中世の木製品や加工材にヒノキが多く利用されていたようであり、当遺跡からも同様な傾向が確認された。

* 植田弥生 (株式会社パレオ・ラボ)

引用文献

松葉礼子 1998 「一色青海遺跡の樹種同定」『一色青海遺跡 自然科学・考察編』69-86、(財)愛知県埋蔵文化財センター。

松葉礼子 2000 「12 世紀末～15 世紀に相当する木製品の樹種同定」『下津北山遺跡』82-85、(財)愛知県埋蔵文化財センター。

植田弥生 2006 「中之郷北遺跡出土木材・杭材の樹種同定」『島崎遺跡 伝法寺本郷遺跡 中之郷北遺跡』252-262、愛知県埋蔵文化財センター。

遺跡調査 年度	地区	遺構	遺物	樹種	木取り	形状など	サイズ(cm) 放射径×接線径×長さ	備考
IHSN 05	B-2	SE01	曲物	ヒノキ	板目	曲物側板		井戸底設置大型曲物
IHSN 05	B-2	SE01	Na.7	クリ	芯持ち丸木	杭状	直径11.5cm	
IHSN 05	B-2	SE01	Na.9	スギ	板目	板材	4.0×10.0×22.0	
IHSN 05	B-2	SE01	Na.11	ヒノキ	板目	板材	4.5×17.5×18.0	
IHSN 05	B-2	SE01	Na.12	クリ	芯持ち丸木か	棒状	直径10.0cm	先端加工
IHSN 05	B-2	SE01	Na.16	スギ	板目	板材	3.5×8.0×25.5	桶板材?
IHSN 05	B-2	SE01	Na.19	ネズコ	板目	板材	0.7×10.0×21.0	
IHSN 05	B-2	SE01	Na.22	ヒノキ	板目	板材	3.0×6.0×18.0	切削加工痕?
IHSN 05	B-2	SE01	Na.23	スギ	板目	板材	1.3×7.5×26.0	桶板材?
IHSN 05	B-2	SE01	Na.24	ヒノキ	板目	板材	6.0×8.5×16.0	穿孔あり
IHSN 05	B-2	SE01	Na.25	ヒノキ	板目	板材	5.0×30.0×21.0	斜め切削痕
IHSN 05	B-2	SE01	Na.26	スギ	板目	板状	1.3×7.0×37.0	桶板材?
IHSN 05	B-2	SE01	Na.29	スギ	板目	板状	2.7×9.0×14.0	
IHSN 05	B-2	SE01	Na.34	クリ	芯持ち丸木、樹皮付	杭状	直径10.0cm	先端加工 最終年輪晩材
IHSN 05	B-2	SE01	Na.35	ヒノキ	板目	板状	3.0×8.0×18.0	片端斜め切削痕
IHSN 05	B-2	SE01	Na.39	スギ	板目	板材	1.5×4.5×26.0	桶板材?

表 2 山王遺跡出土木材 (中世) の樹種同定結果一覧

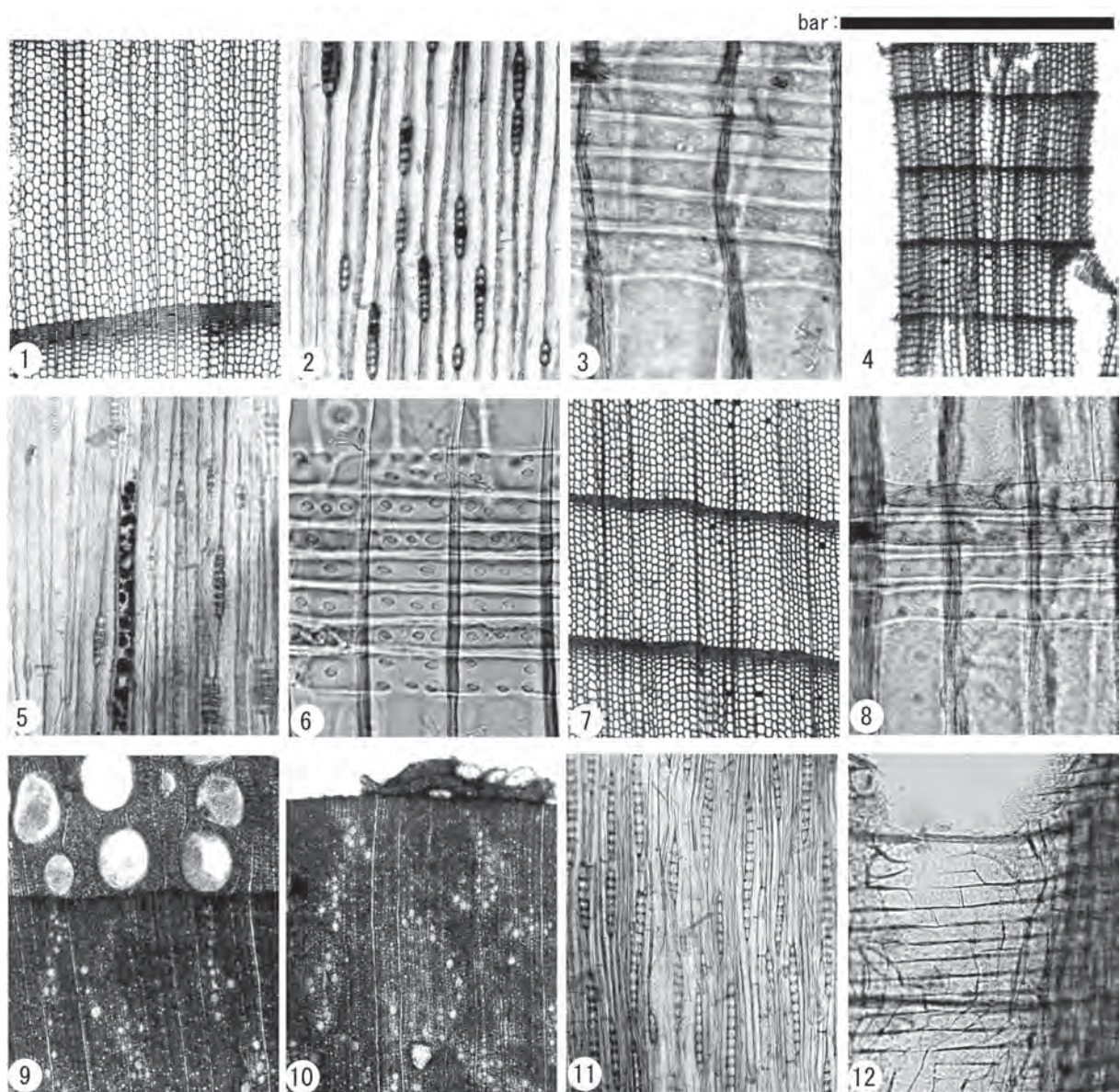


図 10 山王遺跡 05B 区 SE01 出土木製品組織の光学顕微鏡写真

1-3: スギ (No. 23) 4-6: ネズコ (No. 19) 7-8: ヒノキ (曲物) 9-12: クリ (No. 34)

1・4・7・9・10: 横断面 2・5・11: 接線断面 3・6・8・12: 放射断面

bar: 1・4・7・9・10=1.0mm 2・5・11=0.4mm 3・6・8=0.1mm, 12=0.2mm

2. 西海塚遺跡

(1) 調査の概要

暗褐色（現耕作土）の下に褐色土層（旧耕作土）があり、その下に明灰色砂層があつて、その上面



図 11 西海塚遺跡 05B 区作業風景

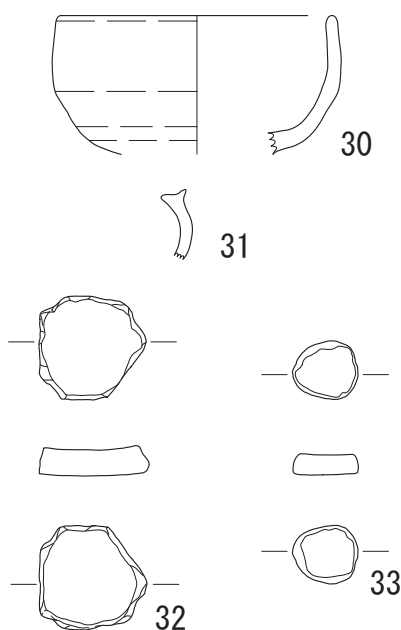


図 12 西海塚遺跡出土遺物 1/3

が遺構確認面となる。ただし、遺構確認面が落ち込む 05A 区南端と 05B 区北端は、土地改良事業以前の田んぼと思われる。

遺構は、土地改良事業以前に畑として利用されていた微高地を中心に、溝 (SD)26 条、土坑 (SK)139 基等が確認できた。しかし、ほとんどの遺構からは遺物が出土せず、また単一層の遺構が多いため、耕作の痕跡と考えられる。とくに、調査区に直交する溝は隣接する道路の方向軸に影響されたものと考えられ、昭和 43(1968) 年以降の本遺跡周辺の土地改良事業後のものと思われる。

i 土坑

05A 区 SK53～56 径 15 cm 程度であり、遺構確認面から落ち込んだ斜面に並んで検出された。その大きさと位置から類推すると、土地改良事業以前の田んぼと畑の土留として打ち込まれた杭列と思われる。遺物は出土していない。

ii 溝

05A 区 SD03・10・11 調査区を N-30°-E に縦断する溝。SK53～56 の並びと直交しており、これらの遺構は土地改良事業以前の遺構と思われる。遺物は出土していない。

(2) 調査の成果

今回確認された遺物は、遺構内遺物は全部で 17 点であり、遺構検出作業中や土地改良事業後の耕作痕と推定される遺構から出土した遊離遺物である。また、すべて破片であり、遺構の性格を決定づけるものにはならない。

30 は SK21 出土の 18 世紀後半の灰釉の碗。31 は SK21 出土の土師器焙烙鍋。32・33 は近世陶器の体部を転用した加工円盤。ともに遺構外である。

3. 中世以降の景観復元

山王遺跡 05B 区で検出した瓦片は 7 世紀末～8 世紀前半の布目瓦である。また、山王・西海塚遺跡から出土した須恵器・灰釉陶器は 8 世紀後半から 10 世紀初頭に属す。これらは、近世の耕作痕から出土しており、二次堆積である。しかし、上流域に国分寺、近在に三宅廃寺・法立廃寺などの古代寺院が存在するので、尾張の古代寺院に係する資料となろう。

科学分析の結果からは、西海塚遺跡から山王遺跡にかけて側方付加堆積によって流路が北から南へと移動していることが確認された。そのひとつが山王遺跡 05A 区の NR01 である。

また、山王遺跡 05B 区で検出された 13 世紀に属す SE01・02 は、この近隣に集落が存在した可能性が高いことを示している。13 世紀以降に急増する自然堤防上の新しい「村」のひとつとなろう。

さらに、1884(明治 17) 年以降作成地籍図との比較を行うと、次の 3 点が指摘できる。

- ① 西海塚遺跡 05B 区北、および西海塚 05A 区南から山王遺跡 05D 区にかけての落込みは、土層観察から水田であったと思われるので、地籍図では A 地点の畑中に溝状に掘られた水田を確認したと思われる。
- ② 山王遺跡 05A 区にて検出された NR01 は、土層観察から近世においては水田として利用され、その北側には堤状の高まりも確認されている。地籍図上の、B 地点の道と水田に該当すると思われる。B 地点の水田は下図のように帯状に広がっており、NR01 の地層観察からも、三宅川に先行する流路であったと推定される。この流路は、三宅川と分断されたために河水が供給されず、流路の機能を失い湿地化し、近世において水田として利用されるようになったも

のと思われる。NR01 北側にある 05B 区 SE01 の時期から、この自然流路は 13 世紀前半に三宅川から分断したものと思われる。このことは、三宅川の歴史に関して興味深い資料となろう。

4. 「三宅保」と「須賀垂」

本遺跡が所在する稲沢市平和町三宅周辺は、安閑天皇 2 年間敷屯倉設置をはじめ、正倉院文書や藤原宮本簡に中央とのつながりを語る史料がある。すなわち、本遺跡地域は中央との結びつきが古くからあったことがうかがえる地域である。そして、14 世紀前半、すなわち南北朝時代においても文献に見ることができる。その一つが「三宅保」であり、もう一つが「須賀垂」である。

(1) 「三宅保」

「三宅保」は『師守記』¹⁾に見ることができる。(原文は縦書・下線は筆者注)

A 『師守記』貞治 3 年(1364)8 月 11 日条

「今朝善覚向土岐大膳大夫入道京都代官武井入道宿所、是近日美濃・尾張寺社本所領半済分可去之由、置法云々、仍寮領美濃国玉村保并蒔田保・穀倉院領尾張国三宅保等事、為被見文書也、而返事云、國中法事、此一兩年押領事候、其事候也、多年押領地不被申引付奉書者、不可道行云々、仍帰了、」

B 『師守記』貞治 6 年(1367)6 月 17 日条

「次令向北小路前中納言教光卿許給、対面、数剋雑談、三屋保事被談合、先年武家奉書披見之、以此奉書、可申談土岐光禄入道之由、返答之」

C 『師守記』同年 8 月 4 日条

「今日北小路前中納言教光卿進状於家君、是尾張国三家保事、口入土岐伊予守直氏之处、此所押領恩賞領家事、曾不存知領家候者、不可有相違之由、令申之、且返報献之云々、如予州返報者、三家保領家職事不存知候、相尋代官、無相違者、不可有子細之趣也、如此奉之条、悦存、可参申入之

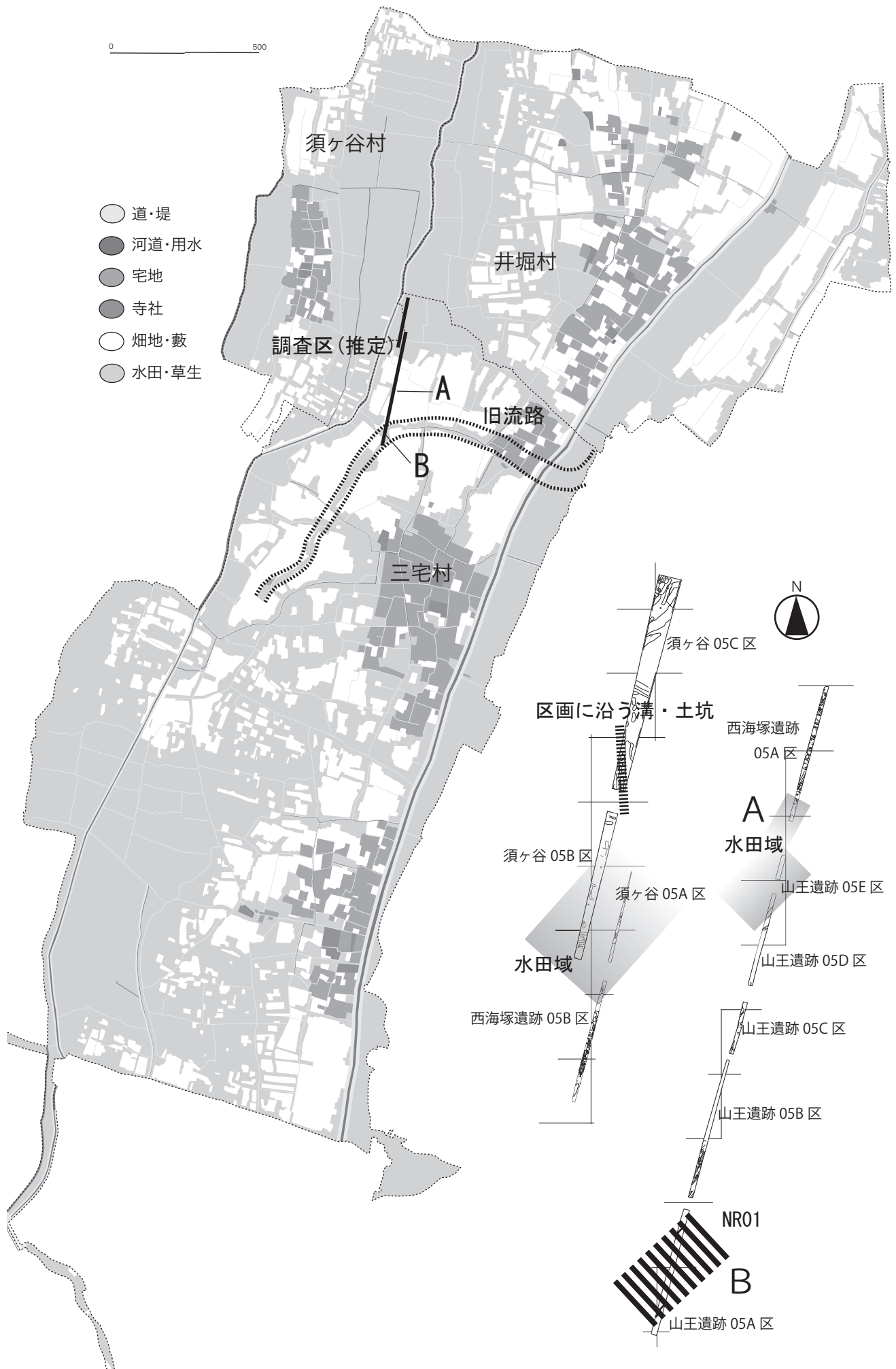


図 13 須ヶ谷・三宅・井堀村の地籍図

図 14 須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡の近世後期以降の展開 1/2000

旨、被答返事了」

D『師守記』同年8月5日条

「次令向北小路中納言教光卿宿所給、三家保事
昨日書状為被謝也、対面申云々」

E『師守記』同年9月10日条

「是日自仙洞被借召補歴本、為北小路前中納言
教光卿奉行被返下、此彼卿被示家君云、三屋保事、
一途可申之由、存候之处、依母儀所勞、伊与守
(土岐直氏)
下向濃州、十日暇被免之、上洛者可申驚云々、被
進請文云、補歴本被返下候了、被申出御本可被下
候、可直進上候、三屋保事、被懸御意、如此蒙仰
候、畏入候、一途候之様、預御口入候者、可畏存
之趣也」

「穀倉院領尾張国三宅保」の郡は記載されてい
ないが、地名から現在の稲沢市平和町三宅周辺に
比定されると思われる。貞治6年の史料では「三
家保」「三屋保」と記載されているが、8月4日
条に尾張国とあること、そして文中に尾張守護代
を勤めた土岐直氏が見えるので、これらはすべて
「穀倉院領尾張国三宅保」をさすと思われる。

さらに、史料Aで同時に半済地返還を求めた美
濃国玉村保と庭田保は大炊寮領²⁾であり、地名から
それぞれ現在の関ヶ原町と本巣市にあったと考え
られる。とすれば、これら三つの荘園は古代の
国衙所在地の近隣に設定された荘園である。

『師守記』の著者中原師守の兄・師茂(史料中
では「家君」)は明法家で、貞和元年(1345)から
大炊頭として史料に見え、貞和5年(1349)に穀
倉院別当に補任された人物である。そのため、師
茂が史料Aで見える3つの荘園にある半済として
押領された下地の返還をもとめたものと思われ
る。

この経緯をさらに考えると、康安2年頃には
守護土岐氏によって、美濃・尾張の本所領が半済
として宛行われていることが、『忠光卿記』³⁾に
見える。これに対して、史料などでは見えないが、

守護土岐氏に半済地の返還命令が御教書で出され
たのであろう。貞治3年8月11日にその御教書
を盾に守護土岐頼康に3つの荘園の返還請求を
したところ、守護方は「多年押領地」を理由に拒
否した。

貞治6年には後光厳天皇の近臣と思われる武
者小路教光を通じて尾張守護代の土岐直氏に三宅
保の問題を口入(介入)したところ、三宅保半済
地が返還の方向へむかうようになった。ただし、
この後三宅保の半済地が返還されたかどうかは不
明である。

このような三宅保半済地の背景には、幕府の半
済に関する方針の変化があると考えられる。足利
義詮は基本的に本所領保護策をとってきた⁴⁾。そ
れが守護方への返還命令となったのであろう。た
だし、三宅保が康安2年以前の押領地であるこ
とを盾に拒否した。しかし、貞治5年以後半済
停止の方針を採用した⁵⁾ため、貞治6年には三宅
保半済地返還へと向ったのだらう。また、貞治5
年に斯波高経が失脚し、翌6年に細川頼之が復
権したことも影響したと考えられる。

だが、三宅保半済地は返還されなかったもの
と思われる。それは、応安元年(1368)に応安半
済令が出され、皇室領・寺社領・殿下渡領などを
除いて諸国本所領の半済を追認したからである。
当然、三宅保半済地も守護方の半済を認められた
であらう。

(2)「須賀垂」

応安3(1370)年8月日付の妙興寺文書に、尾
張国人荒尾宗天(泰隆)が妙興寺に田地を寄進し
た寄進状、売券、田地坪付注文があり、その中に
「尾張國中嶋郡須賀垂」という地名が見られる⁶⁾。
土岐氏が尾張国人を被官化する過程で、この荒尾
氏は守護被官とは区別された存在であった。上村
喜久子氏は、荒尾氏が所領を妙興寺に寄進してい
ることは同氏が幕府に接近していることを示して

いるとしている⁷⁾。このため、14世紀前半には守護土岐氏への対抗上、妙興寺への所領寄進を繰り返していた。

そこで、応安3年に「須賀垂」が妙興寺に寄進された理由としては、前述の通り、2年前の応安半済令によって三宅保半済が恒久的なものとなったことがあろう。すなわち、荒尾氏の所領「須賀垂」が常に守護被官によって侵略を受けかねない場所となったのである。そこで、「須賀垂」を妙興寺に寄進することで、土岐氏の侵略からの保全を図ろうとしたと思われる。

(3) 文献を通した13～14世紀の景観復元

「三宅保」は穀倉院領であるが、元来は国衙領であったと思われる。保の領有者である保司はその多くが国司または在京領主であって、その領有が中央貴族の下に温存された時に保は容易に荘園に転化したこと⁸⁾、国衙領そのものにも内蔵寮領・内匠寮領のものが見えることからである⁹⁾。

14世紀の尾張の国衙領は、保が大半を占めており、12世紀前半以降に史料上に見える保は、在地領主の力を結集するために国衙によって積極的に創出されたものであった。そのため、保は、畠や荒地を多く含み、条里制遺構地域の周辺、旧河道沿いの自然堤防上に分布している¹⁰⁾。当然「三宅保」も、三宅川の自然堤防を利用した畑作が中心であったものと思われる。

また、山口保に属する「須賀垂」は荒尾氏の所領から妙興寺に寄進されたものである。荒尾氏の所領が日光川・三宅川・青木五条川沿いの自然堤防上に分布していることが指摘されている¹¹⁾ので、この「須賀垂」も同様なことが考えられる。

さて、近隣の発掘調査事例を見てみると、一色青海遺跡では、方形土坑群が検出されているが、この土坑群は13世紀後半から14世紀にかけてのものと推定されている。また、跡ノ口遺跡でも14世紀前半に埋没する溝1基が検出されており、

屋敷地の存在が指摘されている。山王遺跡05B区のSE01・02も屋敷地に付随した井戸と考えるならば、同様な事例として位置づけられよう。

他にも、このような13世紀後半から14世紀にかけて見られる遺構の画期は、尾張平野低地部で見られる。これらは、旧来の集落の解体と新しい「村」の出現として考えられている¹²⁾。

以上を総合して考えれば、13～14世紀における本遺跡周辺においても、三宅川の自然堤防を利用して畑作を中心とした開発が行われていたと考えられる。さらに、そのような耕地では、寺院収入に重きをなす絹の生産のために桑園の造営がなされたと、『新修稲沢市史』は想定している。ならば、『海道記』の貞応2(1223)年4月7日条では、津島渡から萱津宿へ行く途中に、「園ノ中ニ桑アリ、桑ノ下ニ宅アリ、宅ニハ蓬髪ナル女、さんさく蚕簀ニ向テ蚕養ヲイトナミ、園ニハ潦倒タル翁、ろうとう鋤ヲ柱テ農業ヲツトム」と記している。本遺跡周辺でも、このような景観が見られたと推測されよう。

註

- 1) 『史料纂集』所収
- 2) 『国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書6日本荘園データ1』(1995)P452・458
- 3) 『忠光卿記』康安2年5月6日条(『歴代残闕日記第20冊』)
- 4) 田端泰子「室町前期の半済」(『日本歴史』第624号)p29
- 5) 前掲論文「室町前期の半済」p34
- 6) 『新編一宮市史資料編五』史料一五二～四
- 7) 上村喜久子「国人層の存在形態―尾張国荒尾氏の場合」(『史学雑誌』74-7)(1965)p66
- 8) 『講座日本荘園史2』(1991、吉川弘文館)p282
- 9) 『講座日本荘園史5』(1990、吉川弘文館)p392
- 10) 前掲書『講座日本荘園史5』p392

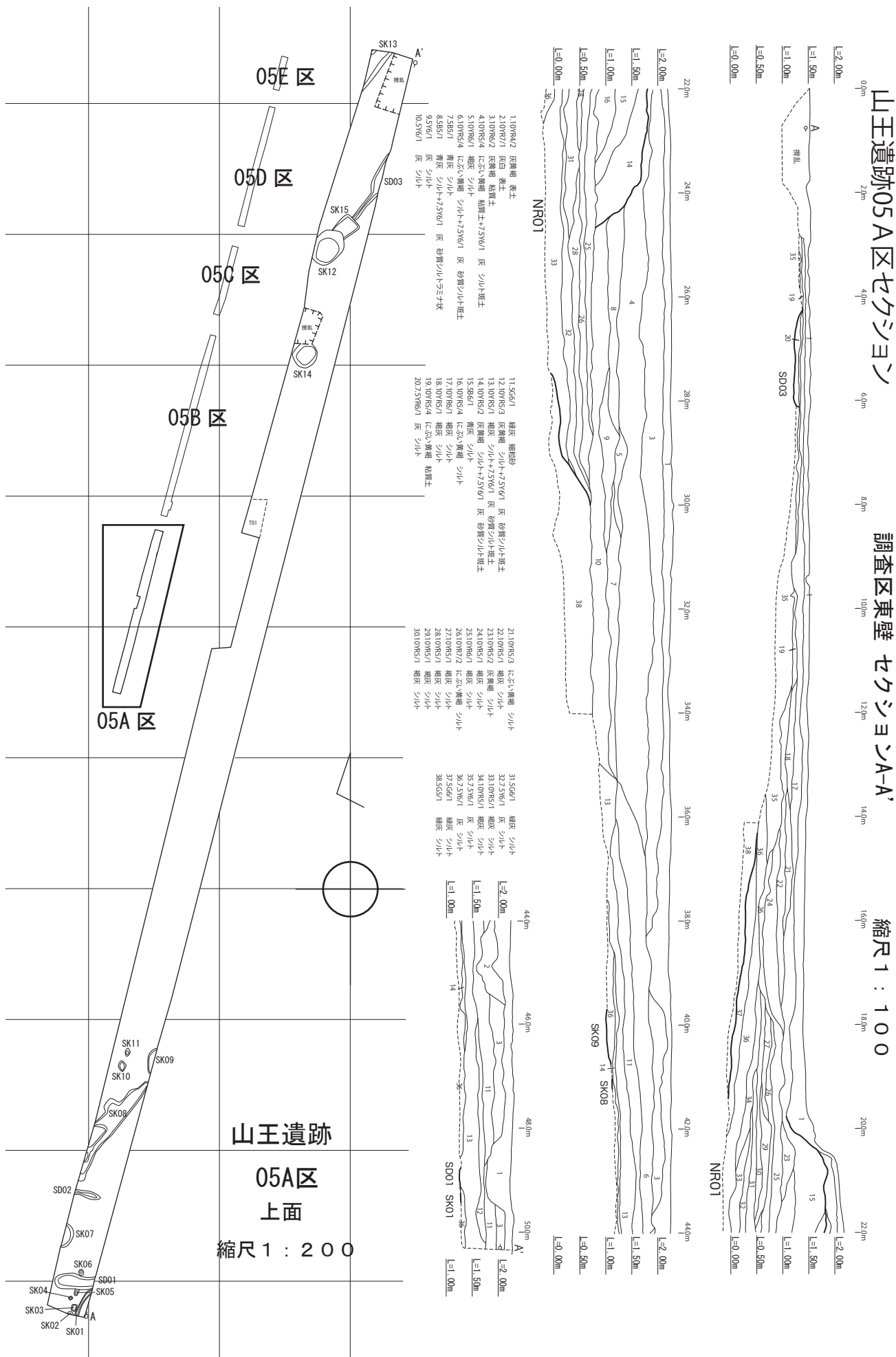


図 15 山王遺跡 05A 区上面プランとセクション

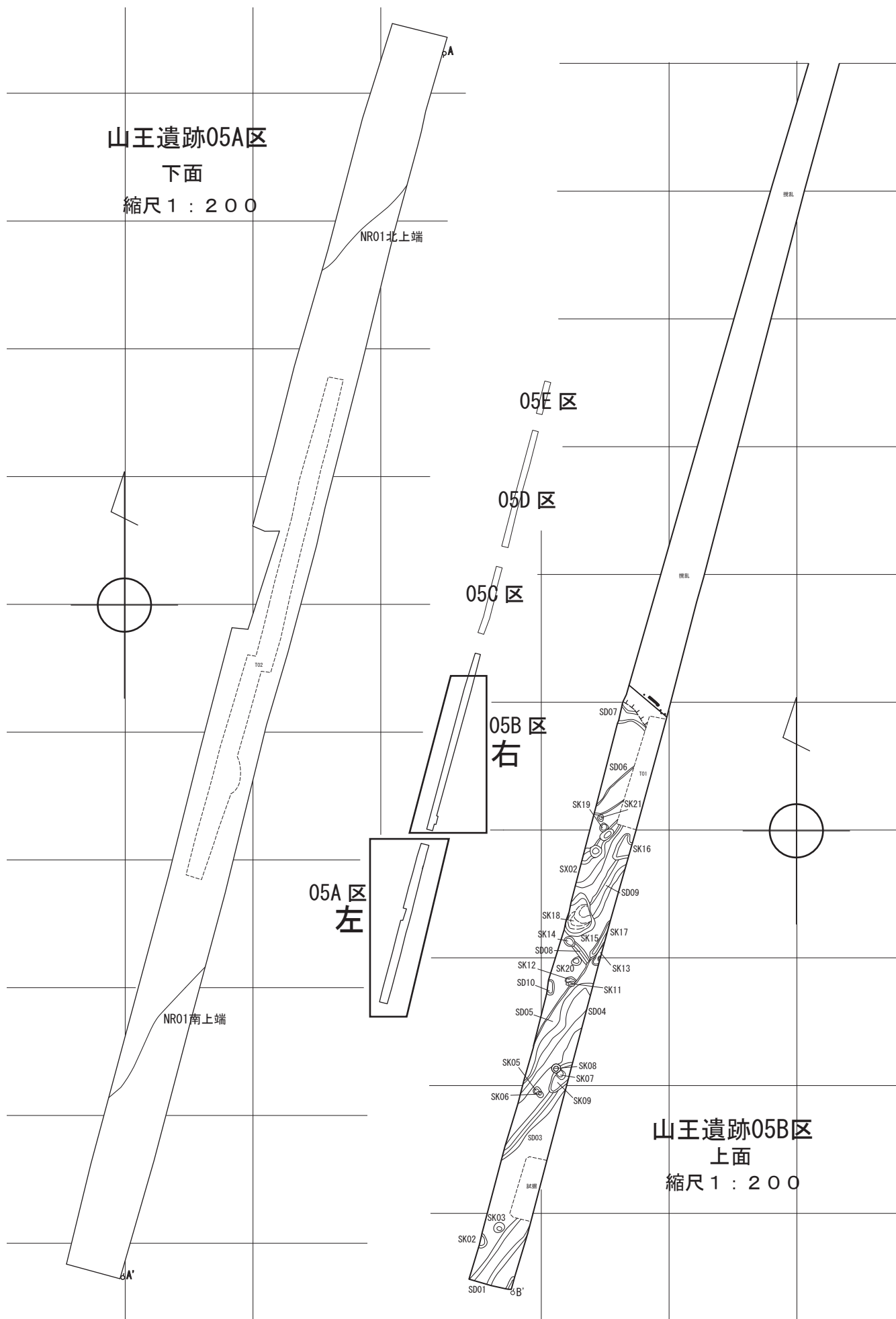


図 16 山王遺跡 05A 区下面・05B 区上面プラン

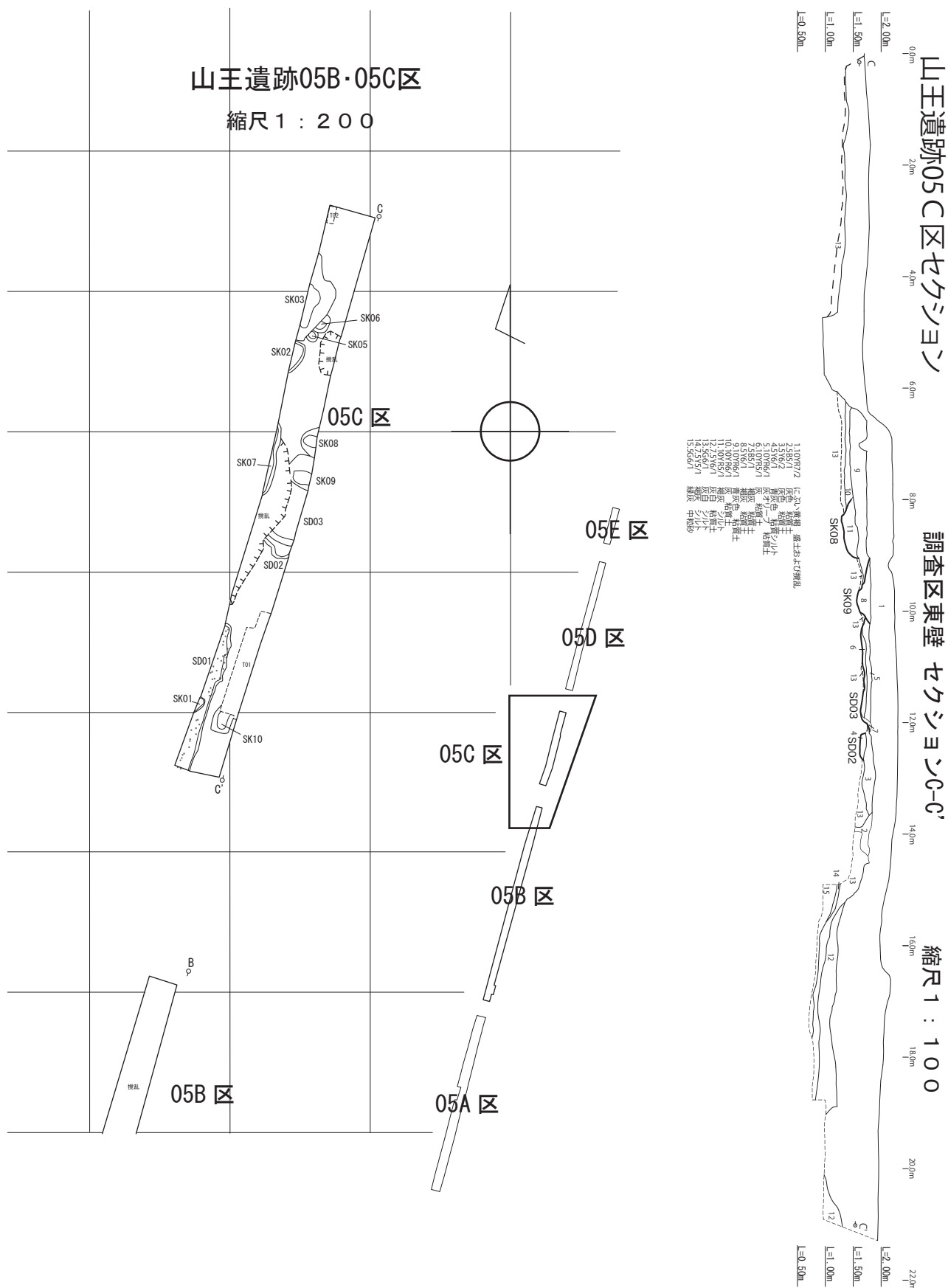


図 18 山王遺跡 05B・C 区プラン・セクション

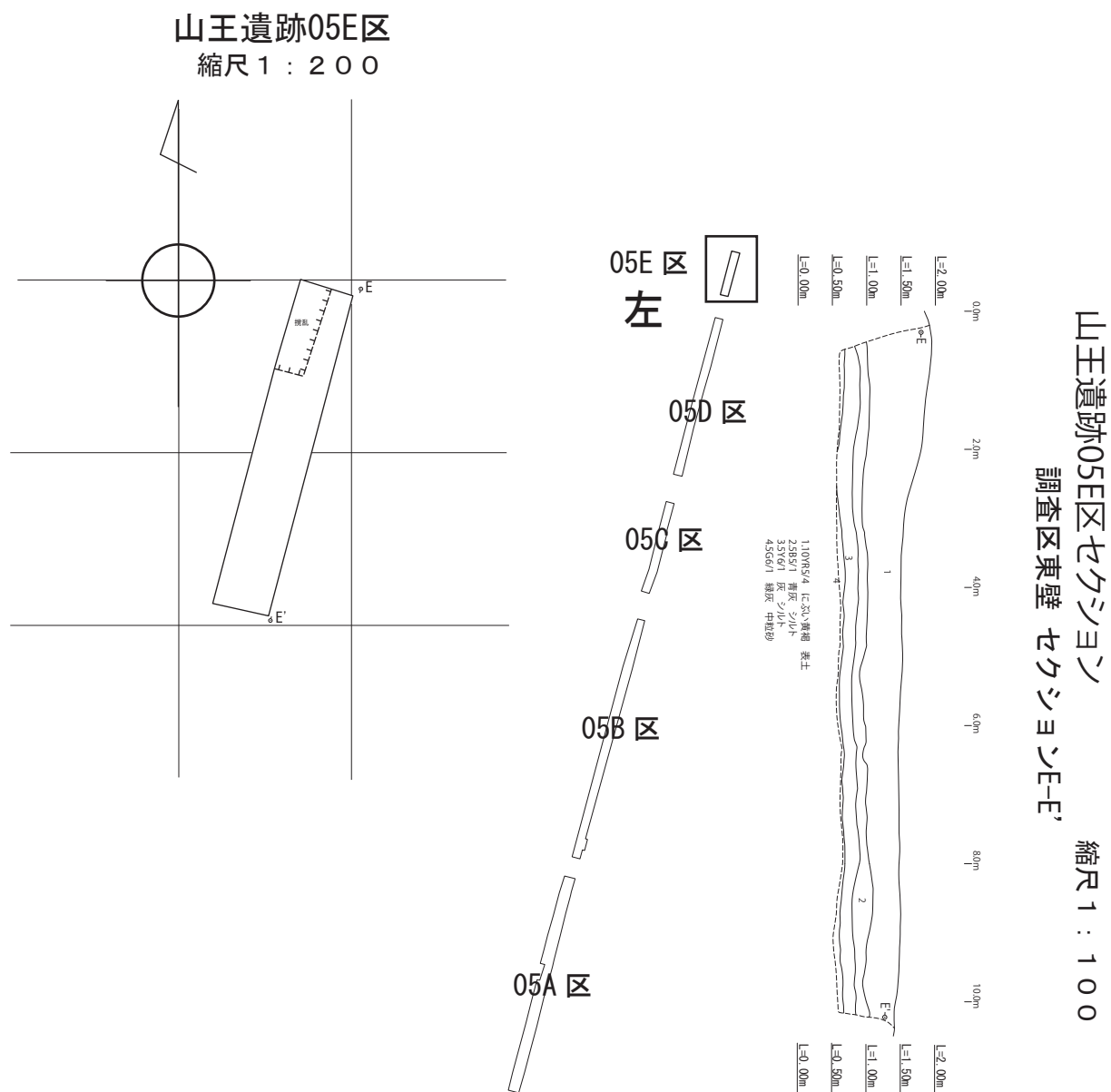


図 20 山王遺跡 05E 区プラン・セクション

- 11) 前掲論文「国人層の存在形態―尾張国荒尾氏の場合」
p54
- 12) 赤塚次郎編『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
第2集土田遺跡』(1987) p109

100
|

縮尺 1 : 200

図 21 西海塚遺跡 05A 区プラン・セクション

西海塚遺跡05B区セクション

調査区東壁 セクションB-B'

縮尺 1 : 100

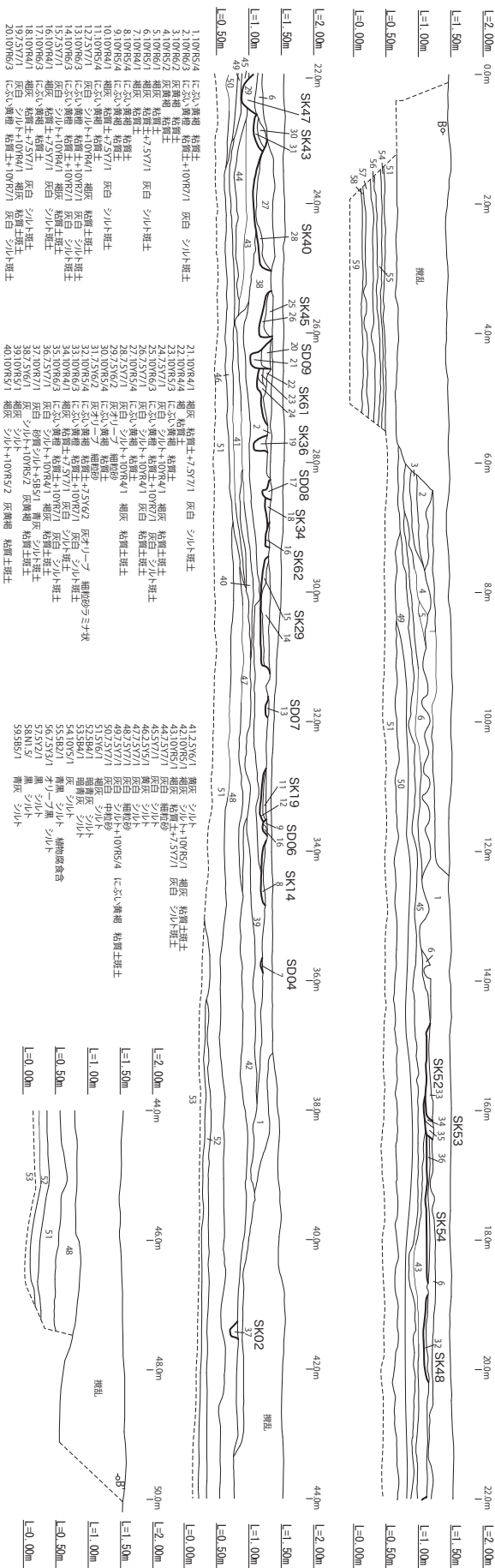
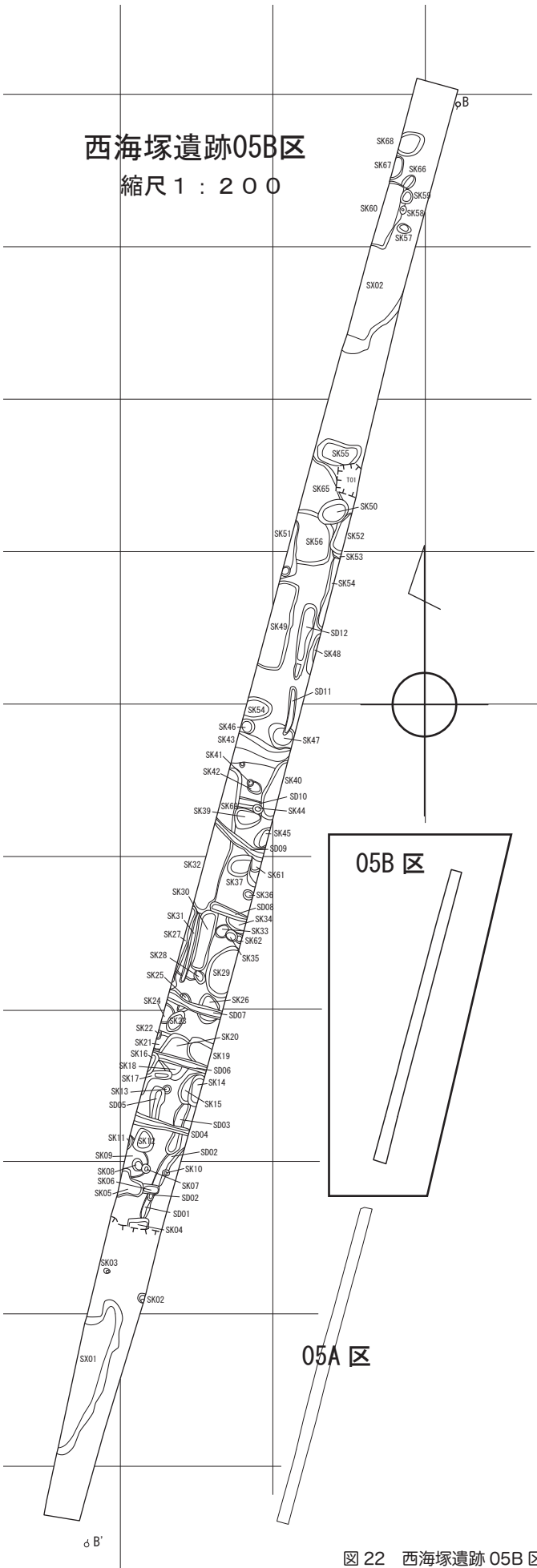


図 22 西海塚遺跡 05B 区プラン・セクション

西海塚遺跡05B区 縮尺 1 : 200



第3章 須ヶ谷遺跡

1. 調査の概要

i 調査経過 須ヶ谷遺跡の調査は今回が初めてである。そのため、試掘結果以外に事前情報は無かった。

発掘調査が行われた一色青海遺跡や野口北出遺跡が北方にあって多少近接しているとはいえ、濃尾平野の沖積地では異なる遺跡の調査結果は往々にしてほとんど参考にならないのであり、事実、今回も山王遺跡・西海塚遺跡に続いて調査を行ったにもかかわらず、遺跡の状況は全く異なるものであった。よって、また新たな情報を蓄積したこ

とになる。

調査区は現県道を挟んで、東に 05A 区、西側の農道以南を 05B 区、以北を 05C 区と設定し、この順で、一部作業を並行させながら調査を進めた。

05A 区は調査区の幅が最大の南端でも 1m30cm 程と狭く、調査区北端では体を入れることはもとより、地層観察にも困難が伴った。そこで、最初の調査区でもあることから、遺構プランの把握よりも土層堆積状況の確認に重点を置いた調査を進めた。

表土掘削は機械力を使えないので、人力で行っ



図 23 須ヶ谷遺跡調査区全景 南から

た。調査終了後の原状復旧のために、隣接する水田にシートを敷き、まず耕作土（床土）を掘り上げ、その上にシートを敷いてさらに下層の掘削土を積み上げた。

調査では遺構検出面を上下2面に設定し、1面を灰白色シルトの上面、2面を青灰色シルト面とした。この灰白色シルトは他の調査区にも広がっており、調査全体の鍵層となった。

05B区は調査区の幅が4m内外であり、機械力を用いて表土掘削を行い、掘削土の排出にもベルトコンベアーを使用した。

耕作土（床土）直下をまず1面目の遺構確認面としたが、この段階ですでに調査区南部では灰白色シルトや黄褐色シルトの縞状の広がりが見られ、しかも方形をなすことから、これらが下層の遺構群（方形周溝墓群）である可能性が高く、少なくとも2面調査が必要であると判断した。結果的にはさらに下部に住居跡や土坑群があり、3面にわたる調査となった。

05C区は05B区の調査途中に並行して、同様の方法で調査を進めた。調査区の幅は5m以上あり、ようやく面的な調査を進めることができた。

表土掘削後、南半部は05B区北部に共通していることがすぐに判明し、方形周溝墓の存在も窺えた。それに対して北半部では広範囲に砂層が露出し、当初は自然流路が調査区を横切っているような印象を持ったが、調査が進むにつれて弥生時代中期前半の期間内だけで洪水層の堆積が複数回あったことが明らかになり、自然堤防の堆積であることが判明した。部分的には洪水層にパックされた遺構面も検出できるという幸運にも恵まれ、堆積環境の履歴を復元する上で貴重なデータが入手できた。

結局、05C区における遺構確認面は累計5面となり、とりわけ北部における遺構密度の高さには驚かされるとともに、須ヶ谷遺跡の弥生時代居

住域の中心が今回調査区北側の未調査部分にあるとの印象を強いものにした。

ii 層序と地表面 層位の堆積状況は調査区によって差異があり、詳細は個別の記載に譲るが、大きくは北西から南東に下降する地形にあつて、白色～灰白色を呈するシルト層が鍵層となって低位部に堆積し、高位部ではそれが部分的な堆積にとどまる状況を確認した。そして05C区では上述のように砂層が挟まれ、洪水の影響を受けた受けた可能性の高いことが判明した。

さて、洪水層の一部である白色～灰白色を呈す

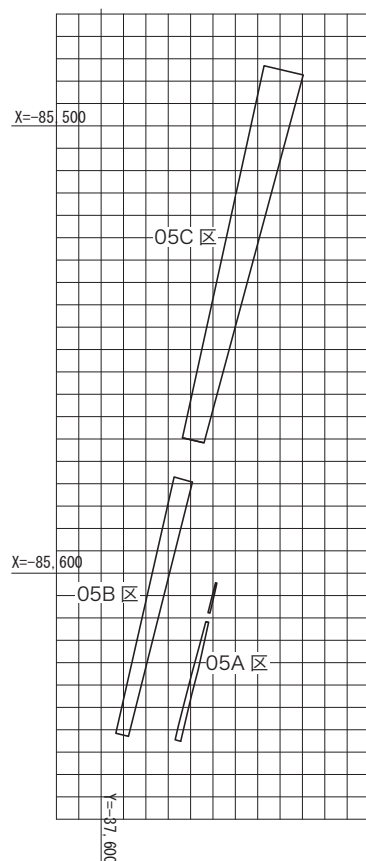


図 24 須ヶ谷遺跡調査区配置図

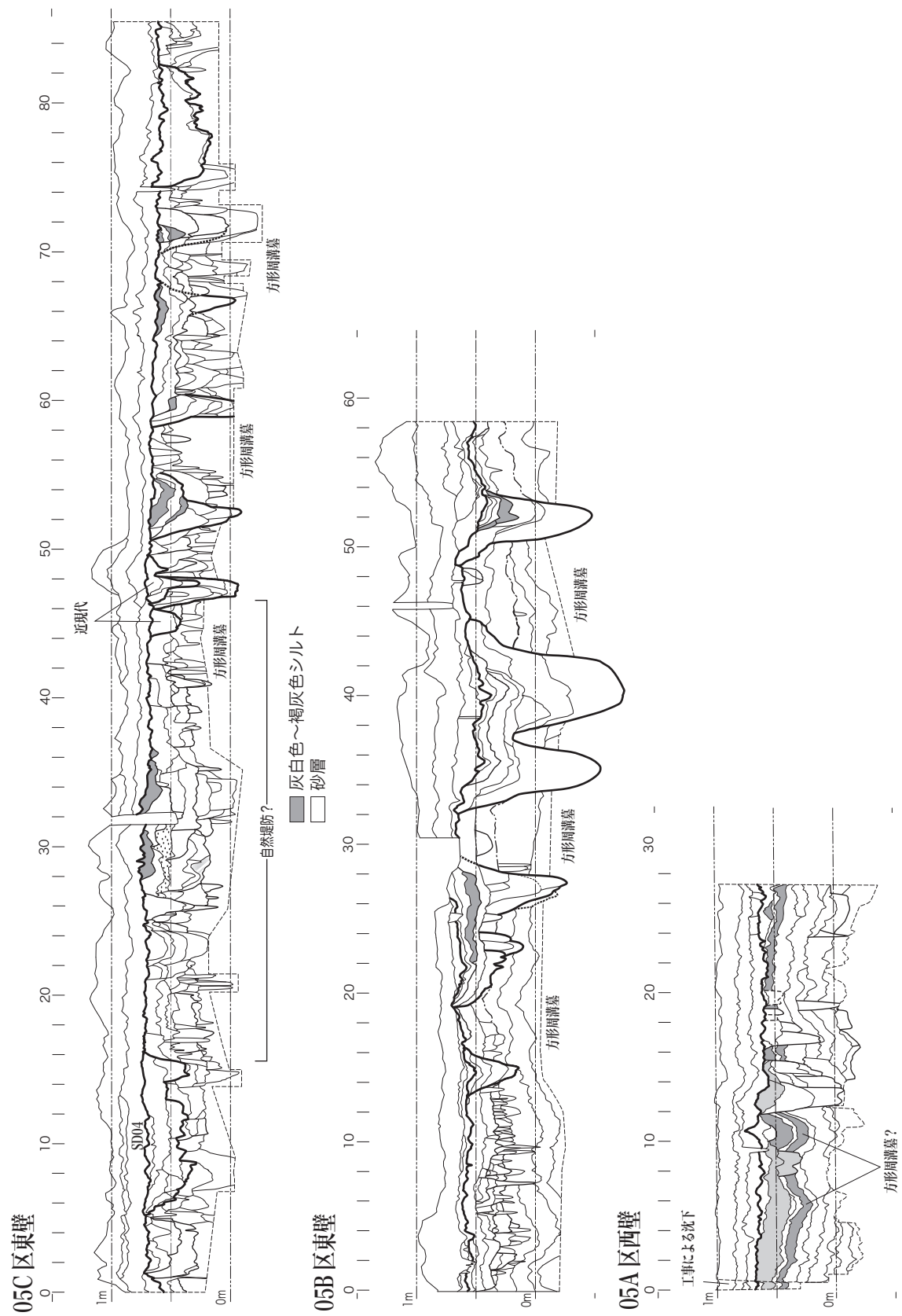


図 25 須ヶ谷遺跡セクション合成図 縦横比 1:6

るシルト層そのものは、遺構があらかた包含層の再堆積によって埋積した後の窪地状の部分が、起源の異なる堆積層によって平坦化する過程で堆積したものであるために、遺構の埋没時期からはかなり時間差をもつことになるのだが、調査当初は広域的に同一面を追跡する上では有効性があると考えた。

しかし、その後調査が進む中で、白色～灰白色を呈するシルト層は、05B区・05C区でみるように堆積範囲が広いわけではなく部分的な箇所もあり、さらに加えて後世の削平による影響が大きいなかで、果たして一定の堆積層上面の全体を覆ったものであったのかどうか残念ながら判断する材料を得ることができなかった。少なくとも野口北出遺跡や05A区の堆積状況をみる限りは全域的な堆積が想定されたが、同一時期の堆積層である根拠を得ることはできなかった。図25では、白色～灰白色を呈するシルト層の標高が調査区ごとに異なっており、同一面の標高が異なることに対応している印象を与えるが、やはり先の全面を覆っていたのかどうか判断できない点も含めて、同一層であるか否かは決着がつかない状況にある。

この点で、05B区の白色～灰白色を呈するシルト層中の炭化物で実施した ^{14}C 年代測定の結果が、その堆積時期が弥生中期中葉以後で、もしかしたら弥生中期後葉に重なるかもしれないという、遺跡全体の堆積環境と出土土器の考古学的年代にもとづく当初の堆積層の推定年代とずれがあった点を重視するなら、先の標高の違いについては、05C区で確認された複数回の洪水層に対応すると考える必要も生じる。つまり、洪水の及んだ水位の違いが反映されている反映されているとなれば、これらが同一層であることはもとより、同一時期の旧地形の起伏を復元する重要な指標になるという点も大きく揺らぐことになる。

これまでの経緯から言えば、一色青海遺跡の調査において同一層は未確認でありゆえに時期差であるとなれば、弥生中期後葉における堆積ではなく、やはり弥生中期中葉の中で堆積したのだと結論づけることになるのだが。

なお、05C区で顕著であった後世の削平は、戦後の区画整理によって三宅川の自然堤防端を方角形状に削り取って水田に改変したのが最大のもので、調査区内でも1mを超える削平があったと想定される。そのため、05C区北部の中世遺構がほとんど底面の検出にとどまり、一部には空白区域さえあることがこのことを示している。

いっぽう、中世方形土坑(SZ01)の残り具合をみると、旧地表には確実に起伏のあったことが窺え、現在は平坦な濃尾平野のイメージが全く最近に形成されたものであることがわかる。

いかにして現在の低平かつ平坦な濃尾平野のイメージを払拭するのかという課題に向けては、われわれの詳細な発掘調査データの確保と適正な読み込みにかかっており、まだ多くの作業を残していると言わねばならない。

2. 調査の成果

(1) 05A 区

i 層序

層位は、①層：耕作土（床土）、②層：黒バンドを挟んで灰白色シルトが2層、③層：青黒～黒シルト、④層：暗青灰～黒シルトとなり、④層は基盤層である。

遺構は、中世以降が②層を掘り込んで構築されているが、南半部では中世の遺構上部をさらに灰白色シルトが覆っている。おそらく、調査区西壁8mまでの上部の灰白色シルトは、二次堆積もしくは新しく堆積した地層であり、②層よりは堆積時期が新しいと考えられる。

②層の堆積状況を観察すると調査区西壁10m付近（SK10）あたりで凹み、さらに同8m以南でも②層が下降しており、地表面の起伏を示している可能性が高いと考えられた。05B区の成果に照合させるなら、弥生中期中葉の方形周溝墓の周溝縁辺か、周溝掘削を含む方形周溝墓造営作業が周囲に影響を与えた可能性が高いといえる。ただ、調査区から明確な溝は未検出であり、あくまで存在を窺わせるにとどまる。

③層は若干遺物を含むものの、自然堆積であり、その下部④を掘り込んで弥生時代の遺構がある。

④層上面では弥生前期の土器が出土し、これらの遺構も弥生前期に属す可能性が高い。

ii 遺構・遺物

遺構群は大きく上下に2分でき、調査区北辺の遺構群は耕作土直下にあって上部に属し、近現代に属す耕作関連の遺

構と考えられる。それ以外は下部に属して中世から近世におさまるであろうが、性格は不明である。

1面と2面に分けて記述する。

[1面]

②層上面で確認した遺構からは、近世・近代の陶器片が若干と加工円盤が出土しているのみで、ほとんど遺物が出土していない。SK05から弥生中期中葉後半：貝田町式2期の壺口頸部(1)が出土した。風化しているので混入と考えられるが、当該期の包含層が北部に存在した可能性を窺わせるに十分である。

1は口縁端部が直交刻み、そして頸部の沈線が多条で頸体部界がわずかに隆起して沈線で斜格子



図26 須ヶ谷遺跡 05A区調査風景 上：南部 下：北部

紋が施されるので、伊勢湾西岸系であろうが、産地は不明。

SD03 と SK09 は直交しており、地割りの軸線をもつかのように見える。この点からいえば、斑土を埋土に含むとはいえ深く安定した SK09 は溝のようでもあるが、水流の痕跡は認められない。

地層断面では SK09 に切られるいくつかの遺構が確認できる。斑土を埋土とするものが主なので、いわゆる「中世方形土坑」に該当するものであった可能性もある。

[2 面]

④層に掘り込まれて③層を覆土とする遺構群である。住居跡と推定した浅い掘り込みや土坑群が展開する。③層下部から遺構埋土にかけては弥生前期の土器片や炭化物が出土した。

SB01・02 は調査区のほぼ中央から重複して検出された。床面上部からは炭化物や土器片が出土

した。ただし、SB02 の床面は傾斜しており、住居跡であったと積極的に判断できる材料は無い。

SB03 は、掘り方は浅いが、検出段階には明確に輪郭を捉えることができた。対向する竪穴掘り方の輪郭がわずかに弧状をなすので径約 3m の円形プランとの印象をもったが、調査区の幅が狭いので確証はない。

なお、SB01 と調査区南部の土坑群の間は遺構平面図で空白となっているように、調査では④層に掘り込まれた明確な遺構は検出できなかった。しかし、西壁 8m 付近から南は②層も下降し③層内に窪地状の起伏が確実に存在した点で、それが上記の遺構が空白である点に関係して④層上面にも窪地が存在するのかが問題となったが、湧水もあって明確な解答をえることはできなかった。05B 区からは明らかに下降しているので、水田が存在した可能性がある。

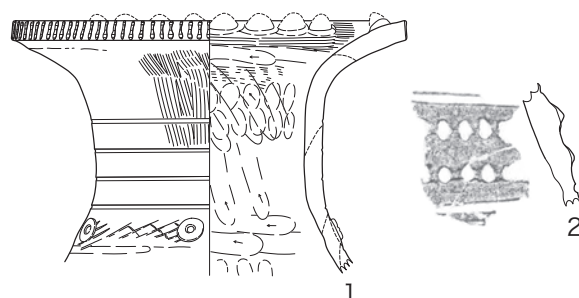
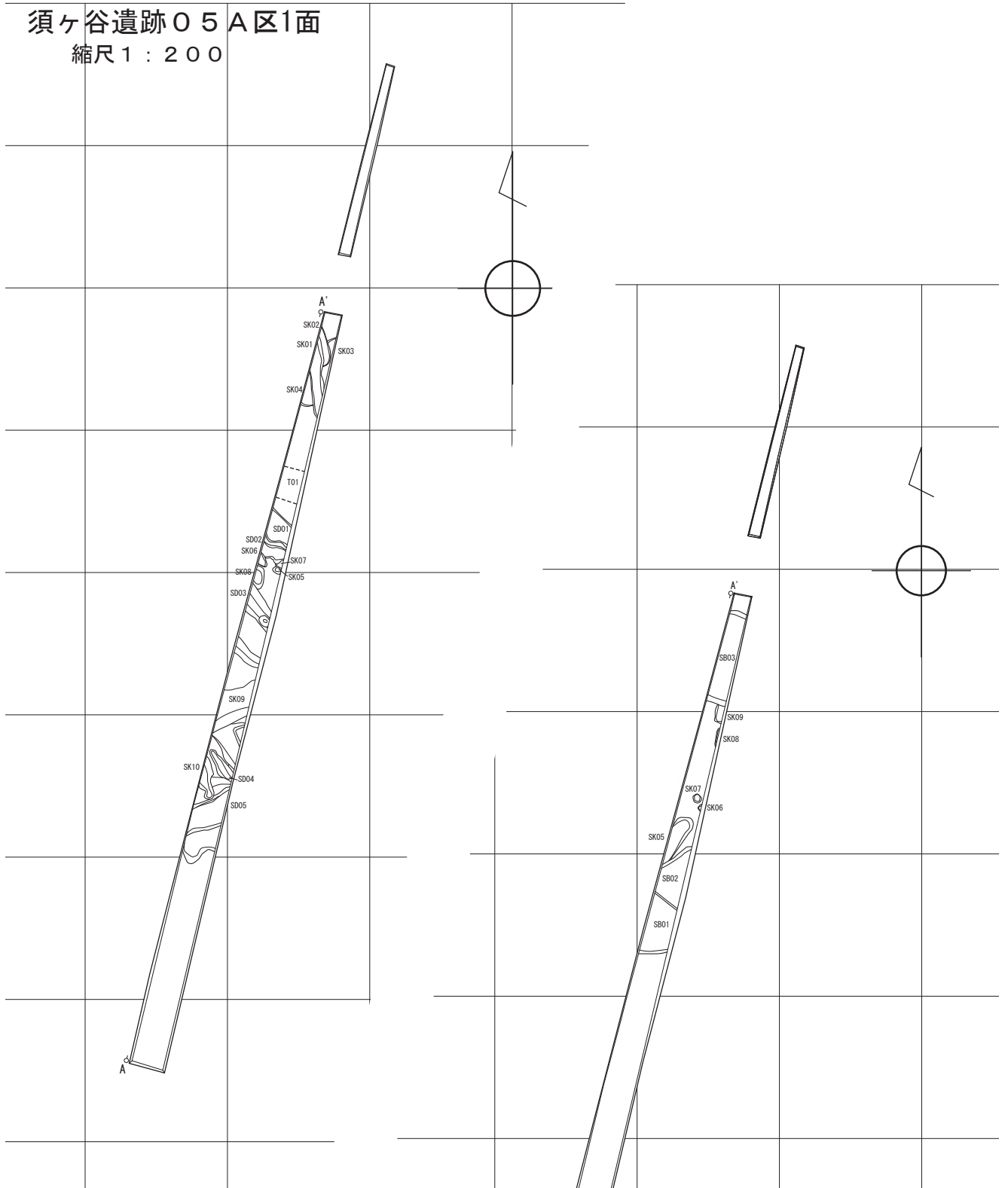


図 27 須ヶ谷遺跡 05A 区出土土器

須ヶ谷遺跡05A区1面

縮尺1:200



須ヶ谷遺跡05A区-2面

縮尺1:200

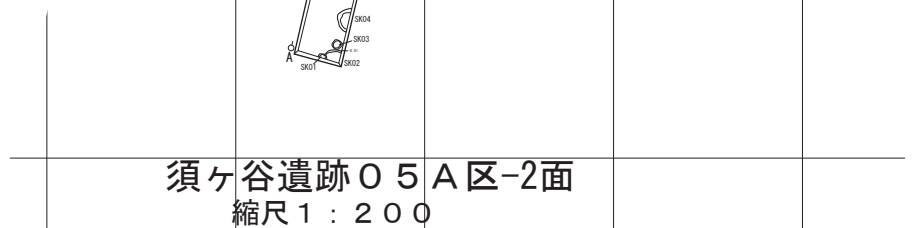


図28 須ヶ谷遺跡05A区1面・2面プラン

須ヶ谷遺跡05A区セクション

縮尺 1 : 50

調査区西壁 セクションA-A'

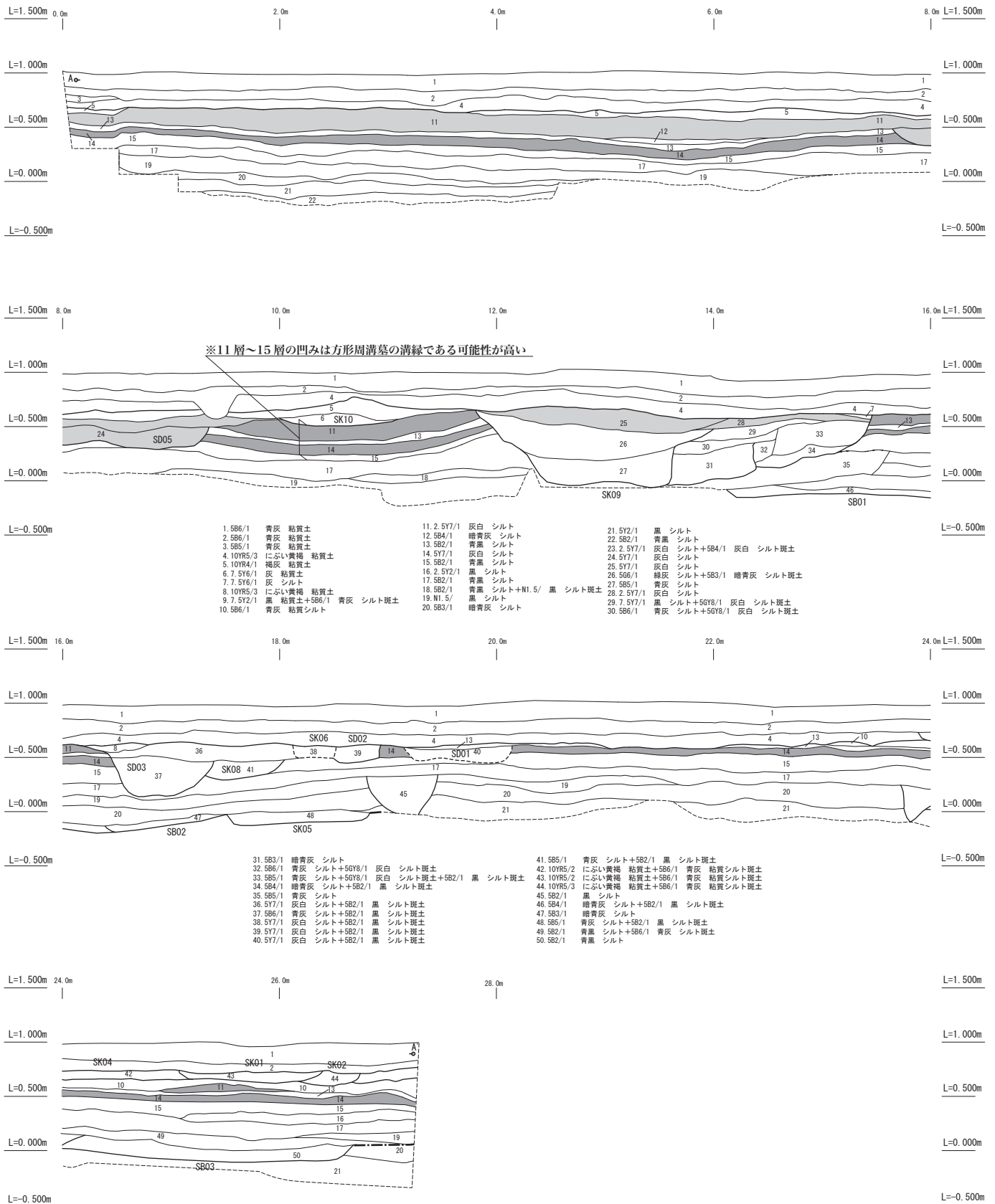


図 29 須ヶ谷遺跡 05A 区西壁セクション

(2) 05B 区

i 層序

層位は、①層：耕作土（床土）、②層：褐灰色粘質土～灰色粘質土～灰色シルト、③層：青灰色粘質土～青灰色シルトとなり、③層は基盤層である。

05A 区の鍵層であった②層と全く同一の層位は 05B 区に無いが、土質・色調から灰白色シルトが対応していると考えた。この地層はしかし、全面に広がることは無く、堆積範囲は方形周溝墓の周溝上部に限られ、酸化して褐灰色を呈する部分もあった。灰白色シルト層が部分的な堆積にとどまることは、05B 区旧地表の標高が 05A 区より高かっただけでなく、起伏也大



図 30 須ヶ谷遺跡 05B 区作業風景



図 31 須ヶ谷遺跡 05B 区 2 面検出状況

きかったことを示している。05B 区の遺構が弥生中期までの時期幅をもち、遺構密度の高いことも、このエリアが高位であることを示している。

ところで、05B 区の②層は調査区全域で均一ではなく、遺構の展開状況によって質・色調を変える。とくに灰色シルトは方形周溝墓の盛土に対応する部分もあり、それが流出して周溝上部に堆積している状況も認められた。

遺構は、②層上面で中世以降の遺構と方形周溝墓上部を、②層上部で方形周溝墓の周溝下部を、②層下部と③層上面で竪穴建物群や土坑群を検出した。したがって遺構検出面は累積 4 面となる。

ii 遺構・遺物

大きく 3 面に分けて記述する。

[1 面]

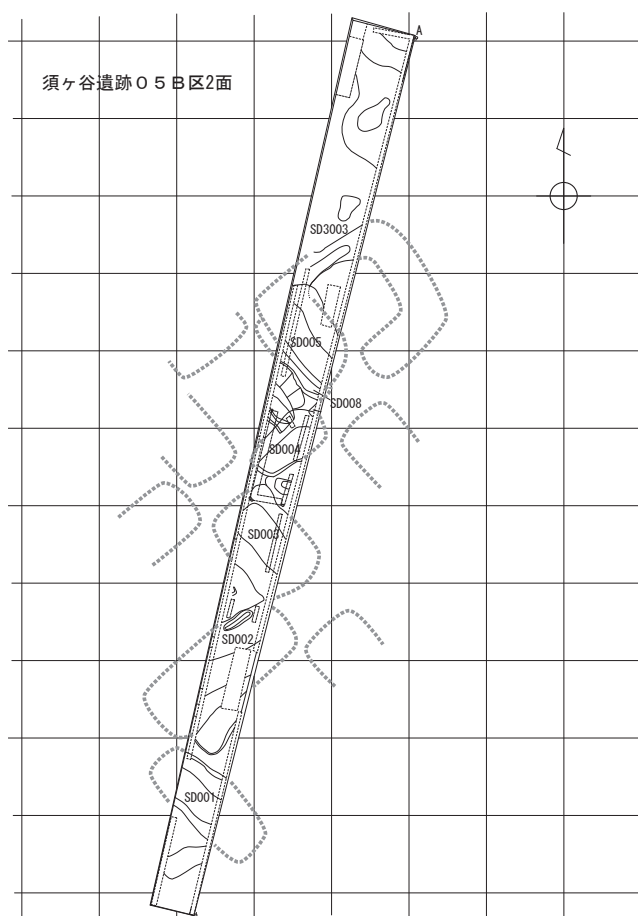
調査区北部では耕作に伴う不定形な遺構群を、南部では東西に走る溝群を検出した。遺物の出土はほとんど無く時期決定に困るが、南部の SD01 ～ 05 が中世に遡る可能性がある以外は近現代に属すであろう。

[2 面]

1 面の遺構検出のために清掃した段階で、褐灰色～灰色粘質土および灰白色シルトが並行して縞状に伸びていることを確認した。L 字形を交互につなげたように見えたことから、それが方形周溝墓の周溝上部堆積層がであることを即座に理解した。

調査の手順としては、これら最初に確認した堆積層を周溝上部を埋積するものと判断して、その掘り下げから始めた。層厚は 15 ～ 20cm と薄いものであったが、溝の形状を把握するには十分で

図 32 須ヶ谷遺跡 05B 区方形周溝墓分布図



あった。この周溝上部堆積層には禾本科植物の炭化物が含まれていた。

周溝上部堆積層を除去すると浅い凹みはすべて接続し、陸橋部の存在は窺えなかった。つまり、陸橋部は方台部より確実に低いことが確認できた。

次に周溝の掘削を行った。通常は周溝上部の凹みの中央が周溝の中央にほぼ対応するので、まず中央を掘り下げた後、掘削範囲を両側に広げていった。しかし、湧水がひどく、また溝底まで掘り下げるとさらに湧水が激しくなって遺構が崩壊する可能性もあったので、周溝最下部の掘削は全

景写真撮影後に行った。

推定される方形周溝墓の規模に比べていずれの溝幅も広いので、隣接する周溝墓の溝が並存する可能性を考えて慎重に掘り下げをおこなったが、やはり湧水のために平面的な追跡は困難を極めた。

周溝内からの遺物の出土は少なく、いくつかの地点で土器片が出土したにとどまり、明らかな供献土器は無かった。方台部については主体部の検出を試みたけれども、中心部からはそれているらしく、確認できなかった。

最終的には、北西-南東の軸線をもつ SD001・SD003・SD008・SD005 とそれらに直交する SD002・SD004・SD3003 を検出し、さらに SD003 - SD004 間、SD004 - SD008 間には陸橋部を検出した。この他、SD002 - SD003 間にも陸橋が存在する可能性はある。

当初、溝幅が広いことから隣接する周溝の並存を予想した点については、確実に溝の重複が判別できたのは SD005 と SD008 であり、SD002 の断面もやや疑念をもたせる以外は重複を確認できなかった。堆積状況からも SD005 を除いて明確な時間差を示す様相は認められなかった。したがって、隣接する周溝が完全に重複するのではなく、それぞれが時間をおかず隣接する周溝を共有

しつつ、埋積が進まない程度の短期間に、連続的に掘削されたと判断した。

この点で、2 面で確認できず 3 面での検出となった SD3003 は、SD005 との間に陸橋部は無く SD008 と重複関係が認められるので、時期的に下がると判断できるにもかかわらず、検出順序を逆転させる結果になってしまった。

SD001 調査区南部で検出した。幅約 4m、深さ約 1m で、上部には 1 面の遺構群が重複していた。北側からの土層の流れ込みがあり盛土の存在も窺えるが、南側にも溝に接して一部盛土が認められたので、調査当初は周溝ではなく水路の可能性も考えた。

SD002 幅は 5m 近くあり、最も幅広い。底面は平坦で他の溝と異なる。SD003 寄りにレンズ状の堆積層が認められるので、再掘削を見逃した可能性もある。

SD003 断面形状は SD001 に類似している。北からの土層の流れ込みが認められる。

SD004 南からの土層の流れ込みが認められる。溝幅は SD003 より狭く小規模であるが、対になる溝である。

SD008 SD005 掘削後に検出したので、確実に時期差のある重複関係をもつ。西壁セクションはほとんど周溝端に相当して浅くなっており、陸橋部が近いことを示している。なお、SD005 として取り上げた貝田町式細頸壺底部片 (3) は重複関係との対応が適切に把握できなかったものであり、SD008 に伴った可能性が高い。

3 は、体部下半が底部付近と最大径部付近のみミガキ仕上げで新しい様相をみせる。櫛描紋は細密で地のハケメを残す点が前半期の特徴であり、貝田町式 1c 期に属す。

SD005 幅約 4m、深さは 1m ほどである。上部の灰色シルトは他の溝より厚く堆積して、埋積状況が異なっていた。この灰色シルトは新しい堆

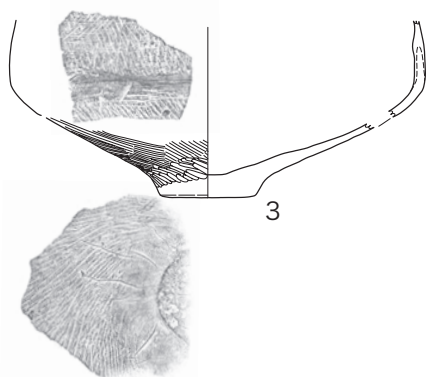


図 33 須ヶ谷遺跡 05B 区 SD005 出土土器



図 34 須ヶ谷遺跡 05B 区方形周溝墓 周溝の上層を掘り下げ



図 35 須ヶ谷遺跡 05B 区方形周溝墓 周溝をさらに掘り下げ



図 36 須ヶ谷遺跡 05B 区方形周溝墓周溝セクション 左 SD001 右 ; SD005

積層であり、埋没が他より遅かったこと、つまりこれらの溝のなかでは最後に掘削されたと判断できる。溝底はSD008よりも浅く、北の溝肩については基盤からの立ち上がりをうまく追跡することができず、輪郭は確実ではない。西壁地層セクションは溝端の状況を示し、規模推定の手掛かりになる。

SD3003 SD005 北側に灰色シルト層が認められて盛土の存在が窺えたが、方形周溝墓との認識に至らず、2面で見落とした溝である。そして、3面の段階でも当初は居住域内の区画溝とも考えていたが、地層断面の確認で2面の溝と判断した。[3面]

調査区北端で密集する竪穴建物跡や土坑群を検出した。弥生中期前葉に限定される遺物の集中箇所もあり、上部・下部の2回に分けて調査した。輪郭が明瞭な遺物集中箇所については竪穴建物廃絶後の廃棄と捉え、竪穴建物の輪郭との対応を見出した資料にそれぞれSB番号を与えて取り上げたが、わずかながらSB番号をまたがる個体もあり、隣接しているために混在した可能性がある。方形周溝墓群の下からも溝や土坑を検出したが、遺物はほとんど出土せず、周溝墓群造営以前にも墓域

であった可能性を窺わせた。

SB3001 SB3003 に重複する方形プランの南コーナーを検出した。竪穴建物に伴う諸施設は不明である。

4は口縁端部に上下から交互に指押圧が加えられ、頸部と体部の境界に沈線が施される。粘土の接合は外傾しているが、沈線帯がやや下がっており、遠賀川系土器とは施紋手法が異なる。5も外傾接合で、刻み突帯をもつ。沈線帯は伴わない。7は鉢で、外傾接合のようだ。8は口縁端部に二枚貝条痕を施すが、圧痕をもち、体部はハケメ調整→二枚貝調整であり、朝日形甕に共通する手法をもつ折衷型土器である。

SB3003 SD3004 に切られる。炉・柱穴は不明。

20～22は遠賀川系土器の末期で、22は金剛坂式か。24・25は金剛坂式甕。24は口縁端部を欠損しているが肥厚は明瞭である。25は丁寧に研磨されている。26は口縁部上端に指頭圧痕が施されており、22に共通する。27は口縁部がく字に屈折し、体部上半内面には研磨がまばらに施されている。28は口縁部外面にハネアゲ紋になる直前の螺旋を描くような波状紋が施されているが、口縁部内面は無紋で、口縁端部に沈線、上端



図 37 須ヶ谷遺跡 05B 区遺物取り上げ作業



図 38 須ヶ谷遺跡 05B 区測量作業

には刻みが施されており、金剛坂式と条痕紋系の折衷型のようなものである。29・30は明らかなハネアゲ紋をもつ。なお、29のハネアゲ紋は二枚貝によるが、それ以下の調整にはクシ状具を用い、工具を使い分けている、その範囲の断面形状は、上部では工具の食い込みが浅く、下部の縦位羽状条痕は歯先が深く鋭く食い込んでいる。32は、口縁端部が無紋で、上端に刻みが施され、体部には縦位羽状条痕が施されている。底部は上げ底である。

SB3004 唯一全周を確認したが、炉や柱穴は不明。SK3028・SK3030が柱穴であろうか。

33は直口壺で、外面には多条沈線、口縁端部には指摘みが加えられ、粘土がはみ出して突起状になっている。36～38は金剛坂式甕だが、口縁部は矮小化している。36・38の頸部は明らかな2段折れになっている。39～43は条痕紋系土器で、いずれも二枚貝条痕。39は口縁端部を欠損する。口縁部の開きが小さく頸部は斜条痕で、水神平式に属す。40は波状紋が崩れハネアゲ紋に近い動作で施紋されている。41～43はいずれも口縁端部に指摘みが加えられ、43は33同様に粘土が突起状にはみだしている。43の口縁端部は無紋で、上端は板状具で刻みが加えられている。これら口縁端部の指摘みは、器種、系統を横断する手法（モード）になっている。45・46は朝日式壺。45の口縁端部は上下から指圧痕が加えられて4に類似している。46は二枚貝で直線紋と波状紋が施されている。直線紋は2帯で構成され、下から上に施され、その後に波状紋が加えられる。朝日式では単体構成の直線・波状の交互配置があるが、それとは異なる。

SB3005 SB3004に切られる。9・10は金剛坂式甕で、9の口縁部上縁にはミガキが施されており、古い様相をもつ。11～15は二枚貝条痕。12は同じ胎土の破片をつないで復元したもので

確証はないが、体部はナデし上げの無紋のようで、肩部に横位条痕と縦位条痕、口縁部外面には右に傾いて畳み込まれたハネアゲ紋が施されている。口縁端部には条痕と指摘みが加えられ、まるで丸子式のようなものである。変化の方向から言えば岩滑式B類の傾向をもち新しい。11は波状紋というより連弧紋風で、もちろんハネアゲ紋とはいえない。その他

19・49はSK3015から出土した。19は大地形土器の口縁部で、内面は段をもたず縄紋帯がめぐり、外面に斜走沈線紋が施されている。49は朝日式の大形壺で、体部内面は被熱して黒変し、表面は荒れて剥落している。やや垂下する口縁端部には二枚貝直線紋が施され、後に上下から連続して指摘みが加えられている。頸部は二枚貝直線紋がめぐり、体部は無紋である。体部の肥大化が進み、口縁端部が垂下するなど貝田町式につながる新しい様相を示す。朝日式2期に属す。

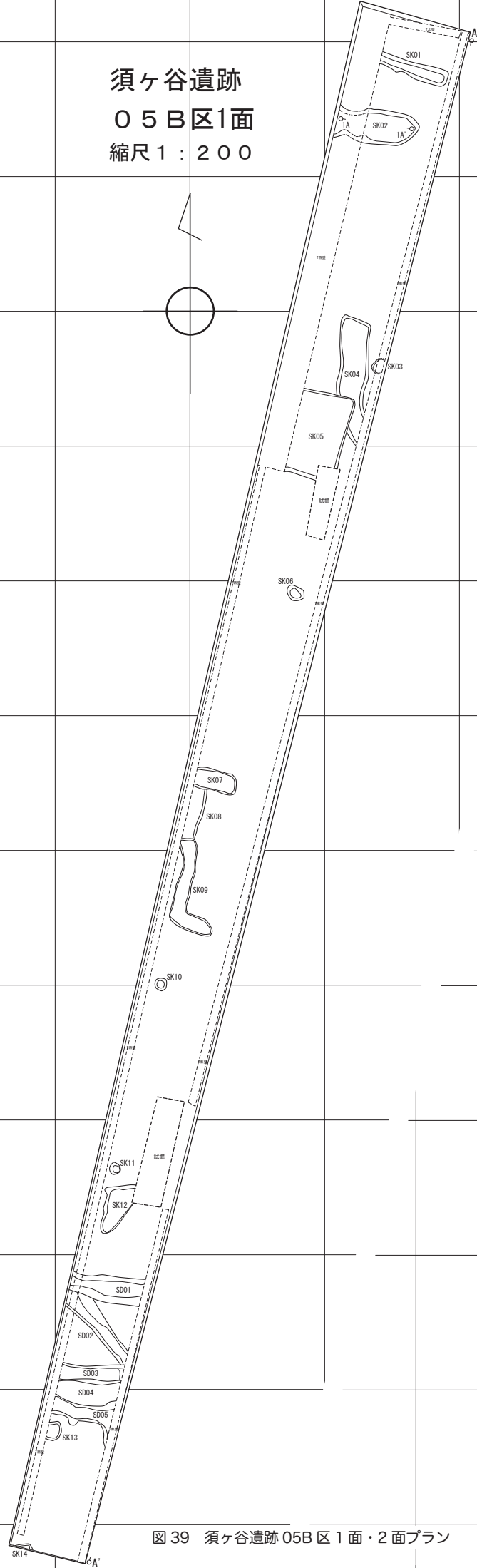
50以下は包含層出土。50～60は条痕紋系土器、61・62は大地形土器、63～75は朝日式に属す。

50～55は壺片。50は乱れた波状紋？、51・52はハネアゲ紋に定式化する前の螺旋状に重なる波状紋、53はハネアゲ紋で平行線が重ねられている。54の頸部には波長の長い押し引き紋（簾状紋風）が施され、下部の横位条痕帯には半截竹管紋が付加されている。55は櫛条痕で、29に類似するが横位条痕の単位が明瞭な点が異なる。野笹類型だが、産地は不明。

56～59は甕片。58は外面はわからないが内面にハケメ調整が認められる。外面は左上がりの斜条痕に左下がりの条痕を加えて縦位羽状条痕に見せている。口縁端部にも条痕が施されているが、折衷型土器というべきか。60は内傾口縁土器で、器壁が薄く、古い様相を呈する。

61・62は大地形土器。61は口縁部内面が無段

須ヶ谷遺跡
05B区1面
縮尺1:200



須ヶ谷遺跡
05B区2面
縮尺1:200

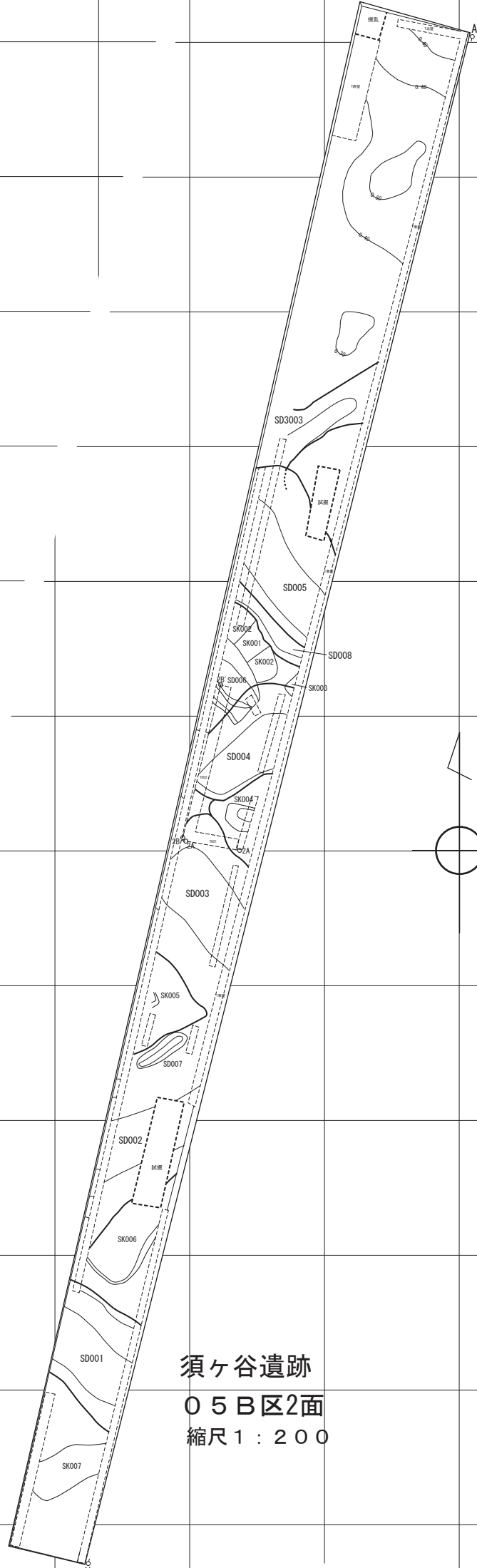
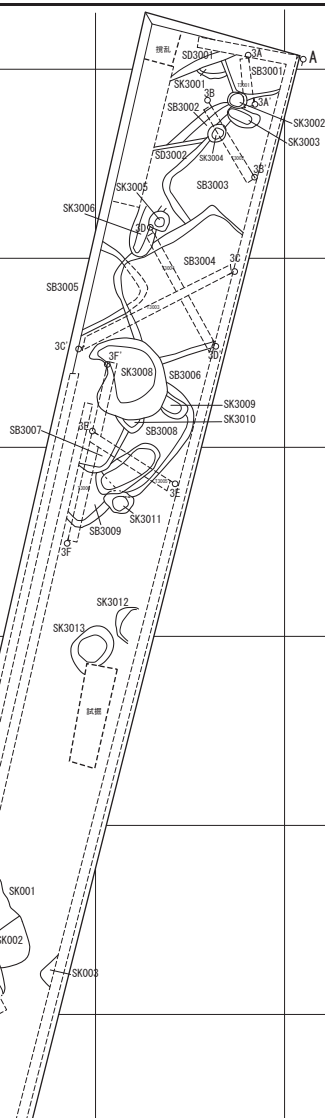


図 39 須ヶ谷遺跡 05B 区 1 面・2 面プラン

須ヶ谷遺跡 O 5 B 区 3a 面

縮尺 1 : 200



須ヶ谷遺跡 O 5 B 区 3b 面

縮尺 1 : 200

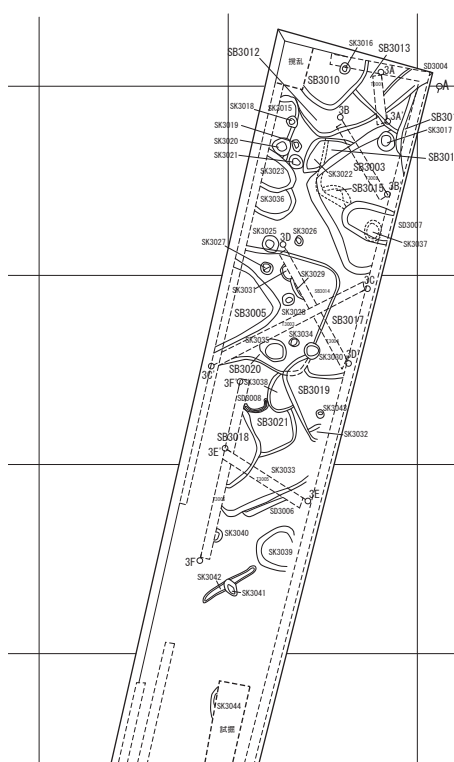


図 40 須ヶ谷遺跡 O5B 区 3a 面・3b 面プラン

須ヶ谷遺跡05B区セクション

縮尺 1 : 50

調査区東壁 セクションA-A' - 1

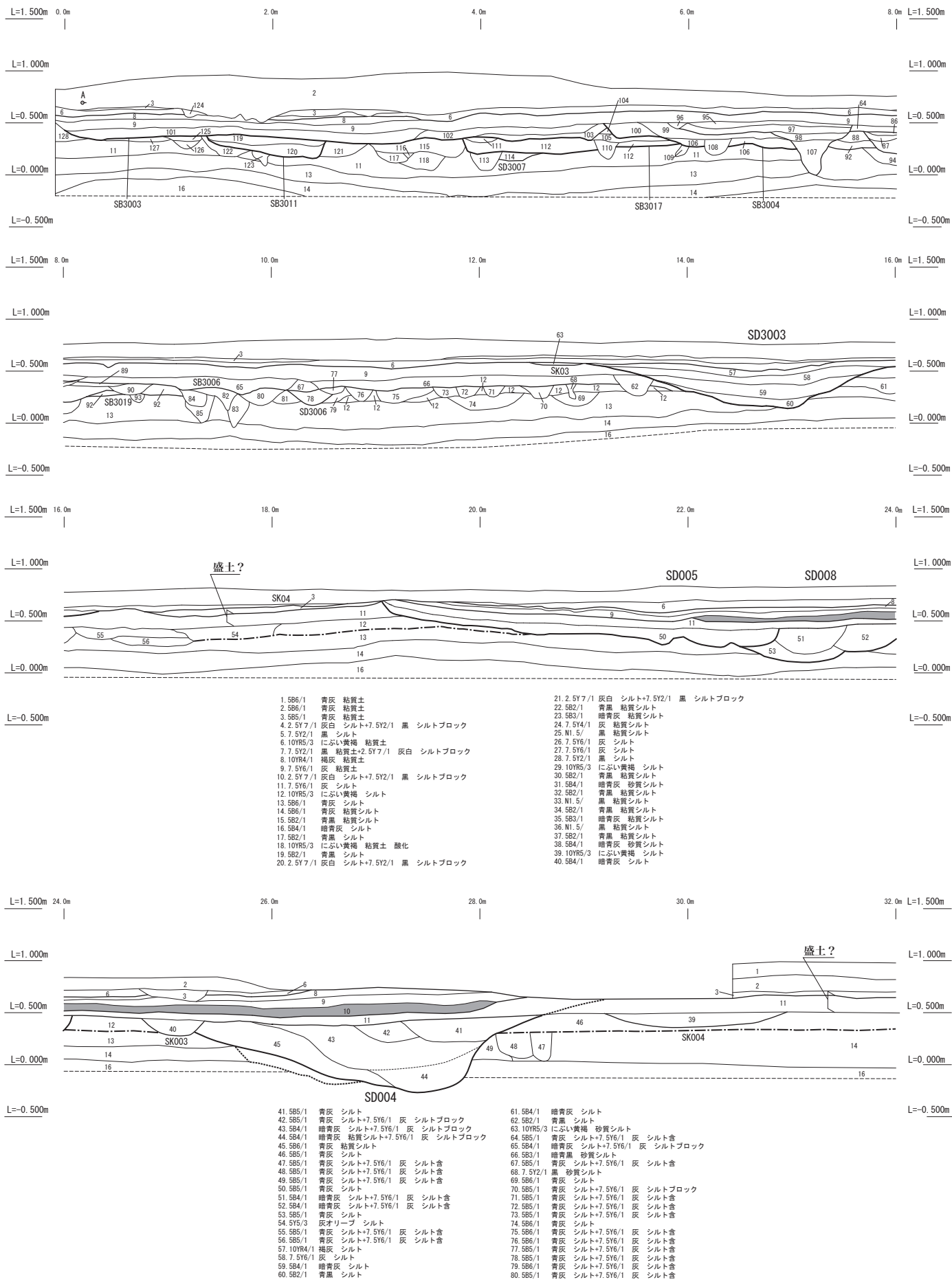


図 41 須ヶ谷遺跡 05B 区東壁セクション (1)

須ヶ谷遺跡05B区セクション

縮尺 1 : 50

調査区東壁 セクションA-A' -2

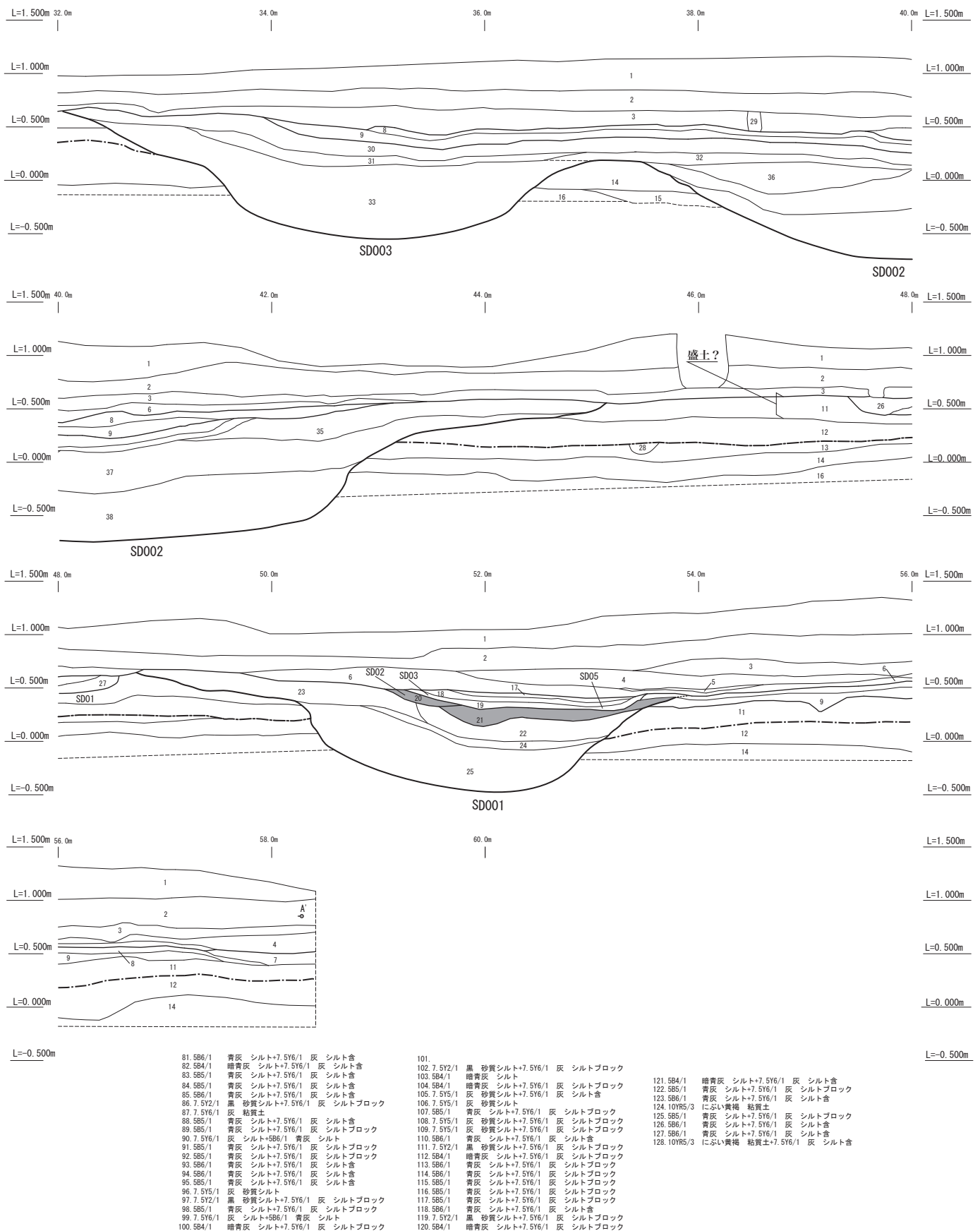


図 42 須ヶ谷遺跡 05B 区東壁セクション (2)

縮尺 1 : 50

The diagram shows a geological cross-section with two profiles, SD003 and SD006, plotted against a common horizontal scale. The scale has markers at 0.0m, 2.0m, 4.0m, 6.0m, and L=1.000m. Vertical scale markers on the left indicate depths of L=0.500m and L=0.000m. The cross-section shows various stratigraphic units, some of which are numbered (e.g., 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45). A specific unit is labeled '盛土?' (Mounded earth?). Below the profiles, a list of stratigraphic units is provided, each with a number and a description in Japanese. The units are listed in three columns, corresponding to the two profiles and the common scale.

Unit Number	Unit Description (Japanese)	Unit Number	Unit Description (Japanese)	Unit Number	Unit Description (Japanese)
11. 2. 5Y3/1	黒褐 シルト	21. 5Y4/1	灰 シルト	31. 10Y6/1	灰 砂質シルト+10Y7/1 灰白 シルト斑土
12. 2. 5Y4/1	灰 砂質シルト	22. 5Y4/1	灰 砂質シルト+5Y3/1 オリーブ黒 シルト斑土	32. 10Y3/1	オリーブ黒 シルト+10Y7/1 灰白 シルト斑土
13. 2. 5Y3/2	黒褐 シルト	23. 5Y4/1	灰 砂質シルト	33. 10Y7/1	灰白 シルト
14. 5Y5/1	灰 シルト	24. 5Y3/1	オリーブ黒 シルト+5Y4/1 灰 砂質シルト斑土	34. 2. 5Y3/2	黒褐 シルト
15. 2. 5Y4/1	黄灰 シルト	25. 10Y4/1	灰 シルト+5Y4/1 灰 砂質シルト斑土	35. 10Y4/1	灰 シルト
16. 5Y4/1	灰 シルト	26. 10Y4/1	黒褐 シルト	36. 10Y4/2	オリーブ灰 シルト
17. 5Y4/1	灰 シルト+10Y7/1 灰白 シルト斑土	27. 10Y4/1	灰 シルト+10Y4/1 褐灰 砂質シルト斑土	37. 2. 5Y4/1	黄灰 砂質シルト
18. 2. 5Y3/2	黒褐 シルト	28. 10Y3/1	黒褐 シルト	38. 10Y4/1	褐灰 砂質シルト
19. 5Y4/1	灰 シルト	29. 10Y3/1	オリーブ黒 シルト	39. 10Y4/1	褐灰 シルト
20. 5Y4/1	灰 シルト	30. 10Y6/1	灰 砂質シルト	40. 2. 5Y5/1	黄灰

Figure 1 is a plan view of the study area. It includes a scale bar from 0m to 3m, a north arrow, and a legend. The legend indicates that 1. 5Y3/2 represents olive fly pupae (シルト 斑土) and 2. 7. 5Y6/2 represents olive fly (灰オリブ シルト 斑土). The map shows a cross-section of the ground with labels 1A, 1, 1A', and 2. A dashed line indicates the '西壁' (West Wall).

L=1.000m
 0.0m
 1.0m
 L=1.000m
 L=0.500m
 3A
 3A'
 L=0.500m
 SB3003
 SB3001
 SB3013
 L=0.000m
 L=0.000m
 1. 5Y4/1 灰 シルト
 2. 5B2/1 青黒 シルト+10Y7/1 灰白 シルト斑土
 3. 5Y4/1 灰 シルト+10Y7/1 灰白 シルト斑土
 4. 5Y5/1 灰 シルト
 5. 5Y5/1 灰 シルト+10Y7/1 灰白 シルト斑土
 6. 10Y7/1 灰 砂質シルト+5Y4/1 灰 シルト斑土
 7. 10Y7/1 灰白 砂質シルト

L=1.000m
 0.0m
 1.583/1 青黒 シルト+10%/1 灰 シルト斑土
 2.103/1 オリーブ黒 シルト+10%/1 灰 シルト斑土
 3.5/4/1 灰 シルト+10%/1 灰 シルト斑土
 4.5/4/1 灰 シルト+10%/1 灰 シルト斑土
 5.5/4/1 灰 シルト
 6.5/5/1 灰 シルト
 7.5/5/1 灰 シルト+10%/1 灰 シルト斑土
 8.10%/1 灰 砂質シルト
 L=0.500m
 3B
 3B
 L=1.000m
 L=0.500m
 L=0.000m
 SB3002 SB3003
 L=0.000m

[illegible]

L=1.000m 0.0m 2.0m 4.0m L=1.000m
 L=0.500m 3F L=0.500m 3F'
 L=0.000m SB3009 SB3008 SB3007 SK3008 SD3006 L=0.000m
 5.5Y3/1 オリーブ黒 シルト+5Y4/1 灰 シルト斑土 シルトブロック含炭化物少量
 6.5Y3/1 オリーブ黒 シルト+5Y4/1 灰 シルト斑土
 7.5Y5/1 灰 シルト+5Y3/1 オリーブ黒 シルト斑土
 9.5Y3/1 オリーブ黒 シルト+10Y6/1 灰 シルト斑土
 13.5Y3/1 オリーブ黒 シルト
 14.5Y3/1 オリーブ黒 シルト
 15.5Y3/1 オリーブ黒 シルト+10Y6/1 灰 シルト斑土
 16.5Y4/1 灰 シルト+10Y6/1 灰 シルト斑土
 17.5Y4/1 灰 シルト+5Y3/1 オリーブ黒 シルト斑土
 21.5Y3/1 オリーブ黒 シルト+10Y6/1 灰 シルト斑土
 22.5Y5/1 灰 シルト+5Y3/1 オリーブ黒 シルト斑土
 23.5Y4/1 灰 シルト
 24.5Y5/1 灰 シルト
 25.5Y5/1 灰 シルト+10Y6/1 灰 シルト斑土
 26.5Y3/1 オリーブ黒 シルト+10Y6/1 灰 シルトブロック含
 27.5Y5/1 灰 シルト+10Y6/1 灰 シルト斑土
 28.10Y6/1 灰 砂層

45

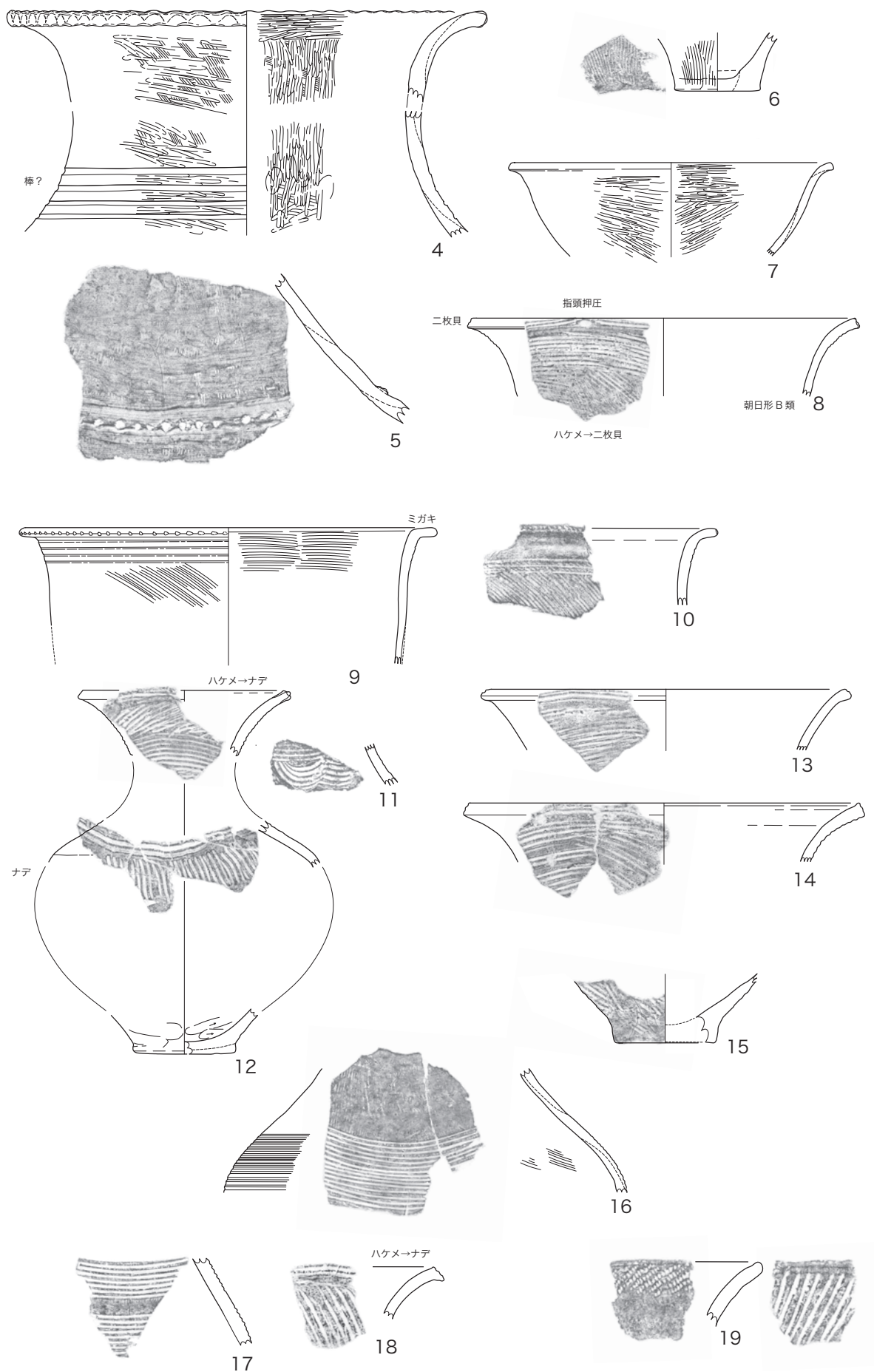


図44 須ヶ谷遺跡 05B 区出土土器 SB3001:4～8 SB005:9～15

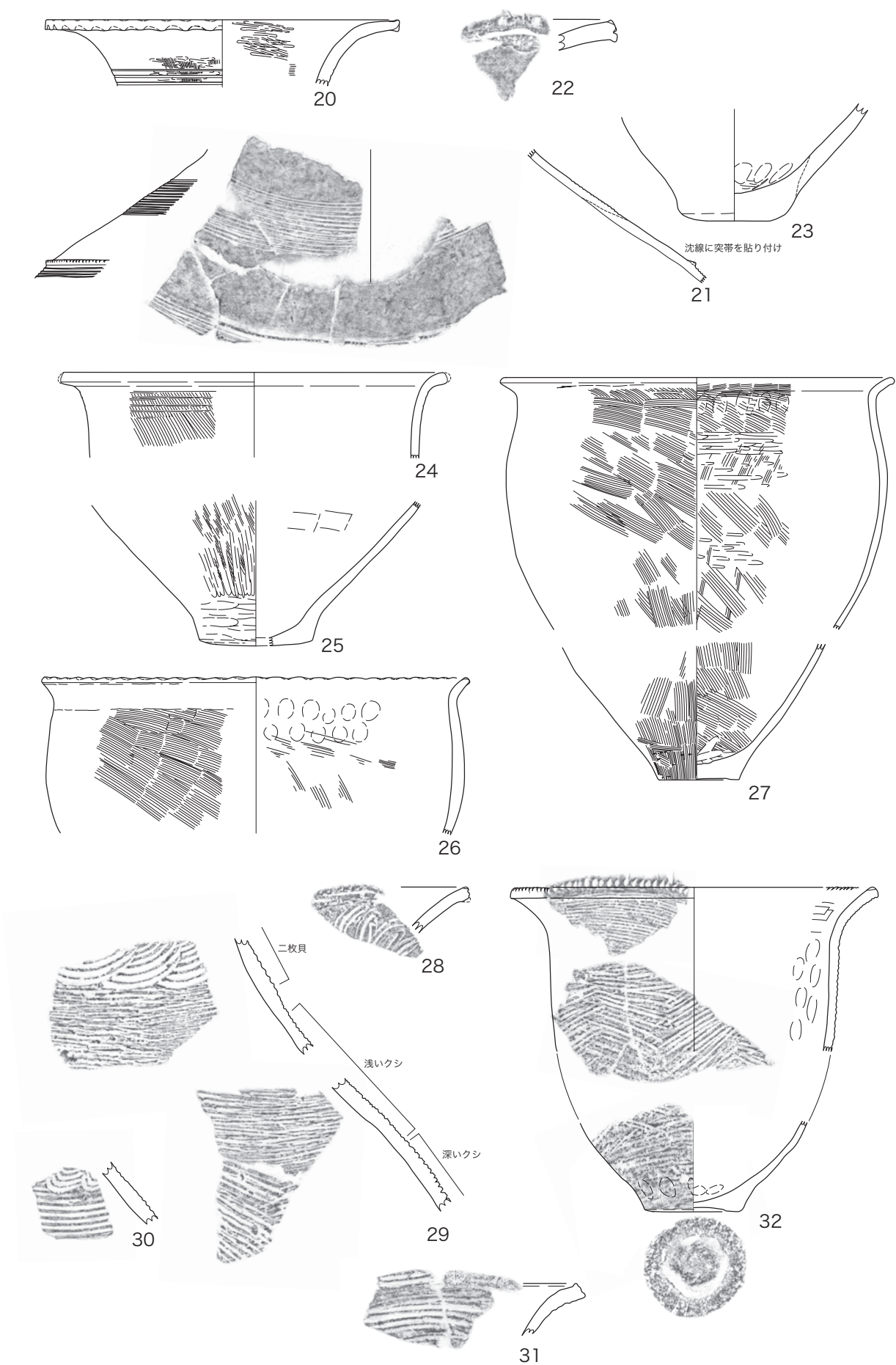


図 45 須ヶ谷遺跡 05B 区 SB3003 出土土器 20～31

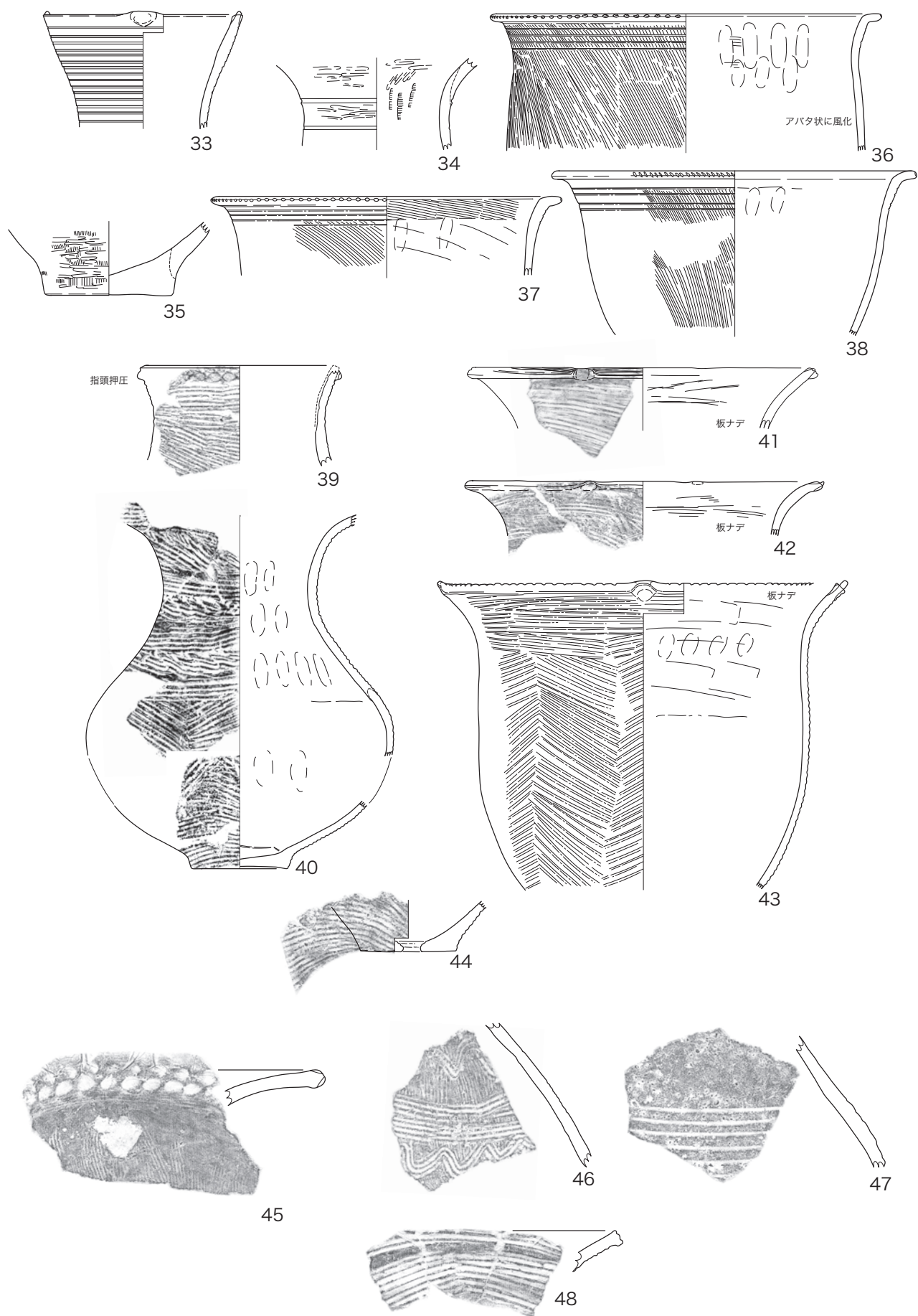


図 46 須ヶ谷遺跡 05B 区 SB3004 出土土器 33～48

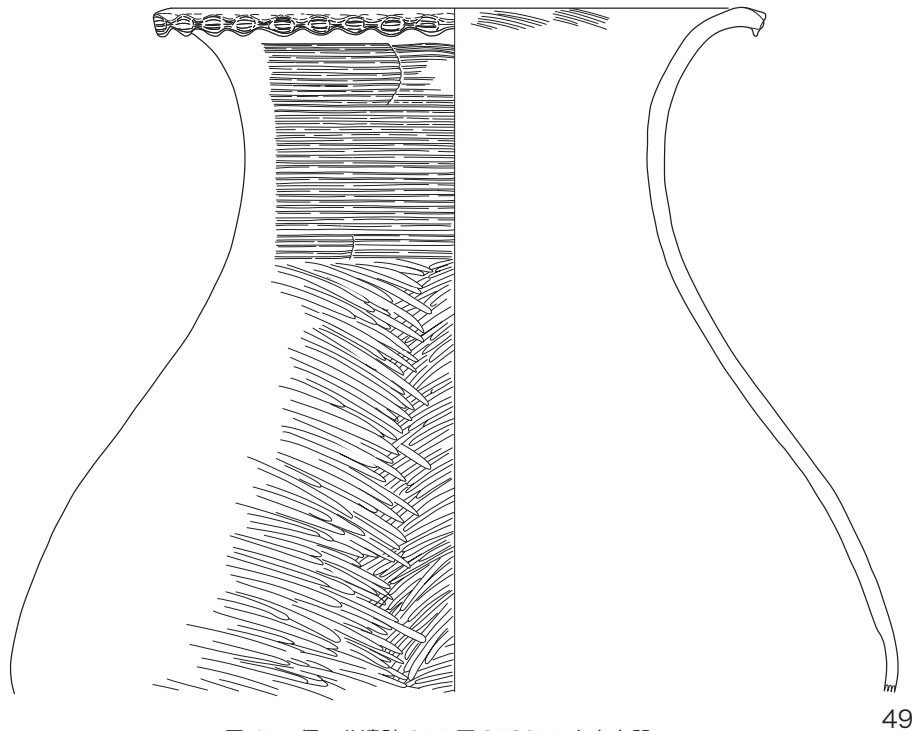


図 47 須ヶ谷遺跡 05B 区 SK3015 出土土器

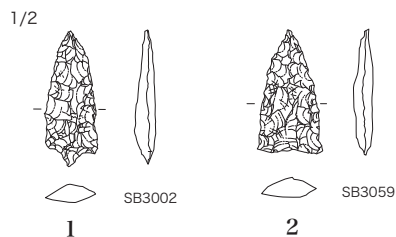


図 48 須ヶ谷遺跡 05B 区出土石器

かつ無紋で、外面には沈線紋帯と段の間に短斜線が施され、縄紋が加えられている。

63 以下は朝日式土器で、71・72・73 は後半に属す。64・68 は口縁部上端に指頭押圧が施されている。金剛坂式の系譜であろう。70 は中期だが、69 は前期に遡るかもしれない。71・72 は直線紋帯に三角形刺突を加えるが、71 は直線紋帯の上下を区画するわけではない。直線紋の工具は、71 は二枚貝、72 は櫛、三角形は板切れの角か。72 は頸部に施されており、貝田町式の細頸壺の

頸部刺突紋につながる。73 は櫛描直線紋に半截竹管を束ねた櫛で鋸歯紋を重ね、波状紋と組み合わせている。半截竹管を櫛描直線紋帯に重ねる手法は貝田町式に共通しているが、波状紋を加える紋様構成は貝田町式では細頸壺以外稀である。この資料は波状紋も半截竹管で施紋している。

石器は鏃を 2 点図示した。1 は有茎石鏃で、側縁が膨らみ、五角形になっていない。基部の剥離も弱い。2 は無茎鏃。側縁下端は外側にわずかに突き出す。

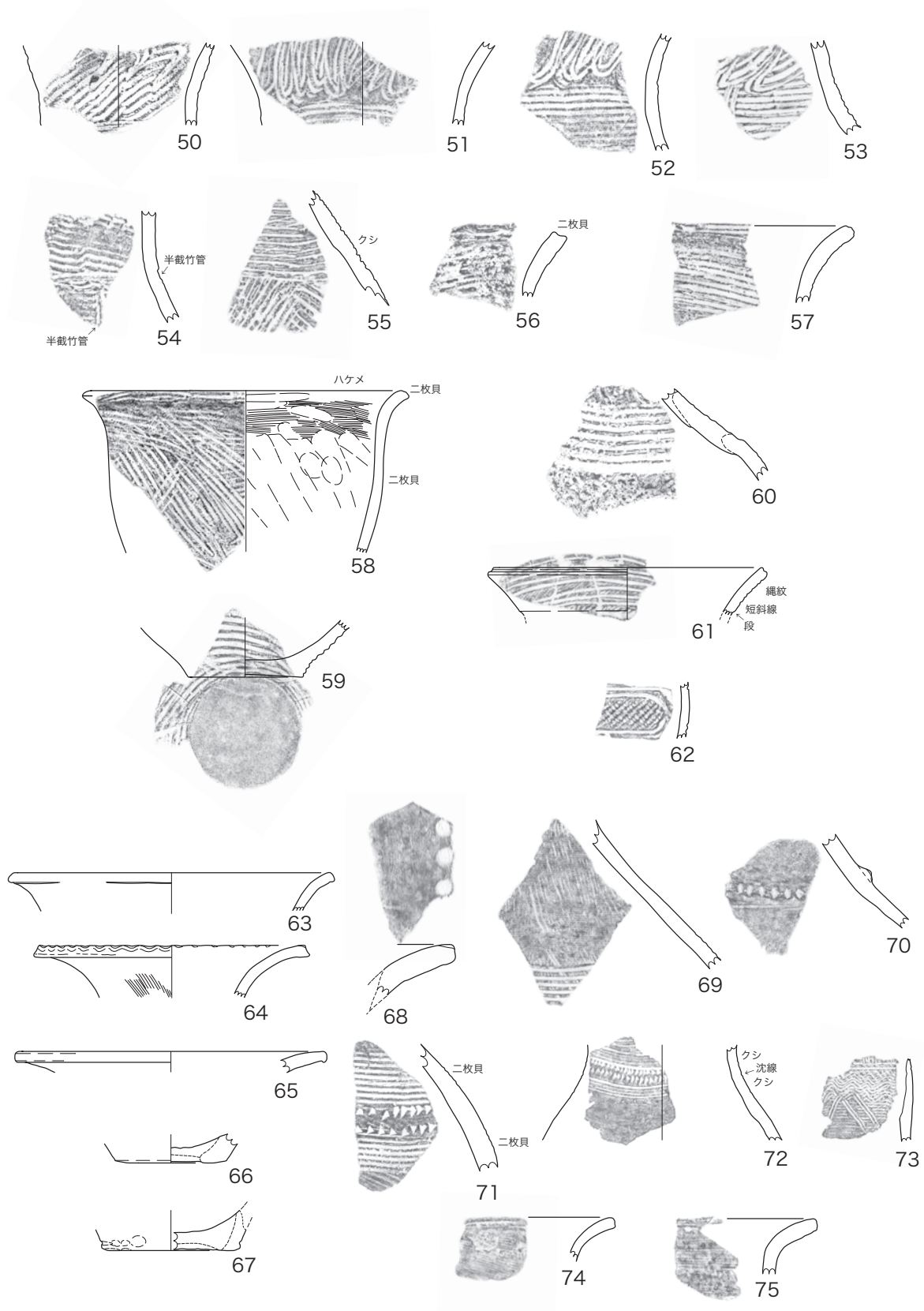


図 49 須ヶ谷遺跡 05B 区包含層出土土器

(3) 05C 区

i 層序

調査区の南北で堆積状況が大きく異なる。南部の層位は 05B 区に類似して、①層：耕作土（床土）、②層：褐灰色粘質土～灰色粘質土～灰色シルト、③層：青灰色粘質土～青灰色シルトとなり、③層は基盤層である。

北部では南部と異なり砂層が介在して層位関係を複雑にしている。まず、上部に堆積する①層：耕作土（床土）や部分的に認められる灰白色シルトは他の地区に共通する。しかし、問題はその後で、細粒砂を遺構面、また細粒砂によって覆われる遺構が重畳する②層となる。②層からは竪穴建物や方形周溝墓の周溝が検出された。その下部に③層：灰白色砂質シルトがあり、基盤となる。②層下部から③層上面にかけては竪穴建物や土坑の重複が著しく、濃密な遺構の分布がみられた。



図 50 須ヶ谷遺跡 05C 区作業風景

上：表土剥ぎ 中：遺構検出 下：トレンチ掘削



SD002 上層

図 51 須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面検出状況



図 52 須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面全景

ところで、人為的な遺構が介在するとはいえ、砂層の堆積する範囲はまさに自然堤防といえるのであり、隣接して自然流路が存在したことを強く示している。

調査は、②層上面でほぼ中世以降の遺構群を網羅したが、部分的に下部遺構群を追加調査したため、遺構番号が面をまたがって連番となった。二桁台の遺構番号がそれである。②層では大きく上下2段階に分け、さらに遺構の重複が著しいエリアについては上部と下部（③層上面に対応）に分けて調査したので、累計は6面となった。

ところで、②層の上部は戦後の区画整理で大きく削平されたことがわかっている。地籍図によれば、おそらく自然堤防の縁辺であったと考えられるので、中世以降の遺構群は多くが削平されたことと思われる。他方、弥生時代の遺構群にはSD001など白色シルトが堆積する遺構もあり、調査区内に限れば北部を除き、方形周溝墓の方台部以外には目立った削平は受けていないと考えられる。05C区北部以外は旧地形を残しており、つまりは低かったということである。その点が、居住域の縮小後に方形周溝墓群が構築された背景であろう。

ii 遺構・遺物

煩瑣を避ける為に、以上の6面を便宜上3面にまとめて記述する。

[1面]

遺構番号は二桁表記に対応している。調査区中央のSD02・SD03、調査区南部のSD01を始めとする遺構群、調査区北西端SD05・SD08以西の遺構群は近現代に属す。調査区南部のSD01・SD09やSD02・SD03は平行し、道路脇の溝や土取り跡、大畔と用水路であり、区画整理前の土地利用に関わる。

上記以外はほぼ中世に属す。調査区北部ではSD04が砂層を埋土として断面形状も立ち上がり

が緩やかでわずかにカーブし、溝というよりは自然流路の痕跡のようである。平行するSD05・SD08も同様にカーブし、底面もレベルが一定ではなく不安定で途切れており、水路ではなく、これらも自然流路の痕跡である可能性が高い。それに対してSD06は南北軸の直線で、いかにも人為的だが、対応する遺構はない。隣接するSX01・02は斑土を埋土とする巨大な土坑であり、SD04に切られて、これらの遺構群ではもっとも古い。

調査区中央のSZ01は斑土を埋土とする、いわゆる「中世方形土坑」である。底面標高は0mに近く、旧地表の高度によってはかなり深いものとなる。この点でSD04以南の空白エリアの存在が大いに問題となる。SD04の北西側では近・現代を含めて多くの遺構群があたかも平行するかのようには検出されたのとは著しく対照的である。つまり、SD04から北西にむけては地表面が下降しゆえに多くの遺構が残されたのであり、この部分がちょうど自然堤防（畠地区）の縁辺（三宅川旧流路に面する傾斜面）にあたる可能性が高い。そして、SZ01の位置するあたりから西もまた地表面が下降していた可能性が高いと言えよう。

[2面]

調査区北半部では砂層の堆積層が複数存在したが、南部では砂層を全く欠くというように、調査区全体の層位的な整合性には乏しい状況であった。そこで北半部の遺構群についてのみ上部・下部に区分した。上部は最後の砂層堆積後の方形周溝墓群の溝を中心とする遺構群であり、南部の溝群もおおむねこれに対応すると考えた。下部はそれ以前の砂層堆積との間に構築された遺構群で、砂層に被覆されるものとそうでないものがある。上部はおおよそ弥生時代の遺構群からなるが、方形周溝墓の周溝上部に堆積したシルト層をすでに[1面]の中世堆積層と誤認して土坑や溝として掘削した部分があり、層位認定にやや混乱をきた

したところがあり、そのために遺構番号が不規則となったが、本報告で若干の修正にとどめた。遺構番号は二桁と三桁があり、3 面目は各遺構とも 3000 番台表記を基本にした。

上部 方形周溝墓の周溝埋土は 05B 区と大差なく、最上部に灰白色シルトや褐灰色シルトが堆積していた。これを指標に周溝を検出したが、なかには欠く例もあり、一部 3 面での検出となったものもある。北から記載する。

SD001 幅が広く浅い溝であり、方形周溝墓で



図 53 雪雲襲来

はない。埋積する再堆積の包含層は 15cm と薄く、その上を無遺物層の灰白色シルトが厚く覆っている。当初は平地式建物の外周溝の可能性を考えたが、溝の北東側を僅かに調査できたに過ぎず、確証を得ることはできなかった。灰白色シルト層直下から凹線紋系土器の短頸壺 (79) が出土したことから、今回調査した弥生中期の遺構群では最後の埋没時期に属す。しかし、他調査区の灰白色シルト相当層は上下 2 層あるので、SD001 の灰白色シルトは下層に対応している可能性がある。なお、重複して検出された SD3001 は SD001 底面外縁に沿うように弧状を呈しており、SD001 初

図 54 須ヶ谷 05C 区作業風景

左上：水没 左下：排水作業 右下：3 面作業風景



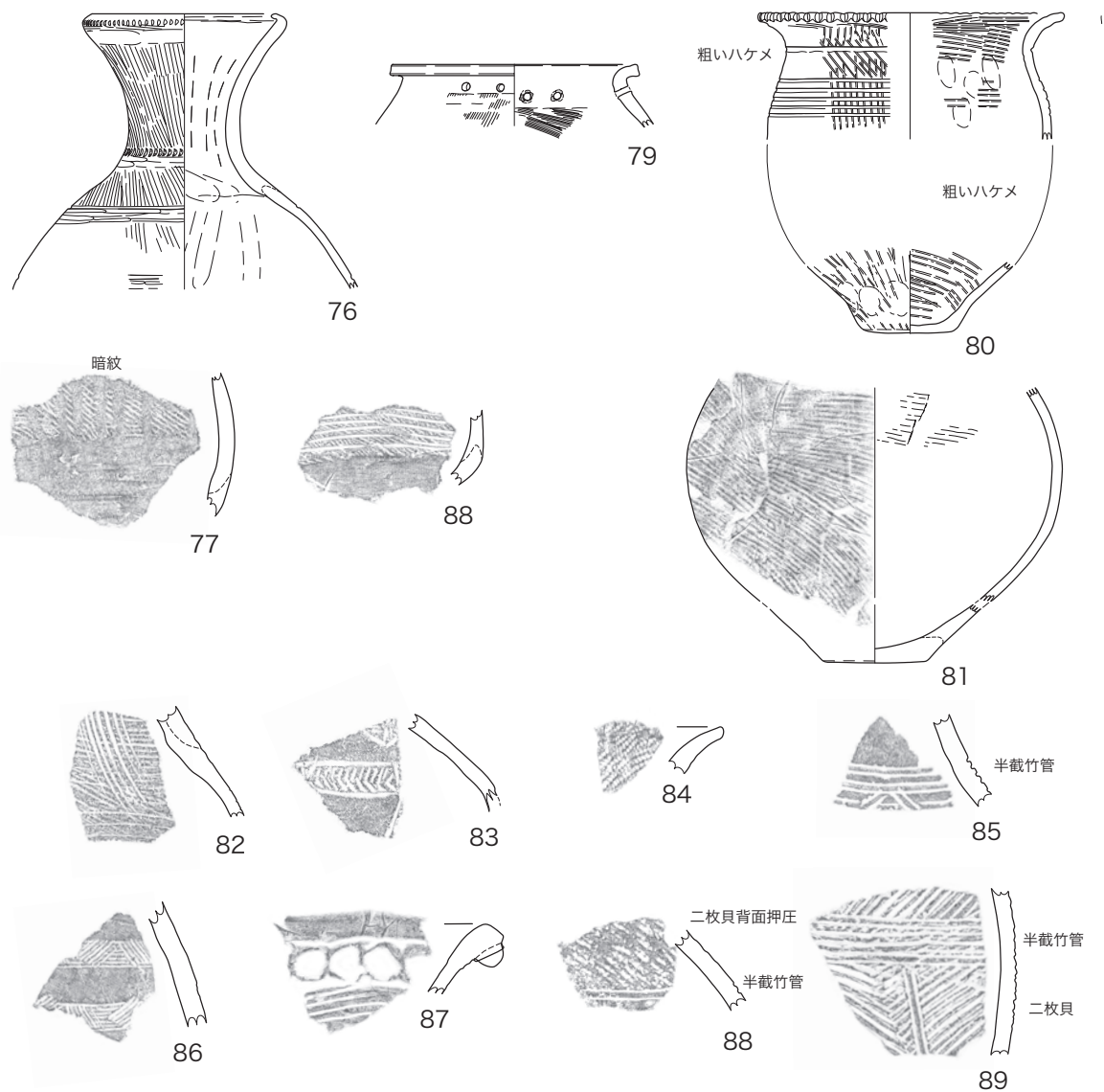
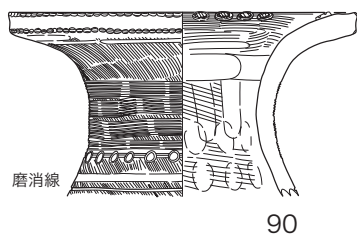


図 55 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD001・SD004 出土土器 SD001 : 76～81
SD004 : 90



期の底面であった可能性がある。

76 は細頸壺で、磨消ハケメ帯が崩れて、沈線付近が磨かれるのみである。口縁端部は強く内折し、屈曲部には板で刻みが加えられている。77

は細頸壺体部片で、磨消線で垂下紋が施される、暗紋表現である。78 は磨消線紋をもつ細頸壺体部片である。以上は貝田町式 3 期に属す。80・81 は SD001 に直接関係する遺物ではなく、再堆積した包含層に含まれていた。80 は粗いハケメ調整の甕で、底部の器壁は薄く突出気味で、琵琶湖周辺地域の特徴をもつ。搬入品である。81 は二枚貝条痕の壺で、続条痕紋系土器である。SK36 SX02 に北半分が削られている。189 は

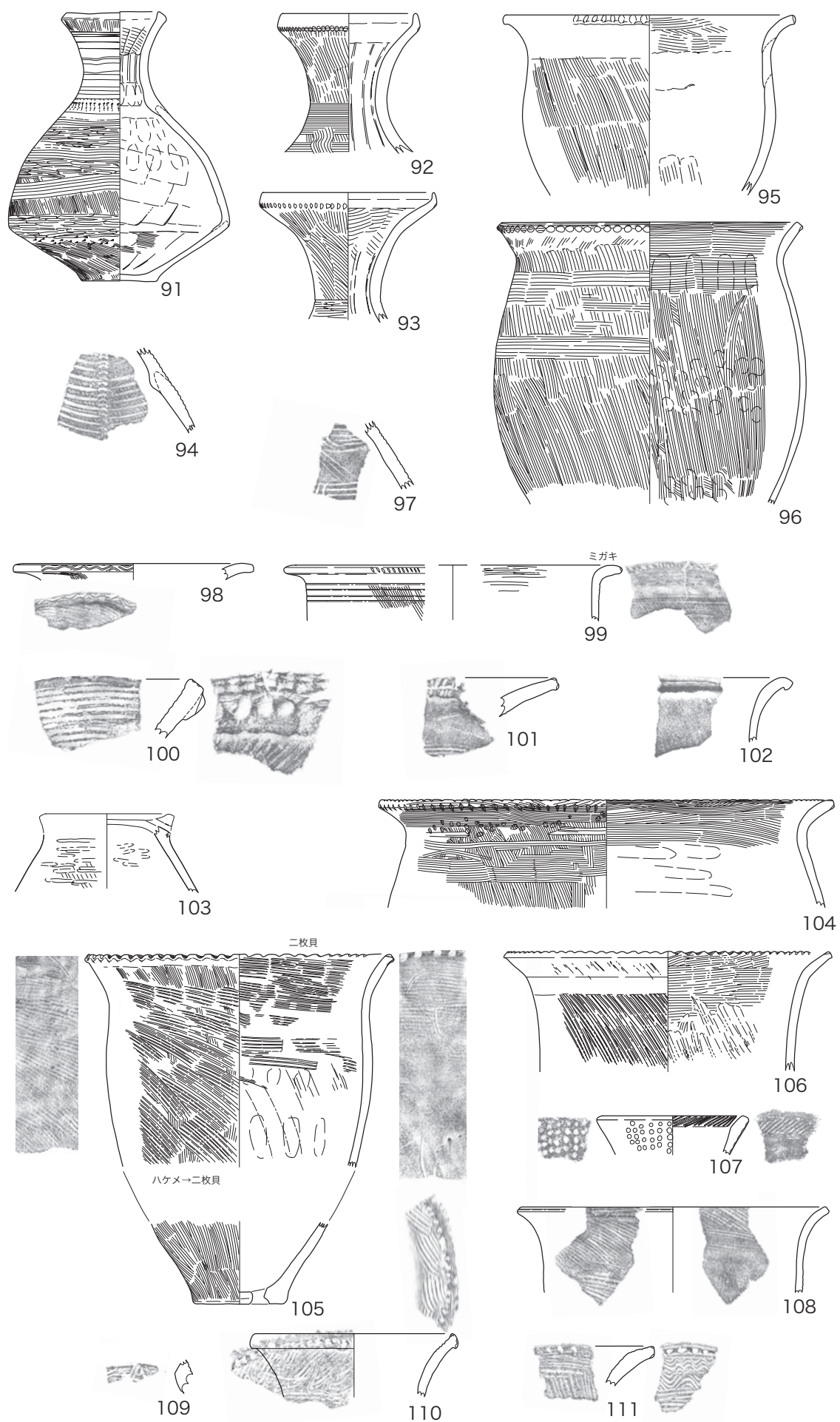


図 56 須ヶ谷遺跡 O5C 区出土土器 SD15:91 ~ 96

横位で潰れて出土した。口縁部には強い横ナデが加えられて、内面に面をもつ。体部は斜めハケメで在地の特徴をもつ。

SD15 地層断面では掘り直しがあるようにも見たので、上部を SK32、下部を SD15 とした。

調査区西壁際で細頸壺 (91) はほぼ完形で、他は大多数が破片で出土した。91 は口縁部の受口状口縁が形骸化し、体部に比べて頸部の櫛工具の間隔に乱れがある。体部下半にはケズリ痕が認められ、研磨も部分的である。体部下半は直線的で、擬口縁の立ち上がりが無く、新しい様相である。貝田町式 2b 期か、貝田町式 3 期に属す。91 以外がいずれも破片である点と比べれば供献時期が下る可能性もある。

91 に比べて 92・93 は口縁部の立ち上がりが明瞭である。94 は細頸壺体部片で、磨消線紋と、半截竹管による器面分割の縦位刺突紋が施されている。95・96 は甕で、前者は在地、後者は体部上半に横ハケメが施されており、伊勢湾西岸域と関係をもつ。以上は貝田町式 2b 期に属す。97 は金剛坂式壺片で、流水紋と複合鋸歯紋が施されている。

SD14 上部に SD07 と SK34 が重複するが、堆積層として見直せば北（方台部側）からの土層の流入が窺えるので、これらも別の遺構ではなく上層埋土ということだろう。104 は SK34 出土で、口縁部上下端にハケメ刻み、体部上半には横ハケメが施されている。伊勢湾西岸域の特徴をもち、SD15 の 96 に同じである。

SD14 出土土器は遺構の時期に直接結びつかない。98 は朝日式壺で、口縁端部には二枚貝で波状紋が施されている。99 は金剛坂式甕で、口縁部内面にはミガキが施されている。100 は岩滑式壺で、口縁部外面にはおそらくハネアゲ紋が施されているだろう。101 も朝日式の壺か。102 はナデ仕上げの甕口縁部である。

SD009 断面が逆台形を呈する大きな溝で、南側斜面が急傾斜になっている。灰白色シルトが上部に堆積し、当初はこれを中世の溝（及び包含層）と誤認した。その下部には砂層が堆積していたが、部分的であった。最下部は湧水のために詳細な把握が不可能。そして、SD009 は規模が大きく、南肩ラインが直線的ではなく南側にカーブを描いていたために環濠の可能性も考えられたが、最終的に SD007 と対になる方形周溝墓と判断した。この点については単純に決着しない問題があり、後述する。

溝の中央から細頸壺 (122)、調査区西壁際から太頸壺 (119) が、それぞれ灰白色シルト直下から出土した。

119 の特徴は、①頸部に沈線が 4 条、②口縁部内面には瘤状突起が 3 ケ 1 単位で 3 ケ所配置、③口縁端部はハケメ工具による直交刻み、④櫛描直線紋帯を重畳させて縦位直線を断続して重ねている、の 4 点である。①②③は伊勢湾西岸域に共通する特徴であり、④も在地的ではない。縦位直線を連続させることなく櫛描直線紋帯ごとに分割して施すのは貝田町式 1 期の手法であり、この時期に濃尾平野では既に廃れている。120 は口縁部にユビ摘み痕を残す太頸壺で、頸部には沈線がめぐる。121 は口縁部外面に粘土の折り返し痕を残している。122 は磨消ハケメ帯をもつ細頸壺で、口縁部外面には波状紋が施され、底部には木葉痕を残す。123 は口縁部の屈曲が弱く、櫛原体も他とは異なる。124 は磨消線紋をもつ細頸壺で、円形浮紋が密に施されている。125 は台付甕で、底部中央を欠損しているが、これは粘土充填部分で、未調整で粘土が突出する形態であったろう。これらは概ね貝田町式 2b 期に相当し、SD001 に重複する可能性がある。

126 は布目底の櫛条痕深鉢である。127 は瓜郷式 2 期、128 は瓜郷式 1 期に属す。127 は壺頸

部の隆起部分で2条沈線区画に刺突を伴い、斜条痕に沈線連弧紋がめぐる。貝田町式2a期に並行する。

その他、129は朝日式壺で混入、130は二枚貝

条痕甕で貝田町式1c期に並行する続条痕紋系土器（阿弥陀寺B類）、131は擬縄紋、132は瓜郷式2期壺片、133は櫛条痕深鉢。133・135は粗いハケメ調整の甕で、134は口縁部に突起をもち、

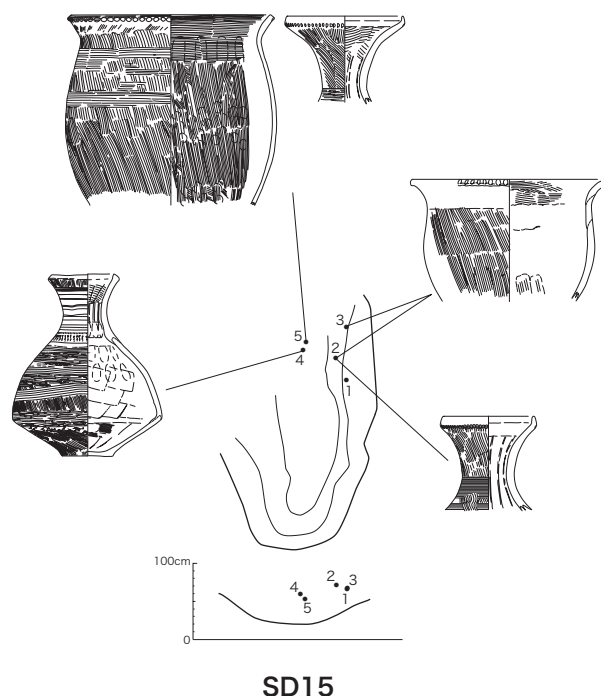
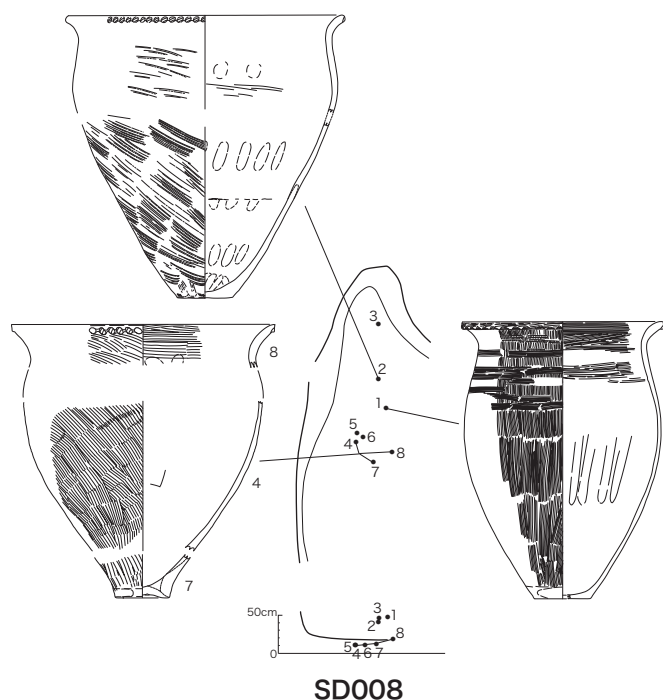


図 57 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD008・SD15 遺物出土状況



図 58 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD009 遺物出土状況



図 59 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD15 遺物出土状況

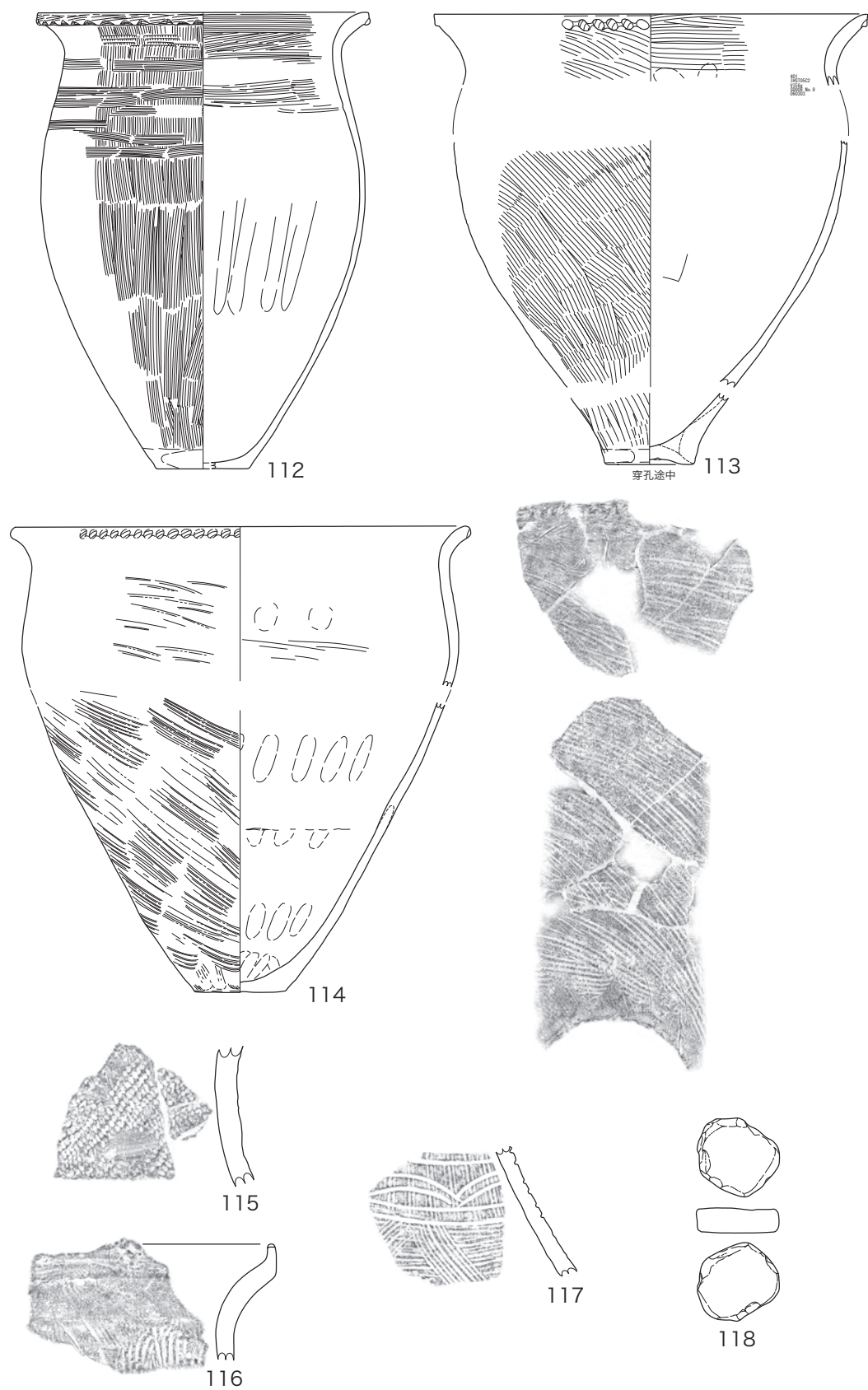


図 60 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD008 出土土器

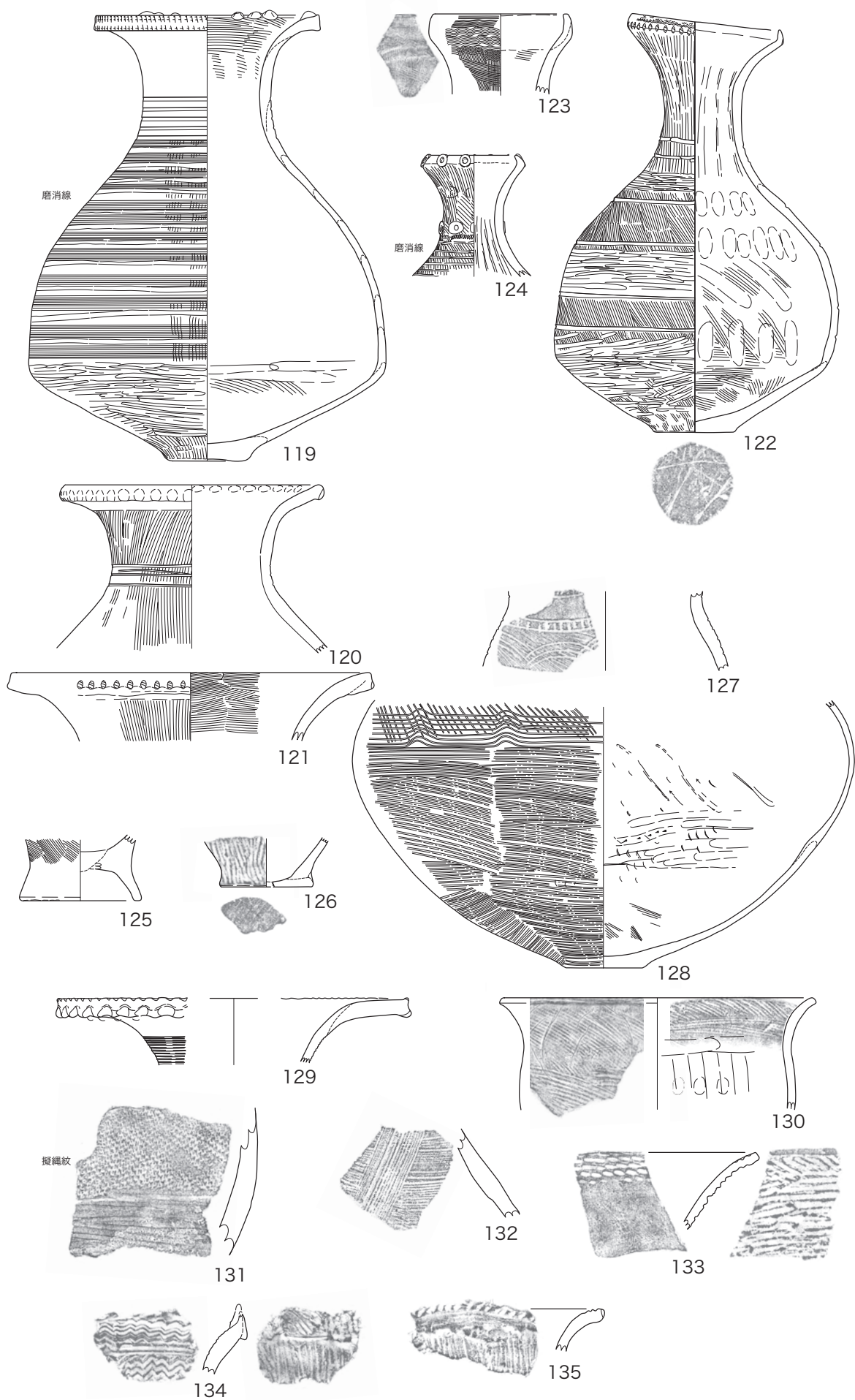


図 61 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD009 出土土器

内面に波状紋がめぐる。

SK35 SD14の東に位置し、黒色砂質シルトを埋土とする。105・106は貝田町式1c期に属す。105は口縁部の開きが小さく、上端にハケメ刻みが加えられている。体部外面はハケメ調整の後に、二枚貝で仕上げられ、内面にも二枚貝調整が加えられている。底部に焼成後穿孔が施されている。106は体部の張りが弱く、緩やかに口縁部が外反して上端にハケメ刻みが加えられている。体部外面は二枚貝調整が施されるが、口縁部外面は強い横ナデで消されている。

SD007 2面の下部で検出した溝である。上部には灰白色シルトに対応する黄褐色シルトが堆積しており、堆積状況はSD009に同じである。南側にテラスをもつ。西端は調査区外にのびる。出土遺物は弥生中期中葉を遡るものばかりで、時期を推定する直接の手掛かりは無い。

136は朝日式の壺頸部で二枚貝描直線紋がめぐる。137は同壺口縁部。138は朝日式2期の壺口縁部で岩滑式の模倣形。139は朝日式壺体部の二枚貝描紋で、波状紋は背面で施紋している。140・141はハケメ甕。142は粗いハケメの甕で、口縁端部に波状紋が施されている。143～146は朝日形甕。147はおそらく朝日形甕の底部、148は上げ底で、充填された粘土が抜けている。伊勢湾西岸のハケメ甕。150～152は鉢。151は半截竹管による平行線紋で櫛描紋風の紋様が施されている。朝日式2期に属すと思われるが、紋様構成は貝田町式1a期の原型である。

153～159は壺。153は頸部に波状紋ではなく連弧紋がめぐり、口縁部の押圧突帯を欠く。154も頸部に波状紋ではなく振幅の小さな連弧紋がめぐり口縁部の押圧突帯を欠く。155は大きく開く袋状口縁で、外面には縦位条痕と沈線、内面には粘土紐が付加されて端面をつくり、指頭押圧が加えられている。156は壺体部で、二枚貝で横

位条痕と斜条痕が施されている。157は口縁部に条痕をもち、直下にハネアゲ紋が施されている。158は二枚貝で部分刻みが施されている。159は軸線が右に傾いて畳み込まれた波状紋である。160～172は甕・深鉢。160～163は口縁端部に二枚貝腹縁の押圧で押し引きではない。164は押し引き。173・174は半截竹管による平行線紋が施されている。173は岩滑式B類の無頸壺で、流水紋が施され、突起をもつ。174は平行線紋に短沈線を付加している。176は大地形土器。

177・178は貝田町式細頸壺。178は外面に縦位直線が重ねられ、口縁部内面はミガキ仕上げで珍しい。瓜郷式かもしれない。

SD008 SD007同様に2面の下部で検出した。上部には褐灰色シルトが堆積している。東端は調査区外にのびる。西部の埋土上部から112・114、底面付近から113が出土した。通常、方形周溝墓の溝からは壺か浅鉢が出土し、このように甕がまとまって出土する例は珍しいが、SD15からも甕が出土しており、遺跡差の可能性もある。

113は下部から破片となって出土した。底部には焼成後の穿孔が途中まで進んでいる。112・114は破片が大きく移動することなく潰れた状態で出土した。112は体部上半に横ハケメが施され、伊勢湾西岸に関係する。114は二枚貝調整で仕上げられているが、地にハケメ調整があるのかどうかはわからない。貝田町式2a期に属す。115は縄紋施紋の壺頸部片、116は受口状口縁の甕で体部には粗いハケメ調整が施されている。117は瓜郷式2期の壺で、2条沈線区画がめぐる。118は加工円盤で、周縁の調整は不十分である。

SD002 以下に述べるSD003・004などと、05B区でみられたような灰白色シルトを上部の埋土とする一連の溝として検出した。このうち、SD002がもっとも幅広く、環濠の可能性やSD009と対になることも考えたが環濠としては

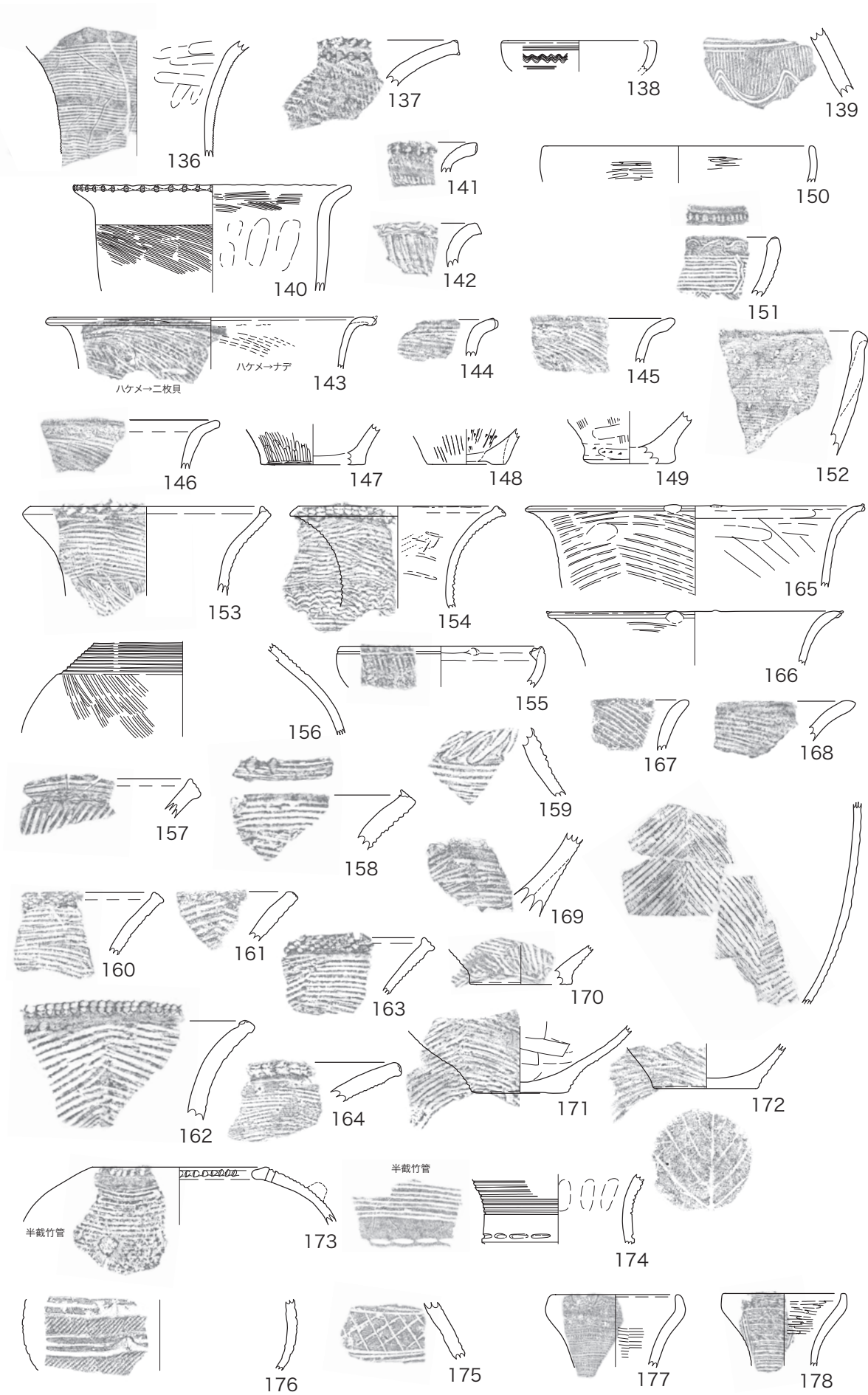


図 62 須ヶ谷遺跡 O5C 区包含層出土土器

小規模、周溝にしては幅が広いので判断に迷った。後に SD008 が検出されたので、最終的に二つの方形周溝墓の間の周溝であると判断したが、幅の広さには違和感がある。

82 は瓜郷式で、沈線連弧紋をもつ。83 は羽状沈線紋をもつ壺の体部片。

SD003 断面U字形を呈し、北側は SD002 との間に掘り残しがあり、南側の SD004 と接するあたりでは底面がわずかに立ち上がる。上部の灰白色シルトの堆積は厚く、SD004 の西側につながる印象をもった。

84 は嶺田式壺口縁部。85 は半截竹管による平行線紋を持つ壺で、朝日式並行。

SD004 東側では明確な段をもって一段落ち込み、断面形状も傾斜が強い箱形なのに対して、西側では緩やかな逆台形と対照的である。また、埋土上部に堆積する灰白色シルト下部の標高も西側では 0.3m であるのに対して東壁では 0.46m と 16cm ほどの高低差がある。このことは SD004 西側の方が埋積が遅いことを示しており、断面形状の違いを考慮するなら SD004 西側は新しく掘削された溝である可能性が高い。つまり、SD004 東側が段をもつことも、もともとは四隅切れプランの方形周溝墓であったことを示唆する。そして、SD004 西側に新たに溝が掘削された溝は陸橋部を残すことなく SD003 に接続したために陸橋部が削平されたと解釈できる。

西壁では北から土層の流入が認められたが、上下 2 層ある灰白色シルトの上層側は不整合であり、SK22・23 との関連から異なる時期の再堆積である可能性が高い。

調査区のほぼ中央から、溝底より 10cm ほど浮いて広口壺の口頸部 (90) が破片となって出土した。口縁端部は上下端をハケメ刻み、頸部に櫛描紋と竹管刺突、体部には沈線と磨消線、口縁部内面は円形浮紋に竹管刺突を加えハケメで調整し

ている。

SD005 上部には明るくはないが、灰色シルトが堆積しており、堆積構造は同一である。断面逆台形で外側の傾斜が強い。

86 は櫛描紋系土器で朝日式 2 期。87 は櫛王式ではなく、水神平式 1 式の壺。88 は二枚貝背面圧痕に半截竹管紋は施され、岩滑式 B 類である。89 は二枚貝条痕に半截竹管による平行線紋が重ねられている。

SD006 調査区の南西コーナーで一部を検出したのみである。堆積状況は SD005 と基本的に同じである。

SK004 SD005・006 からなる方形周溝墓の埋葬施設で、掘形は 2.4m × 1.7m、木棺推定部分は 1.5m × 0.6m を測る。残存部分の深さは 24cm で、底面にはわずかに赤色層を認めた。出土遺物は無かった。

SD3014・3013・3016 これら 3 条の溝は 3 面下部での検出であり、調査の順序が逆転したのは残念だが、その一因には埋積状況が SD04 以北の溝群や SD005・SD006 と異なる点にもあった。それらとは異なり SD3014・3013・3016 付近には土坑（状の堆積）が多くあり、溝の認識になかなか至らなかったからである。

SD3016 や SD3013 はプランからみて調査区東壁にかかっているはずだが、土層断面ではうまく把握できていない。灰白色シルトを指標に溝の位置を推定するとおおよそ東壁土層断面図のように想定できるが、分層が難しいほど層位の混乱があったわけではなく検討が不十分であった。湧水もあって平面的な追跡が難しかったことは確かであるが、土層断面での確認が不十分であったのは今後に向けての反省材料である。

下部

SB001 砂層を構築面として、黒褐色粘質土を埋土とする。床面からは下呂石の剥片が少量出土

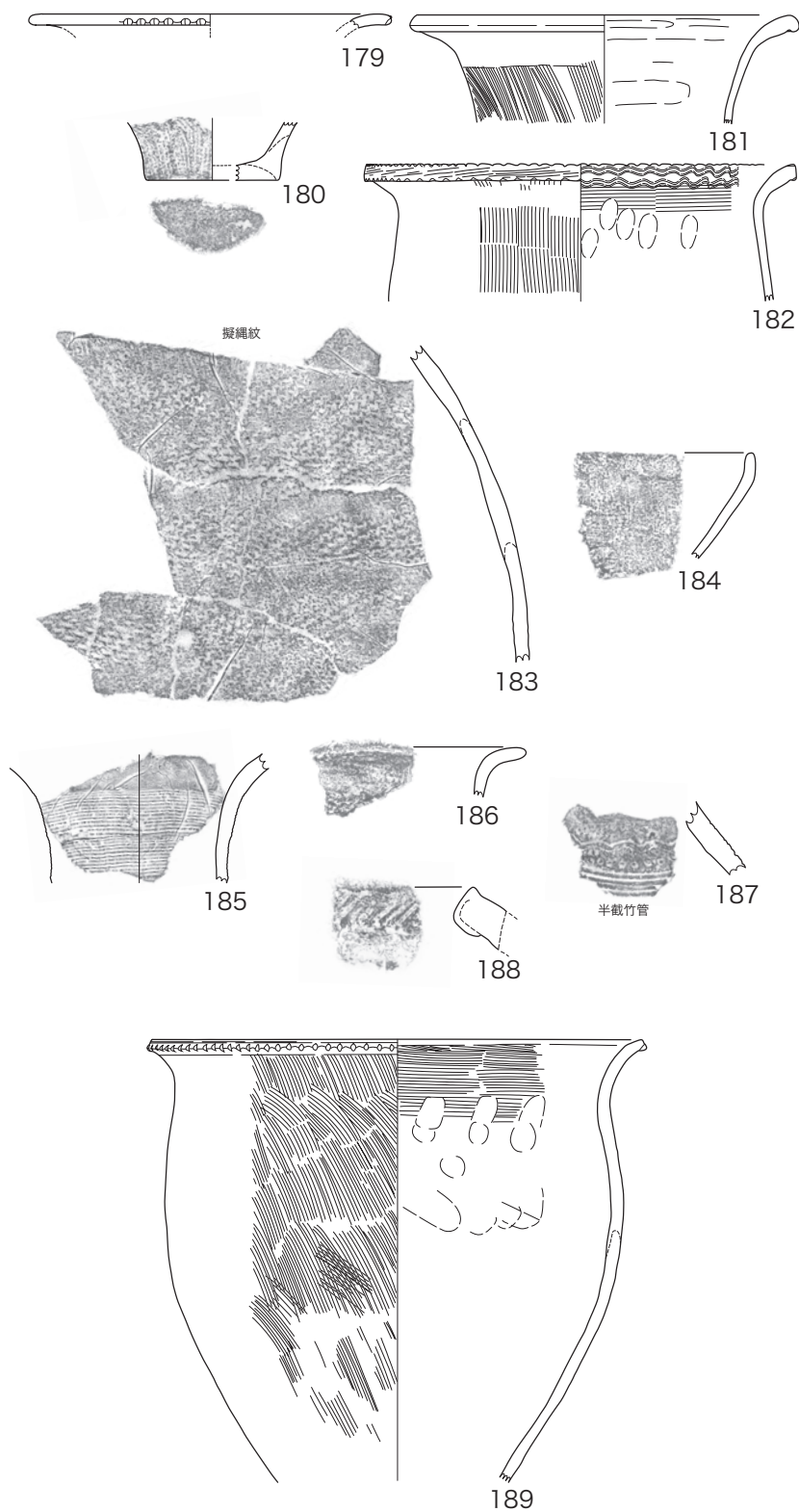


図 63 須ヶ谷遺跡 05C 区 SK36 出土土器 189 他

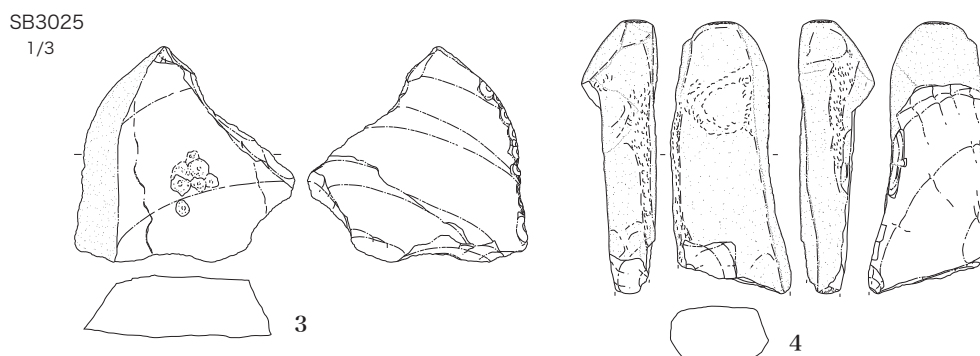


図 64 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3025 出土石器

した。SD15 に切られる。

SD16・SD17 砂層を埋土とする溝で、SD17 は北へ深くなっていき、SD16 とは段差をもってつながる。103 は貝田町式の精製土器で、紐穴をもち、浅鉢形だが蓋としての用法が想定される特異な器種である。

SD010 SD17 掘削後に SD16 からのびるかたちで見つかった溝で、西壁セクションでは確認できない。SD16・17 の掘り直し以前の溝の可能性はある。

SX001 青灰色シルトが斑状に散布していた範囲で、ちょうど SB3001 を取り囲むように分布していた。周堤の一部であった可能性がある。

SB3001 この遺構そのものが竪穴建物かどうかの確証はないが、SD16・17 で囲まれた内側で一部砂層を埋土とする落ち込みとして検出したもので、上部には灰白色シルト層が重複し、窪地のままであったことが窺える。SX001 を周堤、SD16・17 を外周溝跡と考えるなら、竪穴建物跡の可能性が高いが、外周溝なら濃尾平野では初例になる。

SK57 竪穴建物 (SB3036) 覆土上部の砂層が堆積した窪地で、下部には炭化物が堆積していた。居住域の洪水による埋没状況を示すものとして興味深い。

SK002・003 砂層によって埋積した土坑である。

[3 面]

SB3003 SD001 下部で検出された竪穴建物跡であり、東側は SX01 に切られている。

190～195 が出土した。190・191・193 は櫛描紋で、朝日式 2 期に属す。192 はハケメ仕上げで、口縁端部が垂下し、指頭押圧が加えられている。

SB3024・3025 SB3021 の下部で検出した。南東辺が鋭角をなしてプランはやや不整形だが、長軸は 6.5m を測り、小規模例が多い方形プランの竪穴建物跡の中では最大規模である。床面直上には焼土と炭化物が厚く堆積していたが、屋根材などの遺存は認められなかった。SB3025 は SB3024 に重複して、かろうじて床面を見つけたものである。

197 は小形壺で、櫛描紋は浅い。貝田町式 1 期まで下がる資料であり、混入であろうか。198 は櫛条痕深鉢であり、朝日式 2 期に属す。196 は弥生前期まで遡るが、口縁端部が丸みを帯び、押圧突帯の位置もやや下がっており、水神平式的ではない。201～204 は朝日式 2 期、205 は条痕紋系土器で、半截他竹管による平行線紋が重ねられている。201 の頸部は櫛描の波状紋を直線紋

が挟む構成になっている。203 は二枚貝で同心円紋を描き、中央に瘤状突起をもつ。206 は朝日形甕であろう。

石器 3 は円礫から打ち剥がした剥片で、礫面と剥離面は鋭いエッジをつくり、剥離面周縁に剥離が連続し、平坦面に凹みがある。4 は棒状礫で、側面稜線と上端に敲打痕を残し、礫面上部には大きな凹みが形成されている。

SB3034 SD007 に切られる。

199 は波状口縁で、端面には沈線が加えられている。外面には刻み突帯がめぐる。弥生前期まで遡るか。200 は鉢形土器で、口縁部外面は段をもち、縄紋帯がめぐる。

SB3046 SB3001 の下部に位置し、調査区東壁際で検出した貝殻廃棄を伴う竪穴建物跡である。貝殻はヤマトシジミを主にわずかにハマグリを混じる程度で、汽水性種を中心としている。貝殻そのものの遺存部分は僅かだったが、それ以外の埋土の多くも腐食した貝層のようで、本来の貝層の分布範囲はかなり広がったようだ。付近では獣骨の出土もみられた。SB3046 以外の遺構埋土にも腐食貝層が認められるので、このエリアに貝殻廃棄が集中していた可能性が高い。

208 ～ 211 は、211 が朝日形甕？に類似し、他は二枚貝条痕紋系土器である。212・213 は二枚貝背面圧痕の磨り消し擬縄紋構成の岩滑式B類である。209・210 は口縁端面は無紋で、上端に刻みを加える同形の甕、211 はハケメ調整の後に二枚貝を重ね、口縁端部は沈線状に凹面をなしている。

SB3049 SD002 の南に位置している。ほぼ全体を調査できた。床面には土器片を伴いながら薄く炭化物が広がり、西端に地床炉が認められた。プランは短辺の一方が短い逆台形で、柱穴は明確ではなかったが、それも含めて濃尾平野の典型例である。出土したアブラナ科種実の AMS 年代は

BC260-BC200 の数値を得ているが、土器型式は中期前葉・朝日式なので暦年代はもう少し古くなるであろう。

214 は貝殻描紋の朝日式壺、215 は金剛坂式系甕、216 は大形のハケメ甕。

石器の 5 は剥片に僅かな剥離を加えただけの石鏃（剥片鏃）で、基部は未調整である。6 は石錘で先端を欠損。7・8 は微小剥離をもつ剥片。9・10 は部分的に剥離が加えられた剥片。11 は両極打撃の石核で、片面は礫面を残す。12 も残核か。13 ～ 16 は剥片。17 は多面体化しつつある敲打具でチャート製。

SB3053・3059 隣接する竪穴建物跡で、どちらも一部のみ検出した。

SB3053 の 217 は小さく外反する口縁部に押圧突帯がめぐる壺王式壺の典型である。

石器は、21 が打製石斧片、22 は円礫で、両極打撃が加えられて片側が大きく剥離している。石錘の可能性はあるのだろうか。23 は下呂石の石核で、半割後に周囲から打撃が加えられている。

SB3059 の 218 は遠賀川系壺、219 は無紋の壺、220 は口縁端部が無紋で上端にきくみが加えられている。221 は土錘。中期初頭か。石器は下呂石の石鏃、剥片、チップが多量に出土した。34 は無茎の石鏃、35 は礫面を残し、雑な剥離が加えられた無茎の石鏃で、36 は有茎というには不十分な基部で、いちおう五角形鏃に属す。小さな茎部は前期～中期初頭の特徴である。39 は削器片。40 は微小剥離をもつチャート剥片。チャートの石核や剥片はほとんど出土せず主要な石材ではない。41・42 は微小剥離をもつ下呂石剥片。43 ～ 48 は両極打撃を伴う石核・剥片で、49 ～ 55 は剥片。56・57 は石核だが、57 は剥片をとれる大きさではなく、サイコロ状に加工されたもののようだ。

SB3054・3079 SB3079 は SB3054 を切って

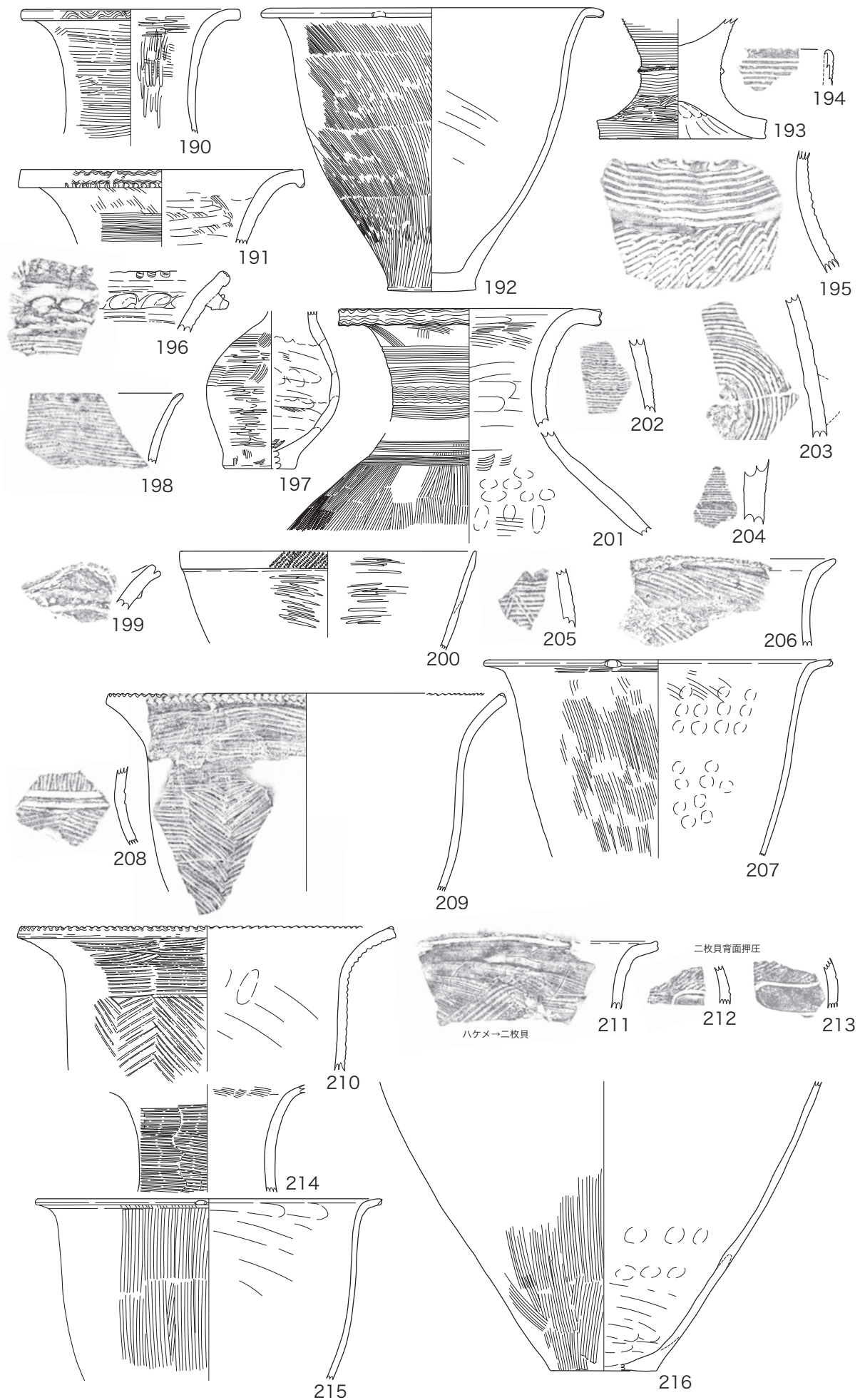


図 65 須ヶ谷遺跡 05C 区各遺構出土土器 SB3003:190 ~ 195 SB3025:201 ~ 206
SB3046:208 ~ 213 SB3049:214 ~ 216

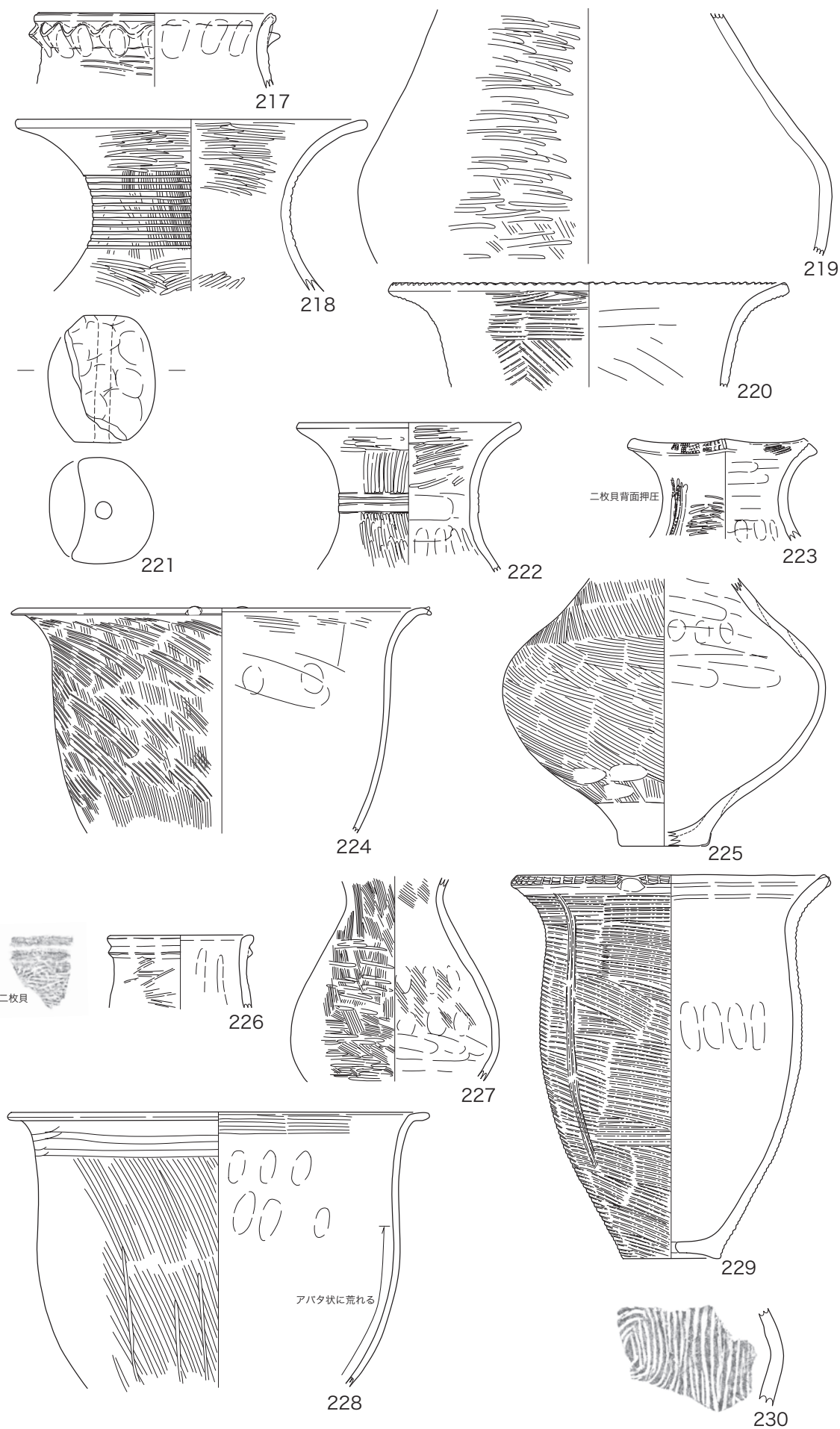


図 66 須ヶ谷遺跡 05C 区各遺構出土土器 SB3059:218 ~ 221 SB3084:226 ~ 230

いる。SB3054 は大形の円形竪穴建物跡で、床面に貼床は認められなかった。SK3239 が中央炉穴である。土器の出土は小片にとどまったが、下呂石剥片・チップが出土した。SB3079 は輪郭や主柱穴を明確に把握できた竪穴建物跡である。主柱穴は抜き取りによる作業のために断面形状が大きく変形していた。SK3307 は床面を浅く掘り込んだ地床炉である。

224 は朝日形甕で、ハケメ調整に二枚貝条痕が重ねられている。口縁部は端部がやや垂下して、指押圧が加えられている。

石器の 18～20 は SK3239 出土で、他にチップもある。18 は棒状錐、19 は微小剥離をもつ剥片、20 はクサビ形石器である。

SB3080・3084 最下部で検出した円形竪穴建物跡であり、SB3080 は SB3084 を切っている。SB3084 は中央炉穴（焼土面は無い）をもち 4 本主柱である。SB3080 は床面直上に炭化物を含むシルト層が認められたが、炉跡は確認できなかった。中央路穴はなく、柱穴も多い。6 本柱であろうか。

225 は無紋の壺。底部から体部にかけての立ち上がりは朝日式の特徴を示す。226 は突帯紋系変容壺で、口縁部は端部がやや肥厚して下がった位置に隆帯がめぐる。頸部外面には二枚貝条痕が認められるが、浅い。混入である。227 は無紋の壺。228 は金剛坂式甕。229 は口縁端部に押し引きと指摘みが加えられた二枚貝条痕の甕。体部外面には縦位条痕が加えられている。底部は上げ底で、焼成後穿孔が加えられている。230 は多条の沈線による縦位と多重円の紋様があり、浮線渦巻紋土器の最終型式か。これらは中期初頭の一様相を示している。

石器 24 は下呂石の剥片を両面とも研磨したもの。形状は扁平片刃石斧に近いが、果たしてどうだろう。25 は打製石斧である。側縁中央やや上

部に敲打が集中しているが、面を作るほどではない。刃部の使用痕は弱い。

その他の遺構出土資料

[土器]

222 は遠賀川系壺で、頸部には削り出し突帯に沈線 2 条。223 は波状口縁をもち、外面はナデ仕上げで、縦位に隆帯が貼付けられている。口縁端部と隆帯には二枚貝背面圧痕が加えられている。口縁部内面には二枚貝条痕が施され、条痕紋系土器と同じである。231 は SB3001 に伴い、103 と同形である。232 は朝日式壺の口縁部片、233 は金剛坂式甕片である。

234～238 は突帯紋系土器の末期資料である。234・235 は SB3057 から出土しているが、遺構の時期に該当するのかわからない。236～238 は同時期の資料である。239 は精製浅鉢だが、浮線紋系土器とは異なる。三ツ井式に属するものであろう。

240～243 は弥生前期に属す。240 は遠賀川系甕、241 は波状紋が 2 段で、水神平式壺の頸部片、242 は下部の横位条痕が直線的で、波状紋も詰まっており、中期に下がるか。243 は遠賀川系壺の扁平蓋である。

244～251 は朝日式に属す。244 は頸部に段をもち、体部は単帯構成の二枚貝描直線紋である。頸部は腹縁、体部は背面による。245 も二枚貝描紋で、相対弧線を加えて流水紋を構成している。246・247 は二枚貝背面による施紋で、波状紋を沈線が挟む。248 は荒いハケメ調整の甕で、口縁端部には波状紋が施されている。249 は二枚貝調整がないので、金剛坂式（系）甕である。250・251 は朝日形甕。

252～261 は二枚貝条痕紋系土器で、岩滑式に属す。252 は無突帯の壺口縁部で、内面に波状紋が施されている。253 はかなり変形した受口状口縁で、口縁部外面の連弧紋も珍しい。類似例は

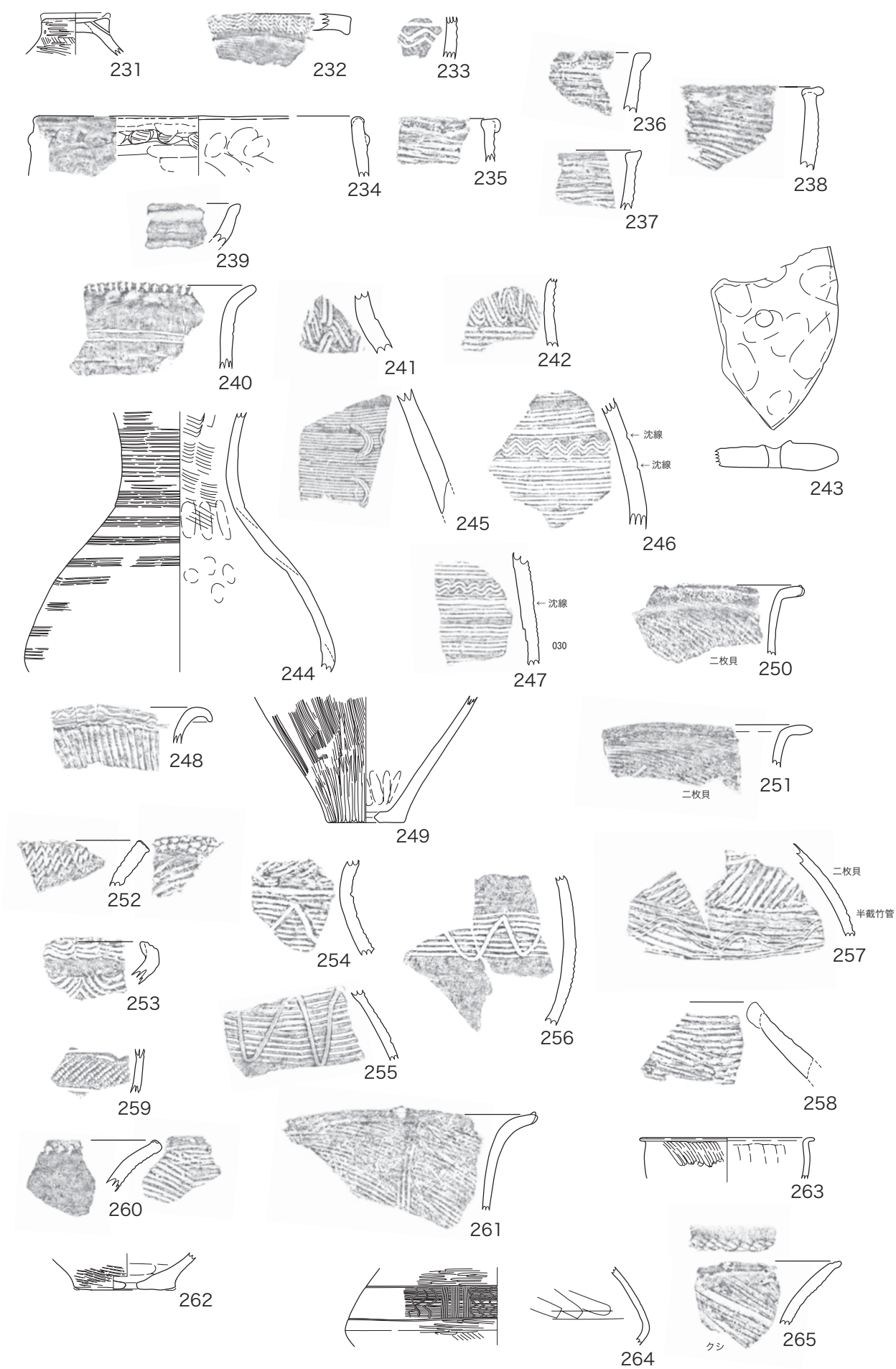


図 67 須ヶ谷遺跡 05C 区各遺構出土土器 SB3019:231 ~ 233

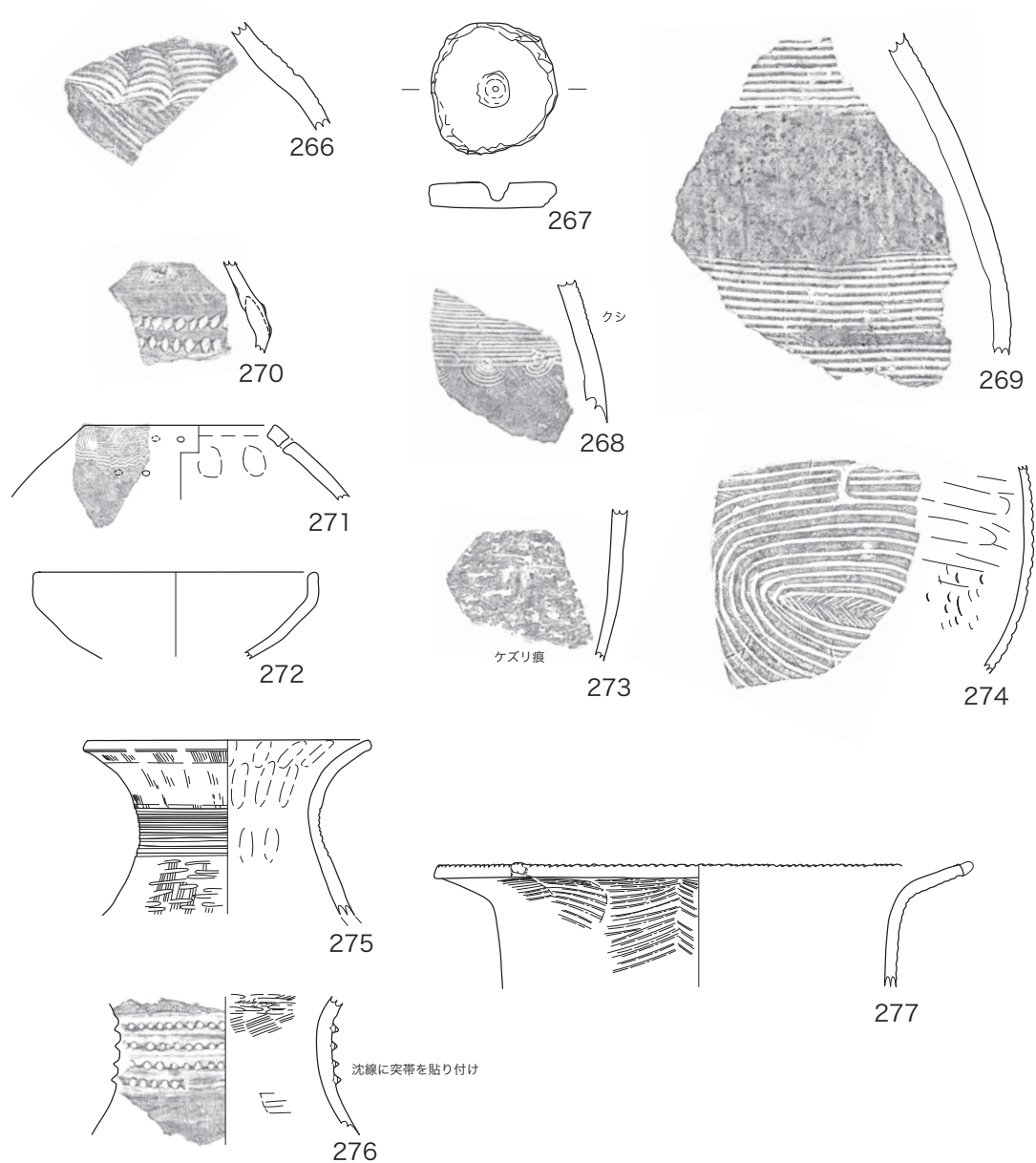


図 68 須ヶ谷遺跡 05C 区各遺構出土土器 SK3049:270～272 SK3082:275～277

篠島の神明社貝塚遺跡にある。254 以下は横位条痕帯に沈線波状紋が重ねられている。257 は半截竹管による平行線紋が付加されている。おそらく沈線紋の工具を裏返せば平行線紋になる場合も

あって、沈線／平行線は置換可能であったと思われる。258 は厚口鉢というよりは内傾口縁土器である。260 は口縁部上端に二枚貝刻みが加えられている。261 は朝日形に類似しているが、外面に

SB3049

1/2

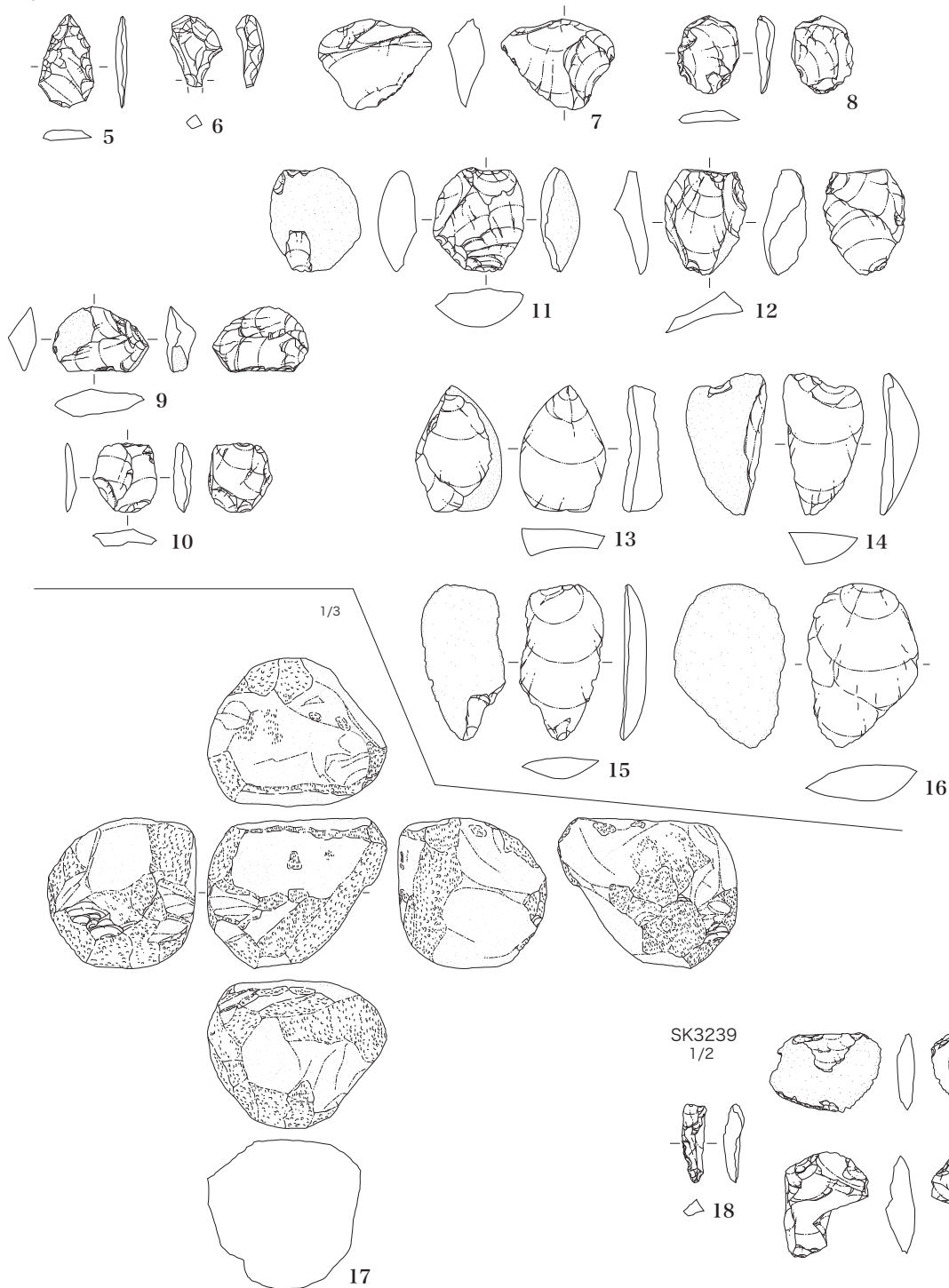


図 69 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3049 出土石器

SK3239
1/2

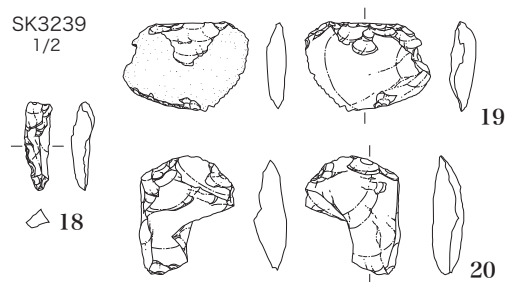


図 70 須ヶ谷遺跡 05C 区 SK3239 出土石器

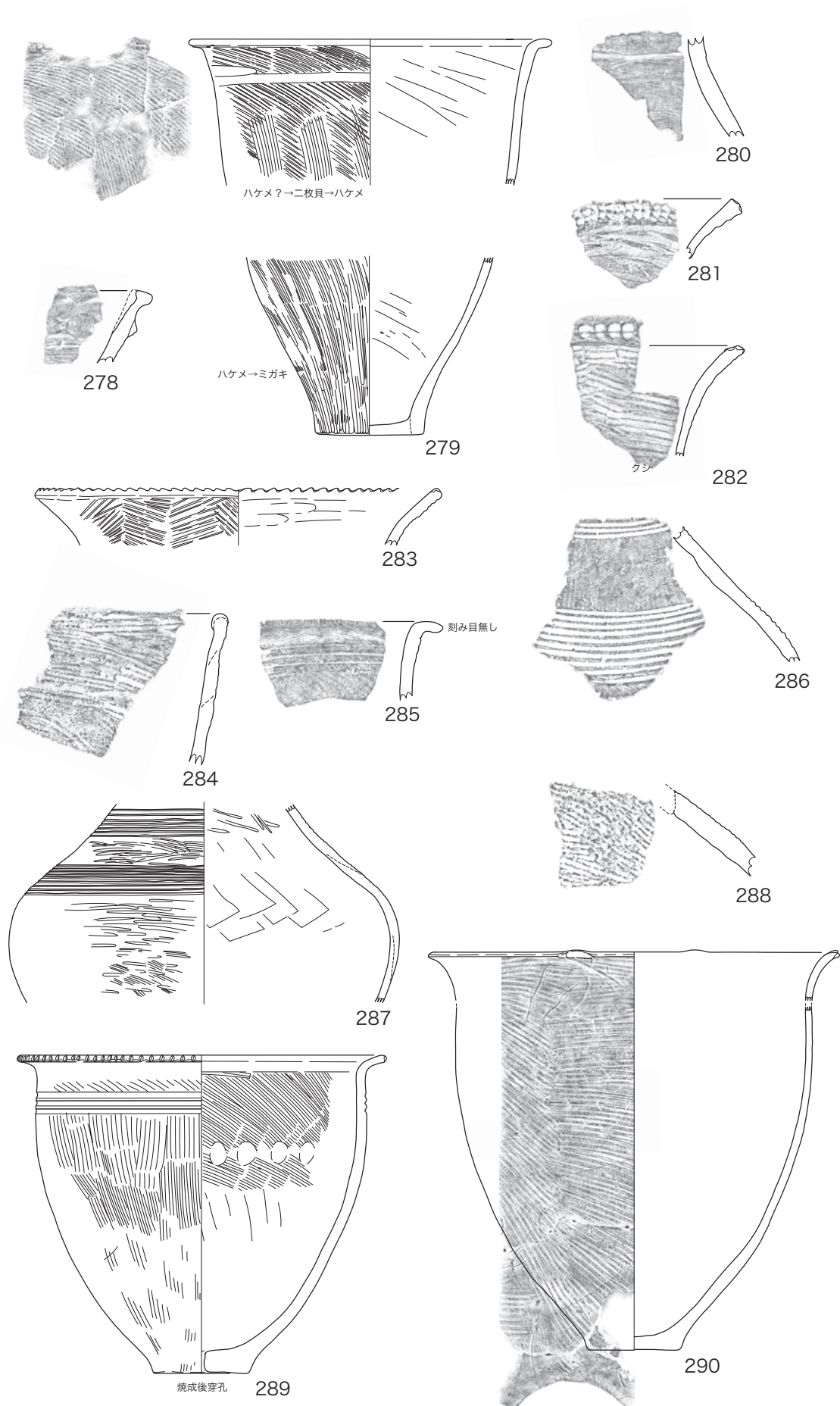


図 71 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (1)

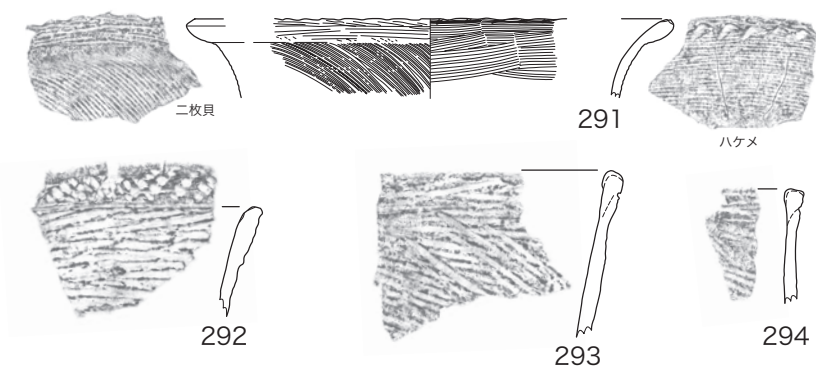


図 72 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (2)

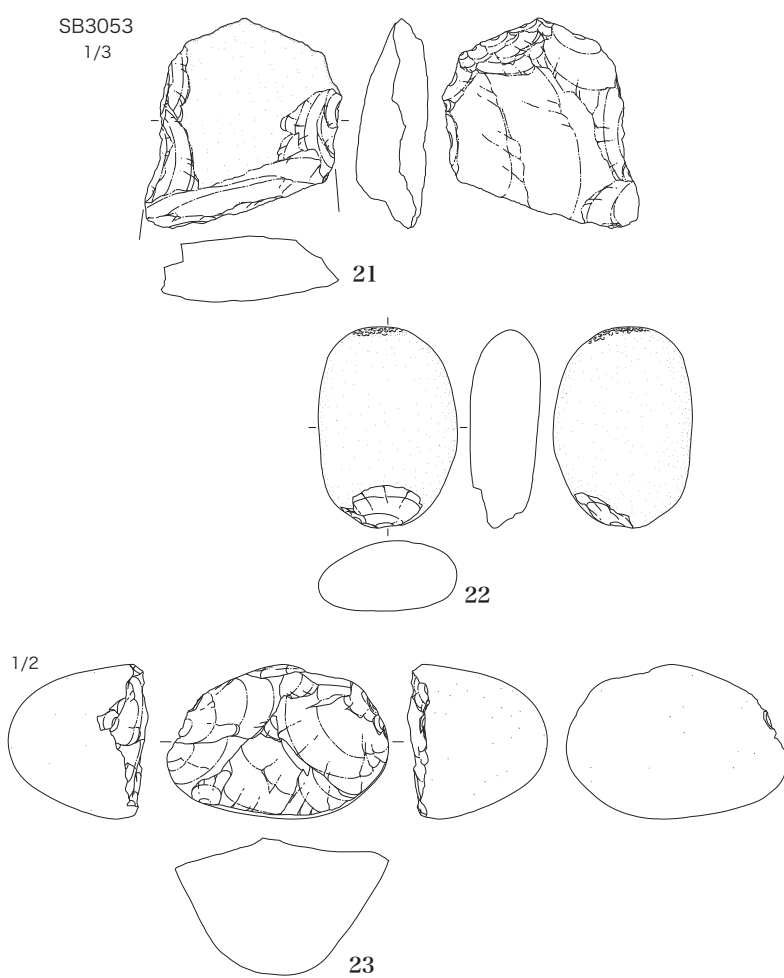


図 73 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3053 出土石器

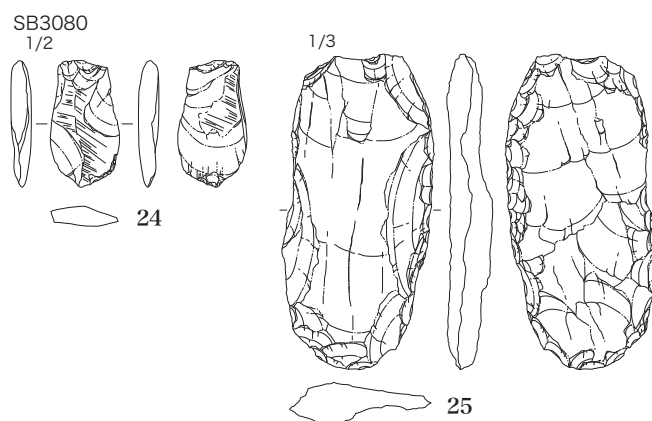


図 74 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3080 出土石器

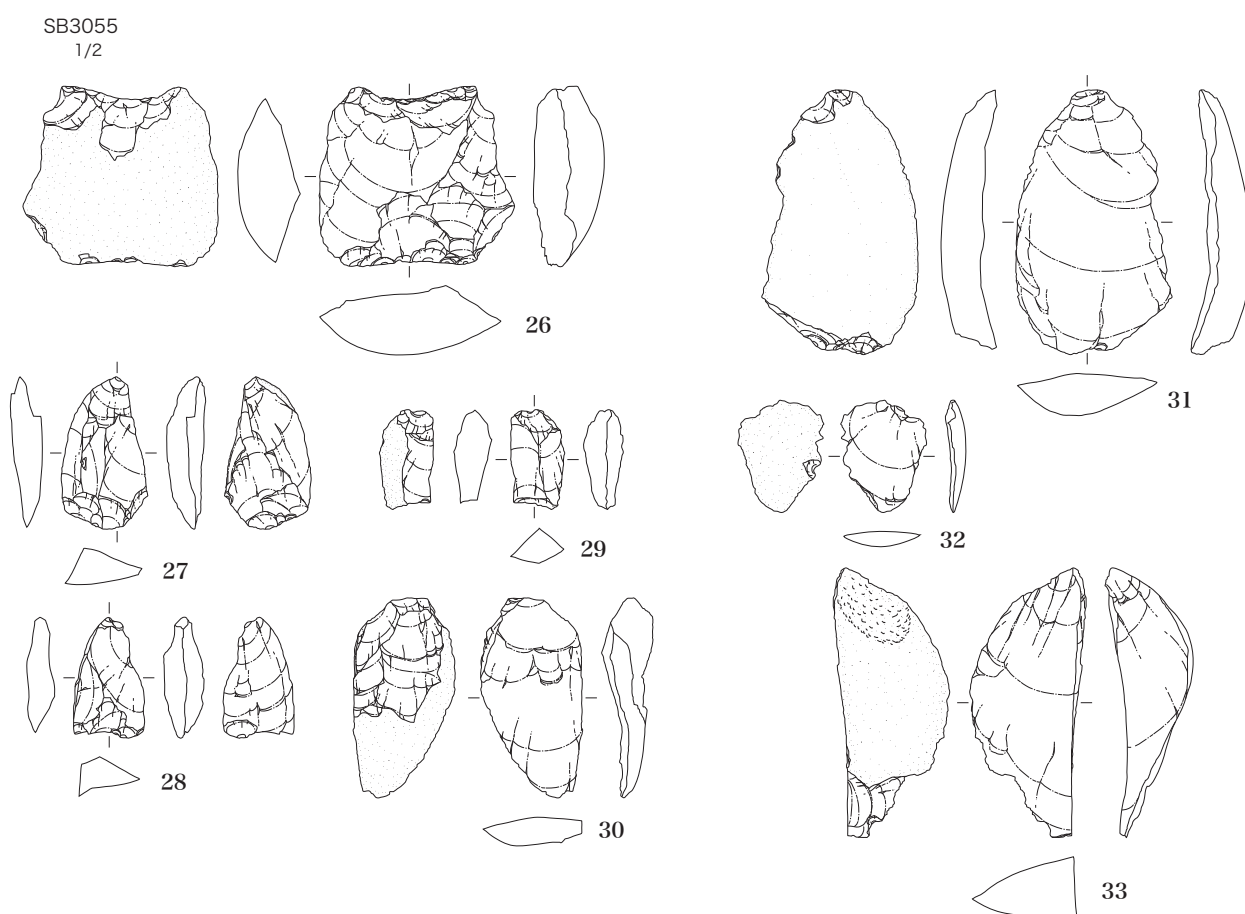


図 75 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3055 出土石器

SB3059
1/2



図 76 須ヶ谷遺跡 O5C 区 SB3059 出土石器

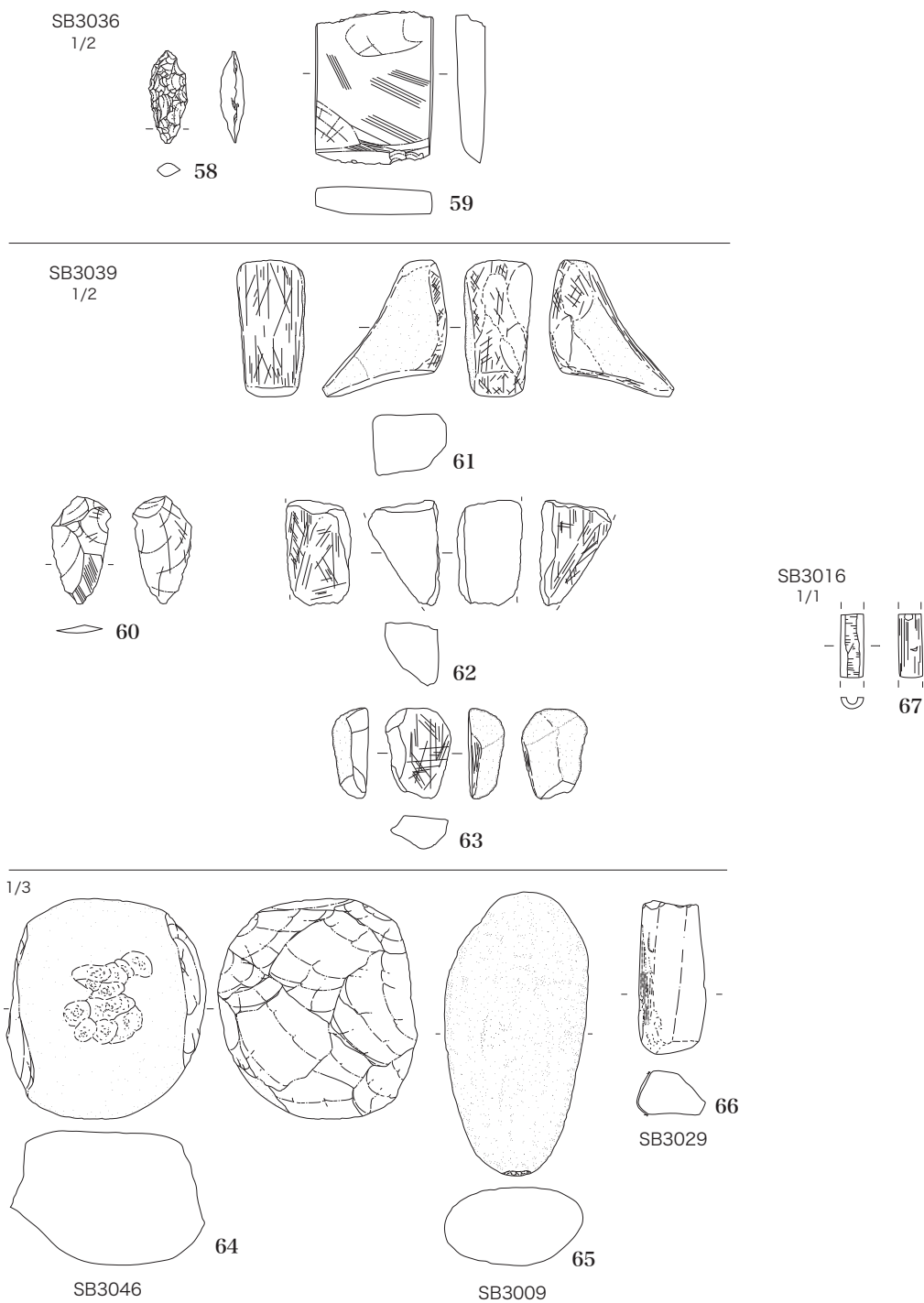


図 77 須ヶ谷遺跡 05C 区 SB 出土石器

縦位条痕が重ねられている。

263 はミガキ仕上げの小形鉢。264 は貝田町式 1b 期でも古相の細頸壺体部片。SB3076 からの出土であるが、この遺構そのものは SD3016 の上層にあたり、方形周溝墓に伴う資料の可能性が高い。265 は櫛条痕深鉢である。

SK3049 SD003 を南に延長した位置にあたり、周溝墓の一部であった可能性もある。

出土土器はいずれも貝田町式 1 期。270 は細頸壺の体部片。低い突帯に刻みが羽状気味に加えられている。271 は無頸壺、272 は浅鉢で、風化して紋様はわからない。

SK3054 SK3049 の東側で、埋設土器が出土した土坑である。底部が残っていたが細片となっており、時期は確定できなかった。

SK3082 SD007 の北側に位置する土坑で、弥生前期に属す。

275 は遠賀川系壺で、頸部に多条沈線。276 は頸部に刻み突帯。277 は口縁部がややのびる二枚貝条痕の深鉢で、無紋の口縁端部に突起を貼付け、上端に刻みを加えている。

SK3171 05C 区南部の最下面で検出した土坑である。

287 は多条沈線の遠賀川系壺。288 は内傾口縁土器。

SK3188 SK3171 の西側に位置している。遠賀川系甕の破片が重ねられた状態で出土した。

289 は沈線が 3 条めぐり、底部には焼成後穿孔が施されている。

SK3216 SB3003 に重複している。

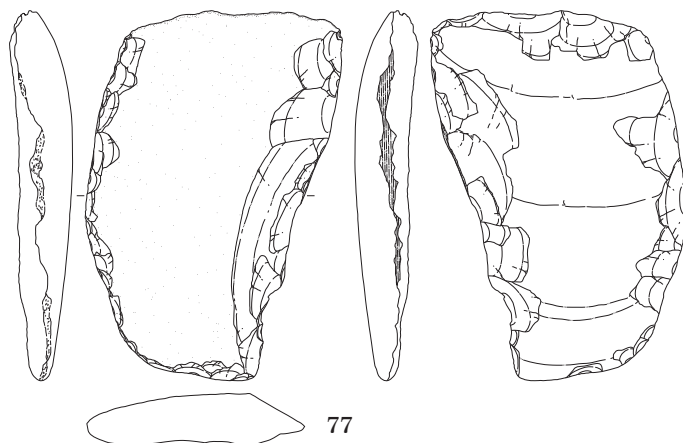
291 は体部外面におそらくハケメ調整の後に二枚貝調整が施される。口縁端部はやや肥厚し、外面端面ともにハケメ調整が施され、口縁上端にはハケメ工具で刻みが加えられている。292 は櫛条痕深鉢である。

293・294 は

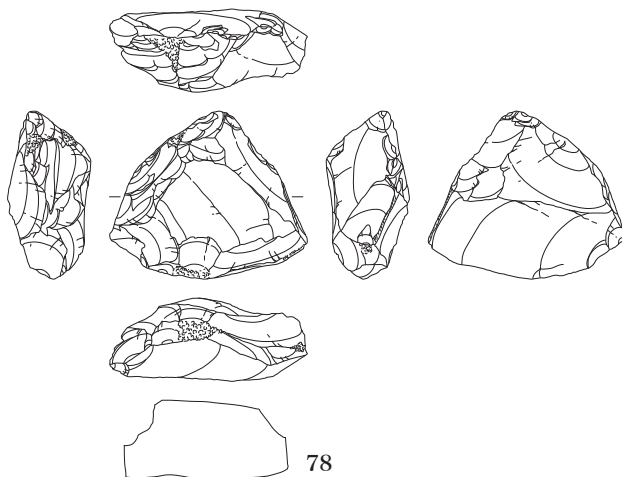
SK4001 調査も最終段階で検出した土坑で、底面付近のみ確認した土器を中心とする廃棄土坑である。出土土器には時期幅がある。

295 は遠賀川系大形壺で、頸部と体部に上半に段をもつ。口縁部と底部を欠損している。296 は体部はミガキで仕上げられて、底部外面にはケズ

SD05
1/3



SD002
1/2



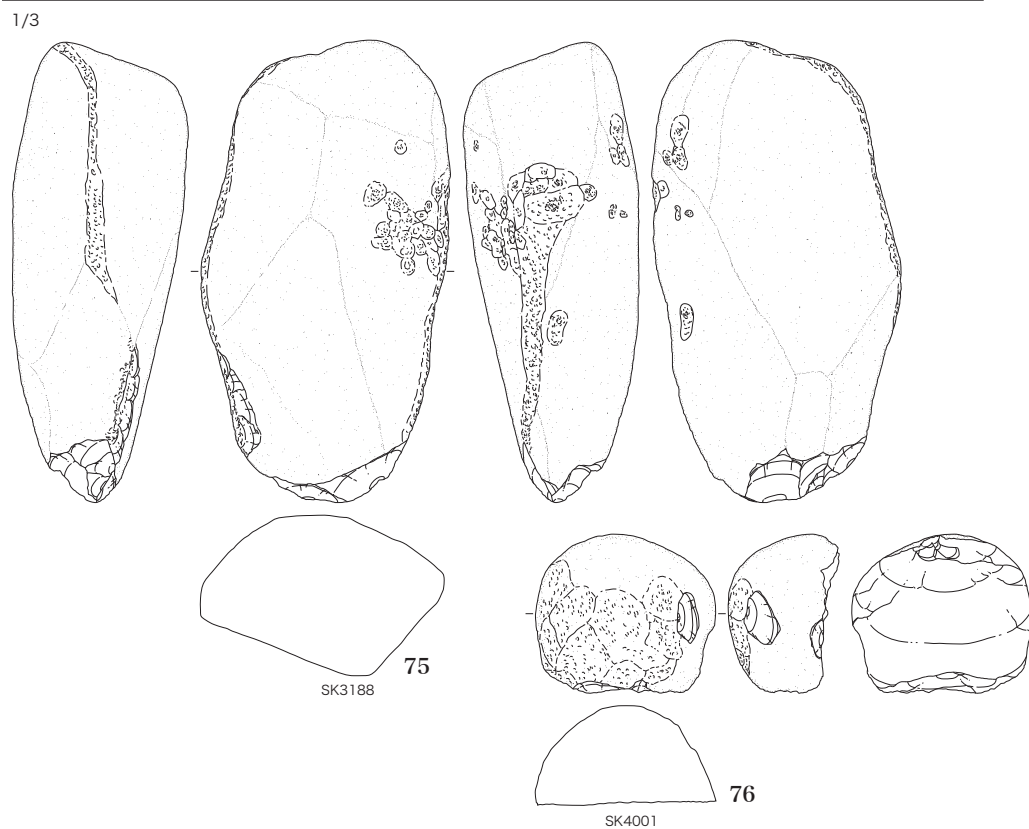
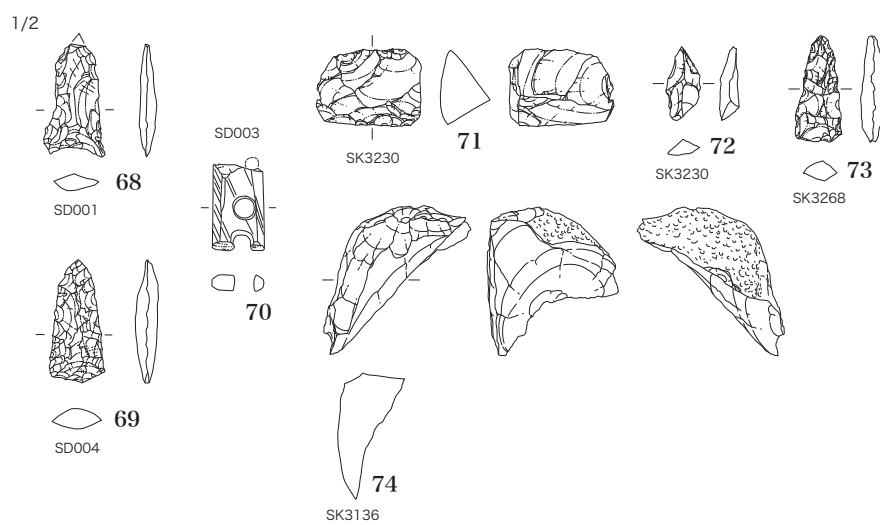


図 78 須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構出土石器

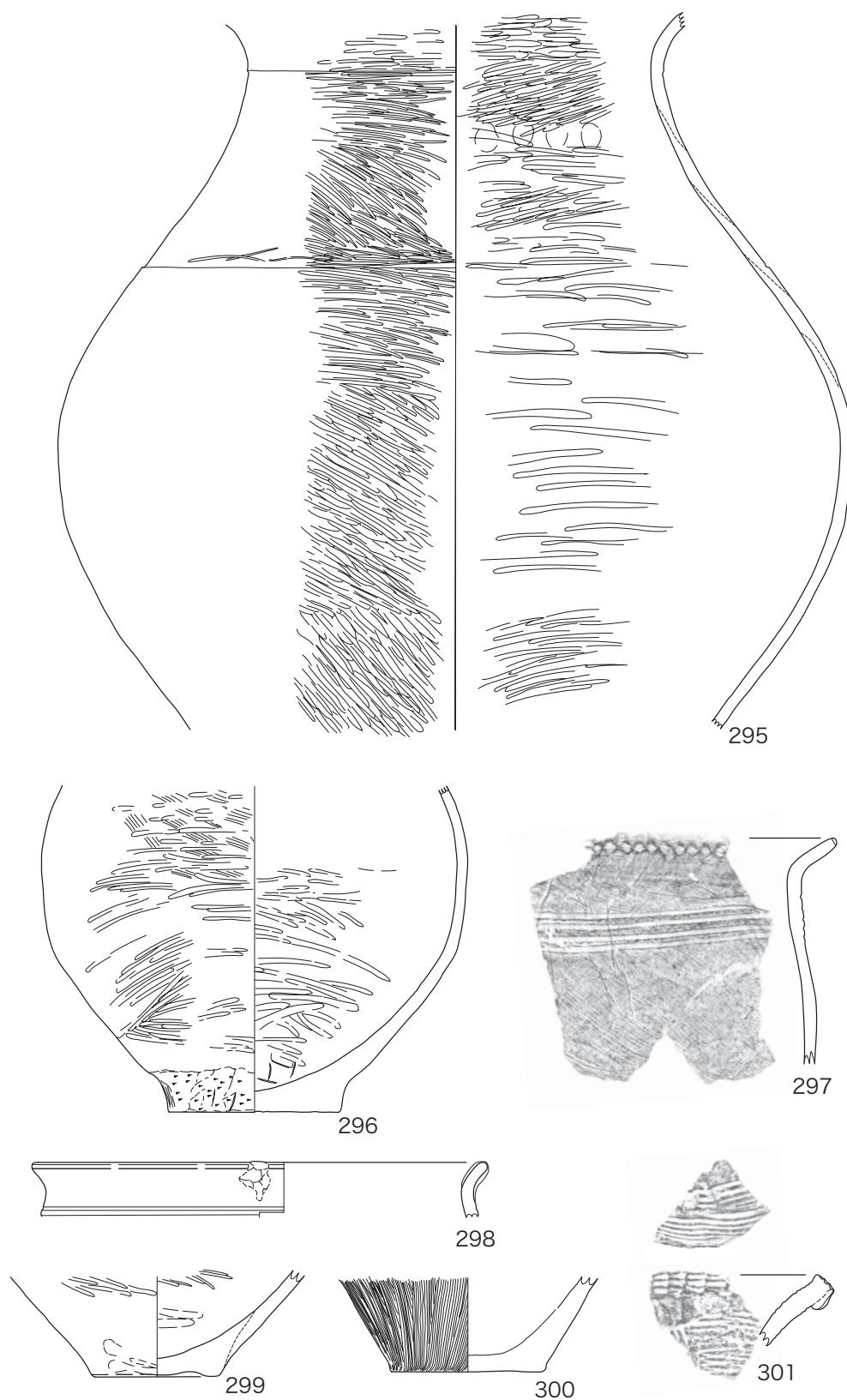


図 79 須ヶ谷遺跡 05C 区各遺構出土土器 SK4001:295 ~ 301

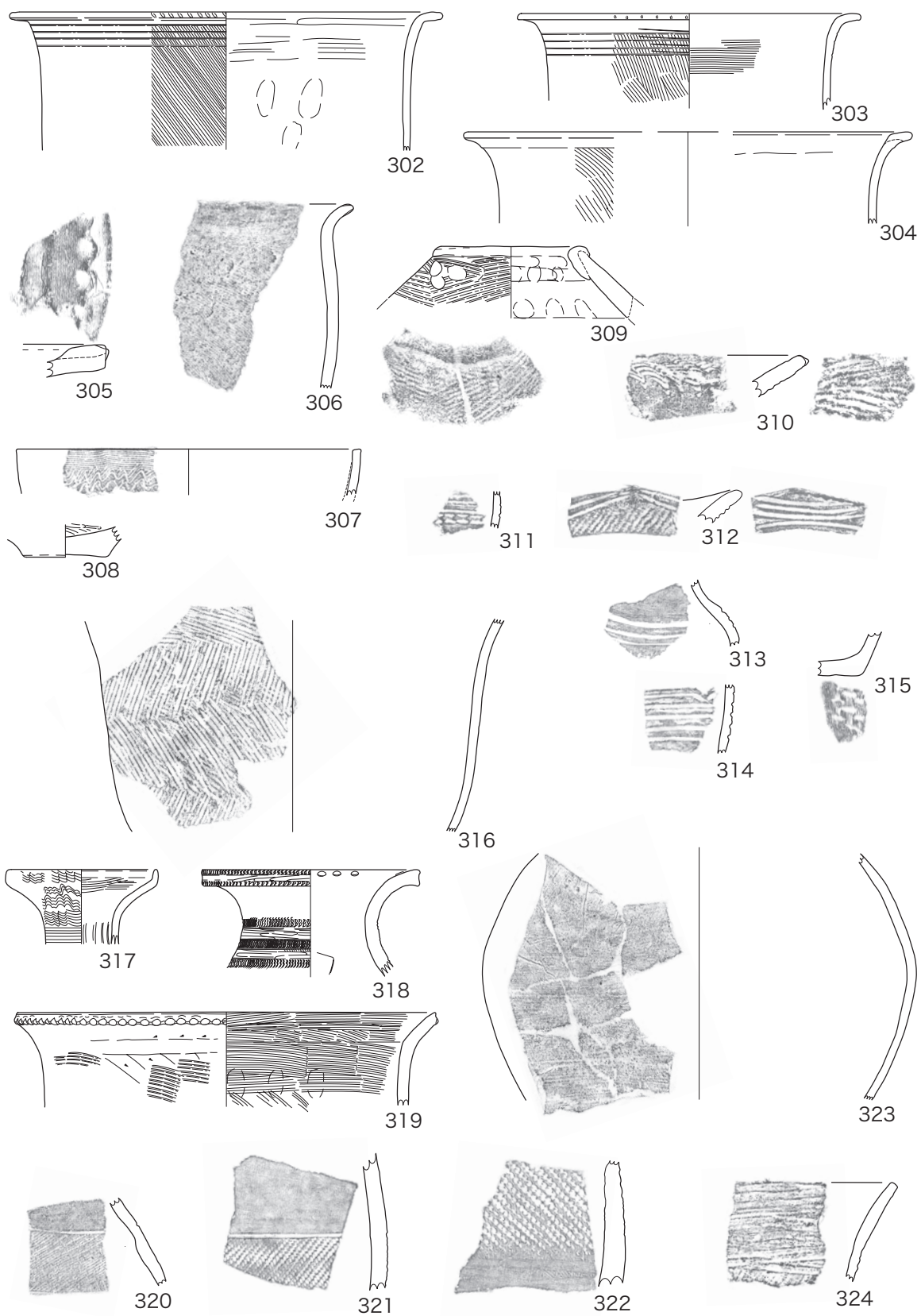


図 80 須ヶ谷遺跡 O5C 区出土土器 (3)

り痕を残す。297 は 4 条沈線の遠賀川系甕。298 は口縁部に突起とはいえない粘土の貼付けがある鉢で、頸部には沈線がめぐりようだ。299 はドーナツ状を呈する壺の底部。300 は甕底部。301 は条痕紋系壺で、口縁部内面に横位条痕、口縁部外面は横位条痕に縦位条痕が重ねられている。

その他の SK 出土資料

179 から 188 は SZ01 出土で、混入品だが紹介しておく。179 ～ 184 は貝田町式 1 期に属す。179 は広口壺口縁部で、ミガキで仕上げられている。180 は櫛条痕甕の底部で、布目痕を残す。181 は口縁部が肥厚する、朝日式以来の二枚貝調整を加えない甕。182 は粗いハケメ調整の甕で、口縁部内面にハケメによる波状紋、上下端に刻みを加える。183 は貝田町式 1 期でも新しい擬縄紋の壺。184 は浅鉢。

185 ～ 188 は朝日式および並行する条痕紋系土器。185 は朝日式の壺で、頸部に二枚貝腹縁の直線紋が施されている。186 は朝日形甕。187 は直線紋の上に竹管刺突紋と半截竹管による平行線の波状紋が施されている。188 は厚口鉢である。

266 は条痕紋系壺の肩部で、二枚貝で連弧紋が施されている。267 は穿孔途中の有孔円盤。268 は櫛描で直線紋と半円紋が施されている。琵琶湖周辺地域との関連を示す資料か。269 は朝日式壺の体部で、複帯構成の二枚貝描直線紋が施されている。

273 は三ツ井式の系譜を引く外面ケズリ甕の破片で、もう少し出土してもよいはずだが、今回唯一の資料である。274 は浮線渦巻紋土器に類似するが、削り込み部分が無くすべて沈線で表現されている。多重円は楕円になって中央に横位に羽状紋が施されており、沈線紋系土器の系譜に属す。弥生前期末に属す。

278 は口縁端部が外側に突出し、下がった位置にある突帯には楕円形押圧が施されている。馬見

塚式終末に属す。

279 は朝日形甕だが、二枚貝条痕の後にさらにハケメが施されている。体部下半から底部にはミガキが施されている。

280 は頸部に段をもつ遠賀川系壺。281 は二枚貝条痕紋系土器。282 は櫛条痕紋系土器。283 は体部外面に二枚貝条痕、口縁端面は無紋で、上端には二枚貝で刻みが加えられている。

284 は二枚貝条痕の深鉢で、278 同様に馬見塚式末期に属す。285 は金剛坂式甕。286 は遠賀川系壺の体部片で、多条沈線がめぐり。

290 は二枚貝条痕の甕で、口縁端部は朝日形のように尖り、指摘みが加えられている。体部は縦位条痕が崩れた印象を与える。293・294 は二枚貝条痕の深鉢で、278 同様に馬見塚式末期に属す。

[石器]

26 ～ 33 は SB3055 出土。26 は両極打撃の石核。27 以下は剥片だが、31 は両極打撃によるものか。58・59 は SB3036 出土。58 は石錐。59 は扁平片刃石斧で、基部を欠損。よく研磨されて成形時の剥離痕が消されている。60 ～ 63 は SB3039 出土。60 は研磨面をもつサヌカイト片で、打製短剣の破片であろう。61 以下は手持ち砥石。64 は花崗岩製の凹み石。表面の摩耗が著しい。65 は棒状の敲打具。66 は側面に擦痕を残す。67 は両側穿孔の管玉。

その他の遺構出土資料

[土器]

325・326 は SD3006 から出土した。325 は櫛条痕深鉢で、口縁部内面に櫛刺突紋がめぐり。326 は多条沈線紋の鉢である。327 は中期前葉 2 に属し、地の調整はナデだが、胎土は二枚貝条痕紋系土器と類似し、岩滑式 B 類に含まれる。施紋は半截竹管により、押し引き状の短線（γ 帯）が直線（β 帯）に沿い、紋様帯下部に組み込まれている。構成上は櫛描紋系の三角形刺突紋とパラレ

ルである。187は同一個体であろうか。区画単位と考えれば174も同類となる。こうした手法は濃尾平野における該期の指標となる。328は貝田町式1期に属す壺の体部片で、櫛描直線紋に縦位波線が重ねられている。

[石器]

68はサヌカイト製の無茎鏃で基部は内湾、69は有茎石鏃の基部が欠損して、調整されて無茎と

なったもので下呂石製。70は磨製石庖丁の紐穴付近の破片を再利用したもので用途不明。71は微小剥離をもつ剥片。72は石錐。73は鏃というより錐か。74は両刃石斧の基端片。75は垂角礫の敲打具で、稜線た側面に敲打痕や凹みがある。76も敲打具。半分に割れてから敲打具に使用か。チャート製。77は粗製剥片石器で、周囲には敲打による剥離があり、さらに凸縁には敲打痕、凹縁には刃部に平行する擦痕が認められる。

ロー状光沢は認められない。75は縞状の目をもち黄緑色を呈する緻密な石で、玉原石の可能性はあるが、施溝は認められない。

遺構外出土資料

[土器]

302～324は2面の上部における遺構外出土資料。329以下は下部の遺構外出土資料である。なお、378・379はSX01に混入した資料である。

302～315は中期前葉、316～324は中期中葉に属す。

302～304は金剛坂式甕で、303は平行線紋を欠く。305は口縁部内面に段をもつ壺で、口縁端部上端に指押圧を加えている。306は鉢。307は櫛描紋をもつ鉢。308は壺の底部。309は厚口鉢。310は壺口縁部で、内面に乱れた波状紋が施されている。311は半截竹管による平行線紋で、327と同類である。312～314は大地形土器。315は底部に網代痕を残す。搬入品である。

316は櫛条痕深鉢の体部片。

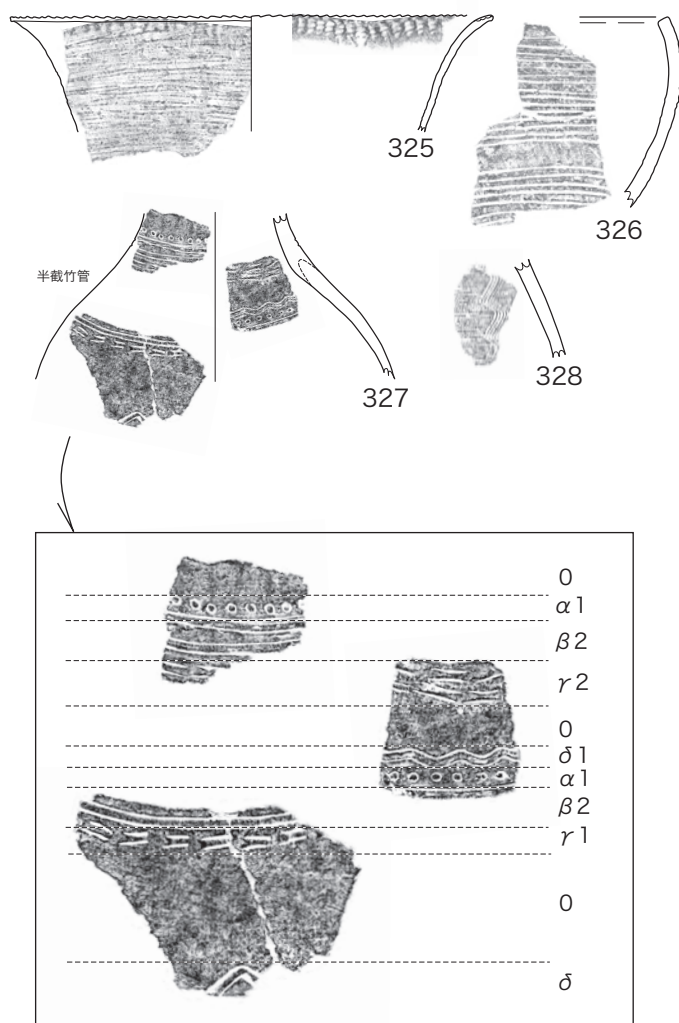


図 81 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (4)

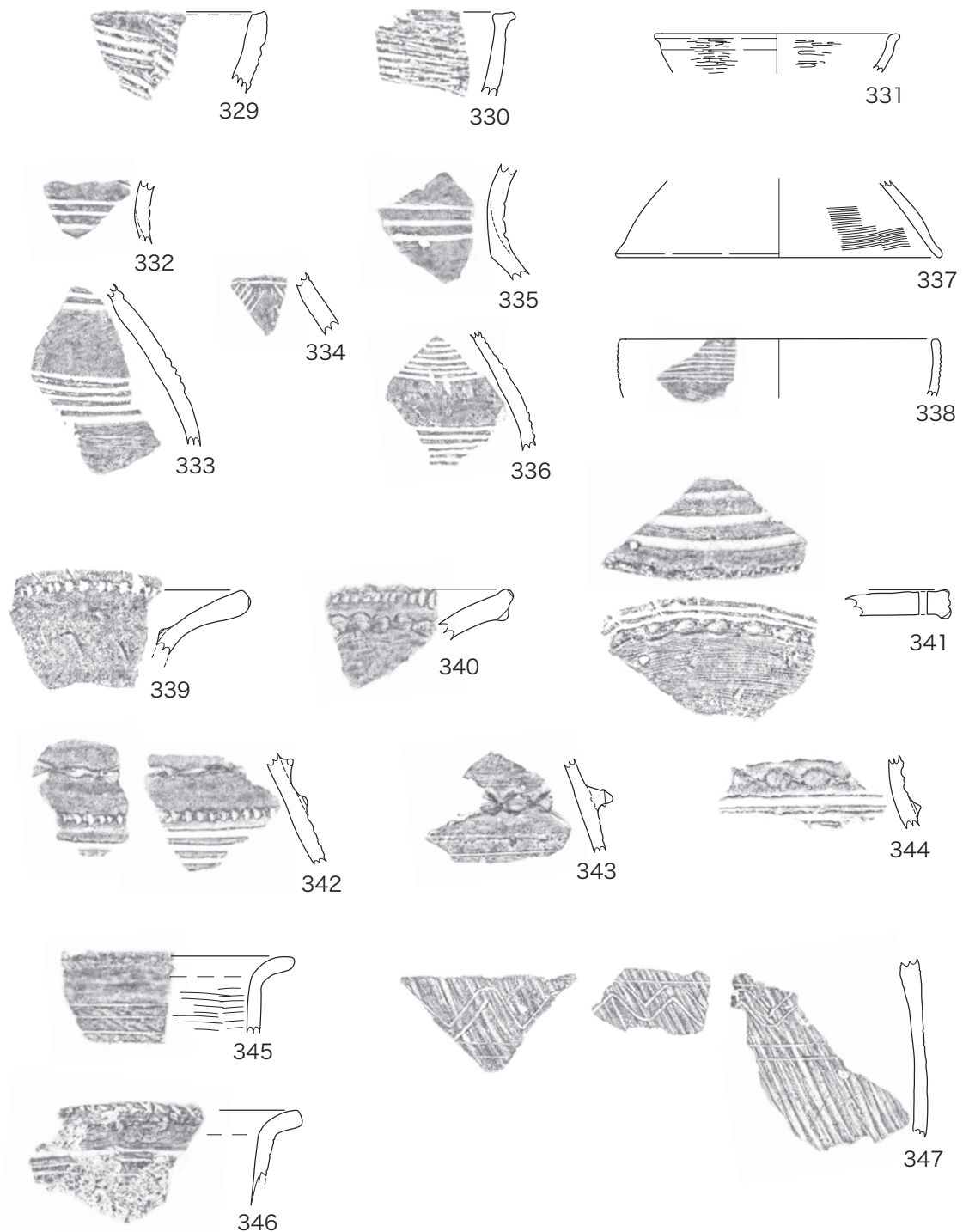


図 82 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (5)

317 は貝田町式 1 期の細頸壺。318 は櫛描紋のかわりに二枚貝腹縁の押し引きを施した続条痕紋系土器の後裔で貝田町式 1 期の末。319 は体部外面に二枚貝調整を重ねる甕で、貝田町式 2 期の初めか。320～322 は縄紋施紋の壺体部片。323 は瓜郷式壺の体部。324 は櫛条痕深鉢だが、口縁部内面の刺突紋を欠く。

329～347 は縄文晩期末から弥生前期。

329 はやや浅めの二枚貝条痕深鉢で馬見塚式末期、330 は口縁端部が拡張し同時期か。331 は三ツ井式の精製浅鉢。

332～338 は遠賀川系土器。332・333 は削り出し突帯、335・336 は沈線手法。337 は甕蓋。338 は多条沈線の鉢。334 は複合鋸歯紋か。

339～347 は金剛坂式土器。339 は口縁部が肥厚して端面に刻みが施され、頸部内面に刻み突帯をもつ。340 は拡張する口縁端部の下端が押圧突帯状を呈する。341 は口縁部内面に幅広のミガキ沈線をもつ。345～347 は甕で、347 は波線(複合鋸歯紋の変容)を直線で挟む構成をもつ。

348～370 は中期前葉、371 以下は中期中葉に属す。

348 は多条沈線の大形壺。349～351 は金剛

坂式甕。352 は壺口縁部内面に弧紋が施されている。353・354 は壺頸部で、354 は段をもつ。355 は直線帯の施紋後に波状紋を加えて交互配置としている。単帯の直線紋構成とは互換性があるが、これらは二枚貝腹縁施紋であり、背面施紋とは手法上区別する必要がある。356～358 は二枚貝背面施紋。356 は 246・247 と同一個体で、波状紋の両側と下の複帯の直線帯の下部に沈線を付加している。357 は波線の下に三角形刺突を加えている。358 は直線帯に複合鋸歯紋を重ねている。359 は壺蓋の破片か?。360 は櫛描紋の無頸壺である。361 は粗いハケメ調整の壺で、口縁部内面にハケメ工具で弧紋が施されている。甕モードの壺である。362 は朝日形甕。363 は幾何学紋をもつ鉢で、研磨面に沈線で紋様が施されている。精製土器である。

365～370 は二枚貝条痕紋系土器である。364 は波状紋の傾向を残すハネアゲ紋。365 は破片をつないで復元した。口縁部はわずかに内湾して袋状口縁の特徴を残す。上端は押圧で波打つ。外面にはハネアゲ紋が最後に施されている。体部上半はハネアゲ紋と斜条痕の間に半截竹管による平行線紋が重ねられている。底部はわずかに上げ底

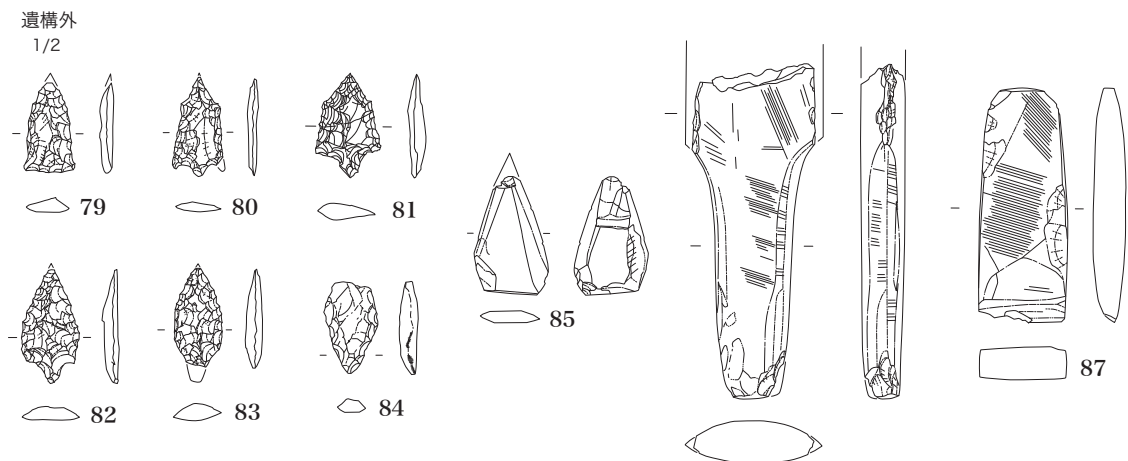


図 83 須ヶ谷遺跡 05C 区遺構外出土器

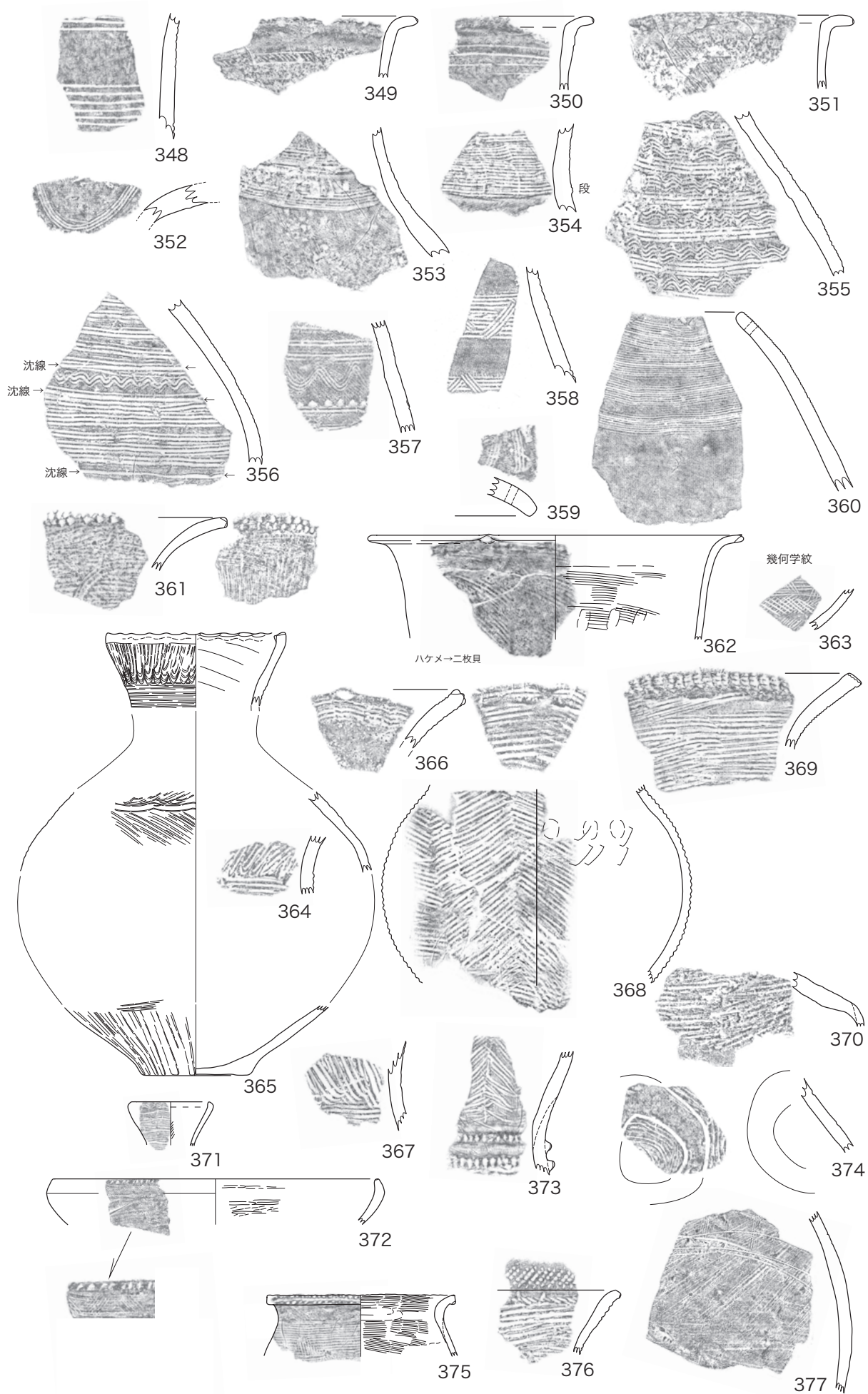


図 84 須ヶ谷遺跡 05C 区出土土器 (6)

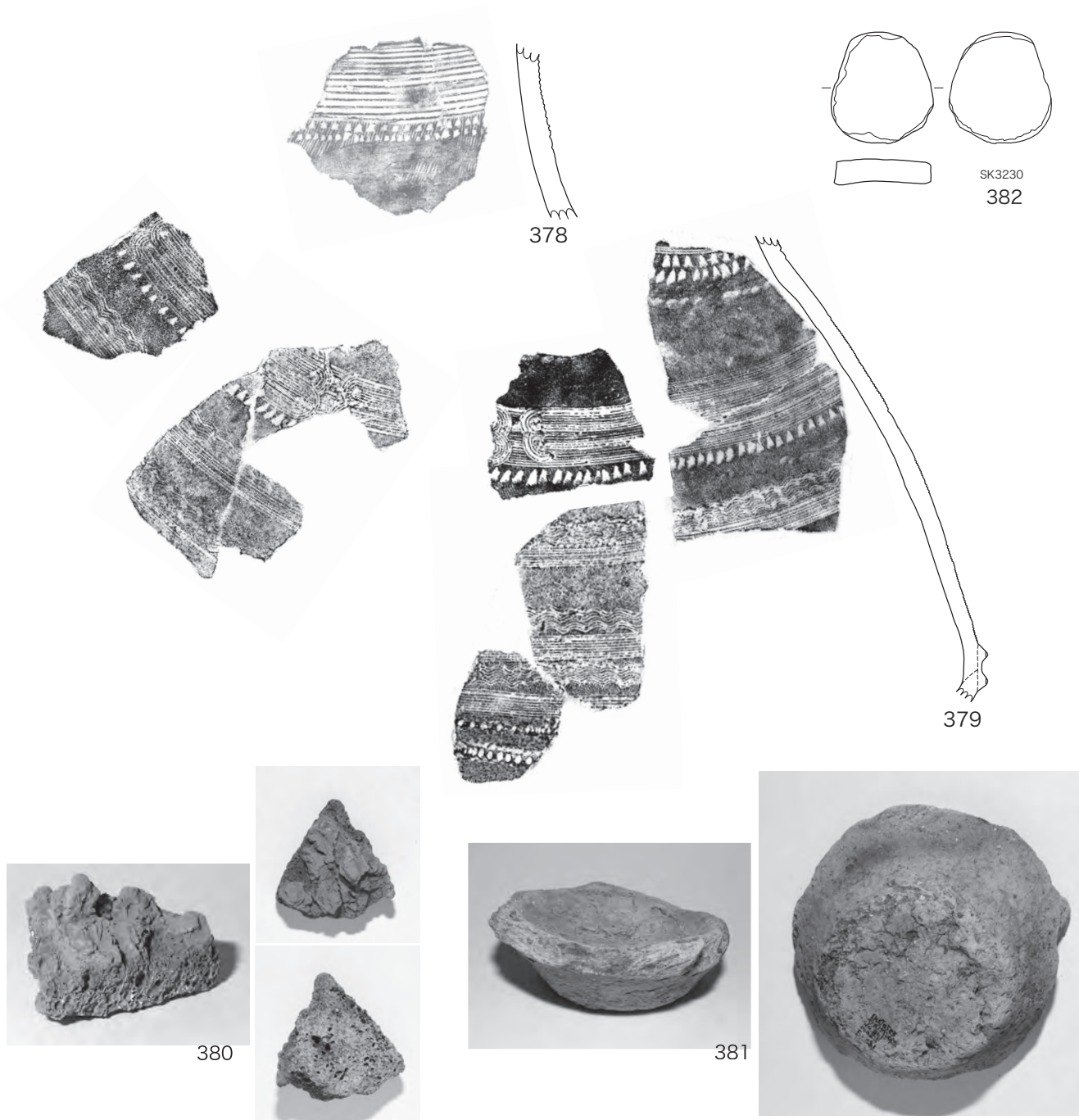


図 85 須ヶ谷遺跡 05C 区出土遺物

状で、木葉痕が認められる。366は無突帯の壺口縁部で、端面に条痕と指摘み加えられ、内面には連弧紋をもつ。367は逆向きのハネアゲ紋のように見えるが、下から上に工具を動かしている。これを模倣すれば北陸の反転ハネアゲ紋になる。368は壺の体部片で、最下部は斜条痕のようだ。369は口縁端部に押し引き紋が施された甕。370は厚口鉢の破片。

371は貝田町式1期の細頸壺。362は浅鉢で、口縁部外面には櫛描で直線帯に鋸歯紋を重ねた紋様が認められる。口縁端部にも刻みが加えられている。

373は壺の頸部のようだが、類例は無い。頸部には刻み突帯が2条めぐり、上部には櫛で綾杉紋が施されている。人面付土器（もしくは土偶形容器）の一部かもしれない。374は同心円を横に連係させる紋様で、磨り消し擬縄紋手法から変化した磨り消し条痕紋手法である。条痕は二枚貝で施され、沈線が付加されている。

375は粗いハケメ調整の甕で、口縁部上下端にはハケメ工具で刻みが加えられている。376は櫛条痕深鉢。377は瓜郷式壺の体部片で沈線3条の連弧紋が施されている。

378は頸部に二枚貝直線紋、その下にくずれた三角形刺突が2列施されている。

379は整った深い櫛による櫛描紋土器で、朝日式2期に属す。頸部はおそらく複帯の直線紋帯、その下に378と同じように三角形刺突が2列施され、無紋帯を挟んで流水紋、三角形刺突、無紋帯、波線と直線、無紋帯、波線と直線の交互配置、刻み突帯2条という構成である。

[石器]

79～83は石鏃。80の五角形鏃は基部中央の突出はわずかだが、両側に剥離が加えられて凹縁となり、有茎鏃と同じである。古い形式である。81はチャート製で、同質の石核・剥片が無いの

で、持ち込まれたものだろう。84は粗雑なチャートで作られた石鏃で、39と同質。側縁に使用による線条痕が認められる。土器の穿孔用であろう。85は磨製石鏃で先端を欠損。86は中世の溝SD04から出土した磨製石剣。関から柄部にかけての破片で、両刃縁は敲打で潰れている。87はほぼ完全な扁平片刃石斧。

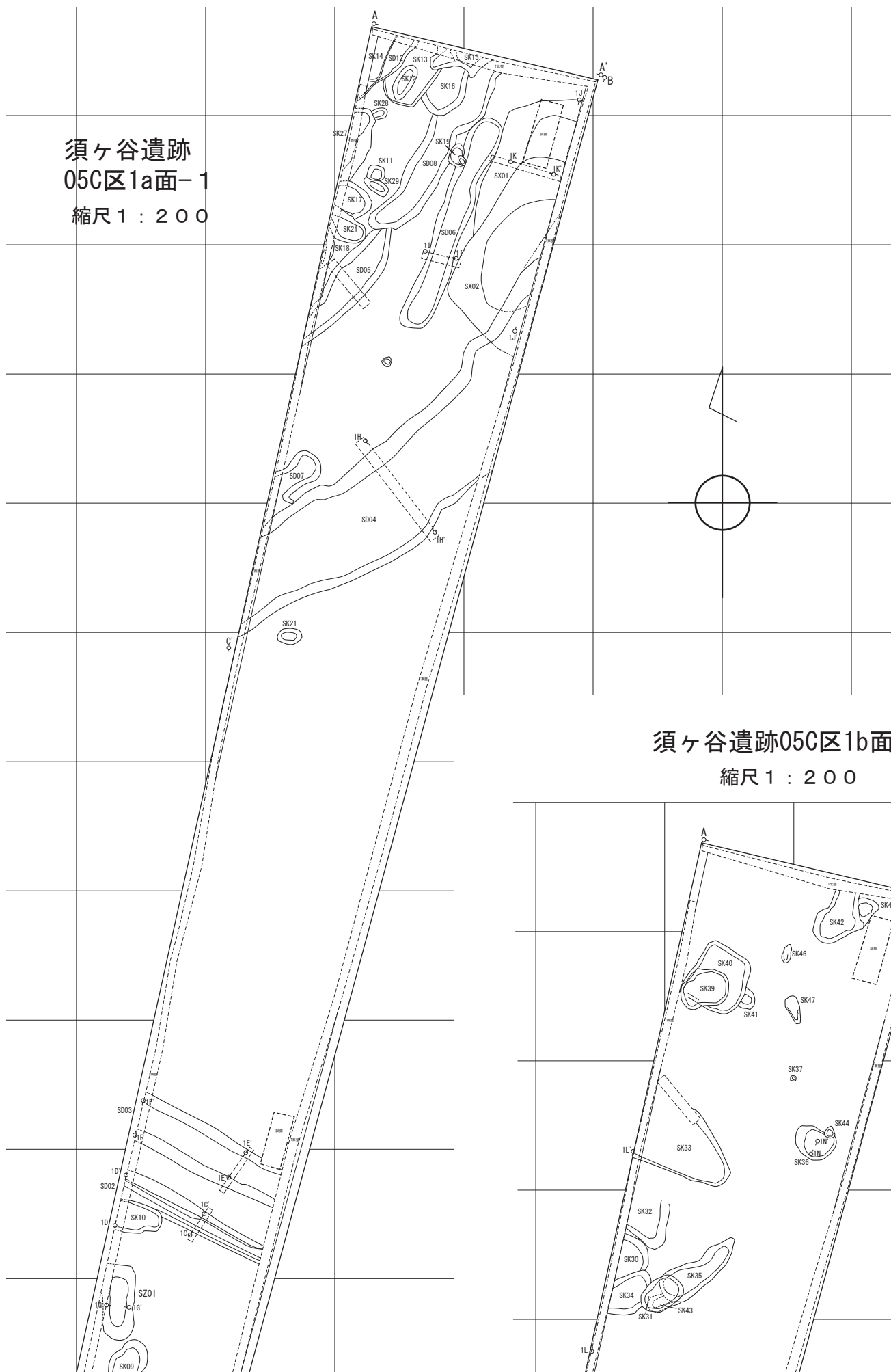
[土製品]

380は4.5cm×3.7cmの焼成粘土塊で最下面から出土した。片面には植物の茎痕が残り、もう片面は発泡してコークス状を呈する。厚みは9～14mmで断面に凹凸はあるが、発泡部分は8～10mmと深くまで達している。厚みが薄いことと発泡が植物痕側でない点は、通常の土器焼成に伴う粘土塊とは異なる。塗壁の表面が被熱したような印象は炉壁を思わせるが、焼成中に破片が転落して強く被熱したのであろうか。

381は支脚に用いられた朝日式の壺底部で、底径は約6cmである。周縁は打ち欠いて整形されている。外面は底部付近が赤く、周縁は灰色に変色している。後者の変色のラインは底面に対して斜めで、水平に置かれたようではないが、不規則な被熱を受けたためであろうか。

今回の調査では、いわゆる台盤状土製品の出土が無く時期差に関わる可能性もあるが、名古屋城三の丸下層では貝田町式1a期に出土しているので、むしろこの場合は居住域の範囲に関わって、調査地区がその縁辺であったことを示していると評価すべきだろう。

須ヶ谷遺跡
05C区1a面-1
縮尺1 : 200



須ヶ谷遺跡05C区1b面
縮尺1 : 200

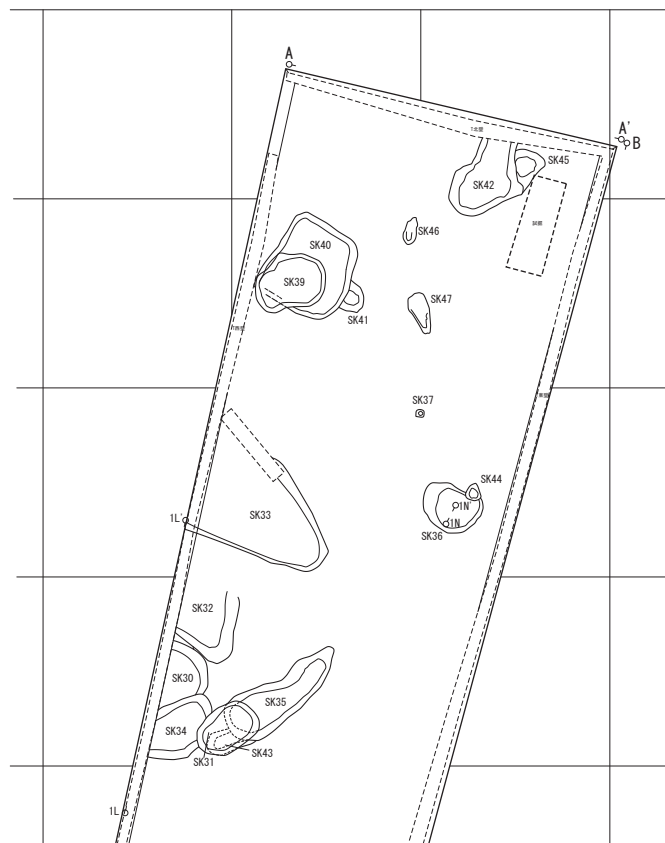


図 86 須ヶ谷遺跡 05C 区 1 面プラン (1)

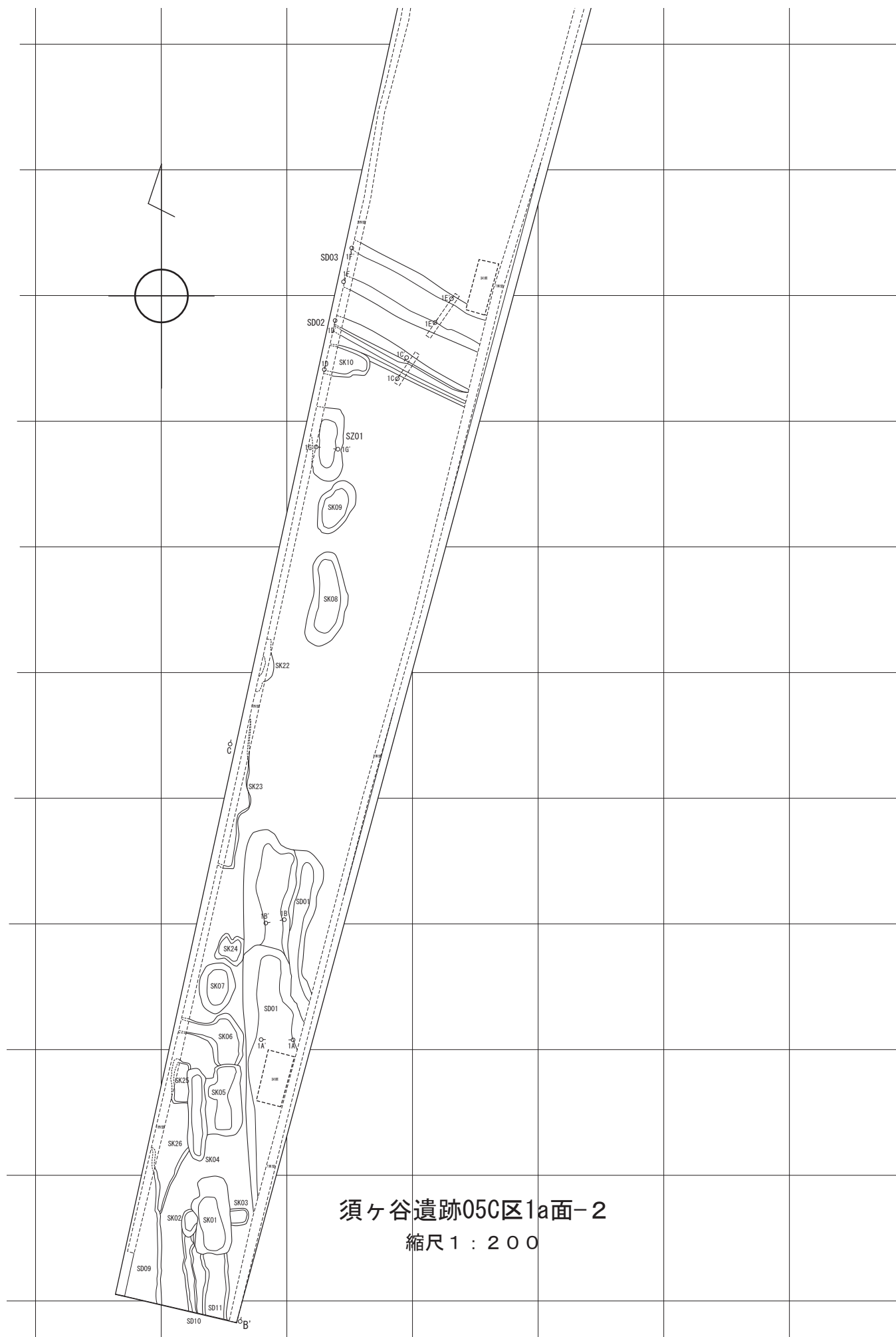
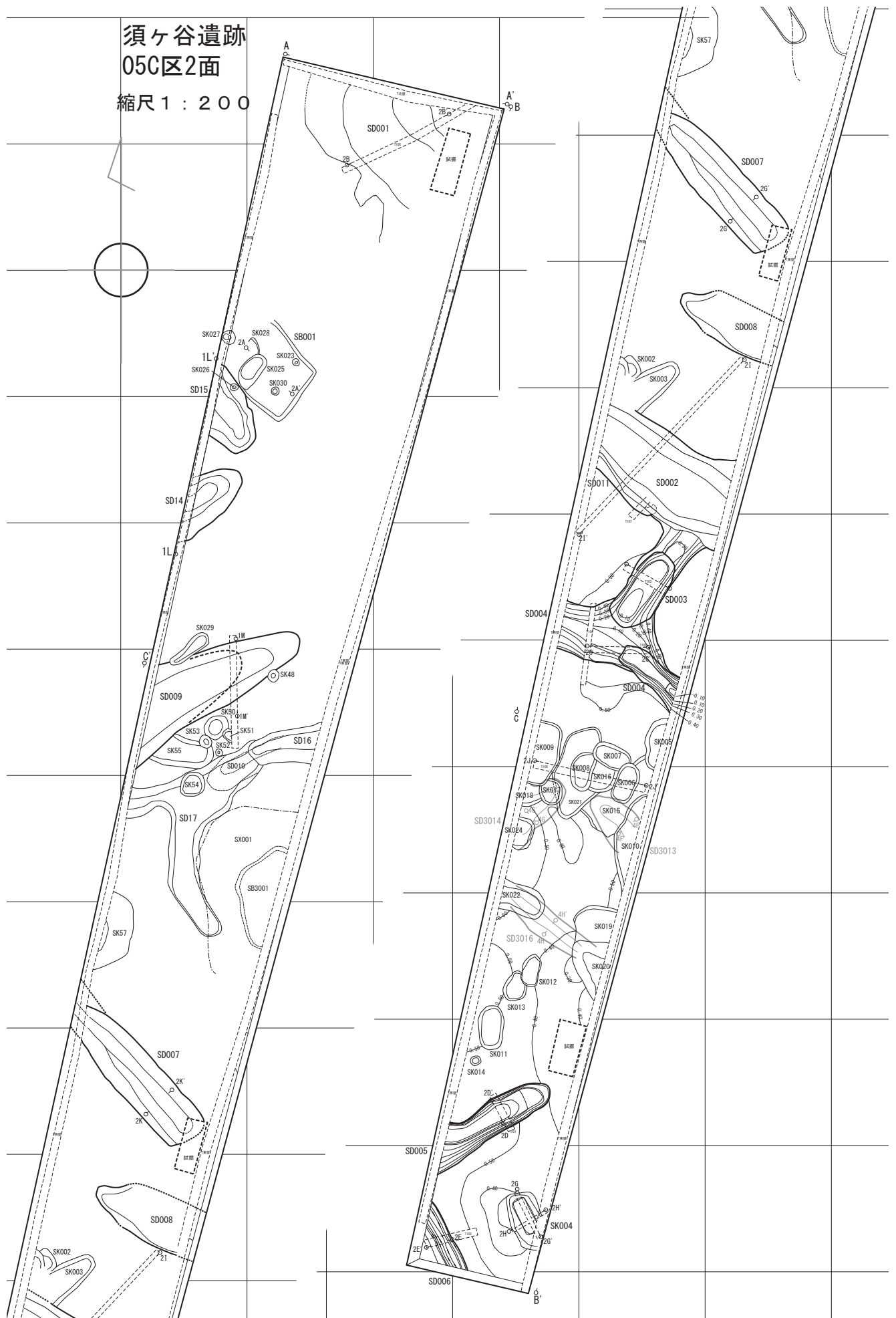


図 87 須ヶ谷遺跡 05C 区 1 面プラン (2)

縮尺 1 : 200



91

05C区3a面

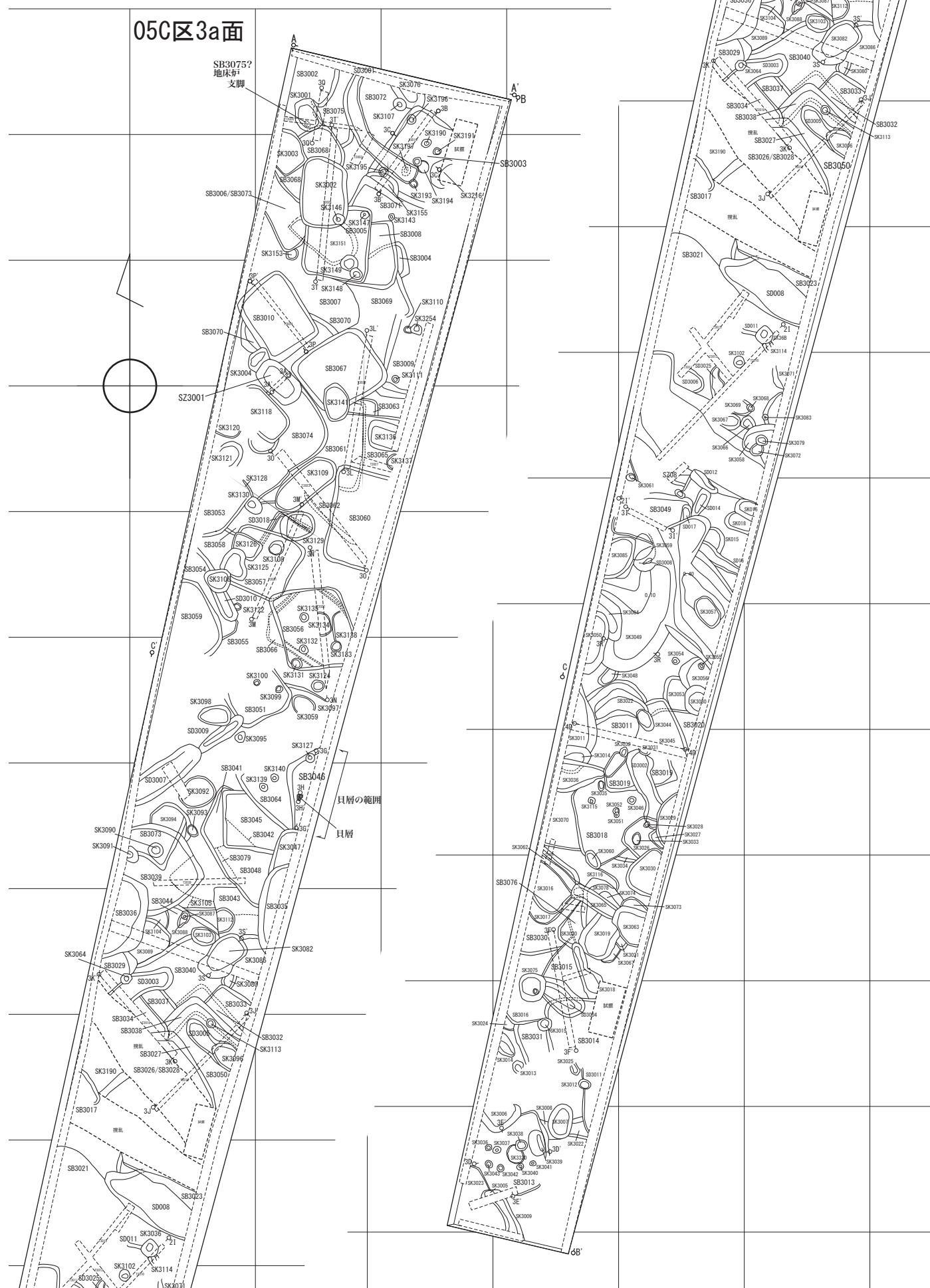


図 89 須ヶ谷遺跡 05C 区 3a 面プラン

須ヶ谷遺跡05C区3b面
縮尺 1 : 200

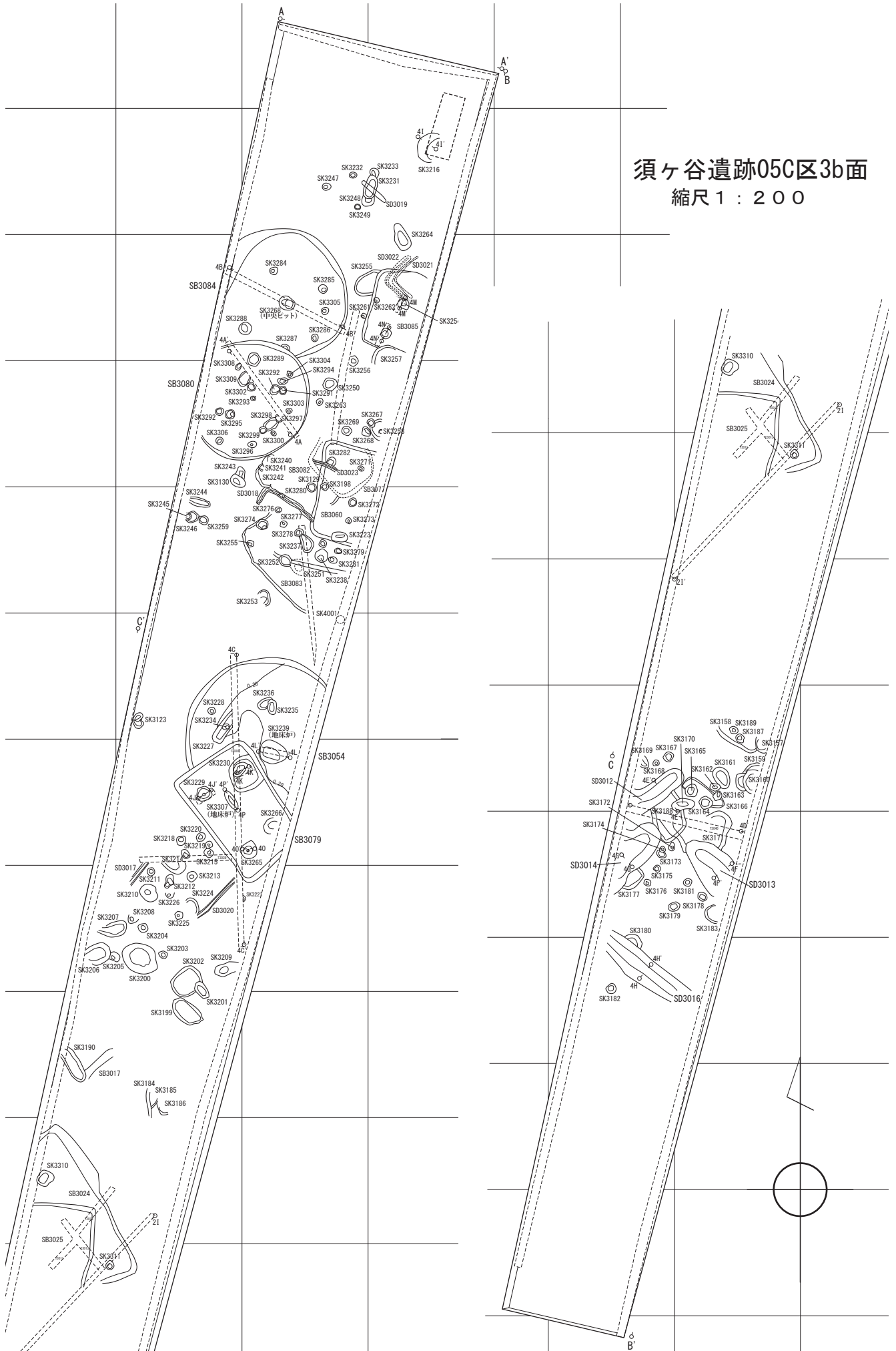


図 90 須ヶ谷遺跡 05C 区 3b 面プラン

縮尺 1 : 50

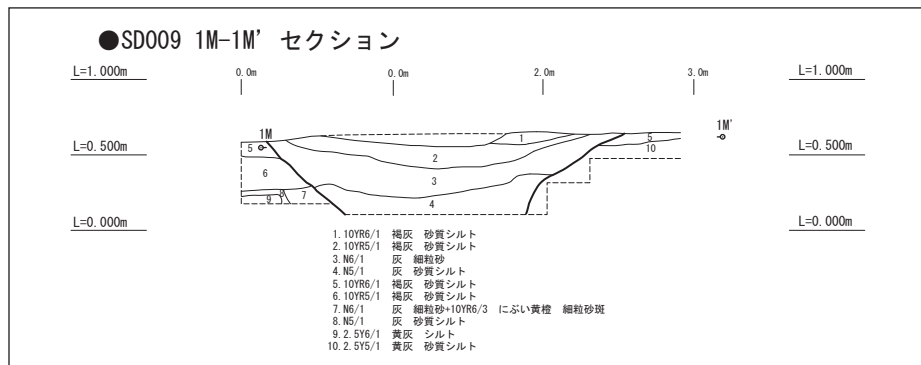
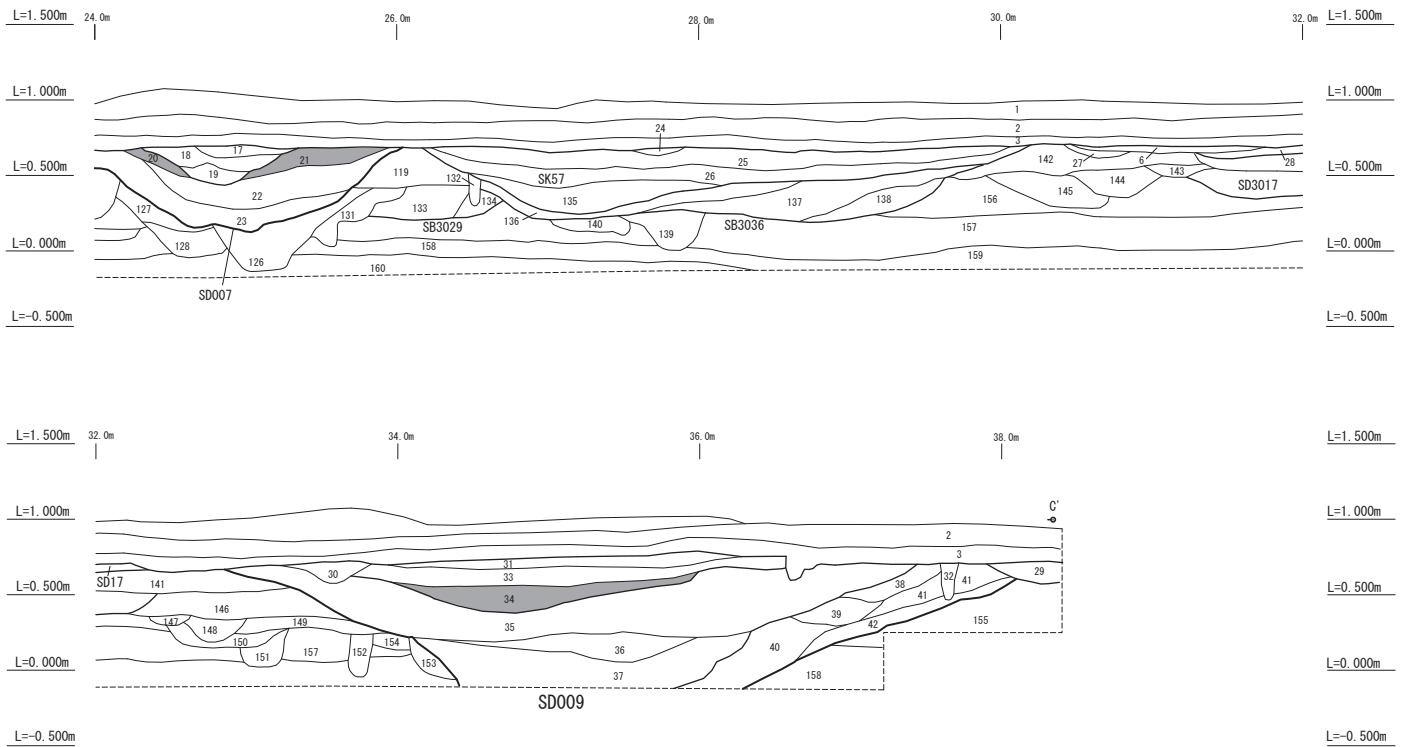
縮尺 1 : 50



須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 5 0

調査区西壁 セクションC-C' -2



調査区西壁 セクション1L-1L'

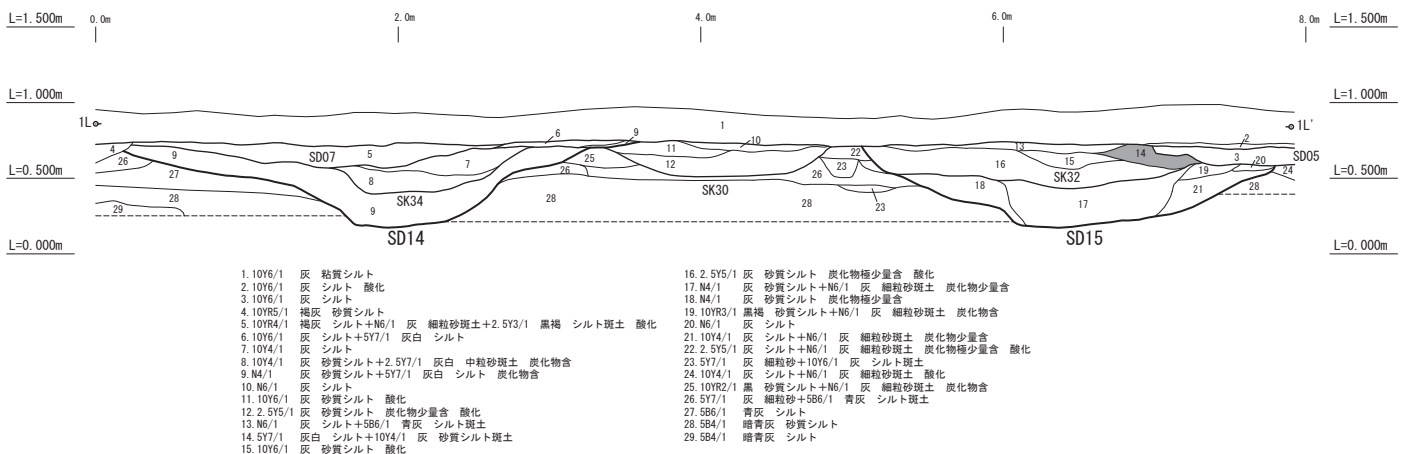


図 93 須ヶ谷遺跡 05C 区西壁セクション (2) 他

須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 50

調査区東壁 セクションB-B' - 1

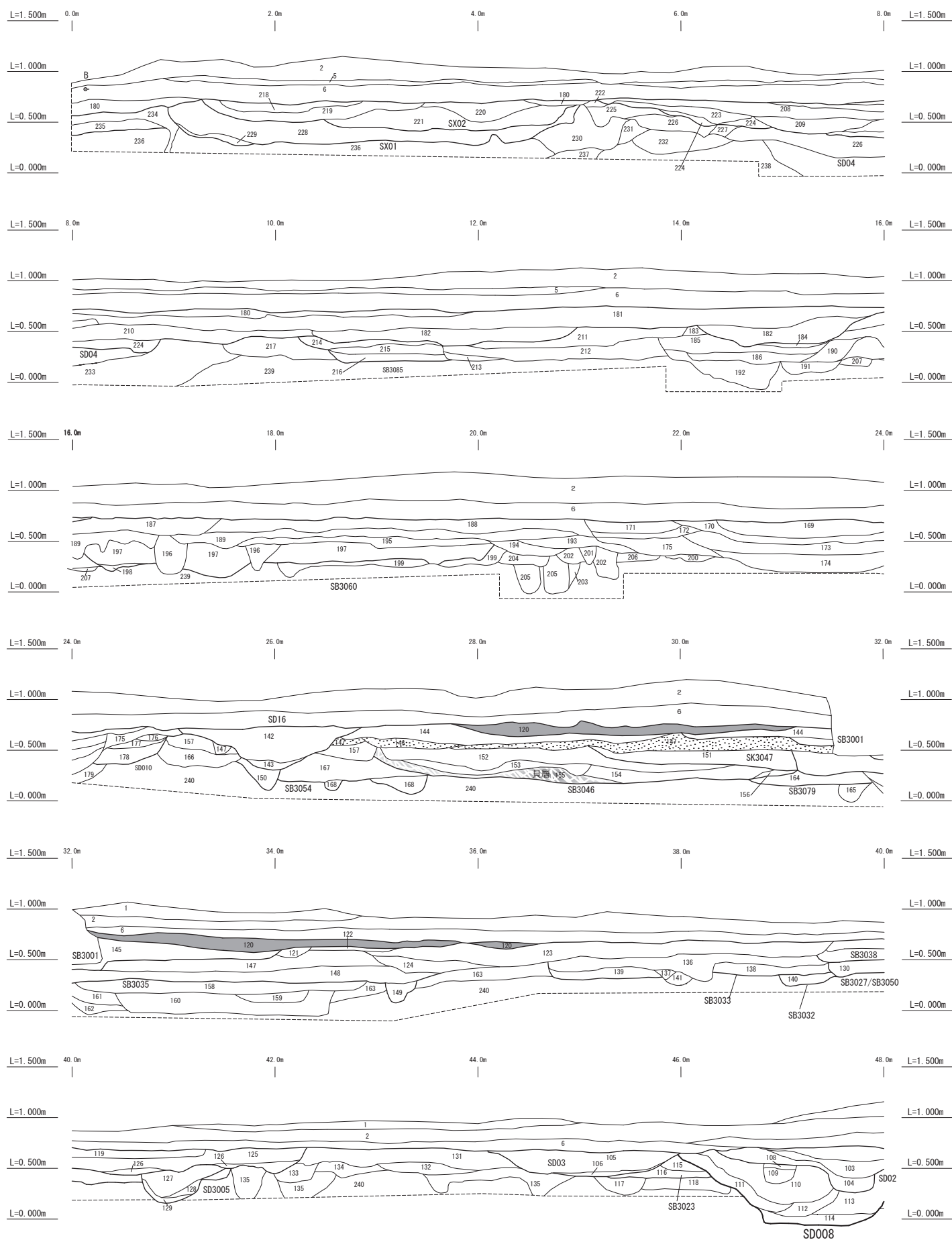


図 94 須ヶ谷遺跡 05C 区セクション東壁 (1)

須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 50

調査区東壁 セクションB-B' -2

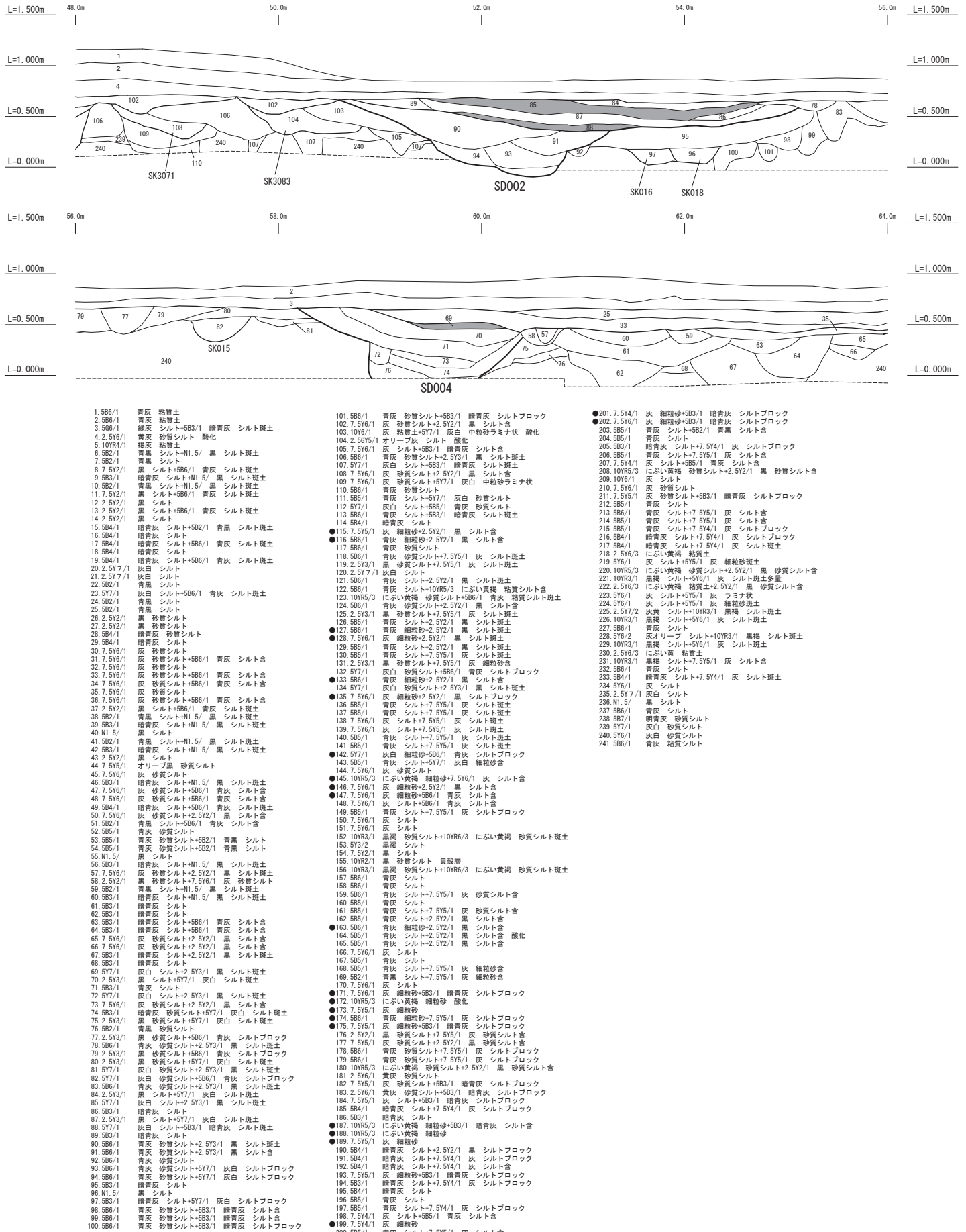
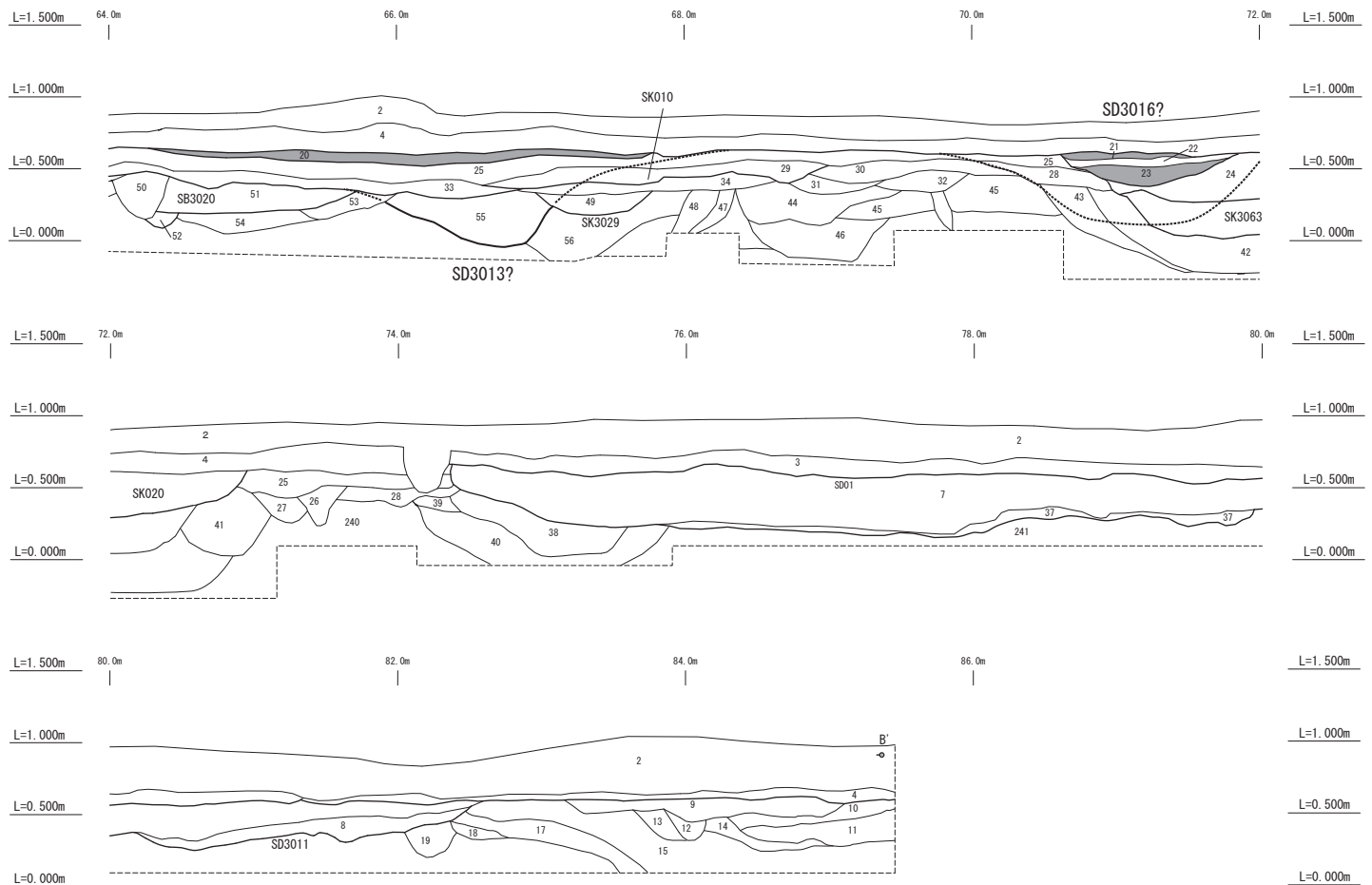


図 95 須ヶ谷遺跡 05C 区東壁セクション (2)

須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 50

調査区東壁 セクションB-B' -3



調査区北壁 セクションA-A'

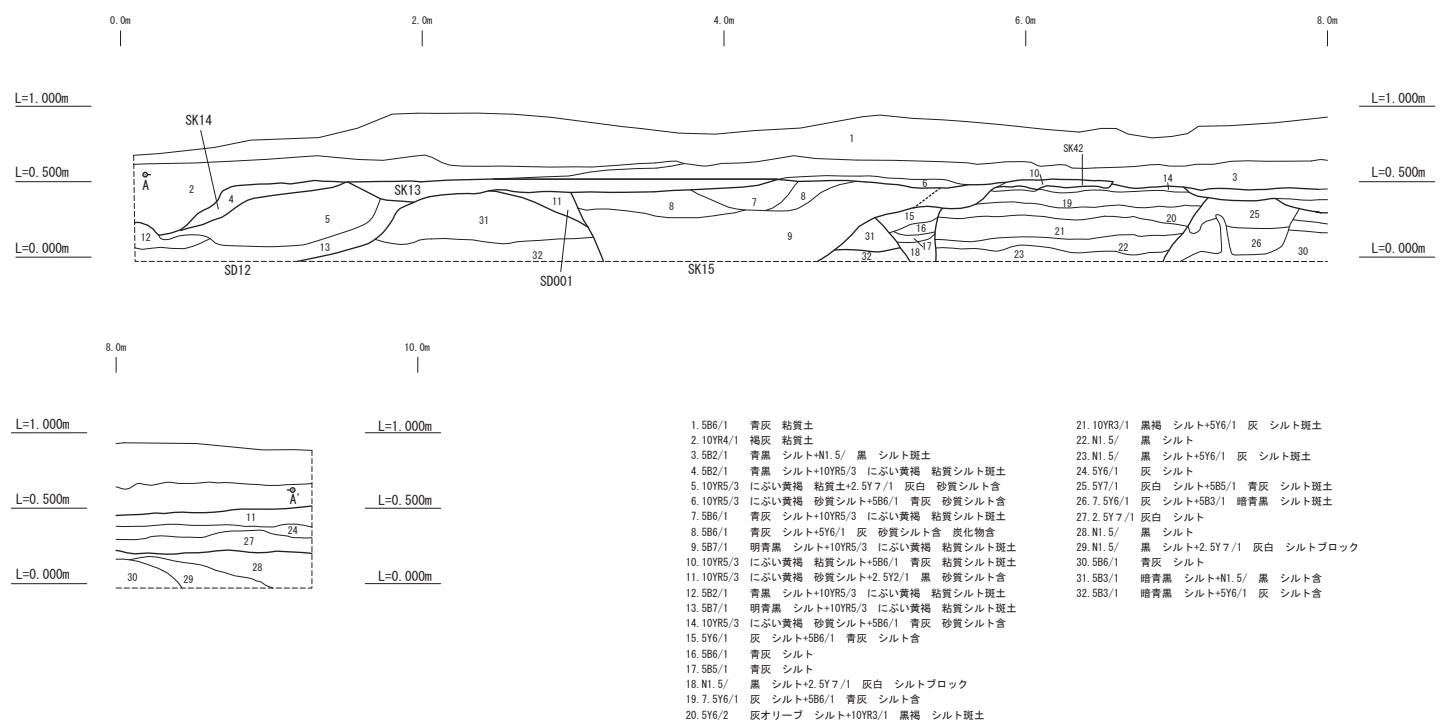
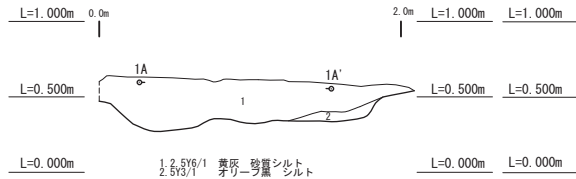


図 96 須ヶ谷遺跡 05C 区東壁セクション (3)・北壁セクション

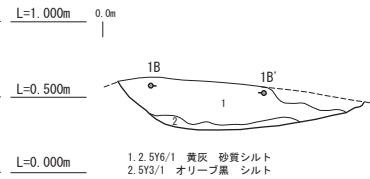
須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 50

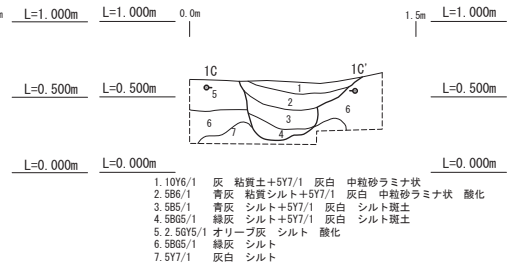
●SD01ベルト1 1A-1A' セクション



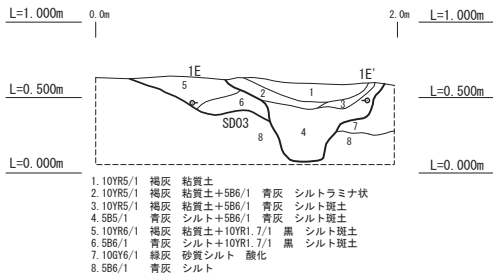
●SD01ベルト2 1B-1B' セクション



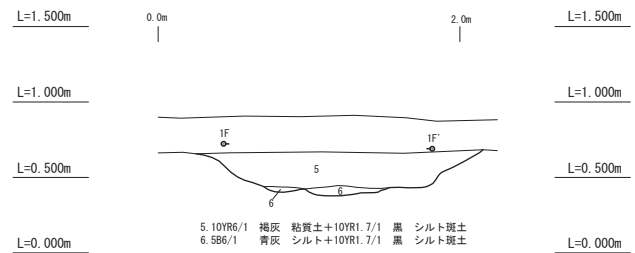
●SD02ベルト1 1C-1C' セクション



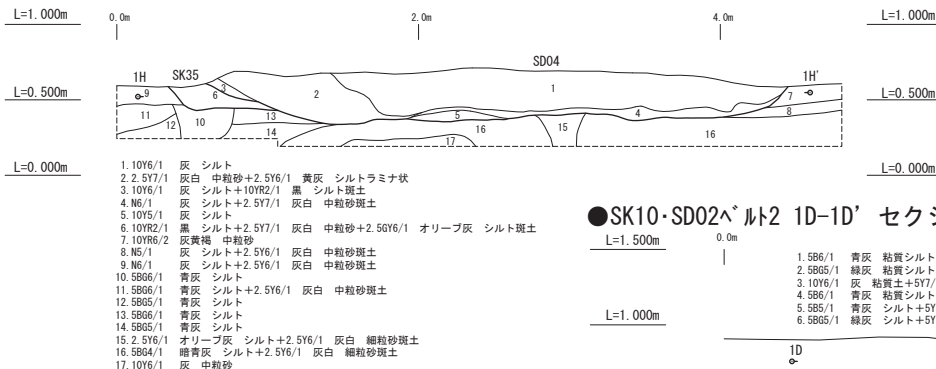
●SD03ベルト1 1E-1E' セクション



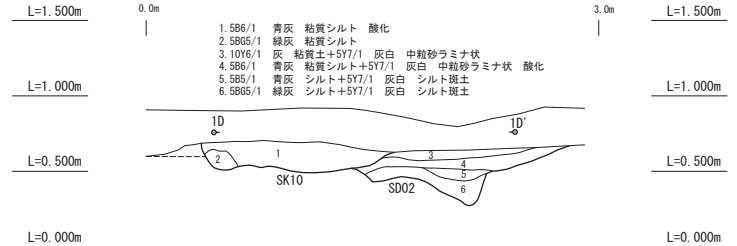
●SD03ベルト2 1F-1F' セクション



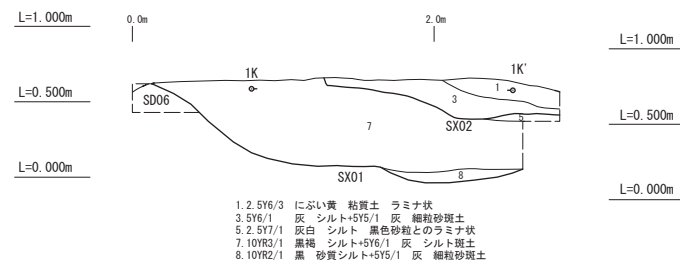
●SD04 1H-1H' セクション



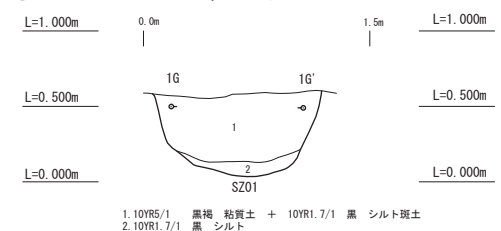
●SK10・SD02ベルト2 1D-1D' セクション



●SX01・02 東西 1K-1K' セクション



●SZ01 1G-1G' セクション



●SX01・02 南北 セクション 1J-1J'

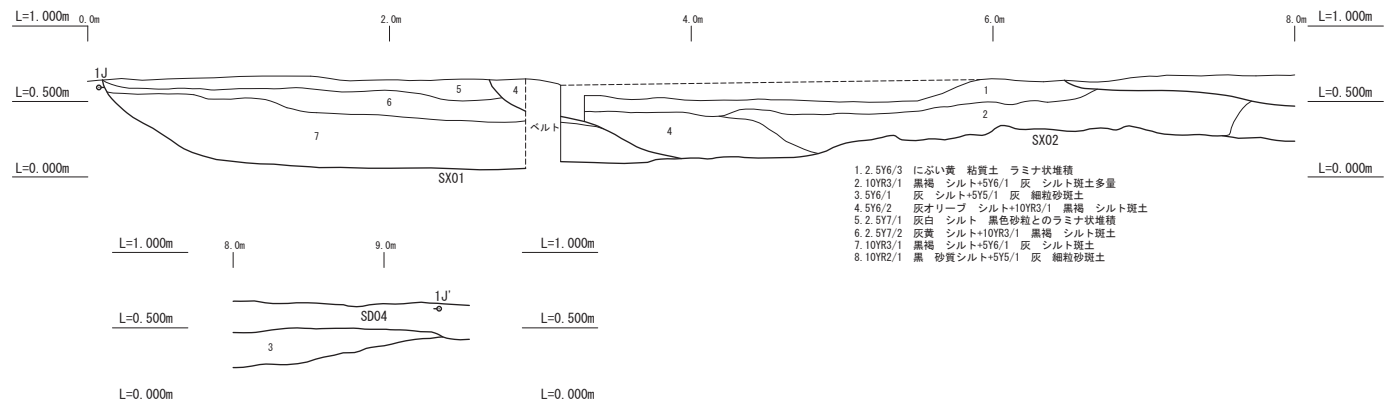
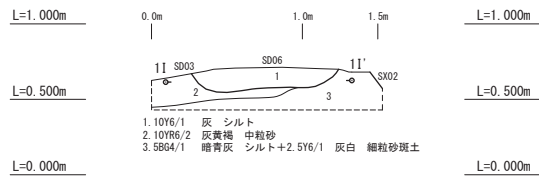


図 97 須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (1)

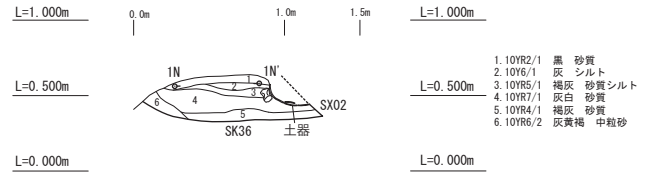
須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 50

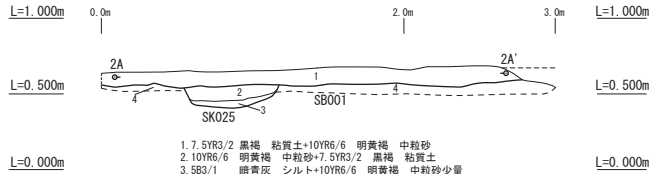
●SK09 1I-1I' セクション



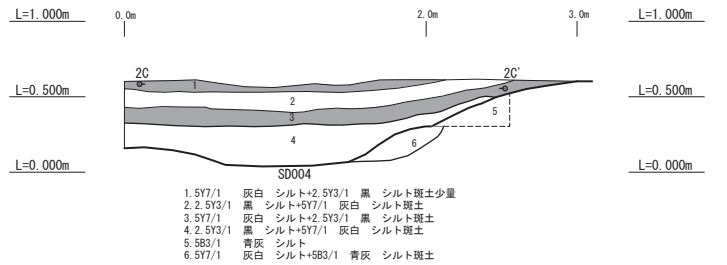
●SK36 1N-1N' セクション



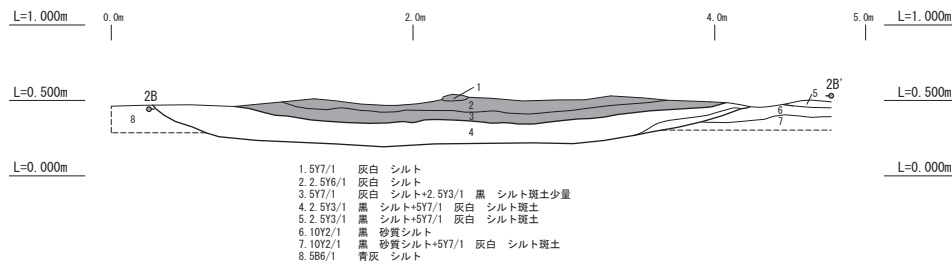
●SB001 2A-2A' セクション



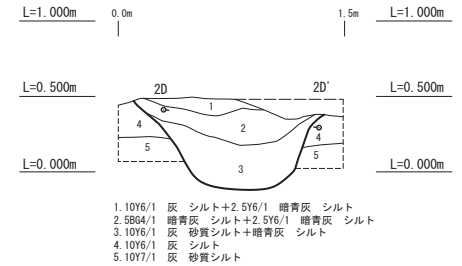
●SD004 2C-2C' セクション



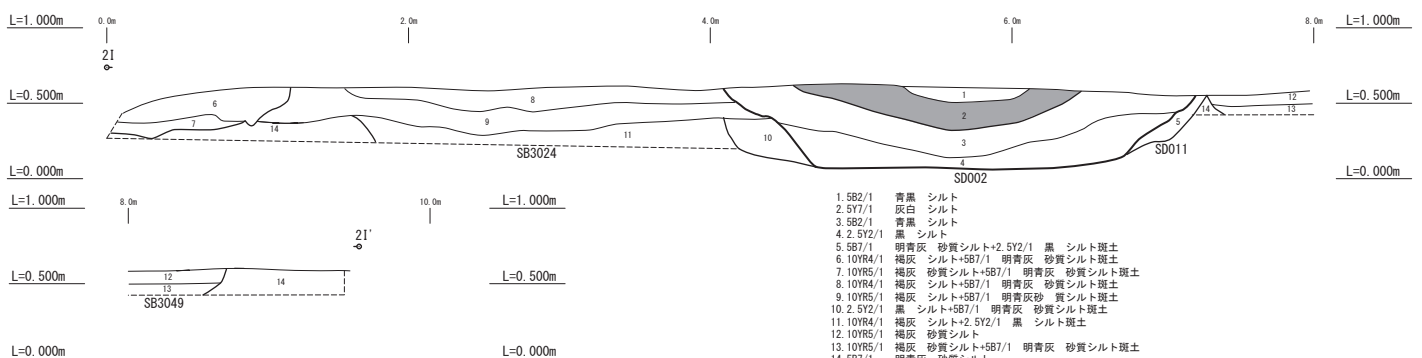
●SD001 2B-2B' セクション



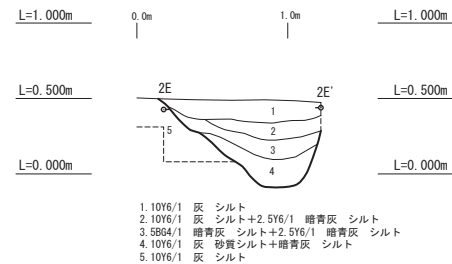
●SD005 2D-2D' セクション



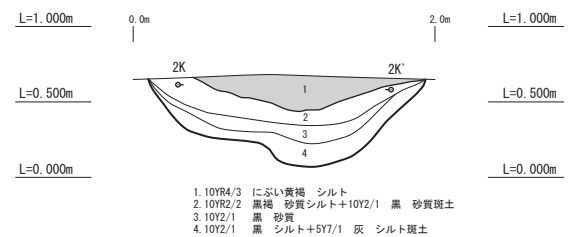
●SD002 2I-2I' セクション



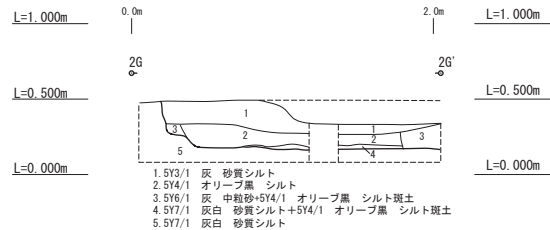
●SD006 2E-2E' セクション



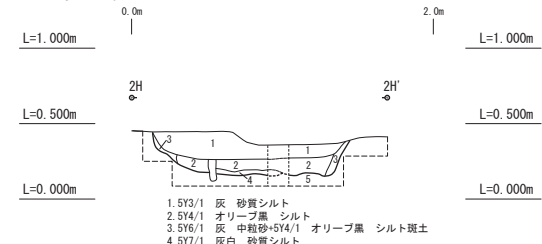
●SD007 2K-2K' セクション



●埋葬施設: SK004-1 2G-2G' セクション



●埋葬施設: SK004-2 2H-2H' セクション



●TR106 2J-2J' セクション

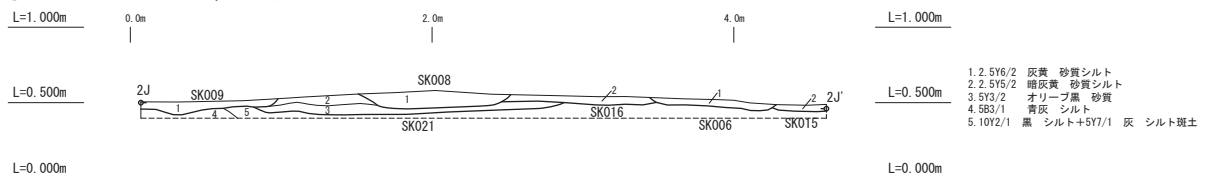
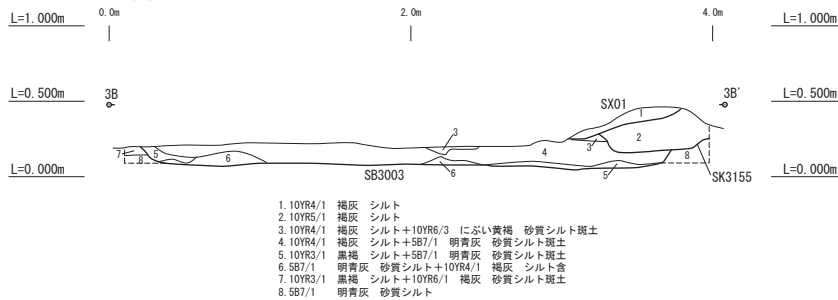


図 98 須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (2)

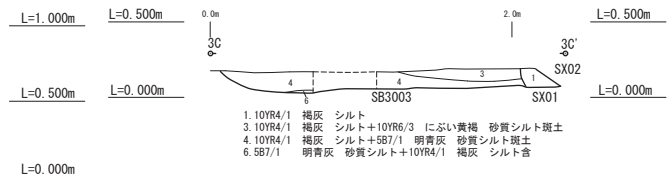
須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 50

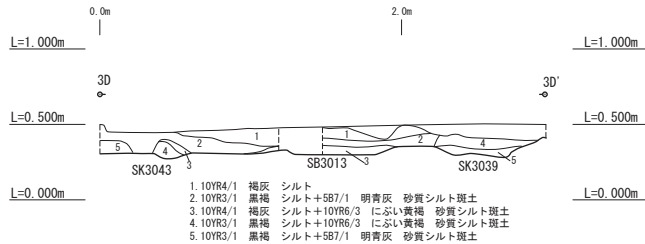
●SB3003南北ベルト(西壁) 3B-3B' セクション



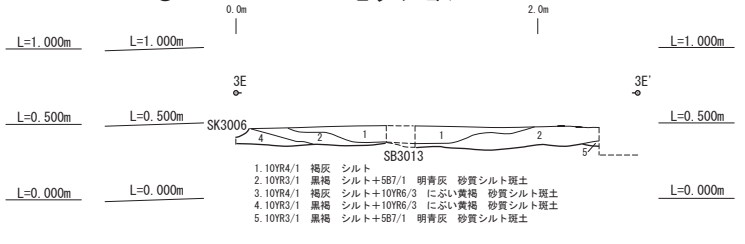
●SB3003(南壁) 3C-3C' セクション



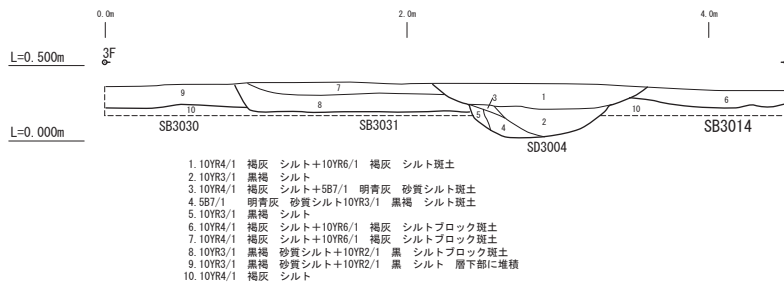
●SB3013 東西ベルト(南壁) 3D-3D' セクション



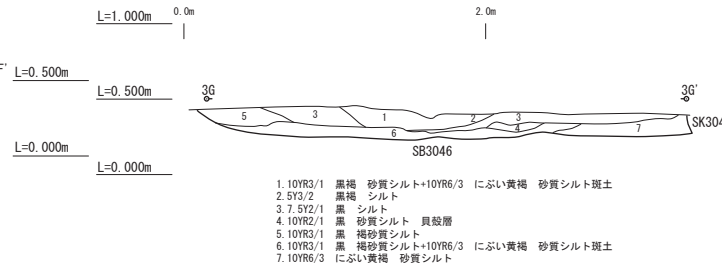
●SB3013 3E-3E' セクション



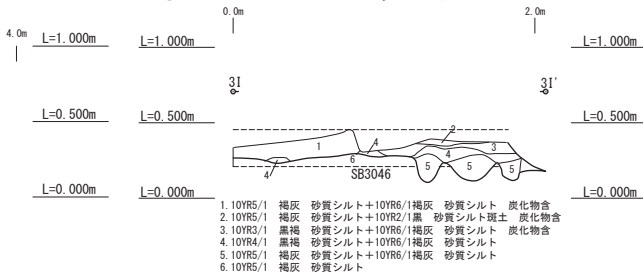
●SB3014・3031・SD3004 3F-3F' セクション



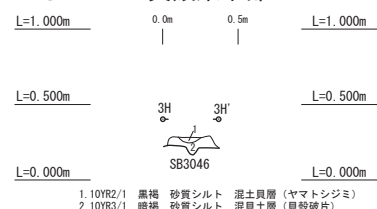
●SB3046 3G-3G' セクション



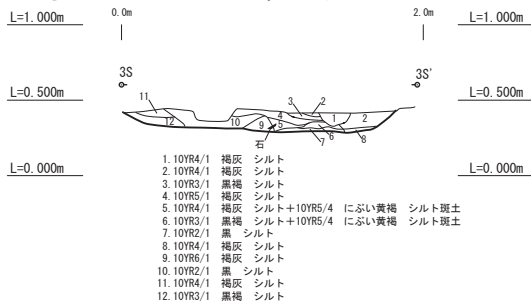
●SB3049 3I-3I' セクション



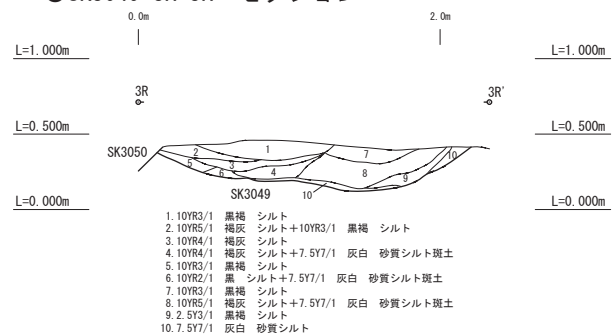
●SB3046-貝殻集中部 3H-3H' セクション



●SK3082 3S-3S' セクション



●SK3049 3R-3R' セクション



●SZ3001 3A-3A' セクション

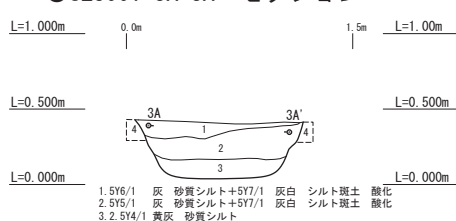
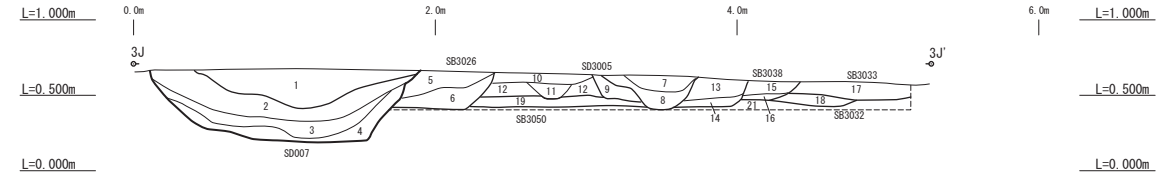


図 99 須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (3)

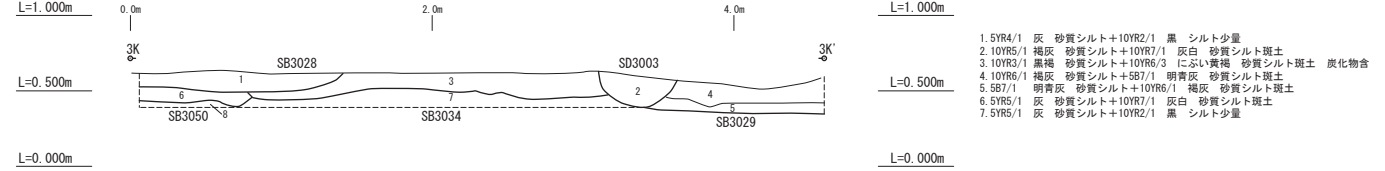
須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 50

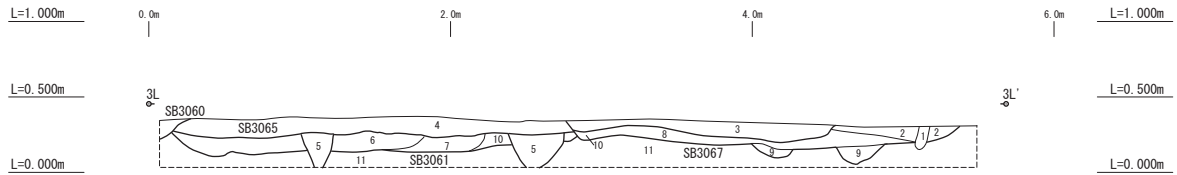
●トレンチ3018 3J-3J' セクション



●トレンチ3019 3K-3K' セクション

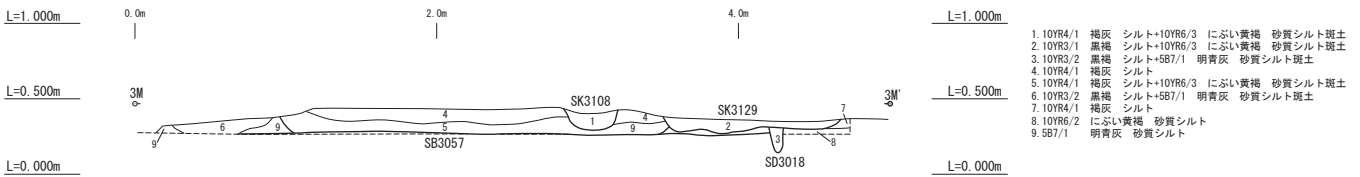


●トレンチ3020 3L-3L' セクション

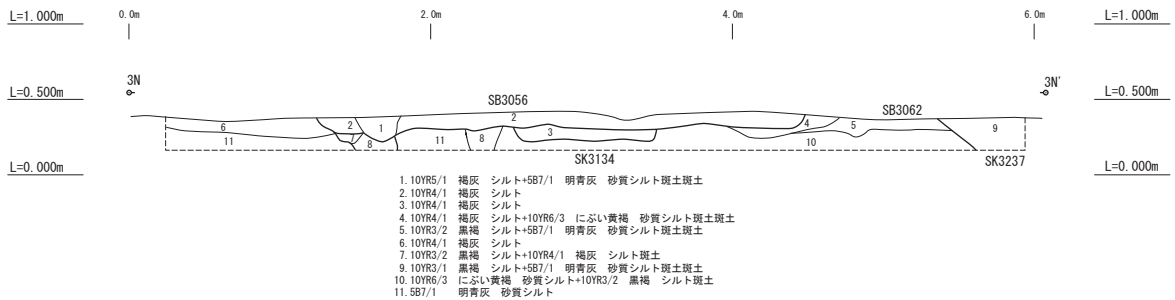


1. 10YR5/1 褐灰 シルト
2. 10YR5/1 褐灰 シルト+10YR6/3 にふい黄褐 砂質シルト斑土
3. 10YR5/1 褐灰 シルト+5B7/1 明青灰 砂質シルト斑土
4. 10YR4/1 褐灰 シルト
5. 10YR4/1 褐灰 シルト+5B7/1 明青灰 砂質シルト斑土
6. 10YR3/2 黒褐 シルト+5B7/1 明青灰 砂質シルト斑土
7. 5B7/1 明青灰 シルト+10YR3/2 黒褐 シルト斑土
8. 10YR6/3 にふい黄褐 砂質シルト+10YR3/2 黒褐 シルト斑土
9. 5B7/1 明青灰 砂質シルト+10YR3/1 黒褐 シルト斑土
10. 10YR6/3 にふい黄褐 砂質シルト+10YR3/2 黒褐 シルト斑土
11. 5B7/1 明青灰 砂質シルト

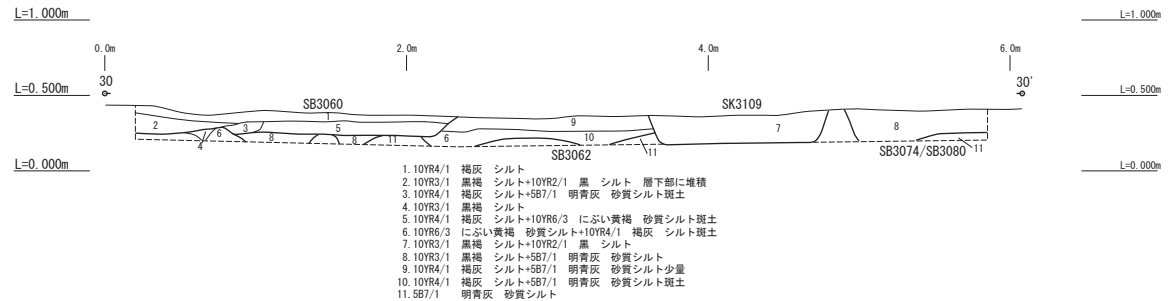
●トレンチ3021 3M-3M' セクション



●トレンチ3022 3N-3N' セクション



●トレンチ3023 3O-3O' セクション



●トレンチ3024 3P-3P' セクション

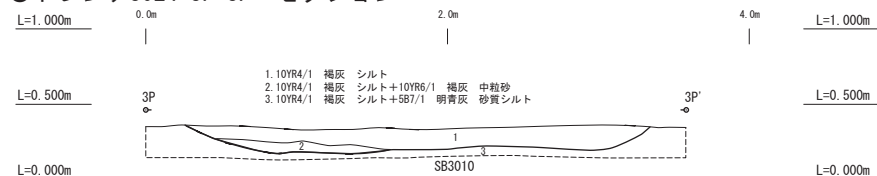
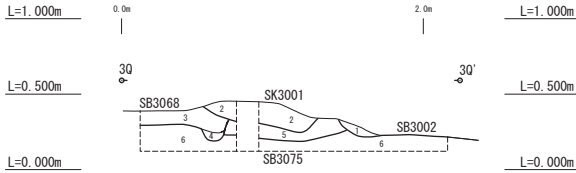


図 100 須ヶ谷遺跡 05C 区各種遺構セクション (4)

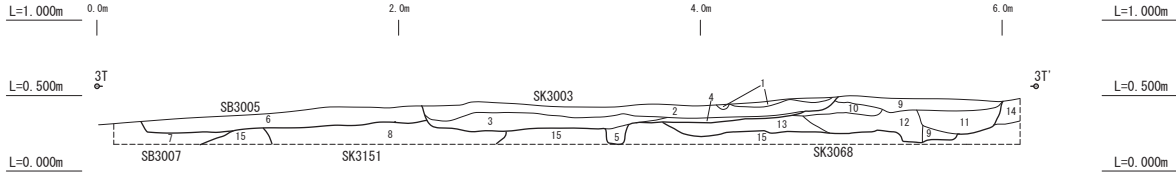
須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 50

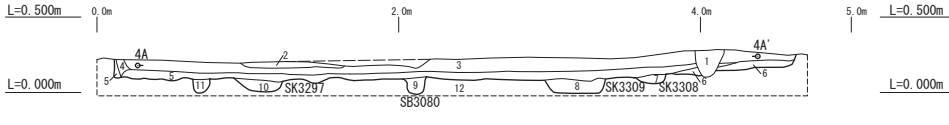
●トレンチ3026 3Q-3Q' セクション



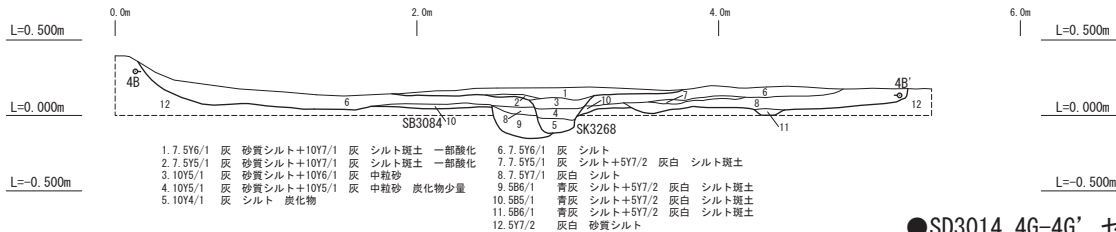
●トレンチ3025 3T-3T' セクション



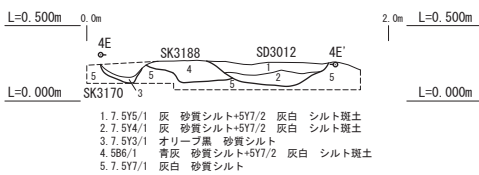
●SB3080 4A-4A' セクション



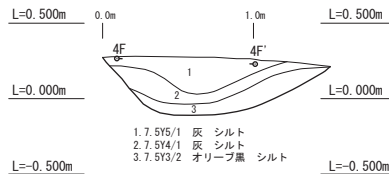
●SB3084 4B-4B' セクション



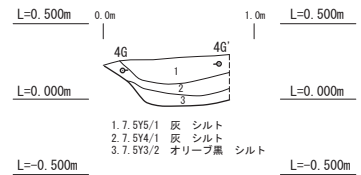
●SD3012 4E-4E' セクション



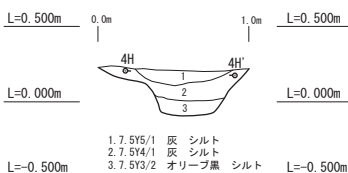
●SD3013 4F-4F' セクション



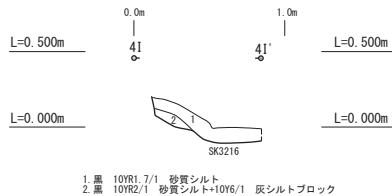
●SD3014 4G-4G' セクション



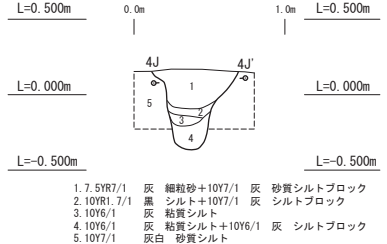
●SD3016 4H-4H' セクション



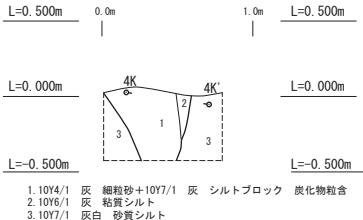
●SK3216 4I-4I' セクション



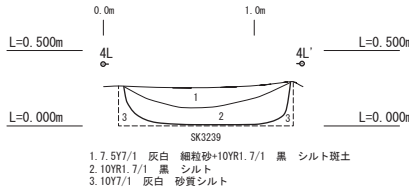
●SK3229 (SB3079柱穴) 4J-4J' セクション



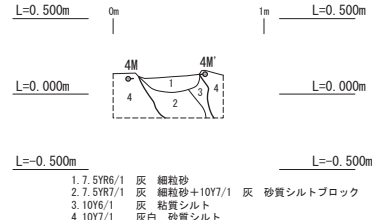
●SK3230 (SB3079柱穴) 4K-4K' セクション



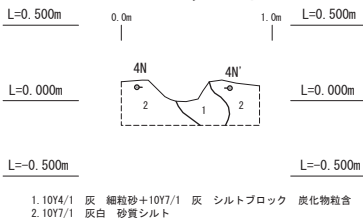
●SK3239 (SB3054炉) 4L-4L' セクション



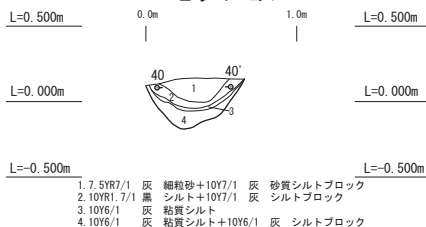
●SK3254 (SB3085柱穴) 4M-4M' セクション



●SK3260 (SB3085柱穴) 4N-4N' セクション



●SK3265 (SB3079柱穴) 4O-4O' セクション



●SK3307 (SB3079炉) 4P-4P' セクション

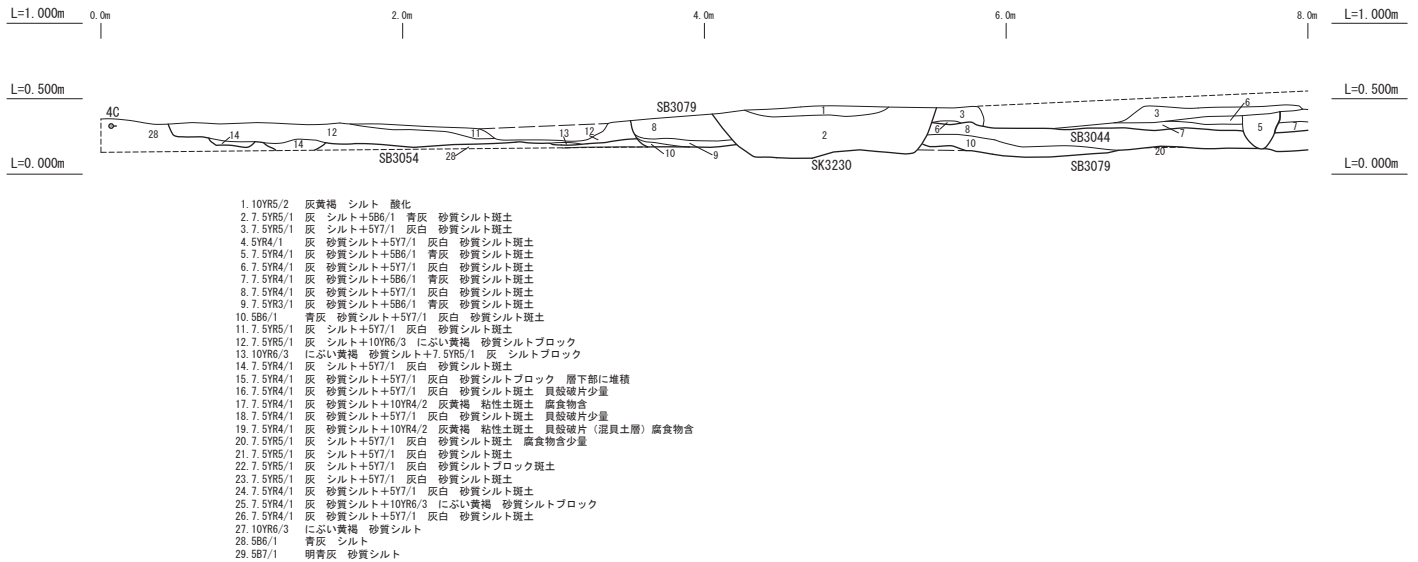


図 101 須ヶ谷遺跡05C区各種遺構セクション (5)

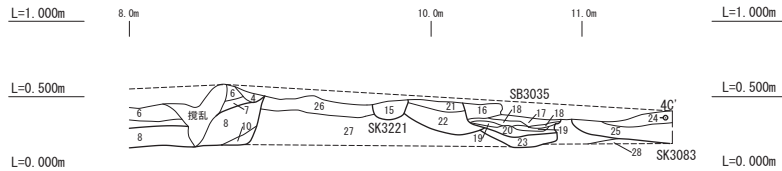
須ヶ谷遺跡05C区セクション

縮尺 1 : 5 0

●トレンチ3030 4C-4C' セクション-1



●トレンチ3030 4C-4C' セクション-2



●トレンチ3040 4D-4D' セクション

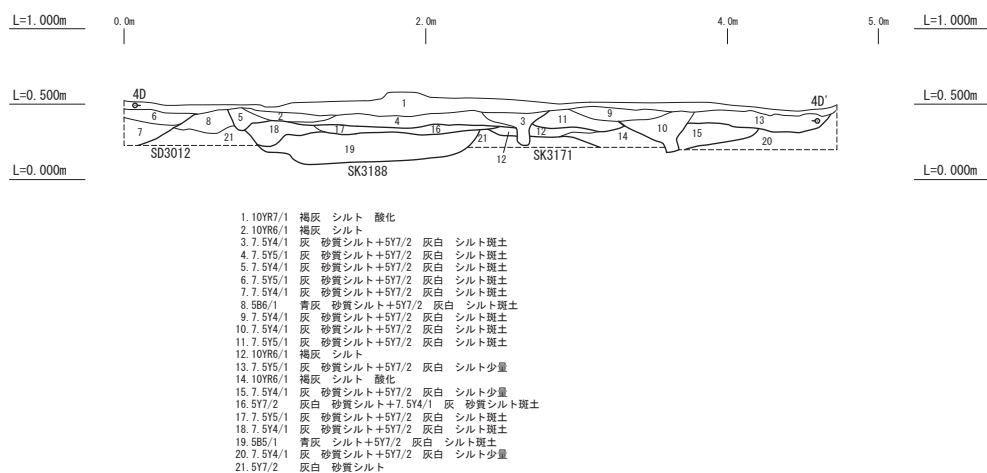


図 102 須ヶ谷遺跡05C区各種遺構セクション(6)

3 須ヶ谷遺跡における遺構の展開

(1) 縄文晩期から弥生前期

いずれも断片的で、具体的な活動を知るには至らない。遺構についても同様で、確実な建物跡は無い。しかし、05C区中央部には廃棄土坑があり、北部にかけて前期の土器が分布するので、このあたりに居住域が存在したことは十分に想定できる。そして南部のSK3171・SK3188周辺にも居住単位が存在した可能性が高い。なお、晩期・馬見塚式の終末段階の資料も北部に分布し、遺跡形成が晩期終末に始まることを示している。

(2) 弥生中期

i 中期初頭～前葉2（朝日式期）

05C区全域に遺構・遺物が広がる中で、05B区北端と05C区北半部に集中する傾向を見せる。最下面では輪郭も明確な竪穴建物跡を検出することができ、しかも円形竪穴建物跡が含まれていた点は重要である。中期初頭の金剛坂式最末型式の甕の分布をみると、05B区北端と05C区北部のSB3084周辺に居住単位が想定できる。その後、全域に居住域が拡大した。05C区中央部には小規模ながらSB3049もある。

ii 中期中葉1（貝田町式1期）

居住域は05C区北半部に移動し、05C区南半部から05B区が墓域となる。今回の調査では台盤状土製品の出土が無いので、住居が展開するとしても密度は薄く、まさに縁辺であったといえよう。

05C区北半部の砂層は中期前葉からこの時期にかけて堆積したもので、大きく上下の2層に分かれる。SB3060は上下を砂層に挟まれ、SB001は上部の砂層を切って床面が構築されている。SB3001は砂層を切り上部に灰白色シルトが堆積しているが、「外周溝」として対応すると考えたSD16は砂層に覆われており、層位的に不整合を

生じている。外周溝ではあっても、SB3001には対応しないのかもしれない。

墓域は方形周溝墓から構成されているが、土坑墓が存在した可能性もある。中期中葉前半の居住域にもっとも近いSD3013・3014・3016からなる方形周溝墓に貝田町式1b期の土器が伴い、最古の可能性が高いので1号とする。また、SK3049も周溝の一部であった可能性があり、SD005・006からなる2号を含めてグループを形成していた可能性が高く、これらをa群と呼ぶ。

05B区では方形周溝墓が規則的に配置され、短期間の造営と考えられる。SD005・3003からなる方形周溝墓がもっとも新しいので、最南の3号から北へ順に7号まであり、これらをb群と呼ぶ。

iii 中期中葉2（貝田町式2期）

中期中葉2になると中葉1に居住域であったエリアに方形周溝墓が造営される。8号～10号は周溝が連結して造営され、11号・12号は軸線を異にして離れて造営されている。8号と9号では溝の埋没状態から9号の方が新しいと考えられるが、10号との関係はSD002をはさんでおり不明である。出土土器は貝田町式2a期に属す。11号や12号から出土した土器は貝田町式2b期であり、時期差はあるが、これらをc群と呼ぶ。

しかし、11号の北溝であるSD009の一部は砂層で埋没しており、SD007とは全く堆積状況が異なる。砂層の堆積は溝の全域ではなく東部と北よりに限られており、埋土全体に面的な広がりをもたない。つまり、方台部に盛り上げられた墳丘の再堆積ではないし、方形周溝墓築造後の洪水に伴う自然堆積でも無いことになる。

そして、SD009内の砂層と先述した上部の砂層が対応するとしても11号とSD16との共存は想定外であること、とりわけSD009が西部で南にカーブすることを重視するなら、SD009は全体がひとつの遺構ではなく、やや軸線を異にして

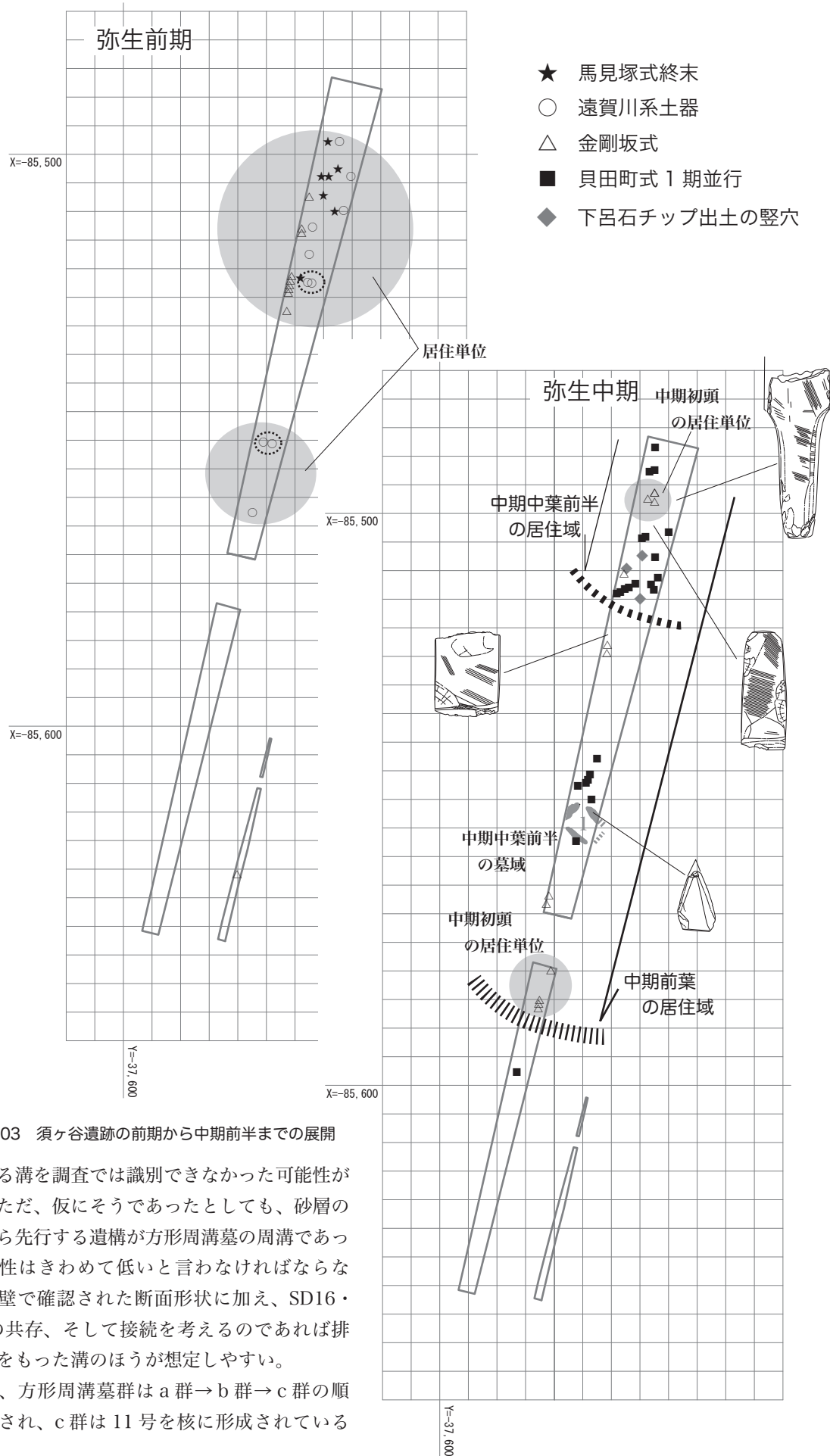


図 103 須ヶ谷遺跡の前期から中期前半までの展開

重複する溝を調査では識別できなかった可能性がある。ただ、仮にそうであったとしても、砂層の存在から先行する遺構が方形周溝墓の周溝であった可能性はさきわめて低いと言わなければならない。西壁で確認された断面形状に加え、SD16・17との共存、そして接続を考えるのであれば排水機能をもった溝のほうが想定しやすい。

さて、方形周溝墓群はa群→b群→c群の順で形成され、c群は11号を核に形成されている

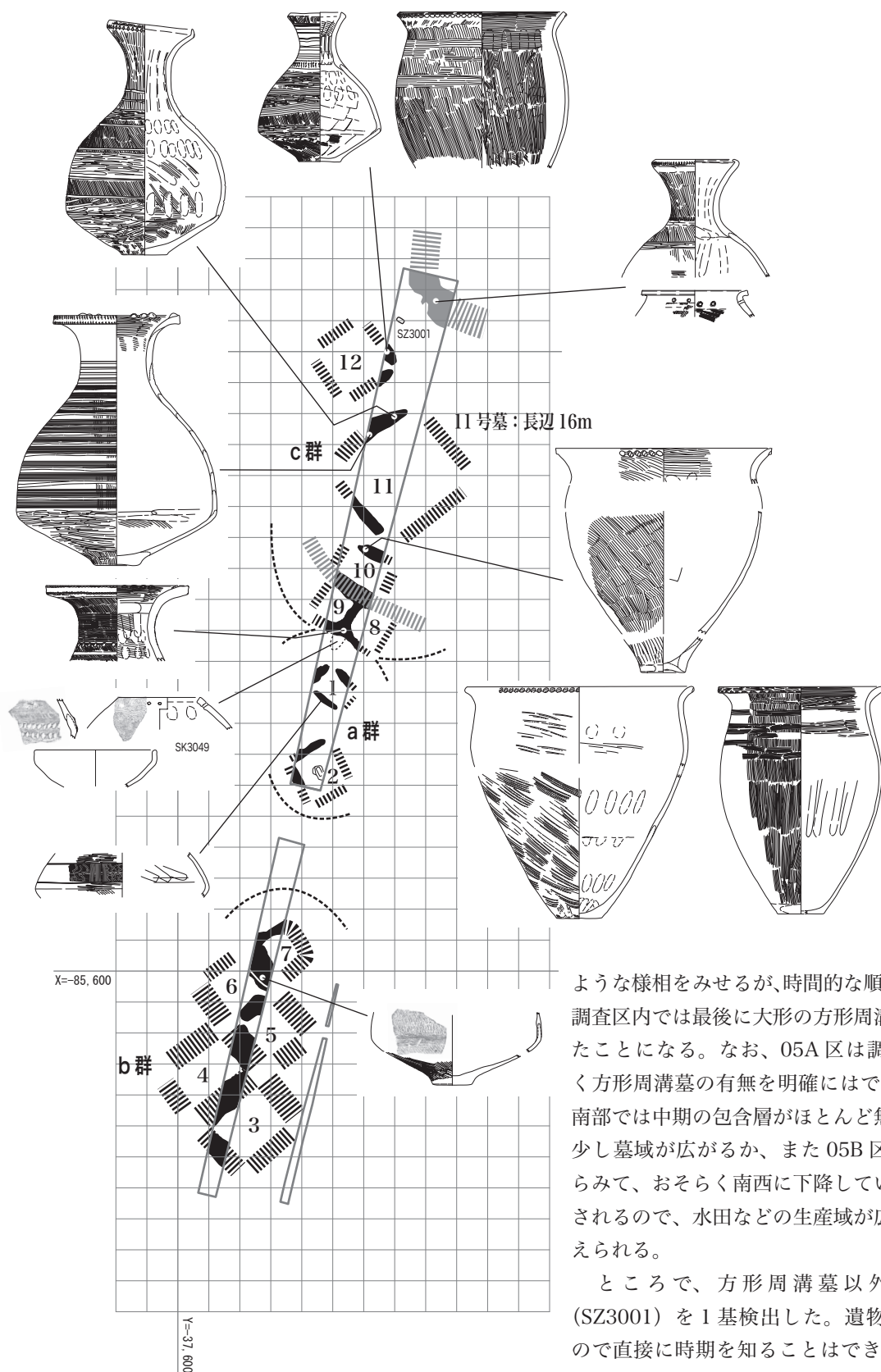


図 104 須ヶ谷遺跡方形周溝墓分布図

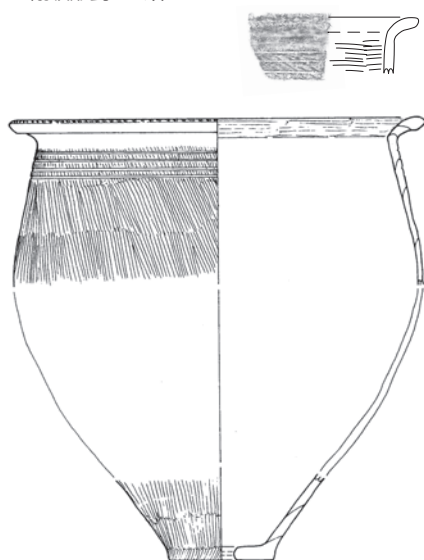
ような様相をみせるが、時間的な順序は逆であり、調査区内では最後に大形の方形周溝墓が造営されたことになる。なお、05A区は調査区の幅が狭く方形周溝墓の有無を明確にはできなかったが、南部では中期の包含層がほとんど無いので、もう少し墓域が広がるか、また05B区との標高差からみて、おそらく南西に下降していくものと予想されるので、水田などの生産域が広がるものと考えられる。

ところで、方形周溝墓以外には土坑墓(SZ3001)を1基検出した。遺物の出土が無いので直接に時期を知ることにはできないが、SD15やSB001と重複しており、明らかに先行する。中期前葉には建物の密度が高いので、所属時期を限定するなら、この付近が居住域の縁辺となる中期中葉になろうか。

iv 弥生中期後葉(貝田町式3期/凹線紋系1期)

金剛坂形甕 a1 類

ほとんどの遺構が埋没過程にあり、新規に構築されたものはない。この段階に灰白色シルトの堆積が進行するので、全域が水没する状況に至った可能性が高い。この時期に一色青海遺跡が始まり、須ヶ谷遺跡と交替して、次期には隆盛を迎える。



金剛坂形甕 a2 類

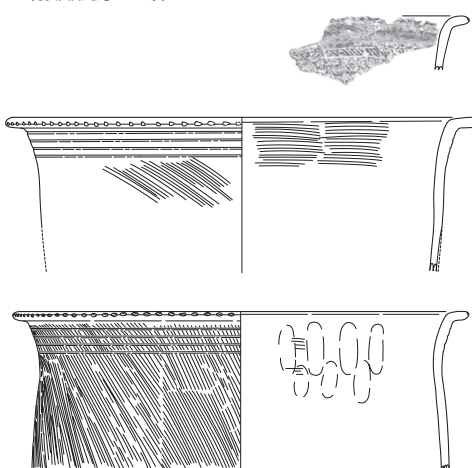


図 105 須ヶ谷遺跡における金剛坂形甕の変遷

4 須ヶ谷遺跡の弥生土器をめぐる予察

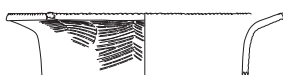
須ヶ谷遺跡の調査によって二つの点が明らかになった。ひとつは濃尾平野北部の一宮市門間沼遺跡で予想された金剛坂式の終末が中期初頭まで下る点が追認できたこと、もうひとつは前期末?から中葉中葉にかけて独自の甕の系列が存在する点である。

(1) 金剛坂式の終末

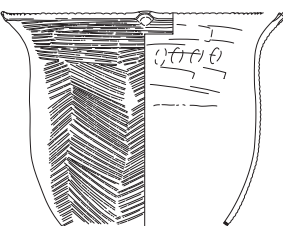
金剛坂式は伊勢湾西岸で遠賀川系 3 期に成立した後、遠賀川系 4 期には濃尾平野での分布濃度が上昇していく。その典型が金剛坂形甕 a1 類で、それはとくに濃尾平野北西部（一宮市西部域）で進むと考えられたが、今回の調査で西部（稲沢市域）でも進行して、濃尾平野の西側を南北に弧状に分布している可能性が高くなった。

金剛坂形甕最末型式の a2 類は口縁部が矮小化する以外には大きな変化が無い。そして、金剛坂形甕 a2 類から頸部直下に施されるべき半截竹管による平行線紋を脱落させ、口縁部に指摘みが増えられた甕が須ヶ谷遺跡から出土しており、今回それを金剛坂系甕と便宜的に呼んだが、この金剛坂系甕を細密肋条の二枚貝で条痕風に仕上げたの

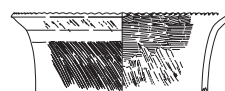
遠賀川系④期



朝日式



貝田町式 1 期



貝田町式 2 期

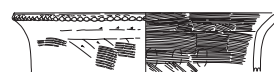


図 106 須ヶ谷形甕の変遷

が朝日形甕であることから、金剛坂式から朝日形甕への連続がスムーズになった。つまり、朝日形甕は条痕紋系土器ではないのである。

朝日式の壺に関しては、これまで頸部の段などから金剛坂式の系譜を想定してきたが、今回口縁部上端に指押圧を加える手法を加えることができたのみならず、同手法をもつ鉢なども含まれる可能性があり、金剛坂系器種群が設定できる可能性がある。

(2) 甕の遺跡差

朝日遺跡では膨大な資料が出土しているにもかかわらず、これまでのところ金剛坂式の終末型式の存在は不明確で、朝日形甕の基盤が弱い点で問題を残していた。だが今回の資料からみれば、むしろ外部から金剛坂系甕を取り込み、それを二枚貝で仕上げることで独自の型式にしたといえるし、金剛坂系器種群を編成して朝日式にしたとも言えよう。

一方、弥生中期の須ヶ谷遺跡では、朝日形甕ではなく金剛坂系甕と二枚貝条痕紋系の須ヶ谷形甕を主要器種とし、中期中葉にもそれを引き継いでいたことが明確になった。濃尾平野南部の甚目寺町阿弥陀寺遺跡では同類が出土しており、朝日形甕と異なる系列が中期中葉に共存して甕の様相を複雑にしていたのだが、須ヶ谷形甕の系列が存在したことによって整理が可能になった。むしろ、須ヶ谷形甕の影響圏について、あらためて評価する必要がある。

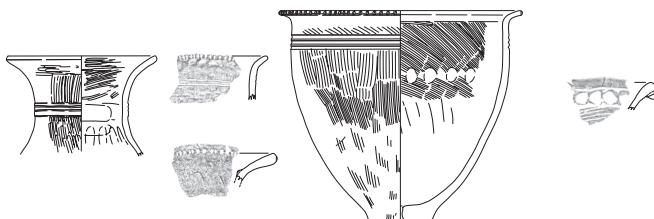
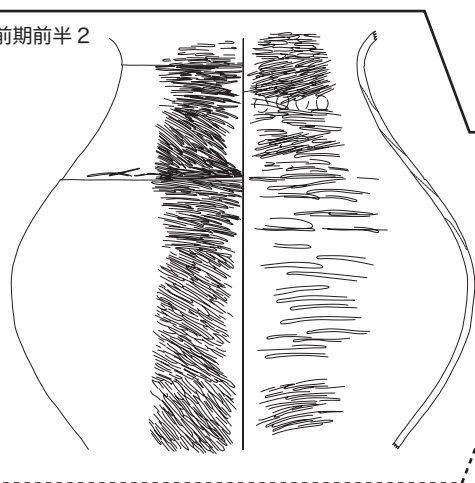
さて、中期中葉になると統条痕紋系土器の甕の二枚貝調整が基本的に斜め（斜条痕）になり縦位羽状条痕が消失する。おそらく須ヶ谷形甕も縦位羽状条痕から斜条痕へと変化するのだろうが、具体的な把握は今後の課題である。

ともかく、以上のことから言えば、これまではいささか無理な組列を組み上げていたと反省せざるをえない。

詳しくは第5章にゆずるとして、ここで要約するなら、濃尾平野では金剛坂形甕 a2 類を基盤に、それが条痕紋系土器の地域差と絡み合って弥生中期前半の甕の地域差を生み出したのである。それほど濃尾平野は広いのだ、ということをここで強調しておきたい。

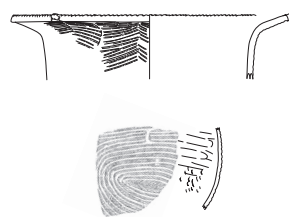
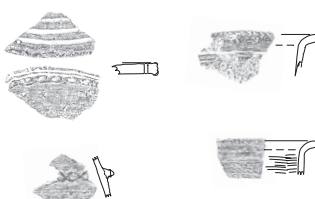
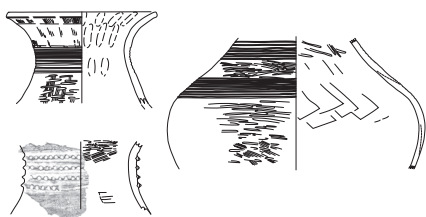
弥生前期前半 1

弥生前期前半 2



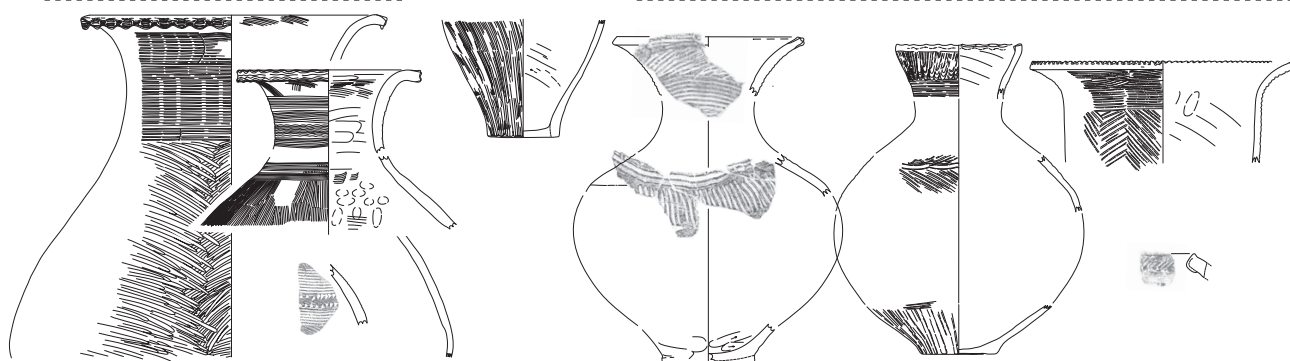
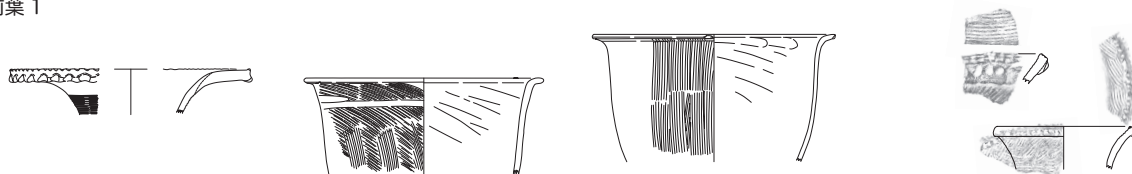
弥生前期後半 1

弥生前期後半 2



弥生中期初頭

弥生中期前葉 1



弥生中期前葉 2

図 107 須ヶ谷遺跡出土土器の変遷

第4章 自然科学的分析

1. 須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡 における古環境変遷

(1) はじめに

濃尾平野中央部、稲沢市平和町の須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および表層地形解析から新たな知見が得られたので報告する。

試料および分析方法

地下層序解析のため、各調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成には愛知県稲沢市発行の「稲沢市基本図(1/2500)」にプロットされた標高値を用いた。

(2) 分析結果

深掘層序

須ヶ谷遺跡で2地点、西海塚遺跡で3地点、山王遺跡で7地点の計12地点でバックホーによる掘削を実施しているが、それらのうち須ヶ谷遺跡で2地点、西海塚遺跡で2地点、山王遺跡で5地点の計9地点の深掘層序断面を示す（図108・図109）。各地点の層序の特徴をまとめて以下に述べる。

調査区北端の地点1（須ヶ谷05C区：以下では「遺跡」を省略する）では深度約2.5mの深掘断面を得た。下位層より、標高-1.80～0mは基質にシルトや粘土といった細粒成分を含まず、淘汰良好な粗粒砂層からなる。湧水のため標高-1.80mよりも下位は掘削できなかった。標高0～0.39mは砂質シルト層である。標高0.39～0.62mは黒褐色を呈する砂混じりの粘土層である。堆積構造はみられない。標高0.62～0.72mは灰色粘土層である。全体に塊状で、堆積構造はみられない。標高0.72～1.00mは現代の水田耕作土である。

地点2（須ヶ谷05B区）では深度約3.5mの深掘断面を得た。下位層より標高-2.76～-0.76mは淘汰良好な中粒砂層である。標高-0.76～-0.56mは黒褐色を呈する砂混じりの腐植質粘土層である。堆積構造はみられない。標高-0.56～-0.50mは褐灰色粘土層であった。塊状で堆積構造はみられない。標高-0.50～-0.34mは灰色粘土層である。標高-0.34～-0.17mは灰色粘土層や黒褐色粘土層のブロック混在層である。上部に炭化物が挟まれる層準がみられる。標高-0.17～0.13mは明灰色粘土層である。標高0.13～0.23mは灰褐色粘土層である。標高0.23～0.83mは現代の水田耕作土である。

地点3（西海塚05B区）では深度約2.5mの深掘断面を得た。下位層より標高-1.00～-0.20mは淘汰良好な極粗粒砂層である。標高-0.20～

-0.06m は灰褐色を呈する砂粒子混じり粘土層である。標高 -0.06 ～ 0.19m は黒褐色粘土層である。堆積構造はみられない。標高 0.19 ～ 0.47m は灰黒色ないし上部で紫灰色を呈する粘土層である。粘土層には層厚 4cm の極細粒砂層の薄層が挟まれる。上部には炭化物の分散がみられる。標高 0.47 ～ 0.51m は褐色粘土層である。標高 0.51 ～ 0.79m はシルト質極細粒砂層である。標高 0.79 ～ 0.89m は淘汰良好な中粒砂層である。標高 0.89 ～ 1.25m 灰褐色シルト層である。標高 1.25 ～ 1.50m は現代の水田耕作土である。

地点 4（西海塚 05A）では深度約 2.5m の深掘断面を得た。下位層より標高 -1.13 ～ 0.79m は淘汰良好な極粗粒砂層である。標高 0.79 ～ 1.28m

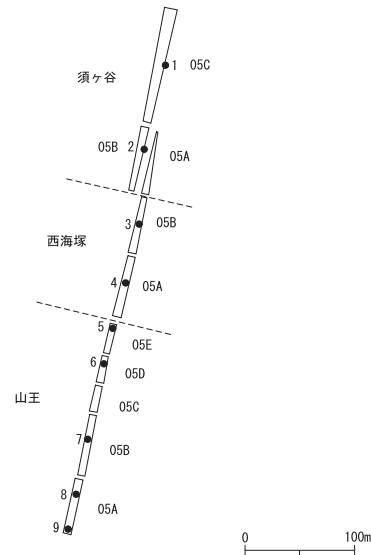
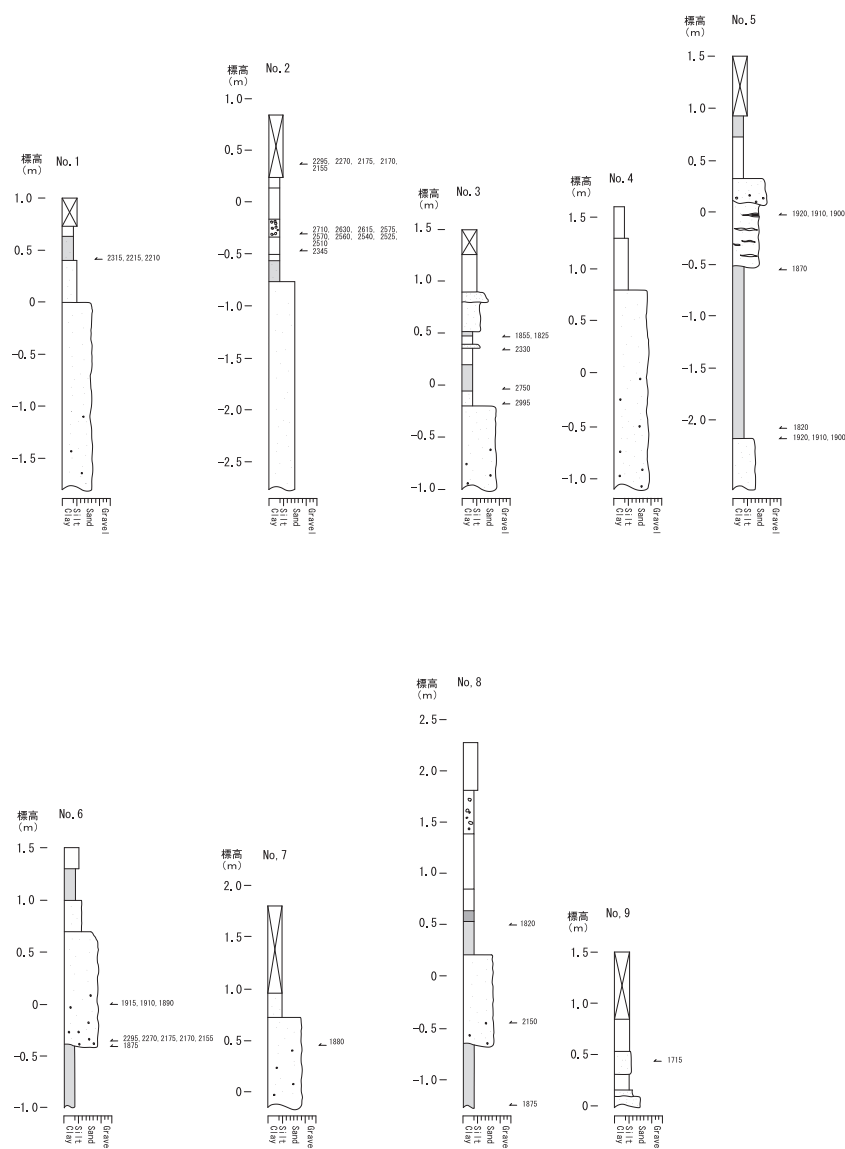


図 108 サンプル採取地点

地点	遺跡名	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	14C年代 (yrs BP)	δ13C PDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, AD/BC)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	1σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	須ヶ谷	05C	0.41	黒褐色砂混じり 粘土層	土壌	2253±23	-21.7	BC 365, 270, 265	2315, 2215, 2210	BC 385-355(42.5%) BC 285-255(40.5%) BC 245-235(15.9%)	2335-2305(42.5%) 2235-2205(40.5%) 2195-2180(15.9%)	PLD-5867(AM)
2	須ヶ谷	05B	-0.75	黒褐色砂混じり粘土層	土壌	2317±25	-21.3	BC 395	2345	BC 400-385(100%)	2350-2335(100%)	PLD-5861(AM)
2	須ヶ谷	05B	-0.50	灰色粘土層	土壌	2499±23	-20.8	BC 760, 680, 665, 625, 620, 615, 595, 575, 565	2710, 2630, 2615, 2575, 2570, 2560, 2540, 2525, 2510	BC 650-540(81.6%) BC 675-655(10.0%)	2600-2490(81.6%) 2625-2605(10.0%)	PLD-5862(AM)
2	須ヶ谷	05B	-0.19	粘土ブロック混在層	土壌	2193±23	-25.8	BC 345, 320, 225, 220, 205	2295, 2270, 2175, 2170, 2155	BC 355-290(68.2%) BC 230-215(16.6%) BC 210-200(13.4%)	2300-2240(68.2%) 2180-2165(16.6%) 2160-2150(13.4%)	PLD-5863(AM)
3	西海塚	05B	-0.18	灰褐色砂混じり粘土層	土壌	2885±24	-21.6	BC 1045	2995	BC 1055-1005(57.5%) BC 1085-1060(27.8%) BC 1110-1095(14.7%)	3000-2955(57.5%) 3035-3005(27.8%) 3060-3045(14.7%)	PLD-5841(AM)
3	西海塚	05B	-0.05	黒褐色粘土層	土壌	2618±23	-22.0	BC 800	2750	BC 810-795(100%)	2760-2745(100%)	PLD-5842(AM)
3	西海塚	05B	0.34	灰黒色粘土層	土壌	2279±23	-21.8	BC 385	2330	BC 395-360(77.9%) BC 270-260(22.1%)	2345-2310(77.9%) 2220-2210(22.1%)	PLD-5843(AM)
3	西海塚	05B	0.46	紫灰色粘土層	炭化物(イネ科(茎))	1883±22	-24.1	AD 95, 125	1855, 1825	AD 75-135(94.5%)	1870-1815(94.5%)	PLD-5844(AM)
5	山王	05E	-2.18	褐色～灰色腐植質粘土層	植物遺体	1965±23	-28.5	AD 30, 40, 50	1920, 1910, 1900	AD 20-70(95.3%)	1930-1880(95.3%)	PLD-6036(AM)
5	山王	05E	-2.08	褐色～灰色腐植質粘土層	植物遺体	1872±24	-26.7	AD 130	1820	AD 85-110(32.6%) AD 115-135(25.5%) AD 155-175(22.5%) AD 190-210(19.4%)	1865-1840(32.6%) 1835-1815(25.5%) 1795-1775(22.5%) 1755-1740(19.4%)	PLD-6035(AM)
5	山王	05E	-0.56	褐色～灰色腐植質粘土層	植物遺体	1915±23	-27.5	AD 80	1870	AD 95-125(55.8%) AD 70-90(44.2%)	1850-1825(55.8%) 1880-1860(44.2%)	PLD-6033(AM)
5	山王	05E	-0.03	中粒砂層	植物遺体	1971±23	-25.8		1920, 1910, 1900	AD 15-65(88.1%) AD 5-10(11.9%)	1930-1885(88.1%) 1945-1940(11.9%)	PLD-6034(AM)
6	山王	05D	-0.40	極粗粒砂層	植物遺体	1924±26	-27.4	AD75	1875	AD 55-85(53.7%) AD 100-125(41.9%)	1890-1860(53.7%) 1850-1825(41.9%)	PLD-5870(AM)
6	山王	05D	-0.35	極粗粒砂層	材	2192±24	-25.8	BC 345, 320, 225, 220, 205	2295, 2270, 2175, 2170, 2155	BC 355-290(67.2%) BC 230-215(16.2%) BC 210-200(14.0%)	2305-2240(67.2%) 2180-2165(16.2%) 2160-2150(14.0%)	PLD-5851(AM)
6	山王	05D	0	極粗粒砂層	材	1952±23	-29.0	AD 30, 35, 55	1915, 1910, 1890	AD 45-75(63.8%) AD 25-40(36.2%)	1905-1875(63.8%) 1925-1905(36.2%)	PLD-5869(AM)
7	山王	05B	0.46	極粗粒砂層	材	1939±23	-29.1	AD 70	1880	AD 50-85(66.7%) AD 25-40(21.9%) AD 105-115(11.4%)	1900-1865(66.7%) 1920-1910(21.9%) 1845-1835(11.4%)	PLD-5850(AM)
8	山王	05A	-1.24	黒褐色腐植質粘土層	植物遺体	1933±24	-27.8	AD 75	1875	AD 55-85(63.7%) AD 105-120(22.6%) AD 30-40(13.7%)	1895-1865(63.7%) 1845-1830(22.6%) 1920-1910(13.7%)	PLD-5846(AM)
8	山王	05A	-0.45	粗粒砂層	材	2169±23	-25.3	BC 200	2150	BC 205-170(46.1%) BC 350-315(45.2%)	2155-2120(46.1%) 2295-2265(45.2%)	PLD-5849(AM)
8	山王	05A	0.49	褐色粘土層	炭化材	1877±22	-23.9	AD 125	1820	AD 80-135(79.5%) AD 195-205(10.4%) AD 160-170(10.2%)	1870-1815(79.5%) 1755-1740(10.4%) 1790-1780(10.2%)	PLD-5739(AM)
9	山王	05A	0.43	シルト質砂層	植物遺体	1813±24	-29.2	AD 235	1715	AD 210-240(44.5%) AD 170-195(28.4%) AD 135-155(27.2%)	1740-1710(44.5%) 1780-1755(28.4%) 1815-1790(27.2%)	PLD-5848(AM)

表 3 放射性炭素年代測定値



はシルト層である。標高 1.28 ～ 1.59m はシルト質粘土層である。

地点 5 (山王 05E 区) では深度約 4.0m の深掘断面を得た。下位層より標高 -2.66 ~ -2.17m は細粒砂層である。標高 -2.17 ~ -0.52m は褐色か

ら灰色を呈する腐植質粘土層である。標高 -0.52 ～ 0.11m は中粒砂層で、シルト層がレンズ状に挟まれる。標高 0.11 ～ 0.32m は極粗粒砂層である。標高 0.32 ～ 0.72m は灰色粘土層である。塊状・均質で、堆積構造はみられない。標高

0.72～0.92mは褐色粘土層である。標高0.92～1.50mは現代の攪乱層である。

地点6（山王05D区）では深度約2.5mの深掘断面を得た。下位層より標高-1.00～-0.38mは褐色～灰色の腐植質粘土層である。標高-0.38～0.70mは極粗粒砂層である。標高0.70～1.00mは灰色を呈する砂質シルト層である。標高1.00～1.30mは褐色のシルト質粘土層である。標高1.30～1.50mは灰色のシルト層である。

地点7（山王05B区）では深度約1.8mの深掘断面を得た。下位層より標高-0.15～0.71mは極粗粒砂層である。標高0.71～0.95mは灰褐色～褐灰色を呈する砂質シルト層である。標高0.95～1.80mは現代の人工的な盛り土である。

地点8（山王05A区の北側）では深度約3.5mの深掘断面を得た。下位層より標高-1.26～-0.65mは黒褐色粘土層である。ヨシ属の茎部が混じる。標高-0.65～0.20mは粗粒砂層であり、ヨシ属の茎部が混じる。標高0.20～0.52mは褐色粘土層である。標高0.52～0.62mは黒褐色の粘土層である。標高0.62～0.82mは暗褐色の粘土層である。標高0.82～1.36mは灰褐色のシルト質粘土層である。標高1.36～1.77mは粘土ブロックの混在層である。標高1.77～2.24mは現代の人工的な盛り土である。

地点9（山王05A区南側）では深度約1.5mの深掘断面を得た。下位層より標高-0.01m～0.08mは中粒砂層である。標高0.08～0.15mはシルト質砂層である。標高0.15～0.30mは砂質シルト層である。標高0.30～0.52mはシルト質砂層である。標高0.52～0.83mはシルト層である。標高0.83～1.50mは現代の人工的な盛り土である。

放射性炭素年代測定

調査区全体で合計20試料の放射性炭素年代値を得た（表3）。古い値では地点3（西海塚

05B区）の灰褐色を呈する砂混じりの粘土層の標高-0.18mから採取した土壌が2995 cal yrs BP(BC 1045)(PLD-5841)、地点2（須ヶ谷05B区）の灰色粘土層の標高-0.50mから採取した土壌が2710、2630、2615、2575、2570、2560、2540、2525、2510 cal yrs BP(BC 760、680、665、625、620、615、595、575、565)(PLD-5862)の数値年代を示した。いっぽう、新しい値では地点9（山王05A区）のシルト質砂層から採取した植物遺体（標高0.43m）が1715 cal yrs BP(AD 235)(PLD-5848)であった。試料全体では概ね約2300年前代から約1800年前代を示す試料が多くみられた。

遺跡周辺の等高線図

東西約2.5km、南北約3.0kmの範囲全体では標高0.4mから標高4.6mまでの等高線が描かれ、北および北東方向で相対的に高く、西および南側で低い傾向がある（図110）。本地域の等高線を概観すると、地形の尾根状あるいは谷状を呈する部分が入り組み、かつ閉曲線として孤立丘状ないしは凹地状の部分がみられ、たいへん複雑な地形の様相を呈している。

さらに詳しく地形要素をみると、標高のもっとも高いのが矢合町の三宅川左岸の南側にひろがる地域であるのに対して、矢合町から約1.0km西の儀長町から須ヶ谷を通り法立へのびる標高0.6～2.4mの範囲はもっとも標高の低い場所であり、幅約150m、長さ約2kmで北から南方向へ開いた谷地形が読み取れる。また、この谷地形に合流する形で井堀高見町を通り井堀蒲六町にかけて東から西へのびる標高0.8～2.8mの谷地形と、井堀江西町から須ヶ谷にかけての東から西へ向かう標高0.8～2.0mの谷地形がある。先の儀長町から須ヶ谷を通り法立へのびる谷地形は、一色跡ノ口町から須ヶ谷にかけて標高0.8～2.0mの南北方向にのびる尾根状地形で西側を画されている。そして、さらに西側には一色跡ノ口町から法立にかけての標高0.8～2.0mの谷地形が認められ、現在の須ヶ谷川が北から南へ流下する場所に当たっている。須ヶ谷遺跡・

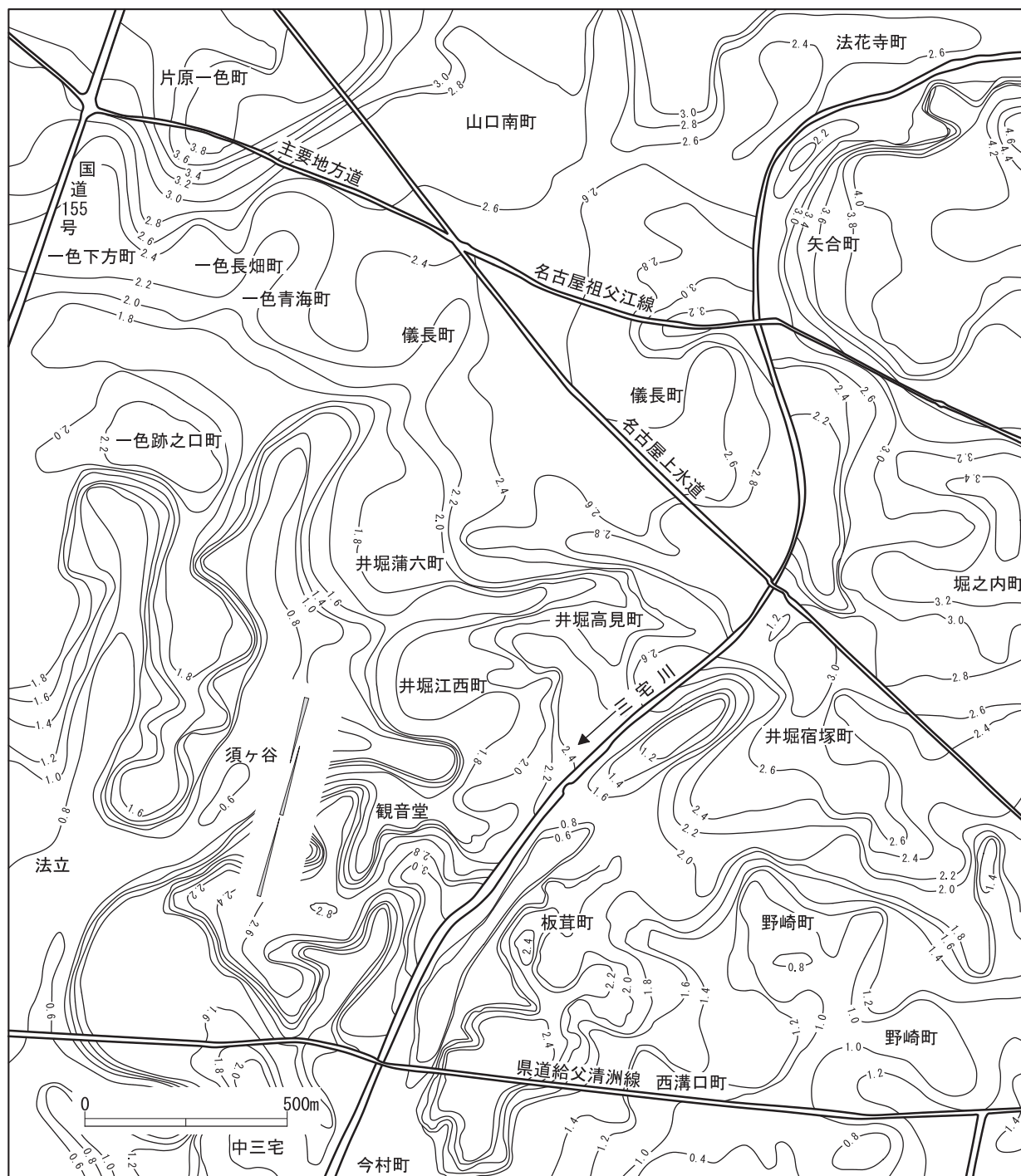


図 110 調査地点周辺の等高線図

西海塚遺跡・山王遺跡は儀長町から須ヶ谷を通り法立へのびる谷地形の、ちょうど東側縁辺部にあたっている。

(3) 考察

推定される古環境

須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡において深掘を実施した。それらの地下層序を観察すると、下位層で砂粒子が卓越する層相がみられるいっぽうで、下位層にシルトや粘土といった細粒な粒子が卓越するものもみられた(図2)。ここで砂粒子が卓越する層相についてみると、概ね標高0mよりも低い層準にその層相が認められる。これらの砂層は全地点で基質に粘土やシルトといった細粒な成分を含まない淘汰良好な砂層から構成された。砂層の堆積年代について、地点5(山王05E区)の標高-0.52～0.11mの中粒砂層中にレンズ状に挟まれた植物遺体層から採取した試料(標高-0.03m)が1920、1910、1900 cal yrs BP(AD 25、40、50)(PLD-6034)、地点6(山王05D区)の標高-0.38～0.70mの極粗粒砂層中の標高-0.40mから採取した植物遺体で1875 cal yrs BP(AD 75)(PLD-5870)、同砂層中の標高-0.35mから採取した材で2295、2270、2175、2170、2155 cal yrs BP(BC 345、320、225、220、205)(PLD-5851)、同砂層中の標高0mから採取した材で1915、1910、1890 cal yrs BP(AD 30、35、55)(PLD-5869)であった。また、地点7(山王05B区)の標高-0.15～0.71mの極粗粒砂層中の標高0.46mから採取した材で1880 cal yrs BP(AD 70)(PLD-5850)、地点8(山王05A区)の標高-0.65～0.20mの粗粒砂層の標高-0.45mから採取した材は2150 cal yrs BP(BC 200)(PLD-5849)と、およそ2200～1800年前代の値を示した。

いっぽう、シルトや粘土といった細粒堆積物が卓越する層相では、地点1(須ヶ谷05C区)の

標高0.39～0.62mの黒褐色を呈する砂混じり粘土層の標高0.41mの土壌で2315、2215、2210 cal yrs BP(BC 365、270、265)(PLD-5867)、地点2(須ヶ谷05B区)の標高-0.76～-0.56mの黒褐色を呈する砂混じり腐植質粘土層の標高-0.75mから採取した土壌で2345 cal yrs BP(BC 3950)(PLD-5861)、地点3(西海塚05B区)の標高-0.20～-0.06mの砂粒子の混じる粘土層の標高-0.18から採取した土壌が2995 cal yrs BP(BC 1045)(PLD-5841)と、約2900～2300年前代を示す値がみられるいっぽうで、地点5(山王05E区)の標高-2.17～-0.52mの腐植質粘土層の標高-2.18mの植物遺体が1920、1910、1900 cal yrs BP(AD 30、40、50)(PLD-6036)、同層の標高-2.08mから採取した植物遺体が1820 cal yrs BP(AD 130)(PLD-6035)、地点8(山王05A区)の標高-1.26～-0.65mの黒褐色粘土層の標高-1.24mから採取した植物遺体が1875 cal yrs BP(AD 75)(PLD-5846)と、概ね約1900～1800年前代を示すものもあった。

ところで、先に須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡でみられる地下層序について、砂粒子の卓越する層相と細粒な粒子が卓越するものとに分かれることを述べた。さらに詳しくみれば、地点1(須ヶ谷05C区)から地点4(西海塚05A区)までは最下位層に層厚0.5mから1.5m以上の厚い砂層がみられ、その砂層を細粒堆積物が覆っているものと、地点5(山王05E区)から地点9(山王05A区)でみられるように、下位層に層厚約0.5mから1.5m以上の腐植質粘土層がみられ、その上を標高0m付近に層厚0.5mから1.0m以上の砂層が覆い、さらにその砂層を細粒堆積物が覆うものとに分けられる(図2)。この事実を考慮して放射性炭素年代測定の結果をみると、地点1(須ヶ谷05C区)から地点4(西海塚05A区)で確認された粘土層からは約2900年前～1800

年前代の数値年代が得られ、従って粘土層よりもさらに下位でみられる砂層はそれらよりも前に堆積していなければならず、地点3（西海塚05B区）の数値年代値を参考にしても約3000年前代には堆積していたものと思われる。いっぽう、地点5（山王05E区）～9（山王05A区）でみられる最下位層の粘土層からは約1900～1800年前代の値を示し、地点1（須ヶ谷05C区）～4（西海塚05A区）よりも形成時代の新しい堆積物であることがわかる。

このように、地下層序は砂粒子が卓越する層相と細粒堆積物が卓越するものとに分けられ、かつ層相の垂直的な重なり方の違いにより、地点1～4までと地点5～9までとに分けられた。また、その堆積年代は地点1（須ヶ谷05C区）～4（西海塚05A区）が約2900～1800年前代にかけて形成されたものであることに対し、地点5（山王05E区）～9（山王05A区）では1900～1800年前代よりも以降に形成されてきたことがわかった。この結果は、西海塚遺跡・山王遺跡よりも須ヶ谷遺跡においてより古い遺物が出土する事実とも調和的である（石黒 2006; 加藤 2006a; 加藤 2006b）。

現在の地形解析結果から、今回の調査地点は儀長町から須ヶ谷にかけてみられる南北方向にのびる谷地形の東側縁辺部にあたっており、須ヶ谷遺跡の調査区は井堀江西町で東から西側へ向かう標高0.8～2.4mの尾根状（舌状）地形の西側縁辺にあたっている。対して、西海塚遺跡・山王遺跡は須ヶ谷と観音堂との間にある標高0.8～2.6mの尾根状地形の西側縁辺にあたっており、井堀江西町と観音堂との間には東から西へ開く標高0.8～1.6mの谷地形を形成している。ちょうどこの谷は西海塚の調査区あたりを通っている。谷状地形は周囲よりも相対的に水理エネルギーの低い堆積場が推定できる。つまり、須ヶ谷遺跡・西海塚

遺跡・山王遺跡の地下層序で認められた層相や形成年代の違いは、須ヶ谷遺跡周辺（地点1～4）の方が堆積地形の形成と離水環境の出現が早く、西海塚遺跡から南側に位置する調査区（地点5～9）は相対的に水理エネルギーの低い堆積場であったことがわかる。須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡は考古学的にこれまでまったく情報のなかった遺跡であり（石黒 2006）、それは地質学的にも同じである。今後、周辺で行なわれる発掘調査による新たなデータの追加を期待したい。

謝辞

本論を作成するにあたり、稲沢市役所には都市基本図の入手で便宜を図っていただいた。放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループの小林紘一氏・丹生越子氏・伊藤 茂氏・山形秀樹氏・瀬谷 薫氏・Zaur Lomatidze氏・Ineza Jorjoliani氏にお世話になった。愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の石黒立人氏・加藤博紀氏・永井邦仁氏には遺跡に関する考古学的情報を教えていただいた。試料の整理・保管と図面作成では整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

石黒立人 2006「須ヶ谷遺跡」『平成17年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター、20-22。
加藤博紀 2006a「西海塚遺跡」『平成17年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター、23。
加藤博紀 2006b「山王遺跡」『平成17年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター、24。

2. 須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡

出土の骨貝類*

はじめに

須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡は、愛知県稲沢市平和町に所在し、愛知県下水道科学館から南へ伸びる道路の拡幅工事に先立って発掘調査が実施されており、南北約 500m にもおよぶ調査区で北から須ヶ谷遺跡、西海塚遺跡、山王遺跡となっている。今回の調査では、須ヶ谷遺跡の弥生時代中期前半とされる遺構から出土した骨貝類の種類を明らかにした。

(1) 試料

試料は、山王遺跡 05B 区の SE01、須ヶ谷遺跡 05C 区 の SD02・SD007・SK3082・SK3214・SB3046・SB3048・SB3059・SB3079・SB3258・SD004・ 検 III (骨)・SB3046・SB3049 から出土した骨貝類である。1 試料の中に複数点の骨貝類が含まれる試料や土壌塊の試料もあり、中には種実遺体試料もある。試料の詳細については、結果と共に表示する。

(2) 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。

なお、同定および解析には、金子浩昌先生に協力をお願いした。なお、貝類の生態等に関しては、奥谷編著 (2000) を参考とする。

(3) 結果

検出された動物分類群の一覧を表 3 に、同定結果を表 4 に示す。以下、試料ごとに結果を示す。

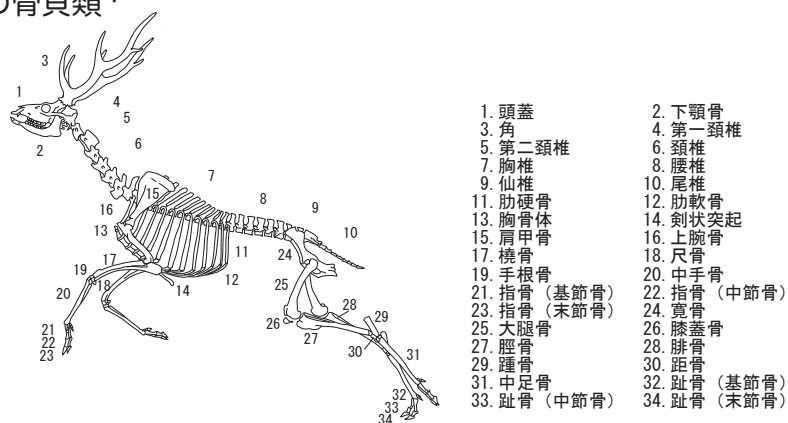


図 111 ニホンジカの骨格 (八木・大森司 1994 を改変)

表 4 検出動物分類群一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
前鰓亜綱	Subclass Prosobranchia
盤足目	Order Discopoda
フトヘナタリ科	Family Potamididae
シマヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithidea) ornata</i>
二枚貝綱	Class Bivalvia
翼形亜綱	Subclass Pteriomorphia
カキ目	Order Ostreoida
イタヤガイ亜目	Suborder Pectinina
ナミマガシワ科	Family Anomiidae
ナミマガシワ	<i>Anomiidae chinensis</i>
カキ亜目	Suborder Ostreina
イタボガキ科	Family Ostreidae
マガキ?	<i>Crassostrea gigas?</i>
異歯亜綱	Order Heterodonta
マルスダレガイ目	Order Veneroida
シジミ科	Family Corbiculidae
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthys
魚類	Ord. et. fam. indet.
鳥綱	Class Aves
カモ目	Order Anseriformes
カモ科	Family Anatidae
カモ亜科	Subfamily Anatinae
カモ類	Gen. et. sp. indet.
哺乳綱	Class Mammalia
ウシ目(偶蹄目)	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>

番号	地区	調査区	グリッド	遺構	地点	日付	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	備考
1	IHSN	05B1		SE01		051206	モモ	核		ほぼ完存	1		
	IHST	05C1	VE6f・g	SD02		060116	礫				1		
	IHST	05C3	VE5f	SD007		060209	イノシシ	後頭骨	右	後頭類	1		
	IHST	05C3	VE4g	SK3082	土壌サンプル	060302	獣類	不明		破片	13 +		
										破片	7 +	○	
										焼土	1	○	
	IHST	05C3	VE4g	SK3082	No. 10	060303	ニホンジカ	鹿角		角幹部片	1	○	
	IHST	05C3	VE4g	SK3082	No. 34	060303	ニホンジカ	鹿角		枝部片	1 +	○	接合試料
	IHST	05C3	VE3g	SK3214		060309	ニホンジカ	鹿角		分岐部	1	○	他破片14+, 加工品?
2	IHST	05C3	VE3h	SB3046		060305	イノシシ	末節骨	左	ほぼ完存	1		
	IHST	05C3	VE3h	SB3046		060308	イノシシ	頰椎		椎体	1		
								椎骨		椎弓部	1		
	IHST	05C3	VE3h	SB3046	土①(貝上)	060225	ニホンジカ	鹿角		海綿質部	1		加工品の一部
	IHST	05C3	VE3h	SB3046	土②(床上)	060225	獣類	椎骨		椎体片	2		
	IHST	05C3		SB3048			ヤマトシジミ	殻		破片	6		
								獣類	不明	破片	3	○	接合試料含
								砂			1		
	IHST	05C3	VE3h	SB3059	(黒)	060309	カモ類	中手骨	右	近位端欠	1		
								獣類	不明	破片	1		細擦痕有
	IHST	05C3	VE3g・h	SB3079		060309	獣類	腰椎		乳頭関節突起	2		
								椎骨		椎体片	1		
								四肢骨		破片	1		
								ウリ科		種子	1		
	IHST	05C3	VE20i	SB3258	土サンプル	060311	ニホンジカ	臼歯		破片	1		接合試料
								炭化米		ほぼ完存	1		
3	IHST	05C	VE2h	SD004	No. 1	060228	ニホンジカ	寛骨	左	腸骨臼部	1		土塊状
4	IHST	05C			検Ⅰ一括	060110	ニホンジカ	上顎歯牙	右	第1大臼歯	1		
5	IHST	05C3	VE2h		検Ⅲ(骨)	060225	ニホンジカ	寛骨	左	坐骨部	1		
6	IHST	05C3	VE3h	SB3046	貝層東側	060302	シマヘナタリ	殻		破片	1		接合試料, 他破片2
								ヤマトシジミ	殻		破片	130	
									左	破片	115		
									右	破片	3	○	
										破片	1		
										破片	75.7 g		
							ハマグリ	殻	右	破片	1		
								殻		破片	6		
							魚類	不明		破片	1	○	
							獣類	肋骨		破片	2	○	
								不明		破片	1		
							土壌等				5		
							残渣				193.3 g		
							ナミマガシワ マガキ? ヤマトシジミ	殻		破片	1		
								殻		破片	1	○	
									左	破片	86		
									右	破片	81		
										破片	2	○	
										破片	74.9 g		
										破片	9	○	
										破片	35.3 g	○	
	IHST	05C3	VE8f	SB3049		060225	炭化物・土壌等	礫			2		
								炭化物			6		
											1.3 g		

注) 数量の欄において、数字の後の「+」表示は、微細な破片が他に存在することを示す。

表 5 骨・貝類同定結果

なお、動物骨格各部位の名称については、ニホンジカを例として図 111 に示す。

●山王遺跡 05B 区

SE01

モモの核である。

●須ヶ谷遺跡 05C 区

SK3082 (採取土壌)

獣類 (イノシシないしニホンジカ) の部位不明破片である。焼骨が含まれる。

SK3082 (No.10)

ニホンジカ鹿角の角幹部片である。焼けている。

SK3082 (No.34)

ニホンジカ鹿角の枝部片である。接合試料である。焼けている。

SK3214

ニホンジカ鹿角の分岐部である。焼けている。加工品と思われる切痕がみられる。

SB3046 (No.1)

イノシシの左末節骨である。全長 23.74mm、幅 9.42mm を計る。唯一の完存骨である。

SB3046 (No.2)

イノシシの頸椎体片と椎弓片である。

SB3046 (採取土壌土①：貝層上部)

ニホンジカ鹿角の海綿質部である。加工品の一部とみられる。

SB3046 (採取土壌②：床面直上)

獣類 (イノシシないしニホンジカ) の椎体片である。

SB3046 (貝層東側)

シマヘナタリ、ヤマトシジミ、ハマグリ、魚骨、獣類 (イノシシないしニホンジカ) 肋骨などが確認される。ヤマトシジミの中には、焼けている個体がみられる。ハマグリは、殻長 30mm 前後の殻であったと推定される。

SB3046 (貝層)

ナミマガシワ、マガキ？、ヤマトシジミなどが

確認される。ヤマトシジミの中には、焼けている個体もみられる。また、種類を明らかにできない二枚貝類の中にも焼けている個体がある。

SB3048

ヤマトシジミの殻片と獣類 (イノシシないしニホンジカ) の部位不明破片である。獣骨は、接合試料を含み、焼けている。

SB3049

炭化物・土壌等であり、骨片はみられない。アブラナ科の種実が出土し、放射性炭素 (AMS) 年代測定を行った。

SB3059

カモ類の右中手骨と獣類 (イノシシないしニホンジカ) の部位不明破片である。カモ類の右中手骨は、近位端が欠損する。獣骨は、細かい擦痕がみられる。

SB3079

獣類 (イノシシないしニホンジカ) の腰椎・乳頭関節突起・椎体片・四肢骨片である。

SB3258 (採取土壌)

ニホンジカの臼歯片である。接合試料である。

SD004 (No.1)

ニホンジカの左寛骨腸骨臼部である。土塊状となっている。成獣個体である。

SD007

イノシシ後頭骨の右後頭顆である。小片であるが、成獣個体である。

検 I

ニホンジカの右上顎第 1 大臼歯である。ほぼ完存する。

検 III

ニホンジカの左寛骨坐骨部である。成獣個体である。

(4) 考察

SB3046 ではヤマトシジミが主体であった。検出されたヤマトシジミで、【貝層東側】で採取さ

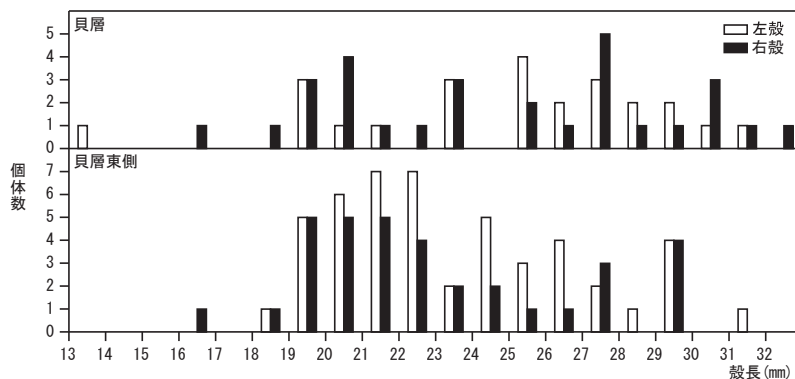


表 6 SB3046 出土ヤマトシジミ殻長分布

れた左殻 130 点中 48 点と右殻 115 点中 34 点、【貝層】で採取された左殻 86 点中 24 点と右殻 81 点中 29 点について殻長を計測した。その結果、殻長は、最小で 13mm、最大 31mm であるが、20～25mm 前後の個体が多かった (表 6)。これによると、検出個体数の多い【貝層東側】の試料で採取された貝に特徴をみることができる。すなわち、本遺跡では、殻長 20～25mm 程度のヤマトシジミが主に採取されていたとみられる。ただし、26～28mm とやや大型の殻もみられ、意識的に採取していたと思われる。

ところで、現生ヤマトシジミの殻長平均値は、4cm 前後とされている (奥谷編著 2000)。それと比べると、本遺跡で検出されるヤマトシジミは小型と言える。おそらく、周辺には 4cm 前後まで成長するヤマトシジミが生育していなかったことも考えられる。

ヤマトシジミ以外にシマヘナタリ、ナミマガシワ、マガキ?といった潮間帯から水深 20m 前後の海域に棲息する種類が検出されている。これらの種類も、おそらくヤマトシジミを採取場所の付近で採取されたと思われる。今回検出された種類は、本遺跡で前回で実施した結果と同様な種類である。ただし、前回の調査では、ニホンジカの鹿

角について、加工品としての利用について可能性を指摘したが、今回それを実証することができた。なお、ニホンジカは、鹿角部以外の部位が少なく、特に四肢骨や椎骨が検出されていないなど、イノシシと異なる利用があったことも考えられ興味深い点である。

*パリノ・サーベイ株式会社

引用文献

- 奥谷 喬司編 (奥谷喬司・窪寺恒己・黒住耐二・斎藤 寛・佐々木猛智・土田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷 巖・速水 格・堀 成夫・松隈明彦) 2000 『日本近海産貝類図鑑』、1173p、東海大学出版会。
- 常松成人 1987 「軟体動物」『石下町史資料第 2 集 鴻野山貝塚発掘調査報告書』石下町史編纂室、36-37。
- 八谷 昇・大秦司紀之 1994 『骨格標本作製法』北海道大学図書刊行会、129p。

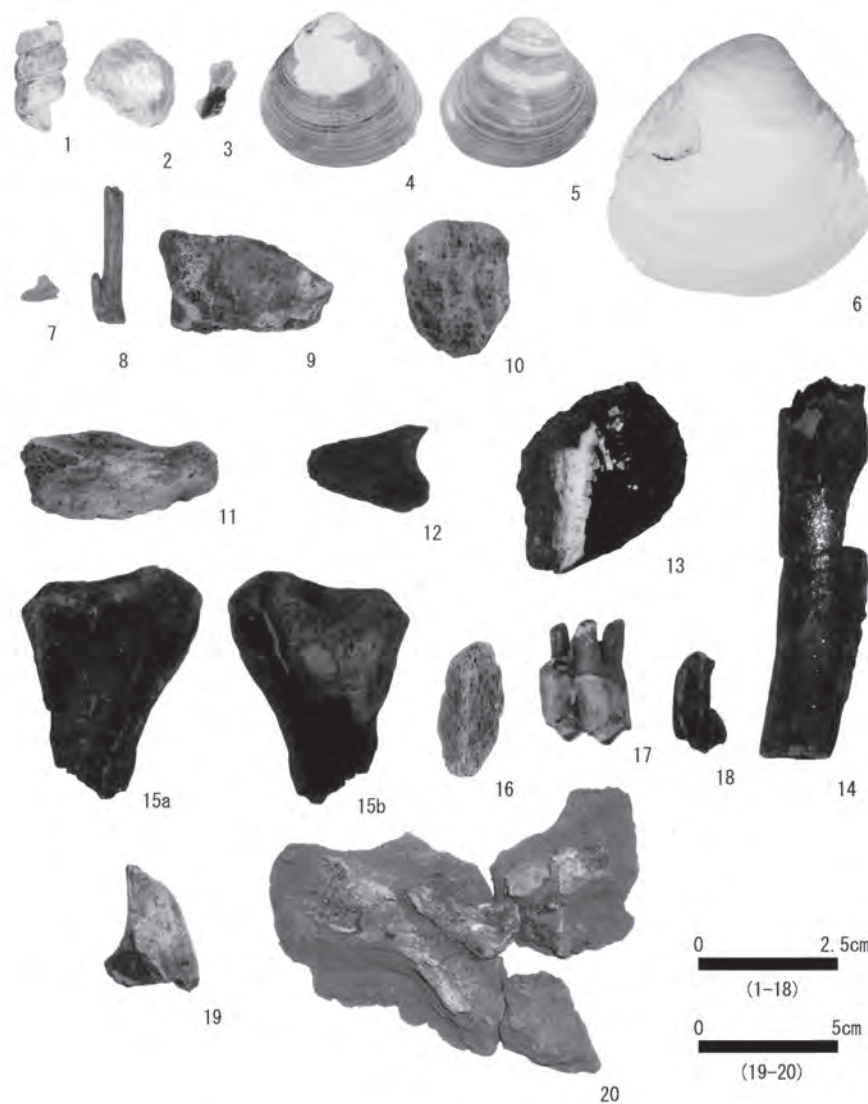


図 112 出土骨貝類

- | | | |
|------------------------|---------------------|--------------------------|
| 1 シマヘタナリ殻：SB3046 貝層東側 | 8 カモ類右中手骨：SB3059 | 15 ニホンジカ鹿角分岐部加工品？：SK3214 |
| 2 ナミマガシワ殻片：SB3046 貝層 | 9 イノシシ後頭骨右後頭類：SD007 | 16 ニホンジカ鹿角加工品：SB3046 |
| 3 マガキ？殻片：SB3046 貝層 | 10 イノシシ頸椎椎体：SB3046 | 17 ニホンジカ右上顎第 1 大臼歯：包含層上部 |
| 4 ヤマトシジミ左殻：SB3046 貝層東側 | 11 イノシシ椎骨椎弓部：SB3046 | 18 ニホンジカ臼歯片：SB3258 |
| 5 ヤマトシジミ右殻：SB3046 貝層東側 | 12 イノシシ末節骨：SB3046 | 19 ニホンジカ左寛骨坐骨部：包含層下部 |
| 6 ハマグリ右殻：SB3046 貝層東側 | 13 ニホンジカ鹿角片：SK3082 | 20 ニホンジカ左寛骨腸骨臼部：SD004 |
| 7 魚類部位不明破片：SB3046 貝層東側 | 14 ニホンジカ鹿角片：SK3082 | |

3. 放射性炭素年代測定*

(1) はじめに

愛知県稲沢市・須ヶ谷遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 7 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (株式会社パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

表 8 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行い、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図 113 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使

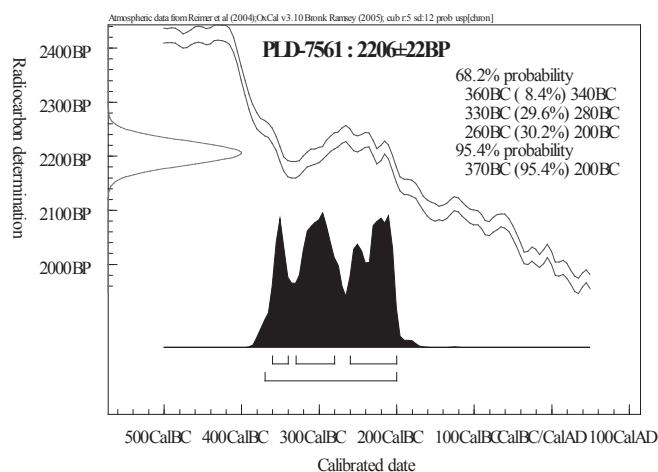


図 113 暦年較正結果

用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

表 7 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-7561	位置: VIESf 遺構: SB3049 その他: IHST05C3	試料の種類: 種実(生、アブラナ科) 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.5N, 塩酸1.2N)

表 8 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-7561	-22.7 $\pm$ 0.16	2206 $\pm$ 22	2205 $\pm$ 20	360BC (8.4%) 340BC 330BC (29.6%) 280BC 260BC (30.2%) 200BC	370BC (95.4%) 200BC

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10(較正曲線データ:INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

(4) 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

*株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

参考文献

Bronk Ramsey C,1995,Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey C,2001,Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』 3-20。

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac,

S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer,2004, IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.

第5章 考察

1. 弥生中期・濃尾平野の地域区分

(1) はじめに

濃尾平野には弥生前期から条痕紋系土器が分布する。その生産地は確定できていないが中期にも分布は継続するので、濃尾平野において条痕紋系土器は基盤環境である。しかし、今回の調査で須ヶ谷遺跡からまとまって出土した「口縁端部が無紋で上端に刻みを加え、体部に縦位羽状条痕を施す甕」（須ヶ谷形甕）は、これまで分布も散漫で実態がわからなかった形式（フォーム）である。

口縁端部に押し引きや条痕が施され、さらに上端に刻みが加えられる甕はこれまでもいくつかの遺跡から散発的に出土していたのだが、わたしは口縁部という細部に関わる型式変化の1段階として処理してきた。ところが、今回の調査成果はその扱いに問題のあることを明らかにしたので、以下で訂正するとともに、濃尾平野の形式分布についても触れてみたい。

(2) 二枚貝条痕甕の諸形（型）式

弥生前期後半の水神平式の甕は口縁端部にナデか押し引きを施し、体部から口縁部外面まで縦位羽状条痕が施されるものと口縁部外面を横位条痕で仕上げるものがある。壺は口縁端部に押し引きだけでなく条痕を施すものがあるが、甕に条痕を施すものはまだ無い。ただし、口縁端部をナデ仕上げで無紋にするものは檜王式につながり、水

表9 甕の分類と諸遺跡の出土数

	須ヶ谷形	金剛坂形甕a2類	金剛坂系甕	朝日形	野笹形	細見形
門間沼	1	8	0	1	0	2
猫島	3	6	3	3	10	1
八王子	0	3	1	4	3	1
須ヶ谷	11	6	3	8	1	6
朝日V	2	1	0	6	2	9
朝日VI	1	0	1	10	2	6
志賀公園	0	0	3	1	0	4
烏帽子	3	0	0	0	0	12

a 須ヶ谷形：二枚貝・口縁上端刻み
口縁端部圧痕

b 金剛坂形甕a2類：ハケメ→
口縁内面・底部ミガキ

c 金剛坂系甕：ハケメ→底部ミガキ
口縁端部圧痕

d 朝日形：ハケメ→二枚貝→底部ミガキ
口縁端部圧痕

e 野笹形：櫛条痕・口縁上端刻み

f 細見形：二枚貝・口縁端部条痕
口縁端部圧痕

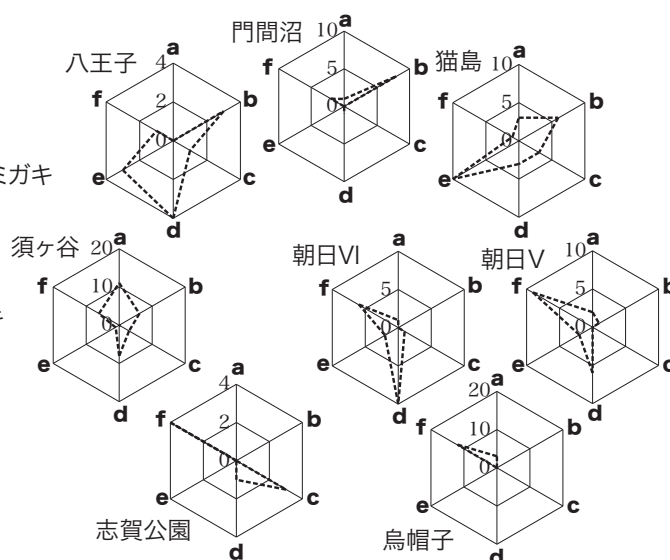


図114 甕の分類と出土傾向

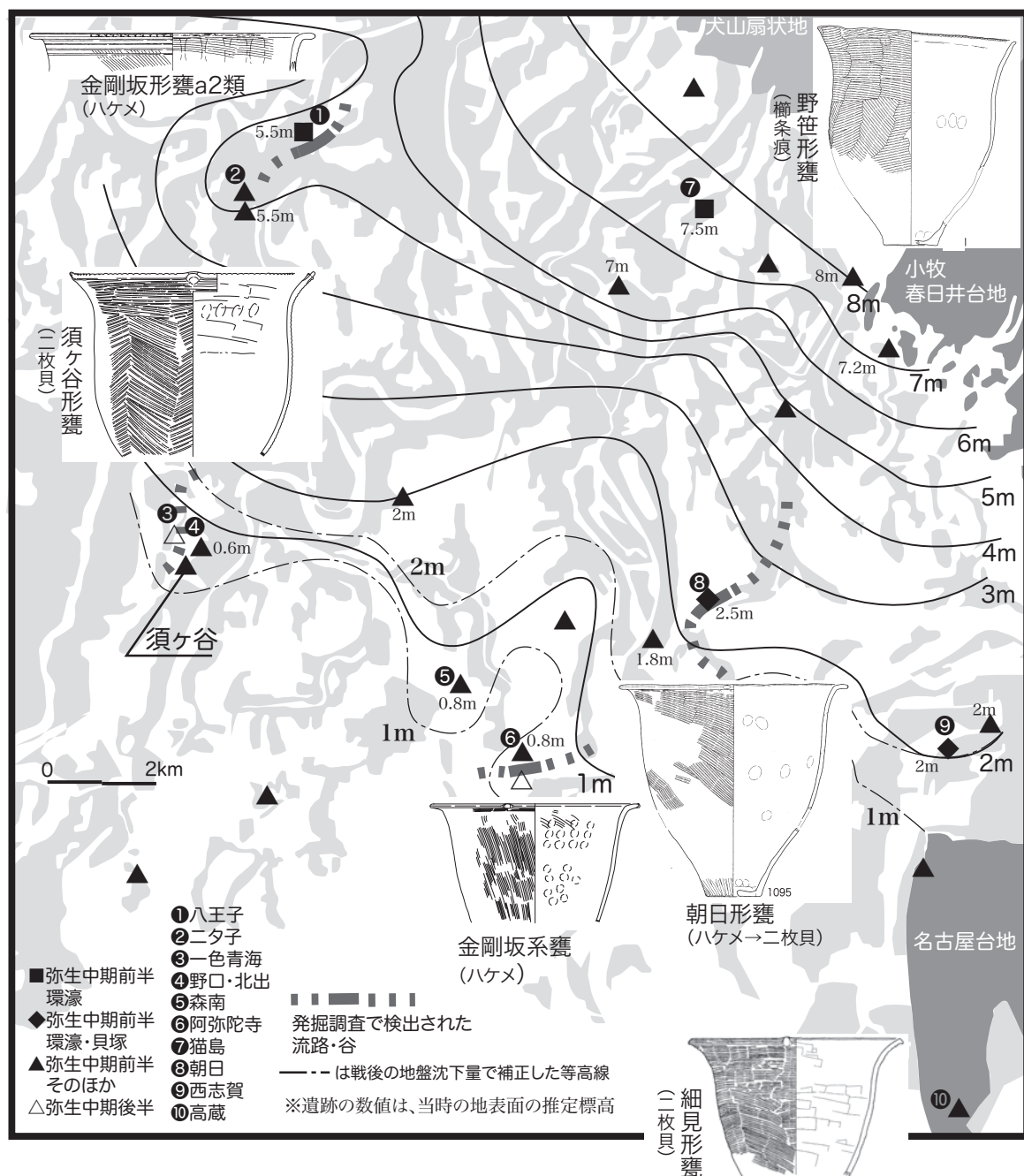


図 115 濃尾平野における弥生中期前葉の甕に見る地域色

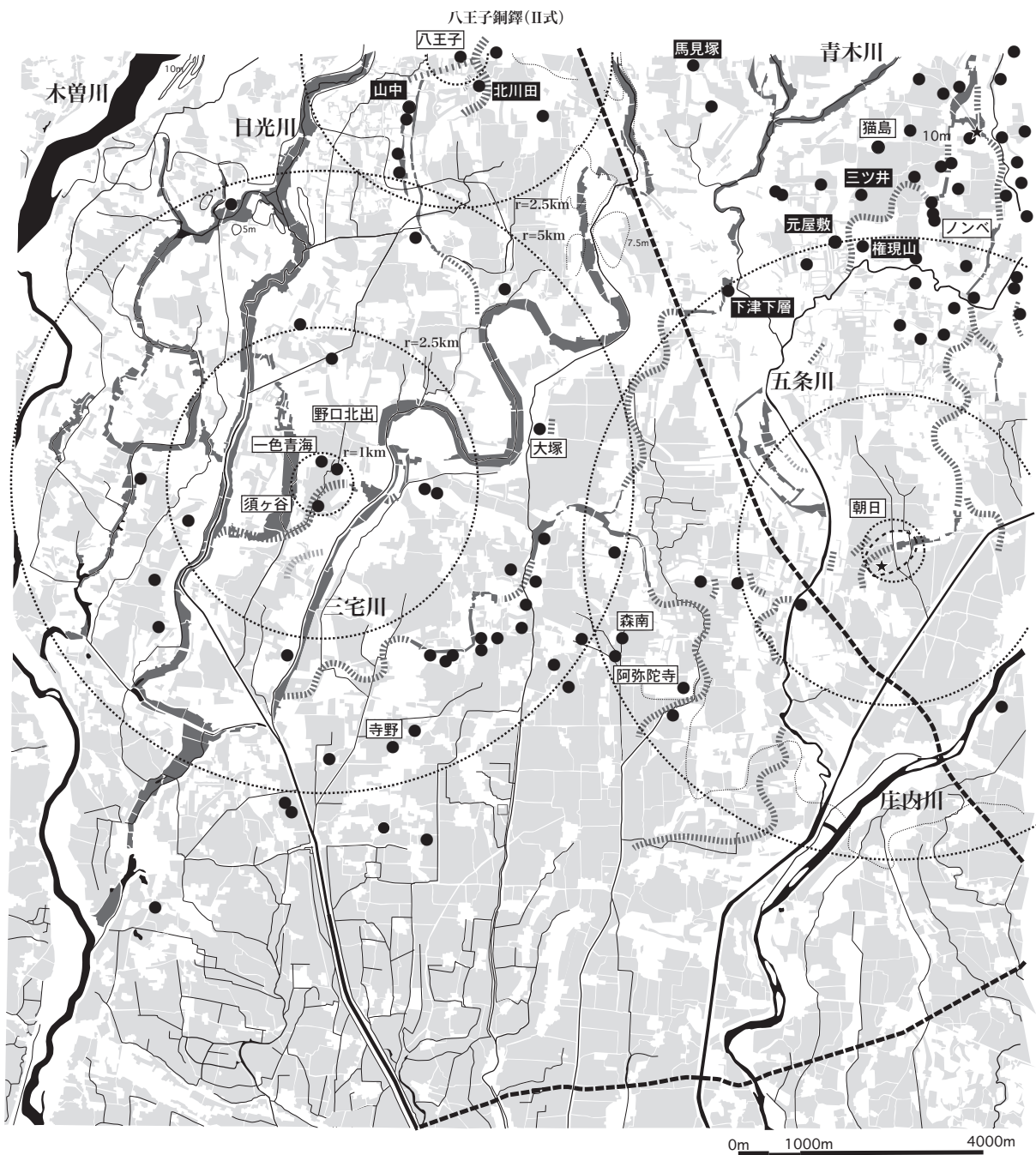


図 116 濃尾平野における地域区分

神平式の古い段階と考えられてきた。ところが、今回1例のみだが口縁端部を無紋のまま粘土を付加して突起を作った二枚貝条痕の甕が出土した。突起が中期の指摘みによる口縁端部圧痕に変わると考えれば組列が滑らかになるので、わたしはそれを須ヶ谷形甕の祖型（アーキタイプ）と考えた。指摘み手法は中期前葉には壺にも施され、二枚貝条痕紋系土器全体において器種を横断する共通した手法（モード）であるのみならず、朝日式の壺や甕、鉢（高杯）にも施され、まさに中期前葉のホライゾンになっている。

中期前葉の条痕紋系土器は岩滑式と総称されており、従来から知られていた甕にはいくつかの種類がある。体部の調整は、前期以来の縦位羽状条痕に斜条痕が加わり、口縁端部には押し引き、条痕、無紋があり、これらの要素が組み合って甕の諸型式が成立している。このうち、体部に縦位羽状条痕、口縁端部に押し引きを施す甕は岩滑式の規範的な形式となって広域に分布する。それに対して、口縁端部に条痕を施すものは体部の調整が縦位羽状条痕だけでなく斜条痕もあり、おもに濃尾平野南部から知多半島にかけて分布し、本稿では知多市細身遺跡を標式に細見形甕と呼ぶ。さらに中期前葉の新段階（朝日式2期並行）には犬山扇状地以北から美濃内陸部で櫛条痕手法（野笹類型）が分離し、木曽川中流域の岐阜県美濃加茂市野笹遺跡を標式に野笹形甕と呼ぶ。

これら条痕紋系甕とともに分布するのが、中期初頭（朝日式1a期並行）の金剛坂形甕a2類、その次期（朝日式1b期並行）の金剛坂系甕と朝日形甕である。朝日形甕は金剛坂系甕に斜条痕を加えるもので細見形甕に関係する。朝日形甕には尖った口縁端部に二枚貝で条痕を加えるというように、細身形甕との間をさらに埋める型式もあり、両者は近い関係にあることがわかる。

以上のように、中期前葉には多少の入れ替え

もあるが、金剛坂系甕、朝日形甕、岩滑式甕・細見形甕・須ヶ谷形甕、野笹形甕の系列が、相互に属性の一部を共有しつつ併存する状況が確認できる。

（3）甕の地域差と地域区分

甕の諸形式を報告書をもとにカウントしたのが表9である。さらにそれをレーダーチャートに表現した。遺跡差は明瞭であり、これらは濃尾平野内における甕の地域差を表しているという以上に、歴史的継続性を、つまり地域性を表現しているとみることができる。そして、これを基盤に弥生中期中葉における甕の諸型式が成立しているのである。該期の続条痕紋系甕は櫛条痕紋系を除き左上がりの斜条痕となる。

この斜条痕を基本属性にして、①朝日形甕は朝日遺跡を中心とする圏域に貝田町式の主要器種として分布する、②須ヶ谷形甕は須ヶ谷遺跡を中心とする圏域に貝田町式の主要器種として分布する、③細見形甕の後続形式は続条痕紋系土器の主要器種として濃尾平野東部から矢作川流域に分布する、の三者に、④縦位羽状条痕を残しつつ横位羽状条痕に移行する野笹形甕の後続形式は櫛条痕紋系土器の主要器種として濃尾平野北部から内陸部にかけて分布する、を付け加えることができる。

これらのうち、①は中期前葉以来の系列であり、③はハケメ調整を採用しないが、②の須ヶ谷形甕は条痕紋系土器からハケメ甕への変換を遂げており両者の中間に位置する。貝田町式に関わって重要なのは①②であり、これに伊勢湾西岸域が加わって地域区分が完成する。

（4）須ヶ谷遺跡と野口北出遺跡、あるいは新たな〈核〉

ところで、須ヶ谷遺跡を一つの核として捉える視点の可否について少し検討しよう。

今回の調査で須ヶ谷遺跡は、縄文晩期終末に始まり弥生中期前葉には濃密な居住の痕跡を残した

こと、しかし中期中葉には方形周溝墓群からなる墓域の形成が始まり、居住域が北に移動したことが判明した。そして、北に隣り合う野口北出遺跡も、弥生前期に居住が始まり、中期中葉には方形周溝墓群からなる墓域に移行し、かつ周溝の上層は洪水層で覆われる、というように同じ道筋を辿る。どちらも中期中葉の居住域の行方が問題になるが、少なくとも須ヶ谷遺跡では中期中葉後半へ続く居住域の縁辺が確認できており、廃絶する様子は全く無い。

つまり、野口北出遺跡を北端、須ヶ谷遺跡を南端と捉えるのであれば両端間は 0.8km 程となり、濃尾平野では大規模だが、朝日遺跡に比べればやや範囲が狭い程度で、遜色は無い。遺跡両端が居住域から墓域へ移行する点も、当初は 1km 圏の居住域が散漫に広がり、中期前葉後半に集住によって空いたエリアが墓域となった朝日遺跡とまさに同じプロセスを見せており、環濠の存在が確認できていないとはいえ、貝層や動物遺存体が出土する等の動態の共通性は質に関わる可能性もあり、重要な点である。これが《大規模集住集落》の変遷におけるキーポイントである。

現状では両遺跡間を旧三宅川本流が流れて弥生時代の遺跡が空白になっており、野口北出遺跡と須ヶ谷遺跡が一連なのかどうかは確証がないのだが、いずれにしても、濃尾平野における河川の流路が自然状態のまま長期に安定することはあり得ないから、将来的に両遺跡のつながりを示す資料が見つかる可能性は残っている。

独自の甕の形式を生み出した遺跡であることを出発点にして、多くの項目を追加しつつ、濃尾平野西部における 10km 圏の〈核〉として朝日遺跡に匹敵する大集落が姿を見せ始めたように、わたしには思われる。今後も注視していきたい。

2. 近世の景観復元

今回および一色青海遺跡などの発掘調査において、中世後期から近世にかけての景観復元できる明瞭な遺構・遺物は確認されていない。では、文献などから本遺跡周辺における近世の景観を復元したい。そのために、本遺跡周辺に所在し、近世初期以来続く8つの村落（儀長・井堀・三宅・須ヶ谷・鷺尾・法立・平池・横池）に注目する【図116】。

さて、近世尾張の村落風景復元に有効な文献が、『寛文村々覚書』と『尾張徇行記』⁽²⁾である。前者は17世紀後半の、後者は18世紀末頃の状況を知ることができるものである。これらの村は両者に記載されており、両時代の状況が把握できる。また、『寛文村々覚書』には、各村落の石高およ

び概高（藩士知行のために年貢分を四ツ免として表記しなおした石高で、近世前半の生産力を最も伝えていると思われる）、田畑の面積、人口などが記されている。また、『尾張徇行記』には『寛文村々覚書』の記載の他に、新田の打出高、面積、当時の人口及び編者樋口好古によるその村に関するコメントが記載されている。このコメントは、地方行政に関わった編者樋口好古自身の見分によるものであり、当時の状況を忠実に伝えていると思われる。8村に関しては、その記載は天明5(1785)年に始まる日光川開削以前の状況を記しているものが多い。（ただし、日光川開削自体は記載されている）

『寛文村々覚書』によると8村の概高、田畑の比率は表10の通りである。これをみると、日光川または三宅川の比較的上流にある村、儀長・井堀・三宅・鷺尾・法立では、比較的水田率が低い

傾向がある、すなわち畑が多いことがみてとれる。一方で、比較的下流に位置する平池・横池では水田が7割以上である。すなわち、稲沢市平和町南部分はデルタ地帯となり、北部分とは様相を異にすることがわかる。その中で、鷺尾・三宅・井堀に挟まれる須ヶ谷は、水田比率が82.3%と横池に続いて高いことが注目される。

ところで、近世前半の1世紀はいわゆる「大開発時代」であり、現在の稲沢市南西部でも新田開発が進められた。『尾張徇行記』によ

村	寛文村々覚書のデータ					大正5年のデータ			
	石高(石)	田(町)	畑(町)	耕地面積	田の比率(%)	田(町)	畑(町)	耕地面積	田の比率(%)
儀長	693.869	19.69	16.61	36.3	54.2	※ 井堀・儀長村の大正5年のデータは管見できなかった。			
井堀	1414.11	29.88	45.63	75.51	39.6				
須ヶ谷	742.322	32.49	6.97	39.46	82.3	37.43	8.53	45.96	81.4
三宅	2787.41	83.93	63.15	147.08	57.1	130.33	54.12	184.45	70.7
鷺尾	608.62	16.03	12.79	28.82	55.6	18.51	14.36	32.87	56.3
法立	401.075	11.58	27.14	38.72	29.9	42.7	31.57	74.27	57.5
平池	149.871	7.34	3.02	10.36	70.8	10.86	3.91	14.77	73.5
横池	166.609	11.13	1.87	13	85.6	16.46	3.85	20.31	81.0

※ 石高(石)は概高、田畑の面積の歩は切捨

表10 関係8村の『寛文村々覚書』・大正5年の田畑データ

村	村勢の記載	土壌の記載
儀長	「地高クシテ水損ナク、竹木茂リテ村立ヨシ」	「此辺田ハマツチ畠ハ砂地ナリ」
井堀	「高二準シテ戸口多ク」	「土地ハマツチ砂交リノ所モアリ」
須ヶ谷	「地卑ニシテ水落方アシク、深タマリニテ出畝水腐スルコト多ク、民戸マデモ水浸スコトアリ」「村立アシキ所」 「三宅村ノ畠ヲ承佃スル」	「卑湿ノ地」
三宅	「竹木茂リ村立ヨク大郷ナリ、高二準シテ戸口多ク」「地高ニシテ日光川御普請以來水損ナシ」	「村西ヘ付マツチナリ、畠ハ砂地多シ」
鷺尾	「村ノ屋ナミハアシキ所」「高二準シテハ戸口多ク」「田畝ヲ承佃ス」	「土地ハマツチナリ」
法立	「村立ヨクシテ竹木モヨク茂レリ」「高二準シテハ戸口多ク佃力足レリ」	
平池	「村立ハ大概ヨキ所ナリ」	
横池	「竹木ヨリ茂リ村立大体ヨシ」「高二準シテハ戸口多ク佃力足レリ」	

表11 『尾張徇行記』による関係8村の記載

ると、慶安元(1648)年から寛文4(1664)年に至るまで、6村で10ヶ所の新田が検地をうけている。しかし、須ヶ谷村、鷺尾村は新田を打ち出していない。すなわち、この2つの村には新田開発可能な土地がなかったことを意味する。

また、『尾張徇行記』の土壌状況の記載に注目する【表11】。須ヶ谷、鷺尾村以外の6村は編者樋口好古から村勢もよく耕作向きの土壌と判断している。三宅川沿いの儀長村、井堀村、三宅村は、「此辺田ハマツチ畠ハ砂地」という記載が見られ、水田ばかりでなく畑作にも適した土壌であったことがうかがえる。しかし、須ヶ谷村、鷺尾村は編者樋口好古から好意的に書かれていない。特に、須ヶ谷村は「村立アシキ所」で土壌も「卑湿ノ地」と記されている。ここからすると、二つの川によって形成された微高地によって切り離され後背湿地に立地する須ヶ谷村、鷺尾村では、排水がうまくできず農業に困難が伴ったことが想像される。特に、水田比率が高い須ヶ谷村では困難を極めたと思われる。

以上から、須ヶ谷川開削以前の本遺跡周辺の景観は、排水ができない場所は常に湿地で、農耕が放棄されたか、湿地としての利用で、生産性は低かったと思われる。この地域の生産性を上げるためには、後背湿地の排水が重要であった。

稲沢市西部を縦断する日光川は、古くは萩原川または足立川と呼ばれ、中世までは木曽川本流を形成していた。近世においては、現在の一宮市地域の悪水落とし(排水路)であり、現在の稲沢市西部では排水が難しかった。そのために、尾張藩は日光川の普請を実施した。寛文6(1666)年勝幡村から下流の川幅拡幅がなされ、天明5(1785)年から文化9(1812)年にわたる27年間の歳月を要して川替え築切工事が行われ、日光川は現在の

流路となった。稲沢市平和町の村々の悪水も、日光川や三宅川に流されるように開削がなされている。『尾張徇行記』を見ると、「三宅川通勝幡落杵」で三宅川に落とす方法と「法立村塩川山新田杵」から萩原川に落とす方法の二つが記されている。だから、須ヶ谷村周辺の悪水を落とす手段は「法立村南ノ江ヨリ萩原古川」へ落とすしかなかった。これは「法立村塩川山新田杵」をさすと思われる。

そこで、天明7(1787)年から寛政10(1798)年にかけて代官澤園兵衛によって須ヶ谷川が開削された。おそらくは、それまでの「法立村塩川山新田杵」をある程度利用し、拡幅の上、須ヶ谷村をはさむように北へ延長したのであろう【図116】。その結果、表10の大正5年のデータでは水田面積が大幅に増加しており、用水整備とともに、須ヶ谷川流域でも湿田から乾田へと徐々に移行し、生産性も向上したものと思われる。

近代における排水設備の導入などを伴いつつも、以上のような環境が、昭和40(1965)年から始まる旧平和町の土地改良事業まで続いたものと思われる。

註

1) 名古屋市教育局 1965『名古屋叢書続編第二巻寛文村々覚書(中)』所収。

2) 愛知県郷土史料刊行会 1979『名古屋叢書続編第六巻尾張徇行記 3』所収。



図 117 須ヶ谷川開削関係図
旧平和町全図は稲沢市役所平和支所提供

写真図版

遺構 1 ～ 20

遺物 1 ～ 5

カラー図版 1 ～ 4



上：山王遺跡全景 南から

左中：山王遺跡 05A 区上面 南から

下左：山王遺跡 05A 区 NR01 南西から

下右：山王遺跡 05A 区 NR01 断面 南から



遺構図版 2



上左：山王遺跡 05B 上面 上右：山王遺跡 05B 区 SE01 井戸全景 西から
中左：山王遺跡 05B 区 SE01 井戸枠 中右：山王遺跡 05B 区 SE01 曲物 北から
下左：山王遺跡 05C 区全景 下右：山王遺跡 05D・E 区全景





上：西海塚遺跡全景 北から

下左：西海塚遺跡 05A 区全景 南から

下右：西海塚遺跡 05B 区全景 南から



遺構図版 4



上：須ヶ谷遺跡 05A 区 1 面全景 北から

中左右：須ヶ谷遺跡 05A 区 1 面 SK09

下左：須ヶ谷遺跡 05A 区 2 面全景 南から

下右：須ヶ谷遺跡 05A 区 2 面 SB01・02 南から



右ページ：須ヶ谷遺跡 05B 区 3 面全景 北から



遺構図版 6



左：須ヶ谷遺跡 05B 区 2 面全景 北から

右：須ヶ谷遺跡 05B 区 2 面全景 南から



左：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面全景 北から

右上：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SD007 から SD009 付近

右下：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SD002 ～ 004



遺構図版 8



上：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SB001 掘り下げ状況 東から



中：須ヶ谷遺跡 05C 区
2 面 SD001 掘り下げ状
況 東から

下：須ヶ谷遺跡 05C 区
2 面 SD001 掘り下げ状
況 北から





上：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面
SD14 土器 (91) 出土状況
中：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面
SD14 土器 (91) 出土状況近景

下左：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SD009 土器 (119) 出土状況 東から
下右：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SD009 土器 (122) 出土状況 東から



遺構図版 10



上：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面 SD004 東側掘り下げ状況 東から

中左：土器 (90) 出土状況 西から

中右：同 東から

下左：SD008 土器 (112・114) 出土状況 北から

下右：同 東から





上：須ヶ谷遺跡 05C 区 2 面
SD005・006 掘り下げ状況 北東
から
中：同 南東から
下左：SK004 木棺検出状況 北西
から
下右：同 掘り下げ状況 南東から



遺構図版 12



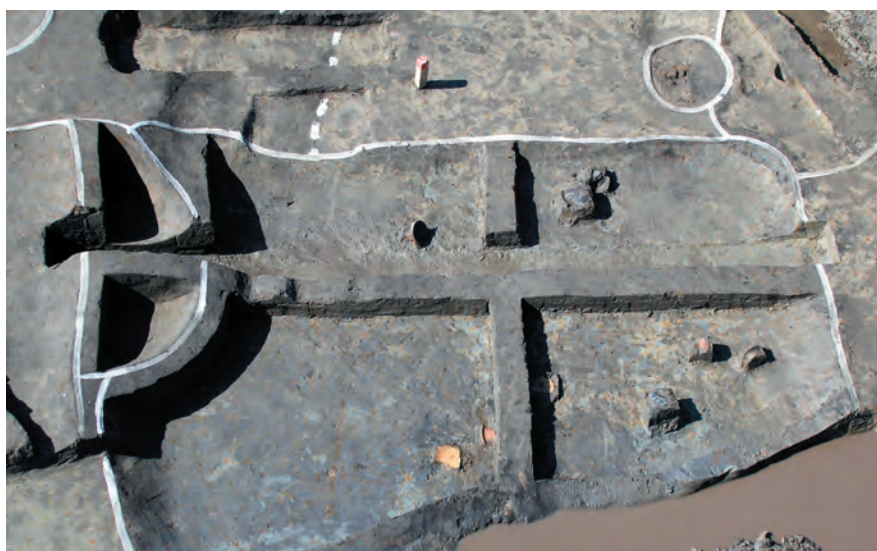
上左：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面 SZ3001 断面 上右：同 完掘状況

中：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面北部遺構群 東から

下右：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面 SB3003 掘り下げ状況



SK36 土器 (189) 出土状況





上：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面北部遺構群 東から

下：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面中央付近遺構群 東から



遺構図版 14



上：須ヶ谷遺跡 05C 区 SB3049 掘り下げ状況 東から

中左：SB3049 遺物出土状況 南東から

中右：SB3049 遺物出土状況 東から

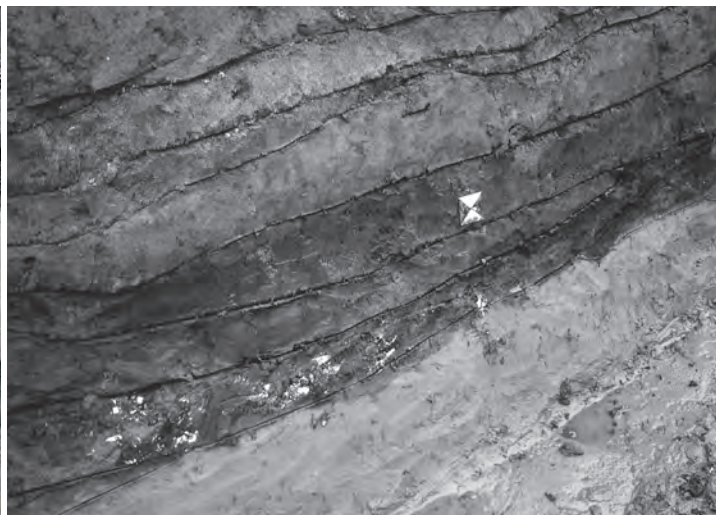
下左：SB3036 炭化物出土状況

下右：SK3082 遺物出土状況





上：須ヶ谷 05C 区遺跡 3 面北半部遺構群 南から
下左：SB3056 内貝層 下右：東壁地層断面と貝層







左ページ上：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部遺構群 北から

左ページ下：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB303080・3084 掘り下げ状況 南東から

上：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3080 完掘状況

下：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3084 完掘状況



遺構図版 18



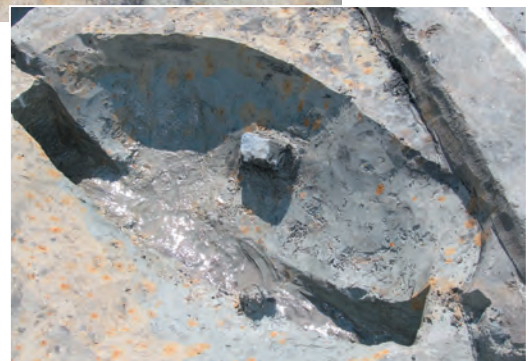
上：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3079・3054 東から

下：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3079 南東から





上：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3054 炉 (SK3239) 断面
右：同完掘状況



上：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3079 炉 (SK3307) 断面
右：同完掘状況



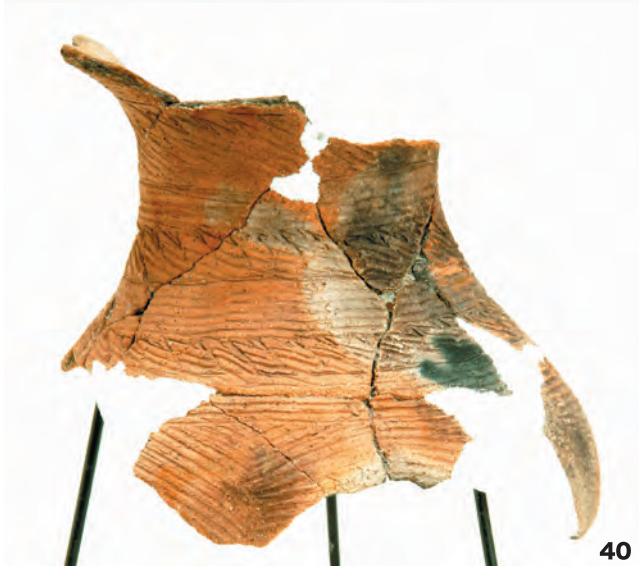
遺構図版 20



上：須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部
SK3188 遠賀川系甕（289）出土状況
右：同近景
下：SK4001 出土状況



遺物図版 1





105



119

122

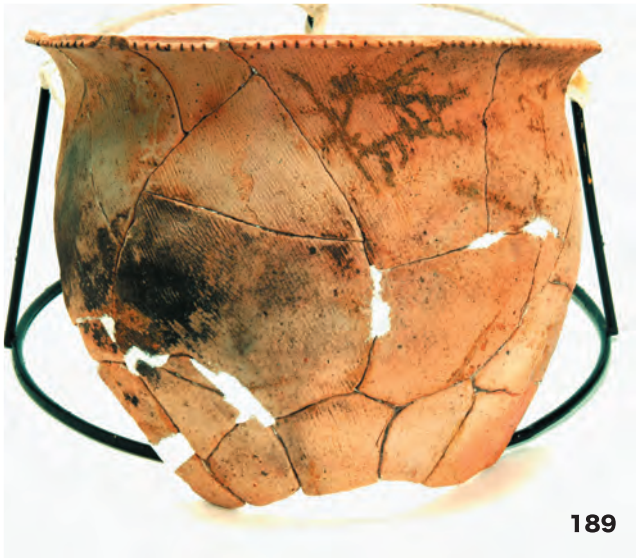


128



124

遺物図版 3



189



196



191



200



192



217



193



201



199



218



222



228



224



229



226



223



257



264



287



365



289



295

カラー図版 1



上段 山王遺跡 南から
中段 西海塚遺跡 北から
下段 山王遺跡 05B 区 SE01

右ページ

上段 須ヶ谷遺跡 05C 区 1 面 南から
下段 須ヶ谷遺跡 05C 区 1 面 北から



カラー図版 3



上段 須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面 南から

下段 須ヶ谷遺跡 05C 区 3 面下部 SB3054・SB3079

カラー図版 4



上段

左 1 : 須ヶ谷遺跡 05B 区 2 面 (6 号墓上面)

左 2 : 須ヶ谷遺跡 05B 区 SD001 西壁断面

左 3 : 須ヶ谷遺跡 05B 区 SD002 西壁断面

左 4 : 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD009 西壁断面

右 1 : 須ヶ谷遺跡 05C 区南部 2 面 (SD002 上層)

右 2 : 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD002 西壁断面

右 3 : 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD004 西壁断面

右 4 : 須ヶ谷遺跡 05C 区 SD004 土層断面

中段

須ヶ谷遺跡 05C 区 SD001 土層断面

下段

須ヶ谷遺跡 05C 区の地床炉と壺底の支脚

ふ り が な	すかたにいせき・にしかいづかいせき・さんのういせき
書 名	須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第156集
編 著 者 名	石 黒 立 人・加藤博紀・鬼頭 剛
編 集 機 関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802番24 TEL 0567(67)4163
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調 査 面 積 m ²	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
すかたにいせき 須ヶ谷遺跡	あいちけんいなざわし 愛知県稲沢市 へいわちょうかんのんどう 平和町観音堂	23220	270014	35度 13分 39秒	136度 45分 14秒	2005.11.1 ～ 2006.3.31	1,341	県道津島稲 沢線道路改 築工事
にしかいづかいせき 西海塚遺跡	あいちけんいなざわし 愛知県稲沢市 へいわちょうかんのんどう 平和町観音堂		270003				461	
さんのういせき 山王遺跡	あいちけんいなざわし 愛知県稲沢市 へいわちょうかみみやけ 平和町上三宅		270004				738	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
須ヶ谷遺跡	散布地	弥 生	方形周溝墓・竪穴住居	弥生土器	
		近 世	溝・土坑	近世陶器	
西海塚遺跡	散布地	近 世	溝・土坑	近世陶器	
山王遺跡	散布地	古代・中世	自然流路・井戸	須恵器・灰釉陶器・山茶碗	
		近 世	溝・土坑	近世陶器	

文 書 番 号	発掘届出(17埋セ第59号 2005.9.30) 通知(17教生第1354号 2005.10.20) 終了届・保管証・発見届(17埋セ第127号 2006.3.23) 監査結果通知(18教生第467号 2006.6.14)
---------	--

要 約	須ヶ谷遺跡では、弥生時代前期から中期前半の竪穴建物跡や土坑、弥生時代中期中葉後半以降の方形周溝墓群や竪穴建物跡を検出し、弥生中期の大集落の一端を垣間みた。中世以降の流路跡、溝・土坑が検出された。そして山王遺跡では、中世以前の自然流路や中世の井戸を中心に溝・土坑が検出され、西海塚遺跡では、近現代の溝・土坑が検出され、土地利用の変遷を明らかにした。
-----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第156集

す か たに にし かい づか さん のう
須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡

2008年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 新日本法規出版株式会社